超次元ゲイムネプテューヌｍｋ2+　LastGoddess

リアルではねぷ子タイプ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
超次元ゲイムネプテューヌｍｋ２＋　ＬａｓｔＧｏｄｄｅｓｓ

【Ｎコード】
Ｎ０７７３Ｗ

【作者名】
リアルではねぷ子タイプ

【あらすじ】
ラステイションに住む傭兵、フロム。日々弾薬費に悩まされながら生きていく中、とても面倒臭い相手に絡まれることに。どうしてこうなった……？

９／６：タイトルを変更。こんなタイトルだけど支配エンドじゃな

い……はず。

支配エンドより嫌なエンド臭してきた……。

フロムちゃんの色々。（前書き）

物語が進むにつれて増えるかもしれない増えないかもしれない設定部。
このゲームのシステムでガチタンをやろうとした結果がこれだよ！
よく重火器持てるな、とかそういう突っ込みは受け入れられません。
ゲイムギョウ界補正です。

８／３１：始まってすらいないのに大幅修正。ダメだこりゃ。
９／０２：思いついたのでセットスキル（というかＥｘフィニッシュ）追加、フロムの武器についての設定追加。というかそんなＥＸフィニッシュみたいなことやるのか不明だけど……。
１１／２４：色々変更。

フロムちゃんの色々。

名前：フロム
イメージＣＶ：相沢舞
カテゴリ：メーカー
身長：１５４ｃｍ
体重：４２ｋｇ
スリーサイズ：Ｂ８１－Ｗ５５－Ｈ８０
説明：毎日を生きるのに必死な自称傭兵。
金が貰えれば比較的なんでもやるらしい。本人曰く【それが傭兵。】だが基本的にはモンスター討伐や暗殺などを主にしている。
過去にあるトラウマが存在しノワール、如いては女神と言う種族事態を恨んでいる。

容姿：髪は白く（染めているらしい。地毛は不明）、まっすぐなセミショートに赤い瞳。
白のワンピースの上に赤黒いジャケットを羽織っている靴は黒緑色のブーツ。さらに両肩と両手の甲、両膝には緑色の厚い装甲版のようなものが付いていてたまに女神のパチモンとか言われる。
モチーフはガチタン＋？。

武器：重火器（グレネードライフル・バズーカ）。Ｅｘスキルで出るその他の重火器は全てこの武器が変形したもの。ＳＰスキルの武器は別途に持っている。質量保存の法則なんかなかった。

特徴：簡単に言えば重戦車化したユニ、またはブラン＋ユニ÷２＋α。初期ＭＯＶが２と最悪な上ＡＧＩやＴＥＣも最低ランク。逆にＡＴＫやＶＩＴは最高ランク。ＡＰは割と高めだがセットスキルが基本的に単発。そもそもラッシュスキルを初期スキル以外に覚えな

い。
通常攻撃の射程が特殊でキャラ三人分ほど前方に小型円（バズーカは中型円）が射程。必死に近づく必要はないため低いＭＯＶでもそれなりには戦える。アクション・ミレニアムメモリなどでＭＯＶを増やしテクニカルサポートなどでＴＥＣを補えば見事なガチタ…移動砲台になる。
スキル：低ＭＯＶなのに近距離じゃないと使えないスキルばかり。しかもほとんどのスキルの射程が通常攻撃以下なのでスキルで先制攻撃はほぼ無理。（というかシステム上だれでも無理な気もする）単発超威力ばかりなのでネプテューヌか彼女かネプギアの取り合いになるかもしれない。

０７－ＭＯＯＮＬＩＧＨＴ：ＡＰ７０・ＳＰ６０　威力５００　ガードダメージ１９０
両手にレーザーブレードを装備し直進して両方一気に突き刺す技。最初から覚えているスキルだが燃費が最悪。ガードブレイク時で余裕がある際の決めぐらいだろうか。

ＮＩＯＨ：ＡＰ１５０・ＳＰ２５０　威力３０００　ガードダメージ１０００
右腕に取り付けたパイルバンカーで敵を貫く。
見ての通りの極悪燃費と極悪火力である。
ＳＰ２５０なんてどう溜めればいいんだろう……
ＳＰ回収力死んでいるのに…

ＪＩＲＥＮ：ＡＰ１００　自らのＳＰ１００回復
Ｐ・ＳＰチャージ使えよ。

ＡＸＩＳ：ＡＰ２００・ＳＰ２００　威力２０００　ガードダメージ２０００　毒付与１００％

１ターン粒子をチャージ後、指定範囲内の敵を緑色の光が薙ぎ払う。
使用後、自分も毒になるので注意。

台詞集
戦闘開始：さぁ、お前の魂（ソウル）を貰おうか！
戦闘開始（先制）：敵は浮足立っている。潰すぞ！
戦闘開始（バックアタック）：後手には後手なりのやり方がある！
自ターン：さて、どう動こう？
敵撃破：さようなら、縛られた命。・私を超えることなど不可能だ！
勝利：撃ち負けはしないよ。当たるならね。
戦闘不能：じょ、冗談、じゃ……
戦闘不能復帰：へばり付いてこその山猫！
アイテム使用：これ、使うよ！
０７－ＭＯＯＮＬＩＧＨＴ発動：一瞬で、蜂の巣に、してやんよお！
ＮＩＯＨ発動：こういうのにこそ浪漫が詰まってるのさ！全部纏めてぶち抜く！

おまけボイス集
自己紹介：傭兵、フロムよ。よろしく。
誕生日を祝う：誕生日、か…。次もあるといいけどね。
メール着信：メール到着。何が書いて…なんでもない。
電話着信：電話が来てるみたい。嫌な予感もありそうだけど、ね…。
褒める：ま、ありじゃない？あなた。
罵る：屑が、あんたには水底が似合いよ。
その他１：くっ、ダメだ、沈んでいく…！？ハッ、夢か……。
その他２：目的は既に果たしたわ…。ネプギアがね！！

Ｅｘフィニッシュ集
ＭＬＧＳＴ／ＨＡＭ：△△□＝４０：ミサイルを四発放つ。ＡＰ燃費がいいため基本ＳＰ回収技。

Ｍ２４／ＥＮ：〇□〇＝５０：スナイパーキャノンからエネルギー弾を放つ。ガードブレイク重視。
ＦＲＴ５５０：□〇△＝６５：火炎放射器ならぬ凍結ガス放射器で敵を凍ら（麻痺ら）せる。５発ヒット。
ＭＭＬ１６：〇〇△＝１０５：ミサイルを１６発放ち中ノックバック。距離が大切なフロムにとっては死に技。
ＲＧ－ＲＨ：□□〇＝１２０：【ダイトウリョウ】という人間が愛用したらしいレールガンで狙い撃つ。ＳＰスキル並の単発超威力技。

フロムちゃんの色々。（後書き）

一応開始（第一章）はキラーマシン（原作二章ルウィー）から。
ラスティショん勢なのにルウィーで遭遇とかどういうことなの……

用語集！（前書き）

そろそろ必要かなー、と思った。キリッ！

４－３時点までで思いつく限り書いたので、読んでない場合は読…

こっち先のほうがいいのかね？

用語集！

ゲイムギョウ界の常識編

光粒子化：生物（人間・女神・モンスター）は死亡すると光の粒子になって消える。消える前に飛び散った血は消えない。消える際に数個遺品が残ることがある。（人間の場合は特に）これが所謂アイテムドロップである。

船：大陸とリーンボックスをつなぐ航路の移動手段。動力は女神のプロセッサユニットのスラスターを元に創られたと言われている。

銃：主にラステイション・リーンボックスで生産されている人間・女神用飛び道具。リーンボックスではアニメのキャラなのが描かれた痛銃も地味に人気。フロムの銃は特注品で一丁１０００００ｃｒｅｄｉｔはする。

傭兵：金や物を貰って仕事をする者の中で、特にモンスターや別国家との物理的衝突を専門とする者。基本的にギルドに所属し仲介してもらっている。

ギルド：各街に一つは確実にある依頼仲介組織。ゲイムギョウ界中から寄せられた依頼をギルド所属の物に仲介、報酬を渡すのが仕事。本部がどこにあるかは誰も知らない。

守護女神：人間を守る神、と言われている。モンスターから人間を守る者とされ、国の実権を持っている。その姿は視ることができただけでも幸運が訪れるとさえ言われているほどに人間の前には姿を現さない。（現実は人間形態の姿をあまり知られていないだけ）

汚染：マジェコンヌのシェアによって生物が凶暴化する現象。人間、女神、モンスター誰にでも起こりうるが、なりやすさはモンスター＞人間＞モンスター異常種＞女神。

～マジェコンヌ関連～

ザ・ハード四天王：マジェコンヌが直接生み出したと言われる四人の強豪。一人一人が女神以上の力を持っていると言われている。

ハンシン：何者か（マジェコンヌではないらしい）によって生み出されたザ・ハード四天王覚醒の鍵。四天王と対応するハンシンが殺し合い、殺した方が真の姿になれるらしい。最初に存在に気付いたのはジャッジだとか。

汚染ディスク：マジックからリンダに与えられたモンスターを自在に汚染させることができるディスク。異常種であろうと汚染させることができるが人間や女神には通じない。

固有能力：ザ・ハード四天王とハンシンそれぞれが持つ特殊な力。微妙な能力からチート性能まで、結構幅広い。

浸食：ハンシンが徐々にザ・ハードに近くなる現象。ハンシンのザ・ハード名に応じた現象に触れることで進む。浸食が進むと固有能力が発現するが、タイミングには結構差がある。

覚醒：ハンシンの浸食が完全に終了すること。条件は浸食条件によって異なる。

用語集！（後書き）

追加してほしい用語があったら感想・メッセージにてお願いします！
思いつかないのこういうの！

0－1　（前書き）

ルウィーから始まると言ったな。
すまん、ありゃ嘘だった。もうちょい前（ラステイション下っ端戦）からだった。
こんなところから始まるけどネプギア達と対面するのはルウィーのキラーマシン（予定）。

至らない点しかない駄作者による作品だが大丈夫か？大丈夫じゃない、大問題だ。ということでどうぞ。

0－1

私は傭兵である。名前はフロム。いつからこんなことをしているかとんと見当がつかない。何でも物心ついたころから銃を持ってただ殺し続けていると記憶している。
私はこのとき初めて女神というものを見た。とはいっても、遠目ではあるが。

その時私がいたのはラスティション付近の旧リゾート区、リピートリゾート。ギルドの依頼で数体のイルカっぽい生物の討伐を終えて小休憩をはさんでいた時だった。

「ふぅ……」

周りの壁の上に座り、一息つく。ここには猫っぽい奴や魚の骨など雑魚がいるが、稀にイルカの様な生物が出没する。その他のやつとは桁違いの強さなのでそれなりに実力がないと受けることはできても返り討ちだ。
まぁ女神信仰が最底辺まで陥っている今ギルドの依頼をこなそうという人間事態がレアだが。私はそこまで信仰心が強いというわけでもない。傭兵なのだ、結局は金になればいい。
それに銃を得物としている以上、弾薬費も莫迦にならない。ラスティションの女神候補生も銃を得物としているそうだが弾薬費は経費で落ちるのだろう。羨ましいことこのうえない。
ふと、後ろを振り向いてみると、青い海と青い空があり、白いリゾートも合わさって綺麗に感じた。ゲームでは傭兵の戦う場所と言えば市街地や荒野、砂漠など殺伐したイメージがあるが私がいるのは元とはいえリゾート地だ。傭兵らしくはない。
それに傭兵というのも自称だ。戦争中というわけでもないし、基本

的に討伐や殺し専門の何でも屋…いや、この場合殺し屋と言った方がいいのだろうか。

などとくだらない思考を考えているのも無駄だ。

少し頭を振り、壁から降りる。掛けておいた銃を持ち、歩き出す。

それと同時に銃撃音が耳に入った。

「……ッ！？」

とっさに銃を構え、周囲に意識を割く。

銃なんて文明の利器を使えるモンスターがいるとは思えない。つまり銃を使える人間がいるということになる。

数年前ならば人間ということで安心もできるが、犯罪組織マジェコンヌの手が世界のありとあらゆるところに蔓延っている今、敵ではないという確証はない。

耳を澄まし、次の銃声を待つ。

聞こえればその方向に牽制射撃。一発１０００ｃｒｅｄｉｔとあまり安くはないが、命あっての稼ぎだ。

５秒、１０秒。１秒１秒が全身の神経を張り詰めらせる。

途端、全く同じ銃声が響いた。即座にその方向を向き、軽く跳んでから引き金を引く。

牽制のつもりなのであまり狙いはつけていないが場所を特定することはできた。

着地すると同時に走り出し、着弾地点に向かう。

着弾したフロアが見えたと同時にその広場とは別方向の通路に滑り込む。

姿勢を低くしてT字路の壁から除きこむと、何やら数人の少女を見つけた。二人ほど倒れているが。

先に撃ち込んだ影響かほとんどが慌てているように見える。
落とす場合今攻めこむべきだが、銃声が聞こえた時点で敵味方が混合している可能性も捨て切ることもできない。
さて、どうするべきか……

ダン、ダァン。
再度銃声が響きだす。咄嗟に隠れ、弾の装填を行う。
一発１０００ｃｒｅｄｉｔの特注弾頭なのだ、無駄に使えば明日の食べ物がなくなる。

幾度となく銃声が響いた後、ぱったりと銃声が止む。
その数十秒後、私の横を灰色の鼠のようなコートを着た少女（どちらかと言えば女性に近いかもしれない）が走って行った。ところどころが焦げ付いている。
どうやら私には気づかなかったようでそのまま走り去っていった。
広場の方を見直すと、先ほど立っていた二人の姿が変わるところが見えた。
遠目……2，３０ｍほど離れているため完全に認識することはできないが、二人が光に包まれて姿を変えた、というところは認識できた。

【変身】ーあるものが他の物に姿を変えること。
片方は服等の装備が変わる程度だがもう片方は髪色すら変わっている。
そもそも、ゲイムギョウ界とはいえ、変身のような吹っ飛んだことを出来るのは私の知る限りでは女神しかいない。
しかしその女神は三年前に四人全員が行方不明になった。

その結果、私の脳内は一つの結論が出る。
あの二人は、女神候補生なのだろう。

私が知っているのは女神候補生とは女神の妹であることぐらい。
あと精々ラステイションの女神候補生の名前と得物。確か【ユニ】だったか。

倒れている二人もそうなのかはわからないが、あの二人の片方はおそらく【ユニ】、もう片方もどこぞやの女神候補生なのだろう。
そうとわかれば話は早い。女神は国で最も尊いと言われる者だ。候補生でも変わらないだろう。
そんな雲の上の方と会えば面倒なことになるのは確実だ。先ほど一発撃ちこんでしまったし。
世の中、バレなければいい。……マジェコンヌみたいな考えだな、これ。

そう考えながら、気づかれないように、こっそり、且つ素早くその場から離れ、ラステイションに戻った。
一度、教会に行ってみるのもアリかもしれないな。
尊い女神候補生が何故こんな辺鄙な元リゾート地にいるのか、聞き出してみるのも必要だろう。教祖を考えれば同等の代価が必要そうだが・・・そのあたりは後々考えよう。まずは報酬だ。

日記追記：報酬は２５００ｃｒｅｄｉｔ、使った弾頭は４発、つまり４０００ｃｒｅｄｉｔ。……今日も赤字だ。

0－1　（後書き）

ネプテューヌの二次小説なのに驚きの泥臭さ。本当にフロムさん恐ろしい。
まだろまん関連は出てこないですよ。ほんとに。
しかしユニはあんだけ銃弾ぶっぱなしといて弾薬費どうしてんだ、と思ったら女神候補生だし経費で落ちるんだろうなぁ。と脳内保管。
本当にネプテューヌの二次は地獄だぜフゥハハハー……
すいませんでした。

ネプギア達と合流するまで泥臭いオリ展開と赤字生活が続きます。
というかこれ以降最悪合流までネプギア一行が出るのかすら怪しいところ。
本当にネプテューヌの二次小説かこれ……？

今回の懺悔：リピートリゾートには本来海豚（ドルフィン）はいません。セプテントリゾートと近いので出るときには出るんだろうなーという理由でやりました。

０－２（前書き）

さて、暫く泥臭さと赤字生活が続く予定だが……。どうなるのか、ほんとに。

余談ですが作者はまだｍｋ２二週しかしてません。（真ＥＮＤと支配ＥＮＤ）
やはりＢＡＤＥＮＤはいい・・・圧倒的じゃないか…！その後のネプギアの苦悩、不安、絶望を妄想するだけで若干楽しくなってくるド畜生が二話をお届けします。

0―2

ラスティションの教会。
教祖、神宮寺ケイとその他大勢、そして女神ノワールに代わり女神候補生ユニが国を治める場。
正直ここに来る人間も激減し、廃れてもおかしくないのだがそこは教会の意地というものなのか無事維持できている。意地だけに。

……失礼。

今日、私がここに来たのは紛れもない女神候補生ユニがラスティションを離れて他国の女神候補生と何やらやっていた。ということの詳細を聞くため。
基本的に私の仕事場は旧リゾート区やカンパニー跡地。そこに女神候補生が現れて流れ弾が当たったりしたら大参事だ。正直そういった面倒臭い雲の上の女神に関わるとロクなことがない、と思っている。

とかなんとか考えている間に教祖が出てきたようだ。

「ようこそ教会へ。まさか傭兵が教会に来るなんて思ってもいなかったよ。」
「素性は…知れているようで。」
「そりゃあね。情報はほかの何よりも強力な武器だ。ラスティション住民の名前や顔ぐらいは記憶している。」

この教祖、巷ではあまり話したがるようなのはいないらしいが、その気分が今わかった。
所謂智将、軍師という物凄く頭が回るタイプなのだろう。私も遅く

はないと思ってはいるが。

「それで、要件を聞こうか。」

「……わかった。」

私が教祖に話したことは、旧リゾート区で女神候補生ユニを見たこと、そしてもうひとりの女神候補生らしきものの存在。そして鼠コートの女性と戦っていたこと。

私の話を聞いた教祖は面白いものを発見したようにニヤケながら考え事をしている。傍から見てとても怪しい。

「その報告に値する情報を与えるとするならば、ユニがあちらこちらに行っているのは僕の頼みさ。詳しくは言えないがね。そしてそのもう一人の女神候補生、彼女はプラネテューヌの女神候補生ネプギアさ。わざわざラステイションに来るあたり何やら目的はあるのだろうけどてんで見当がつかない。まぁ、このぐらいかな。」

「…悩みも取れた。これで失礼する。」

「良い取引をありがとう。ああそうそう。君はその女神候補生達と【会った】のかい？」

「いいえ、遠目で見ただけだが？」

「一度会ってみるといい。君は何か女神を嫌視しているように見えたからね。彼女たちならそのイメージも変わるかもしれない。」

「……取引好きの教祖様が一介の傭兵に随分なご執心で。」

「何、久しぶりのお客だ。少しお節介でもしてみたくてね。それにラステイションの教祖としてラステイションの住民に幸福を与える義務と言う奴もある。」

「…失礼する」

私はすたすたと教会を出る。

どうやら私はああいうタイプが大の苦手のようだ。
教会を出ると、相変わらず黒々しい町並みと青い空が視界を独占していた。
まだ昼前だ。一仕事やってもいいだろう。そう考え、私はギルドに足を向けた。

ギルドとは、まぁ簡単に言えばゲイムギョウ界中の依頼の仲介所だ。
どうでもいいお使いや教祖からのモンスター討伐の依頼など結構多種多様なのだが……
最近（といっても女神の消息不明からだから三年弱ほど前から）はロクに人がいない場合が多い。

「ようフロム。仕事か？」
「…リントさん。」

今私に話しかけてきたのは天宮リント。傭兵というわけではなく、ラステイションの防衛部隊の人らしいのだがロクに仕事をしているのを見たことがない。
座右の銘は【生きていりゃあそのうち何とかなる】だとか。生存本能にあふれている人だ。

「若い子は元気でいいねぇ。俺は毎日生きてビールを飲めりゃそれで十分だ。」
「リントさん物凄く年寄臭い。」
「はっはっは。まぁ女神さんたちがどっか行っちまって世界もごたごただ。この世の中素直にゲームできる子供たちが羨ましくってしょうがねぇ。」
「防衛隊が言う台詞かそれ……」
「いいんだよ今はオフだ。それよりフロム、一仕事する前に飯行か

ねぇか？腹が減っちゃあ仕事もできねぇ。」
「奢りなら。」
「よっしゃ、イーノやルシエルとかも誘って飲み会すっか！」
「私未成年だから。あとまだ昼前だから。」

何だかんだ言って飲み会は免れたけど多人数でこんな昼食取ってる私って何なんだろう。

「支払はフロムを除いて割り勘でいいよな？」
「すまない。今月も大赤字で…。」
「大丈夫だ、問題ない。」
「イーノ君、君の財布の中身は一昨日使い切っていたはずだが大丈夫か？」
「昨日大金の入った財布を拾った。大丈夫だ、問題ない。」
「大丈夫じゃないだろそれ！？」

私、リントさん、今一よくわからないイーノとルシエルさんの四人でいるのはラステイションの一角、Ｎｏｎｏ壱番屋。平たく言えばカレー屋。
最近キミズカレーなるものが新しくでたらしいが私はそんなイロモノは要らん。普通に7辛のカレーがマイブーム。

「リントさんはどうします？」
「俺は…ちょっとキミズカレーでも挑戦してみっか？」
「自殺願望あったんだ…」
「馬鹿いえ。」
「私は無難に2辛にしよう。イーノ君、どうする？」
「１０辛にしよう。舌には自信がある。大丈夫だ、問題ない。」

それ、絶対大丈夫じゃないだろ……。

その後、昼食はイーノが一口毎に悶絶してはルシエルさんの【神は言っている、ここで死ぬ定めではないと】を繰り返したりするぐらいしか特筆することもなく、私は無出費で昼食を取ることができた。リントさんさまさまだ。

ギルドにより適当に依頼を受けてさて行こうとした矢先。
見覚えのある黒と紫が入ってきた。

「ん～…はぁ。悪いわねネプギア。ラステイションのシェア回復手伝わせちゃって。」
「当然のことだよ。ユニちゃん一人だと真っ先に麻痺していつの間にか倒れちゃいそうだったもん。ほっとけないよ。」

今、私はものすごく戦慄しているであろう。
ギルドに入ってきたのはラステイションの女神候補生ユニとプラネテューヌの女神(らしい)候補生ネプギア。
私のことを知りはしないだろうが、数々の出来事が私の心臓を締め付ける。
私はここまで臆病だったのか、と内心自笑し彼女らの横を通りぬけようとする。

刹那、脳裏を通り過ぎた一瞬の感覚。
反射的にその方向に銃を向けると、私はユニと銃を向け合っていた。

「……」
「……」

銃を向け合いながら無言。一瞬感じたのは何だったのか、それ以前に女神に銃を向けたということにただならぬ危機感が煽られ頭がうまく働かない。

「ダメだよユニちゃん！元からトリガーハッピーみたいな思考回路なのに初対面の人に銃突きつけられたらそれこそ乱射魔だよ！」

もう一人、ネプギアの声で我に返る。
自分でも物凄いと思う速さで銃をしまう私と、どうやらまだ我に返る途中らしいユニ。

「あの、大丈夫ですか？すいません。ユニちゃん悪い人じゃないんですけどなんでもかんでも撃ちたがるトリガーハッピーな子なんです。」
「大丈夫、だが……今のは一体……？ハッ、申し訳ない。失礼する。」

即座に立ち上がり、そそくさとギルドを出る私。
後ろから「ユニちゃーん、はやくしないと武器は軽火器なのに体は重いとか言われちゃうよー？」とか聞こえたけど私には関係ない（はずだ）からさっさと依頼をこなすことにした。

日記追伸：今日こなした依頼の合計報酬は１３０００。撃った弾頭は7発で７０００。久々の黒字だ。今日はごちそうにしよう。

０－２（後書き）

これ…ネプテューヌの…二次小説…だよね…？
何この驚きの庶民っぽさ。

オリキャラが出すの面倒ならゲハピク勢の人を出せばいいじゃない。
とか思った結果がこれだよ！
これは叩かれても仕方がないレベル…もうだめだ・・・おしまいだぁ……。
次から次の次辺りから本格的に泥臭く及び血生臭くなるだろう…。
多分、きっと。

0－3（前書き）

なんだかもう瞑想中につき。
確かにネプギアと合流はしてないが…して、無いが・・・どうなの、
これは。
どうなの、これは。

0－3

今日、割と快晴なり。私フロムは割と精神的な危機に陥っていた。
何を隠そう昨日反射的に女神候補生と銃を突きつけあうというとんでもないことをやらかしたのだ。私。
その時は逃げ出すように依頼をこなしたが、ギルドに行くたびにいる（何とか依頼をこなしてはいるが）ため私は気が気でない。
不敬罪か何かで銃殺されそうだ。不敬罪なんてあるのか知らないが。
。

リントさんによればそのプラネテューヌの女神一行はプラネテューヌに帰って行ったとか。女神候補生相手でもあのフランクさは変わらないのだろう。ある意味すごい人だ。

プラネテューヌに行ったというのなら遭遇することもないだろう。
と少し不安気味にギルドに入ると――

「ようフロム。」
「遅かったじゃない。」

……ユニとリントさんが待ち構えていた。なんてことだ。

「リントさん……私に恨みでも何かあった?」
「別にそういうんじゃないさ。昨日おまえさんが仕事に行った後あのプラネテューヌんとこの嬢ちゃんと話したんだが結構いい嬢ちゃんでね。」
「で、それとこの状況に何の関連性が?」
「それは私から話しましょう。」

私とリントさんとの会話にユニが入り込んでくる。
正直嫌な予感しかしていない。私は面倒事が嫌いなんだ。

「リントから聞いたけど、あんたって銃の使い手らしいじゃない？
それもかなりの。」
「かなりの、の部分は疑問がありますがね」
「私に銃の戦い方を教えなさい！」
「謹んで遠慮させてもらいます」

ユニの横を素通りし数個依頼を受ける。どれも数少ない弾数でそれなりに稼げると判断したものばかりだ。

「じゃあリントさん、これから依頼があるんでこれで」
「おお、頑張れよー。」
「ちょ、ちょっと待ちなさいよ！」

私が背負う銃を掴み私を引き留めるユニ。それ危ない。暴発したら大変だから。私が。

「ハァ…リントさん、これなんとかしてください。」
「無理を言うな。女神候補生だぞ？」
「その女神候補生と親しげに話してたのはどこの誰だよ」
「それは俺の特技みたいなもんだ。」
「ちょっと！私を無視しないでくれる！？」

「で、今日の依頼はどうすんだ？」
「廃工場内部のモンスター殲滅ですね。でリントさん、これも連れてけと？」
「女神候補生だぜ？折角だから連れてっちまえ。」

仮にも女神候補生に対しこれとか折角だからとか言い放つ私たちって何なんだろう。本当に不敬罪のにおいがしてきた……。

「じゃあリントさん、行ってきます。」
「おう、行って来い！」
「ちょっと！私を無視しないでってば！！」

ラステイションにも大量に工場はあるが、ところどころ郊外に廃工場があったりもする。
私の目前にある廃工場、通称マッドカンパニーもその一つだ。その通称から察するに何かマッドな研究をしていたのかもしれないが……私には関係ないことだし何より今となってはわからない。
目的は中にいるモンスターの殲滅。できるだけ弾の消費を抑えたいから上手くひきつけなければならないの、だが……

「結局付いてきてるし……」
「女神候補生が付いてきてやってるんだから感謝しなさいよね！」
「女神候補生だから感謝できないんだけど……」

そう、結局ユニが付いてきているのだ。
こんな殲滅戦に女神候補生なんて出てきて巻き添えを食らわれると非常にまずい。報酬どころか逆に色々請求されそうだ。そうされたら割と生きる活路がない。

「とりあえず迂闊に出てこないでくれますか？邪魔なので。」

「邪魔って何よ！私足手まといに何かならないわよ！」
「あーめんどくさ……」

基本背中に掛けているカバーから愛用の銃を取り出し、構えながら扉を蹴り開ける。

扉から見える範囲には赤いスライヌと仮面とつけた猫（？）。
まぁそんなものではないというのは百も承知。
今頭にある作戦は出来るだけ多くのモンスターを引きつけ、一掃。
もっとも効率的かつ弾頭を使わないやり方だ。
大型がいない限りはこれでなんとかなる。

「とりあえず、まず引きつけ「モンスターの殲滅よね！？任せなさい！」ちょ、ま！？」

ユニが私の横を走りすぎ廃工場の中に走り出し、すぐに銃声が響きだした。

「……護衛対象が敵に突っ込むんじゃねぇえええ！！」

私も中に走り出し、とっさにユニを見つけてその数m前に撃ちこむ。

「ちょ、あんた何す「退いてろ！」

ユニに近づいてから手に持つ銃（形状から見てアサルトライフル）を奪い取る。
両方片手で撃つには多少骨が折れる。が、そこまで大した問題はない。

「全員纏めて、マッハで蜂の巣にしてやんよ！！」

叫び声を上げながらアサルトライフルを乱射。多く溜まっている上反動でロクに照準は合わせられないがざっと見て４０体は要るため数を撃てば大体当たる。

「そらそらそらぁ！」

只管ライフル弾をばら撒き、少し多いところにはグレネードを撃ちこむ。

硝煙で徐々に周りが見えなくなるが、聞こえる断末魔と気配頼りに撃ち続ける。

数十秒そんなことを続け、手持ちのグレネードも尽きかけた時。断末魔がパタリと止む。

煙が晴れると、機械の残骸やら蜂の巣になったスライヌなど死屍累々状態だった。

数えた限りでは撃ち込んだグレネード数は６発。計６０００ｃｒｅｄｉｔ…報酬が足りるかどうか。

と、ここでアサルトライフルを借りた相手、ユニの存在を思い出す。

周りを見回すと、ちょうど真後ろに座り込んでいた。

「あ、あんた、ねぇ…！私を殺す気…！？」

若干涙目になりながら私をにらむユニ。数発流れ弾が行っていたようだ。

「あーあ、予定なら2，3発で済ませるつもりだったのに6発も撃ち込んだ…誰かが迂闊に飛び込んだりしなければ……」

「そ、それより私の銃返してよ！」

「はい。」

とりあえず借りていたアサルトライフルを投げ渡す。軽火器も汎用性や小回りは効くがどうにも物足りない。ある種のトリガーハッピーなのだろう私は。トリガーハッピーに数種類あるかどうかはわからないが。

「さて、帰ろ帰ろ…黒字だといいけど……」
「ちょ、ちょっと待ちなさい……！」

振り返ると、ユニが何か這い蹲りながら言っていた。女神とは思えないほど無様な恰好である。

「…何しに来たんですか女神様」
「あんたに銃の戦いかた教えてもらうため……あ！」

何かをひらめいたようで突然立ち上がるユニ。嫌な予感しかしない。

「今、決めたわ！あんたを教会で雇う！」
「……ハ？」

私に指差しながらそんなことを宣言するユニ。
どうしてそうなったとか、なんでだよとか色々言いたいことはあったが、私の頭に浮かんだのはただ一言。
…これは、面倒なことに、なった。

０－３（後書き）

その場のノリで書いているのでもう自分でもよくわからないことに。
これは叩かれる。横から。
今後次回予告は無し！

今回の懺悔：デスペラードぐらいだけどユニはアサルトライフルを片手で撃ってます。というかアサルトライフルなのにユニの銃って単発……ドーバーガン（実弾・レーザー両方撃てるトンデモ銃）なのだろうか。

０－４（前書き）

最近もうフロムじゃなくてもいいんじゃないかな、と思い始めた今日この頃。
最近ネプスレの平和さによくほんわかする今日この頃。
最近コメントが来ることにかなり感動する今日この頃。
最近ジャッジ様関連で小説考えれば某人類種の天敵みたいなＢＡＤＥＮＤができるんじゃないかなとか思いつき始めた今日この頃。

0ー4

どうしてこうなった、という言葉がある。
どうして、とは何故など原因を聞く場合に使われる。こうなった、つまりこうという状況になった。
合わせてこの状況になった原因を聞く、転じて状況を嘆く際にも使われる。
以上のことを踏まえてもう一度言おう。

どうしてこうなった。

私の今いる場所はラステイションの教会。依頼を受けたら女神候補生に絡まれるし挙句雇われることに・・・どうしてこうなった。

「女神候補生に雇われるなんて…世も末だ。」
「…さっきからそれ聞こえるように言ってない？」
「なんのことかね」

「おや。ユニから師匠を連れてきたと連絡がきたので急いできてみたら。君だったのか。」

どうやら教祖が来たようだ。正直こんな早く再開するとは思っていなかった。会いたくはなかった。

「傭兵を雇う女神候補生って、この国もそろそろ末じゃないの？どうなのよ教祖様。」
「まさか、傭兵を雇うとは僕も思わなかったよ。ユニも何を考えているのやら。」

「……そういうのって、本人がいないところでやるもんじゃない？」
「「本人がいるからやるんでしょ」じゃないかい？」
「……」
飽きれたようにため息を吐いてから適当な場所に座るユニ。
どうやら話に絡むのはあきらめたようだ。
「さて、ユニから聞く話では君を雇うらしいが……希望はあるかい？」
「弾薬費。」
「だけかい？」
「生活費とかは別に稼いでいる。問題は弾薬費。私の銃は一発１００ｃｒｅｄｉｔの特注品だから。」
「一発１０００ｃｒｅｄｉｔ、か……。その銃は君が背負っているそれかい？」
「……。」
「…じゃあこういうのはどうだろう。これから君にはユニの御守りのついでに教会からの依頼を受けてもらう。もし大型を狩れば一体に付き２０００ｃｒｅｄｉｔを手当しよう。つまり、大型を一体狩れ、という報酬が３０００ｃｒｅｄｉｔの依頼を君にだし、それをこなした場合大型の特別手当に加えて依頼報酬。つまり５０００ｃｒｅｄｉｔを稼げる。というわけだ。ユニに関する手当はユニの小遣いから割当てよう。それでいいかい？」
「お守りって何よ」
「引き受けた。」
「スルー！？」
「契約成立だ。それで、教会にも住む場所はあるが、どうする？」
「元の場所でいい。教会に行けばいいんでしょ？」

「まぁ、そうだね。とりあえず今日は帰ったほうがいい。明日ユニを向かわせよう。」
「え！？私！？」
「君が雇うのだから君が面倒を見るのは当然だろう？」
「……はぁ。わかったわよ。」

どうやらユニは自分に飛び火するとは思っていなかったようだ。というか当事者というか元凶だろう貴女様は。

「じゃあ、今日はもう帰ったほうがいい。ユニの我儘に付き合わせることになってすまないと思っているよ」
「ケイ、棒読みになってる」
「内心だと面倒くさい女神を押し付けられて幸運だとでも思っていそうな……」
「心外だね。」
「まぁいい。じゃあ、また明日。」
「ああ。また明日。」
「寝坊したりしないでよね！」

教会を後にすると、日が既に暮れだし、黒い工場群が輝いて見える。
私は若干忘れかけていた依頼を報告（報酬は計６５００ｃｒｅｄｉｔだった。ギリギリ黒字）し、自宅に戻った。

０－４（後書き）

ユニ（ケイ）と契約して弾薬費が圧倒的に浮いたフロム。
そしてケイの真っ黒な依頼がラスティションを震撼させる・・・！？
次回、超次元ゲイムネプテューヌｍｋ２＋。
【ケイ「そちらにとっても、悪い話ではないと思いますが？（笑）」】
お楽しみに。

0－5（前書き）

コメがさらに増えてばんざーい。
というかこれいつ1章（ルウィー・キラーマシン一戦目）になるんだろう…。
それに一章のタイトルすらまだ考えてないのに…。

でも日常パートのイーノ君とルシエルさんの汎用性が高すぎてヤバイ。

0―5

早朝。私は聞き慣れない音楽で目が覚める。
私は比較的朝には強い方だが、時計を見れば午前４時。本当に早朝だった。
横に転がっている私を起こした携帯端末を開ける。メールだ。
私の携帯端末の使い道と言えば本当に携帯する電話だ。その電話もロクに使った覚えはない。
まぁしかし、こうしてメールが来ているのだからそれを見るほかはない。

Ｆｒｏｍラスティション教会　Ｔｏフロム
Ｔｉｔｌｅ：依頼連絡

早朝からすまないね。その日その日の依頼をこれからこうしてメールで通達するよ。メールアドレスの聞き所は聞かないでほしい。

これからすぐにユニも行くだろうから依頼ついでにユニのお守をしてほしい。ユニも劣等感の塊だがあれで女神候補生でありノワールの妹だ。十分優秀だと僕は思っているよ。

さて、最初の依頼だけど、ミッドガルド地区の中規模マジェコンヌ信仰団体を制圧してほしい。
ユニとプラネテューヌの女神候補生ネプギアによってラスティションのシェアは全体的に約６７％ほど回復した。しかしまぁ、そういう信仰団体はどうしてもある。それは直接たたく必要があるのだがいかんせん教会も手が短くてね。そこでちょうどいい傭兵の君に頼むことになったんだ。
制圧方法は君に任せるよ。自慢の銃でやってもよし、和解や舌戦も

よし。
ただし条件を二つつけさせてもらう。死者を出さないこと、必要以上の器物破損を起こさないことだ。
この二つを守ってさえくれれば何をしても構いやしないよ。犯罪組織を信仰したことを後悔させてやるといい。
報酬は後払いだが、金額は先に提示しておくよ。５００００ｃｒｅｄｉｔだ。
じゃあ、頑張ってほしい。

……なんともまぁこんな早朝からこんな長いメールを送れるものだ。
しかしまぁ、市街戦とはなんとも傭兵向けな依頼だ。それで５００００ｃｒｅｄｉｔもらえるのであればこれは稼ぎ所だ。言わばぼろもうけのチャンス。

何にせよ、とりあえず、朝食でも取ろう。目も覚めてしまったし。

とは考えたものの、基本的に私は料理をすることはない。理由はド下手だからだ。
一度色々工夫してはみたもののイーノが復活したそばから悶絶するというある意味猟奇的、あるいは兵器的なものができてしまう。
これは才能がなさ過ぎて一回転した、という安直な考えでいいのだろう。
まぁそのような理由で自室の冷蔵庫（と言うより食料貯蔵庫と考えるべきかもしれない。）には飲料しか入っていない。それだけで腹

が膨れるわけもない。
そして買い置きしている携帯食料も底を尽きかけている。
……結論、リントさん辺りにでもたかろう。

こうもすがすがしい気分でギルドを訪れるのは一日ぶりだ。
だがしかし、契約までしてしまった以上（立場的な意味で）お荷物を連れて制圧戦なんかしないといけないのだから若干憂鬱な気分だ。
だが、今はそれを考える必要がないだろう。食事を食事として考えて取れるということは割と貴重だ。
リントさんに対して何をたかろうと考えながらギルドの扉を開けると――――

「待っていたわ！」

即座に扉を閉める。
おそらく音速の域に達するレベルで扉を閉めた私は、綺麗に回れ右でギルドに背を向け歩きだす。
どうやら私はまだ夢の中のようだ。無理もない、先ほどの時計は午前４時。いつもの私はあと一時間程度寝てから起きる。
なのでまだ目が覚めきっていないようだ。
こういった意識のあり、なおかつ現実性のある夢は元の場所で眠りなおすと逆に目が覚めると言われている。
この状況にぴったりと当てはまる解決方法だ。そうだ、それにしよう。

「ちょっと、なんで扉閉めたのよ！」

どうやらこの夢では女神様に好かれているようだ。うん、これが有難迷惑という奴なのだろう。
女神と直接関わっていいことというのが思いつかない。私の場合弾薬費が浮く程度か。
さて、まずはコレをどう切り抜けて家に帰ろうか……

「……待ってって言ってんでしょうが無視すんなよオラァァァァ！！！」
「っつ、ぅおっ！？」

後ろの女神様が私にあろうことか発砲までし出した。女神がルール（大体あってるはず）な国、しいてはゲイムギョウ界でこんなことが許されるのだろうか。女神だから許される。
咄嗟に銃口を逸らして一命を取り留めたがなんということだろう。こんな危険な女神様とこれから依頼をしなければいけないのだろうか。教祖の小憎らしい顔が目に浮かぶ。

「これから依頼もしなければいけないのに発砲するなんて何を考えているのだろうかこの腹黒ツインドリルは。こんなのが女神になって大丈夫なのか。」
「ちょっと、途中から声出てるわよ。というかわざとよね、わざとモノローグ口に出してるわよね？」
「なんのことやら。」

さて、現実逃避もここまでにして、そろそろ何か食べたい。女神なんて上流階級のこのお方が料理なんてことを出来るわけがないし、イーノ辺りでもいればよかったのだが……

「イーノ君。そんな予算で大丈夫か？」

「大丈夫だ、問題ない。」

いた。まさか考えた途端に出てくるとは思わなかった。
しかしこいつらは何をやっているのだろう。ギルドにちょくちょく顔を出すようだがどういう仕事をしているかロクに聞いたことがない。イーノは何かの書記官をやっているそうだが……到底信じられはしない。
まぁ今はそんなことはどうでもいい。重要なのは朝食だ。

「奇遇だなイーノ、ルシエルさん。朝早くから。」
「ああ、フロムか。いや、イーノ君が朝早くからキミズカレーを食いに行くと行って聞かなくてね。全く、困ったものだよ。」
「じゃあ私も手を貸そう。と言ってもルシエルさんとイーノの二持ちで。」
「おいおい。私もそこまで手持ちはないんだがな。」
「女神様がいるんだし割引とか聞くんじゃない？」
「女神を何だと思ってるのよ……まぁいいわ。そのキミズカレーだっけ？それを食いに行くんでしょ、あんた。どうしても付いてきてほしそうだから仕方なくついてってあげるわ。」
「何かほざいてるし行きましょうかルシエルさん。」
「まぁまぁ。彼女の言うことは断れないさ。女神は絶対だからね。」
「絶対者にまともなのがいた覚えがないんですけどね……」

談笑しながらイーノの後を追う私とルシエルさん。
途中から寂しくなったのか女神様が来たけどイーノもルシエルさんも煩わしそうにはしていなかった。
私の感性がおかしいのだろうか……？

私やリントさん、イーノとルシエルさんもよく行くらしいラスティション下層に存在するＮｏｎｏ壱番屋。
ラスティションを代表する歌手、キミズナナも常連でその所為かキミズカレーというゲテモ……イロモノカレーもメニューにでかでかと宣伝されている。

「キミズカレーだ。今日こそは大丈夫だ、問題ない。」
「少し前１０辛で悶絶していただろうに…懲りないなこいつ。」
「こいつは話を聞かないからな。さて、私は無難にハヤシライスでも食べようか。」
「今日は依頼もあるし、大盛り2辛のカツとチャーシュー増し増しで。」
「支払が私とイーノ君だからって遠慮がなさすぎるだろ。私はともかくイーノ君はまともに金を持っていないはずだ。」
「昨日の夜カツアゲにあったが逆に財布を奪った。正当防衛だから大丈夫だ、問題ない。」
「なら大丈夫だ。」「なら大丈夫だ。君の判断なのだからな。」
「どこが！？正当防衛どころか逆カツアゲじゃない！？」

先ほどまで黙っていたユニが声を荒げる。
どうやら常識人だったようだ。街中で人向けて銃ぶっぱなしはするが。

「何か問題ある？」「少なくとも私にはないがな。」「大丈夫だ、問題ない」
「あんたらねぇ！何さらっと犯罪者紛いなことやってんのよ！？マジェコンヌかあんたたち！」
「で、何食うか決まったの女神様？」
「あ、もうちょっと待って。こういうとこ来たことないからよくわかんなくって……」

「早くしてくださいませんか女神様こちとら仕事があるんですが」
「だからちょっと待ってってば！あーもう私もキミズカレー！」
（ゲテモノ選んだよこの女神様）（そんな選択で…大丈夫なのだろうか…）

その後談笑（失笑）した後にカレー到着。私は色々と増し増しなカレー。ルシエルさんのは若干色が薄いハヤシライス。
そしてユニとイーノの目の前にあるのはゲテモノとしか言い様のないカレー（？）。
本来のカレーは茶色、まぁ白でも可だが、そのカレーのようなものの色は紫。
なんだ、ラステイションのカレー屋ではプラネテューヌ的な何かが流行っているのか。紫色だし。
スープみたいな器に盛られた白米と紫色のルーが合わさって何か瘴気的なものまで醸し出し始めている。これは人類に出していいものではないと思うのだが。あ、一人人間じゃなくて女神だ。

「え、これ、食べるの……？」
「女神候補生様は有言実行すらできな「わかったわよ！食べるわよ！」
「イーノ君、そんな料理で大丈夫か？」
「大丈夫だ、問題ない（冷汗）」

いつもドヤ顔なイーノにまで顔に汗が出ている。そうとうの凶器なのだろう。今回は何回復活するだろうか。

「「「「いただきます」」」」
「はむっ」「……」

恐る恐るゲテモノを口に運ぶユニとイーノ。

（どうなるんだか……）
「……バタッ」「……がくっ」
「まぁわかってた」

即座に机に倒れた。
カレー（パープル）を退かしてから倒れる辺り余裕はあったのかもしれない。

【神は言っている、ここで死ぬ定めではないと。】
「だからゲテモノはやめろと言ったのに……。」

イーノはルシエルさんによって簡単に治るが、この私の横で倒れているツインドリルはどうしたものか。
私の手持ちにあるのは簡単な傷薬とその他諸々。
このゲテモノの威力を打ち消すようなものはあいにくと持ち合わせていない。
と、なると……まぁいい、教祖にでも連絡してみよう。

【Ｆｒｏｍフロム　Ｔｏラステイション教会
Ｔｉｔｌｅ：Ｒｅ；依頼連絡

依頼に関しては了解した。
しかし女神候補生ユニの扱いに困っている。私の朝食にユニがついてきたのだが、キミズカレーを食べて気絶した。生憎手持ちには簡単な傷薬しかない。
対処法を求む。】

送信、と。
私の横で倒れるユニは白目まで向いて痙攣し始めている。
最早一種の兵器じゃないか、キミズカレー。
一方イーノは食う→倒れる→復活→食う→倒れるを繰り返し、順調（？）にキミズカレーの量が減っている。
こいつならどんなゲテモノ料理でも食いきれそうだ。ただしルシエルさんがいるときに限りそうだが。

…あ、もう戻ってきた。暇なのだろうか、ラステイション教会。または女神候補生がかかわっているから最重要事案なのだろうか。後者だと思いたい。

【Ｆｒｏｍラステイション教会　Ｔｏフロム
Ｔｉｔｌｅ：Ｒｅ；Ｒｅ；依頼連絡
ユニは女神候補生さ、そう簡単には死にはしない。例え白目をむいて痙攣していてもね。数分で治ると思うよ。ああそうそう、できれば任務は今日中に終わらせてほしい。激務だというのは承知しているが君は傭兵で僕は依頼者だ。報酬は弾むから、頑張ってほしい。
勿論、ユニの世話もね。】

……女神ってすごいな。
片手間に携帯を弄っていたため、気づけば大盛りカレーは空になりスプーンは空しく器を叩いていた。
とりあえず教祖がそう言っているのでユニは放って……そうだ、依頼はこれ連れて行かないといけなかったんだった……。

「…はぁ、ルシエルさん、私とコレでこれから依頼に行くんで、これで失礼します。」
「ここで死ぬ定めではないと…。そうか。その女神様はいいのか？」
「教祖様が数分放っておけばいいと。じゃ、イーノ。奢りありがと。

」

ユニを背負って席を立つ。
私は自分でも細見だとは思っているがそれなりに筋肉はある。
でなければグレネードライフルとその銃弾を何発も持ち歩くことなんてできはしない。
…しかし、ユニはアサルトライフルを携帯している割には軽い。
もしや、何か女神的技術で隠し持っているのではないだろうか…？
まぁ、それを気にする場合でもない。

「ああそうだ、フロム。」
「……？」

ルシエルさんに声をかけられ、振り向く。
相変わらず不敵な笑みのルシエルさんは私に向かって一言言った。

「そんな依頼で大丈夫か？」
「…大丈夫、問題ない。」

私はできる限りのドヤ顔で返した。

0－5（後書き）

（・´ー・`）ドヤァ……

ドヤ顔でゲテモノを食べながら倒れて即座に復活するイーノ君はさぞかしシュールなんだろう…。

ちなみに作者はキミズカレーの元ネタを知りません。だからゲテモノになってしまったが大丈夫か？

次回やっとミッドガルド。どうしようかな……。

0－6（前書き）

ネプテューヌっぽいことをあまりやっていないためか中々指が進まない最近……。
この依頼が終わって、ユニギアのタイマンやって（中略）ルウィー行ってキラーマシンで一章だ…遠い、遠すぎる…！何てプロローグだ…！
こんなんじゃあ最初（一章）からクライマックスみたいなふいんき（何故か変換できない）になってしまう…！どうしよう…。

0－6

ミッドガルド。ラステイション（都市）からバイク（魔改造）で３０分強ほどの所に存在する魔都市。
この魔都市、という名称は私ぐらいしか使っていない。というか私が考えた。
ラステイション（国）は貿易国家だが、その中ではかなり閉鎖的な都市なのだ。偶にギルドにもミッドガルドからの依頼は来るが、依頼内容がかなり淡泊だ。傭兵としてはわかりやすくていいのだが。
私がミッドガルドを魔都市と呼ぶ理由は一つ。【女神が失踪する前からマジェコンヌを信仰している】からだ。
閉鎖的な理由はそこから来るのかもしれないが、ラステイションでマジェコンヌシェアが急激に拡大したのは大体この都市の所為。まぁどちらにしろ女神失踪の時点でマジェコンヌにシェアが総食いされても仕方ないとはいえるが。

さて、私とユニがいるのはその魔都市、ミッドガルドの入り口。
ラステイションのイメージカラーは黒だが、この町はどちらかと言えば赤黒い。
マジェコンヌのイメージカラーの赤の所為なのだろうか。実はそこまで深く考えてはいないのかもしれない。
私とユニを載せて３０分強ほど爆走したバイクはその辺に泊めておき、愛銃を取りだす。
今回は殺傷してはいけないということでさらに特別な弾頭（一発１５００ｃｒｅｄｉｔ）を１０発ほど持ってきた。
足りなかったら体術やらユニの銃もあるからどうにでもなるだろう。
……で。

「そこの女神とは思えない無様な姿をさらしているお方」

「わ、ゲホッ、私のことじゃ、ないでしょ、ウグ……」
「だからゲテモノを食べるなと言ったのに……。」

私の横で物凄い腹痛に悩まされているお方が約一名。あんなゲテモノ食べたんだからある意味当然とも思える。
というか女神と人間の違いが本格的に変身以外にないんじゃないかと思い始めてきた。間違ってないだろう。

「これから殲滅戦が始まりますが邪魔っぽいのでここにいてくださいませんかお願いいたします」
「そんなケイ張りに棒読みすることないでしょうに……！」

腹を押さえて荒野を転がっている女神候補生様を見ていると何か笑いがこみあげてくるが何とかこらえる。
流石に撃たれそうだ。

「じゃ、役に立ちそうにないんでこれ借りていきますよー死ぬまで」
「死ぬまで付けんなぁぁあぁぁ……がくっ」

…大丈夫なんだろうか、ラステイション（国）は。

街中を歩きながらユニから奪……借りた銃を調べる。
前はアサルトライフルだったが今回は回転式拳銃、つまりはリボルバーが二丁。結構幅広く使うようだ。
依頼内容を知っているからか実弾は入っていない。付いてくる気満々だったんだ…それをキミズカレーというゲテモノカレーに……おっと、顔がにやけていたようだ。

自分でも怪しいとは思いながら、薄暗い街中を歩く。
まだ昼前なのだが、ミッドガルド周辺は何故かいつも薄暗い。何か環境的にヤバいことでもやっているのではないかとラスティション（首都）では噂になっている。が、一切不明らしい。

信仰団体の制圧となると、何か裏路地の廃ビル、というイメージがあるが、ミッドガルドに関してはそうでもない。
元々マジェコンヌ信仰がラスティション（国）では比較的強かったこともあり、マジェコンのたたき売り、横流し等が割と頻繁に起こっている。
それでもまだ女神がいたころは下火だったが、女神が失踪した三年前からマジェコンたたき売りは政府もスルーし始めて割と合法化されている。

まぁ私が生きてきた中で政府が何かまともに仕事しているのを聞いたことがない。
そもそもあらゆる国家的最終権限が女神にある世界で政府だなんだに何の意味があるのか、とも一自機思ったことがある。女神が失踪してからそういったことを想定してのサブメモリのような役割をしていた、と思っていたのだが別にそんなことはなかったようだ。マジェコンスルーしてるし。

さて、メールにこっそり添付されていた（さっきまで気づかなかった）地図や写真を頼りに探してみると、まぁ、それなりの企業を装った信仰団体、というよく暴力団か何かにありそうなパターンだ。
しかしまぁ、1企業（を装った信仰団体）を一人（と荷物一人）で制圧しなければいけないというのだ。
あの教祖には絶対に頭脳戦で勝てそうな気がしない。

…ここまで長々とモノローグで語っておいてなんだが、正直楽な仕事だろう。
問題を挙げるとすれば、死傷者を出さないようにするために手加減す必要があること、あまりグレネードをぶっ放せないこと、制圧ということは頂点やその周りを何とかする必要がある、ぐらいか。
その頂点はどこにいるのか、今この目前のビル（？）にいるのか、など等。
必要以上の器物破損は禁じる、逆に言えば必要ならば多少の器物破損は目をつぶる、ということだ。
その必要範囲内にビル一棟は含まれるのだろうか。

…おや、通話？

『やあ。仕事ははかどっているかい？』
「……暇なんですね、いや暇なんだろ教会って」
『なかなか失礼なこと言ってくれるね。一つ重要なことを言っておこうと思ったんだけどね。』
「…何ですか、二つの禁則事項を解いてくれるのが一番ですけど」
『そこは変わることはないよ。でもまぁ、そうだね。君の目の前にあるビル、それ一棟分ぐらいなら許容範囲かな。ああそうだ、ユニはどうしてるんだい？』
「まだ町の入口で腹押さえて転がってるんじゃないんですか」
『……まぁ、いいや。仕事とユニのお守り、頑張ってほしい。』

通話が切れたようなので、端末を閉じる。
何やら随分とこまめだが、女神がいるからという理由にしておこう。
その辺の考察は面倒臭いというか意味がない。
さて、多少許可も貰ったところで、これからやっと依頼を始められる。
どう落としたものか……♪

「あ！やっと見つけたわよ！！！」

…今、聞きたくない声が聞こえた気がする。
恐る恐る後ろを振り向くと、あっさり回復したのか腹痛を気にする様子もないユニが仁王立ちしていた。

「何だ、生きて……コホン、回復されたのですね女神様」
「白々しいからやめなさいっての…」
「それで、まさか付いてくるとかいいませんよね女神様」
「当然でしょ。ラステイションの女神候補生として、シェア回復の仕事があるんだから。」
「シェアとかどうでもいいし金もらえればいいんだけど」
「何か言った？」
「イエナンデモアリマセンヨメガミサマ」
「よーし、張り切って行くわよ！」

テンション高めに乗り込み始めたユニを見て私は一つ予感した。

ああ、今回の仕事、ロクに進む気がしない。

０－６（後書き）

次回はやっと依頼遂行。【死人】はでません。ええ、死人は。
でも死人が出ないとフロムっぽくないような…某大統領でもあるまいし…。
まぁ、【まさに外道】を目指して失敗すると思うので次回もお楽しみに？

０－７（前書き）

何か微妙に長い気がする今回。
これでやっと依頼が終わって、次にユニギアタイマン、ルウィー…
…うまく進めればあと３，４話ぐらいでｃｈａｐｔｅｒ０終わるか
…？終わると…いいな……。

07

「今このときよりユニの名に置いてこの企業を制圧す「何してんだそこのボケェエエ！！」ハブッ！？」

ユニの後頭部に銃弾（リボルバーに入っていた。おそらく実弾ではなくゴム弾かペイント弾）を撃ち込み、気絶させたところを引きずってビルを出る。

この女神様と来たら、特に策も巡らさせず正面突破なんかし始めたのだ。

某吉〇家のコピペかというね。女神ってもしかして頭が弱いのだろうか。

ビルの裏側に逃げ込んで、ユニを投げ捨てる。おそらく女神だから数分で目が覚めるだろう。

コレの所為で作戦（まだ考えてなかったけど）が台無しになってしまった。

仕方ない。早速秘蔵のとっておきグレネード（一発１５００ｃｒｅｄｉｔ）の使うことにしよう。

いつも通りの一回リロードだが、今回は何が特別性かをこのモノローグにて説明しよう。

この弾頭は対象との激突の衝撃ですぐに爆発はしない。部分的に液状化して粘着し確実に対象を破壊または殺傷を目的としている。

欠点をあげるとするならば【当てなければならない】。つまりこんな狙撃なんか考えもしないグレネードライフルで確実に当てなければ効果はほぼない、と言うことだ。

ここまで説明しておいてなんだけど、結局はガムグレネード弾だ。

局所的な破壊または殺傷に適している、だけで知っている人には通じるだろう。

建物破壊にも使えるこのガムグレネード弾（一発１５００ｃｒｅｄｉｔ）をふんだんに使うつもりだ。

今回持ってきているのは十発。とりあえずこのビルの形状は四角柱。各隅に設置して８個。

残り二つの設置場所と、死人を出してはいけないという条件を満たすためにビル内の人間全てを退去させ、その後全員確保する必要がある。

ガムグレネードの起爆は大体７秒。つまり、確保後６秒の間に全て起爆する必要がある。リロードどころか予備の銃ももう一つあるから一回で二つできる。全て撃つのにはリロードを含めて８秒と言ったところか。

…だめだ、これじゃあ最後を撃つ前に爆発する。いや、最初に撃ったグレネード付近に撃ちこめば誘爆を狙える。これだ！

そしてもう一つの問題。どうやって退去させるか、だ。私はどうしても撃ちこむのに集中する必要がある。つまり退去は私の目の前で伸びてるこの女神様に頑張ってもらう必要があるのだが……

大丈夫、なのだろうか…？

「はぁ……。」

ため息が自らの口から漏れる。自分でも面倒ごとになってしまったと今更ながら後悔している。しかしまぁ、どれだけ後悔しようが現実は現実だ。受け止めなければならない。

……はぁ。

「う、ん……。」
「起きましたか単純女神様」
「誰が単純めが…！、っつぅ……。」

目覚めたと思ったら後頭部を両手で押さえるユニ。回復はするが、どうしてもダメージは残るようだ。
さて、これからの内容を理解し、賛同し、行動してくれるかどうか……

「はぁ！？なんでそんなまだるっこしいことしないといけないのよ！」
「どうしてもそんなまだるっこしいことしなきゃいけないんだからわかれよ脳筋」

まぁわかってた（予知夢）。この女神様が正攻法以外のことを考えていないなんてもちろんわかってたさ……はぁ。

「いいですかロクに働かないであろう頭と耳をよく働かせて聞きやがってくださいね。」
「ねぇ、もう突っ込んでいい？」
「却下。まずそもそもの目的はこの企業の制圧。制圧っつうことは企業員はピンからキリまで全部確保、まぁ捕縛する必要がある。しかも教祖様は死者は一人も出すなという条件まで出してくれやがったお蔭でただでさえ面倒くさい依頼だというのにこれ以上面倒くさくする気ですか貴女様はお前寧ろ妨害しに来てるだろ教祖の差し金で１ｃｒｅｄｉｔでも私に渡さないように仕向けられた足かせだろ

このツインドリル」
「ちょいちょいちょい待って待って待ちなさいってストップストップ！」

ユニに抑えられ、われに返って衝動的にユニの顔面に突きつけていたライフルをしまう。
そうだ、弾頭十発しか持ってきてないんだから無駄に使うわけにもいかない。衝動とは怖いものだ。

「ああ、危ない危ない。貴重な弾頭を無駄使いするところだった。」
「心配するのそっちじゃない！こっち！！」

必死になって自らを指差すユニ。シュールだとか思ってしまってはいけないのだろう。

「それで、いい加減理解してくれやがりましたかツインドリル」
「そのツインドリルって呼び名は固定なの……？まぁいいわ。何か納得いかないけどその作戦に乗ってあげる。感謝しなさい。」
「嫌です」
「……」

「さて、簡単に説明します。これからこのビル内にあるであろう警報装置をフルに作動させてください。ぶっちゃけて言えば女神様のやることはそれだけです。」
「それだけ！？もっとこう銃をばーっ！ってぶっ放したりしないの！？」
「出来ればとっくにやっとるわ。さっきも言ったけど教祖様からの条件で死人を出さないようにと言われてる。……あ、あと出てきた連中の確保も。」

「…で、あんたがやるのって？」
「グレネードによるビルの破壊。おそらく何らかの記録や貯蔵もあるだろうからその破壊もかねて建物ごと一気に。」
「……結構やること過激なのね」
「得物の都合上。」
「ああ、そう……。じゃあ、行ってみるわ。警報鳴ればって外からでもわかるのよね「勿論」なら、やってやるわ！」

意気揚々とユニは走り去り、私一人残されたところで弾頭や銃のチェック。
とりあえず全部問題なし。ほかの弾頭もすべてすぐに装填できる。
問題なし。
両方の銃を置いて屋上より少し下の隅に狙いをつける。あとは警報が鳴ると同時に撃つだけ。

……そういえば自信満々だったが…警報の管制室とか知っているわけがないし……どうするつもりなんだろうか。

そんなこんなで待ち続けて十分弱。

ジリリリリリ、と危機感を煽るような音が響きだした。
その音を聞いてすぐに置いてあるライフル二つを発砲。即座に次弾を装填してビルの壁を上りながら八角の内下の二つに発砲。上りながら次弾装填。
屋上まで登って飛び越えながら残りの隅二つに発砲。ここまで目測で5秒。
空中で装填して狙うは入口の方の二隅。これはそこまで狙いをつけずに撃つ。

そしてリロード。１秒１秒がここまで長く感じるのは命の危機ぐらいだ。
最後の二発装填、狙うは今撃った上の二隅付近。
上手く近くにあてれば誘爆できる……ッ！

放った弾頭はとてもスローモーションで飛んで行き、先ほど撃った弾頭の数Ｃｍ横に着弾。それと同時に奥の弾頭が爆発。
続いて下の方も爆発し始める。

スローモーションの視点が解除され、重力に縛られ下に落下する。
落下地点近くには多数の人が。
弾頭はもうない。このまま落ちるだけなのだが――――――
まだ、手はある。

ライフルを下に投げ捨て、ユニから奪っ借りたリボルバー二挺を下に連射。実弾が入っていないことは確認済みなため下に降り注ぐのはゴム弾か何か。
そして、リボルバーは意外に反動が大きい、反動が大きいということは、それすなわち落下の勢いを弱めることができるということ。
しかしリボルバーの弾数は各６発。計１２発の発砲でどこまで勢いを弱められるか。致死圏は既に脱出済み。あとは受け身の問題だ。

地上約５ｍ、リボルバー連射の反動でまっすぐ下に向いていた体が傾き、足が地に向くようになりその直後、着地。
リボルバー弾数、０。衝撃、それなり。戦闘続行、弾切れにより不可。
一応周りに銃を向けて牽制しておくが、これの弾数を知っていればすぐにブラフだとはバレるだろうし…。
ユニはどこに行ったんだか…

「フロム！」

ん、この声はユニ。

振り向くと、あろうことか変身なんてしやがった状態のユニがこちらに走ってきた。

デカい銃とツインドリルが（いろんな意味で）眩しい。

「フロム。あんたの作戦通り出てきた連中は全員無力化したわ。一応殺傷しない弾薬ってのも私も持ってたからね。」

「……ああ、それはよかった。」

とりあえず突っ込むのはもう野暮だと思いスルーして教祖に連絡を取ることにする。メールだとラグもあるだろうし通話で。

『やぁ、フロム君。依頼は順調かい？』

「まさか君付けで呼ばれるとは思っていませんでしたよド畜生」

『他にいいのが思いつかなくてね。よければちゃん付けで呼ぼうかい？』

「謹んで遠慮します。それで教祖様、女神様が変身までしてくれてターゲットの連中を確保してくれましたが？」

「それ嫌味？ねぇ嫌味よねそれって。」

『そうか。それは御手柄だねユニ。まぁ女神化を使ってしまったのはあまり褒められたことではないが…。これから回収班を向かわせるよ。ラステイションに戻ったら昼食でも取って教会に来てほしい。ああフロム、報酬金は君の口座に振り込んでおくよ。決してハッキングしたわけではないから安心してほしい。じゃあ、また。』

…最後物凄く不穏な言葉が聞こえたが気にしないでおこう。

必要なところは注意深く、深く聞いてはいけないところはできる限りスルー。処世術の基本である。

その後数分で大量（数十人）の回収班がなだれ込み、連中を輸送して行った。
私とユニは回収班に後を任せ、ラステイションに帰ることにした。
私のバイク、ＶＯＢ（ヴァリアブルオーガブースターの略。命名私）はこの町に来た時と同じように佇んでいた。まぁバイクが一人でに動き出すなんて…ゲイムギョウ界ならありえそうだ。

ミッドガルドからラステイションに戻る最中、バイクで３０分強かかる道のりを駆けるＶＯＢ。
時速２００ｋｍ近いスピードの中、行きの時よりユニの私にしがみつく力が強いような気がした。

０－７（後書き）

あとがきの前に一つ言っておくことがある。

この小説は泥臭さをウリ（？）にしていたような気がするが別にそんなことはなかった。何かフロムさんビルの壁駆けあがっちゃってるし跳んじゃったし挙句リボルバーの反動で着地補助しちゃうし。知ってるかい…？リボルバーって、そこまで反動があるわけじゃないんだぜ…。

前話の複線回収？いいえ、単なる思い付きです。リボルバー１２発撃ち込んだぐらいでそんな体勢崩れるようなものなのか…そんなことは知りません。何かよくわからないけどゲイムギョウ界だからいいよね！ね！ね！？

※感想で銃器に関するマジレスはどう受け答えればいいか本気でわからないのでできるだけやめてください。本当ににわか知識だけでやってるんで。エンドオブエタニティーとかイメージしてるんで。

０－８（前書き）

ユニギアタイマン編突入。といっても２～３話で終わる【はず】だけど。
そろそろ終わりが見えてきたｃｈａｐｔｅｒ０。長いなｌｃｈａｐｔｅｒ０……。

0－8

現在時刻、午後1時27分。ラステイション到着。
駐輪場にダイナミック駐輪後、私たちがいるのは教会……ではなく、ラステイション中層部（Ｎｏｎｏ壱番屋やラステイション入口等最下層部に存在）に建っている居酒屋。ま た リ ン ト さ ん か

「はいつうわけで、フロムのギルド卒業を祝ってかんぱーい」
「「「かんぱーい」」」
「かんぱーい・・・・じゃねぇよ！！」

机を大きくたたき主張する。
リントさんに「折角だからおまえもこい！依頼明けだろ？」とか言われてホイホイついてきた結果がこれだ。てかパッと見十数人いるぞ！ギルドそんな人いるところ見たことないし。

「なんだフロム。主賓が騒がしくしてちゃ酒も楽しめないだろ？」
「勝手に主賓にすんなあと何でギルド卒業させられるんだよ！私の稼ぎ口だぞ貴重な！」
「教会に雇われたんだろ？教会の仕事っつってハードなのは目に見えてっからな。ギルドにそう顔もだせなくなるんだろ？」
「それは依頼次第ですが……つか昼間っから酒飲んでんなよオッサン共！」
「そうかてぇこと言うなよ。俺らだって仕事開けだ。」
「知らないのばっかだと思ったらやっぱり防衛隊か、あんたらもう何でもいいから飲みたいだけだろ！」
「「「たりめぇよぉ！」」」
「意気揚々と肯定すんじゃねぇよオッサン共ォ！！」

一通り突っ込んだところで少し呼吸を整える。
このオッサン共は私はともかくユニをどうするつもりなんだろうか。
なんかもう酔いつぶれかけてるし。
それでいいのか女神候補生。

「いちばん、ゆに！まだまだのむわよぉ～！」
「いよッ、女神様！」
「言い飲みっぷりじゃねぇか女神様！」

「ほら、あの嬢ちゃんもあんな感じだし」
「どうすんだよユニそもそも酒飲める年齢かも怪しいのにあんな酔わせて」
「女神様ってのは見た目と年齢は釣り合わねぇもんだろ？」
「知りませんがね…ってかどう収拾つけんだこの惨状」

私とリントさんの目の前ではオッサン共に囲まれて一升瓶一気飲みするユニの姿が。
急性アル中で死ぬ女神とか笑い話にもならなそうだ。
ちなみに私が飲んでいるのはコジマジュース。コジマさんとやらが開発したジュースなのだろう。綺麗な緑色だ。青汁ではない。

「…そういえばリントさん、仕事明けって言ってましたね。異常種でも出ました？」
「あ～……やっかいな感じでな。フェンリルタイプ、ドルフィンタイプ、ドラゴンタイプ全部きやがってな。まぁなんとか追い返せたわけだが…。」
「毎度毎度だけど防衛隊の死守力には脱帽です。それで、被害は？」
「おお、異常種三体来た割には死者は7人だ。どいつも若い奴等でねぇ。異常種の怖さってのを全くわかってないやつらだったよ。」

「まぁ、先走らない新兵というのは貴重でしょうけどね」
「俺はな、いつも新米連中にはこう言ってんだ。【死ぬな、死にそうになったら逃げろ、そんで隠れろ。運が良ければ隙をついてぶっ殺せ】ってな。」
「防衛部隊が逃げてどうすんだか。」
「なぁーに、ベテランにしかできない往なし方ってのがあんだよ。」
「まぁ、私にできるのは制圧戦ぐらいなもので。そういった細かいことは任せました、ベテランさん。」
「じゃあ女神様のご機嫌は任せたよ、エース様。」

……結局、あいつら酒しか飲んでなかったよね、いや飲み会って居酒屋としては間違ってないし仕事明けって点でも間違ってないかもしれないけどさ…。
ほら、ユニって問題あるし。この子何歳なのかわかんないし。私より年下っぽいけど実は大幅に年上ってオチもあるかもしれないけど。
まぁどうにも言う意味もなく、完全に酔いつぶれたユニを背負うことになった私。不憫だなぁ私。
しかし朝も今もコレを背負うことになるとは…。手のかかる雇い主だこと。

「ん……お姉ちゃん……。」

背中の女神様は姉の夢を見ているようだ。これの姉をしつつ女神業務（詳しいことは知らないが）とは、女神ノワールも随分と苦労人だったのかもしれない。女神ながら少し同情した。

「やぁフロム。依頼は無事完遂できたみたいだね。器物破損も想定内、死者も無。何故ユニを背負っているのかは聞かないでおくよ。」
「それは実に助かりますいやほんと。」
「ユニは適当に寝かせておいてほしい。これからまた仕事の依頼があるからね。」
「そうですか……っと。」

ユニを椅子（ソファー？）に寝かせ、教祖に向きなおす。
正直嫌な予感しかしない。

「失礼なことを思われている気がするが、まぁそこはいいだろう。どうしても今はなさなければならなくてね。」
「そこまで重要とはね。それも一介の傭兵に？」
「今はユニの御付の傭兵だろう？」
「…そうでした。」

「…プラネテューヌの女神候補生ネプギアが、もう一度この国に来る。彼女、ネプギアは三年前女神と共にギョウカイ墓場に行ったのだがその中での唯一の生き残り…というか生還者でね。それでユニは彼女にとてつもないライバル意識を燃やしているわけだが…ユニでは彼女には勝てないだろう。」
「これはまた随分と弱気な発言で。」
「事実は受け止めなければならないだろう？まぁでも、ユニがそんなことで諦めるとは思っていない。十中八九ネプギアに決闘を求めるだろうね。僕としては面倒事は起こさないでほしいのだがまぁそこは仕方ない。舞台は僕がセッティングするよ。」
「……で？私に何をしろと？」

「決闘の邪魔をするものを排除してほしい。秘密裏にね。」
「また私が苦手なものを…」
「別にグレネードライフルしか持っていない、というわけでもないのだろう？」
「正確には合っているけど間違っているというか…まぁそれでいいでしょう。」
「じゃあ、明朝メールを送っておくよ。ユニとネプギアの決闘。結果は見えているが過程を見届けておいてほし「おねえちゃん・・・それ、みずぎぎゃくだよ……」……」
「……」

「大丈夫なのかこんなので。」
「まぁ、結果は敗北とわかりきっているから……ね……」

…こんな冷めた目でユニを見つめる教祖は初めて見た。

まぁ、不安ではあるのだが……何か予感がするのも事実。明日は警戒しておこう。

日記追記：口座を見てみたら本当に５００００ｃｒｅｄｉｔ振り込まれていた。荒んだ心に一筋の光明。それを感じるのはやはりこうした報酬なのだろう。うん。

０－８（後書き）

ネプギアと対面はあくまでｃｈａｐｔｅｒ１で。ｃｈａｐｔｅｒ０ではありません。前にあったろとか言わないで。
もうすぐだ、もうすぐ（ｃｈａｐｔｅｒ０が）終わる…！

※フロムＥｘフィニッシュに使う武器はフロムの銃が変形した物。物理法則なんてなかった。

0－9（前書き）

ユニギアタイマン編と前回言ったな。すまん、あれは若干嘘だった。
詳しくは本文で。すぐにわかるよ、うん。

0－9

「ここは…夢？意識がはっきりしている夢とは珍しい…。」

「…見たことない景色……あれは…女神……？」

「女神が何故こんなところに
…そもそも、ここは……？」

「　ミ　ツ　ケ　タ　」

「ッ！？」

「ヤットミツケタゾ…

オレノハンシン！！！！」

「ソンナトコロデアソンデンジャネェヨ！！」

「オレト、モットコロソウゼェエエエ！！！」

「――――ッ！！？？」

目が覚めると、いつもの私の部屋だった。
今のが夢だった、のだろう。記憶も残っていた。意識もあった。なんて見心地の悪い夢だ。

……だが、アレはなんだ？
真っ黒な機械の様な身体、髑髏が付けられた斧……縛られた女神…。
そして私に向けられた【ハンシン】……。
…全く、こういう夢を見るのは主人公とかそういう特別な奴だろうに…私はただのしがない傭兵だ…。あんなのに絡まれる筋合いはないはずなのだがな・・・・・。
時計を確認すると午前六時。私にしては起きるのが遅い。着替えて軽く何か飲んでから、教会にでも行ってみるか。

「やぁフロム。ここに来たということは、メールは見ていないようだね。」
「……あ。」
教会に着くや否や指摘され、思い出した。昨日メールをするとか言っていた。悪夢の所為ですっかり忘れていた……。

【Ｆｒｏｍラスティション教会　Ｔｏフロム
Ｔｉｔｌｅ：依頼連絡
おはよう。今日の依頼を連絡するよ。
昨日も言ったけど今日の依頼はユニとネプギアの決闘の邪魔をする連中の排除だ。戦力は未知数だが確定している分だけ画像を添付しておくよ。
場所は旧リゾート区、セプテントリゾート。性質上狙撃が最も効果的だからね。効果的な狙撃の場所も地図付きで添付しておくよ。出来る限り早く行くといい。
今回の依頼の報酬は４５０００ｃｒｅｄｉｔだ。９割はユニの小遣いだから気にする必要はないよ。
じゃあ、頑張って。】

添付された画像には、数か所〇がついた地図と、写真が二つ。
片方にはセーター姿の少女、もう片方は見るからにサイズが合っていないコート姿の少女、か……。
どこかで見たことがある気がするが…まぁあくまで気がするだけだしいいか。

「ああ、確かにこれは急がなければならないようだ。」
「わかってくれてよかった。もしユニとネプギアの決闘が邪魔されでもしたらただでさえ劣等感の塊ノユニが塞ぎ込んでしまうよ。そうなればラステイションも終わってしまいかねないからね。」
「傭兵に国の命運背負わせんなよ……」
「すまないね。ユニに目をつけられたのを不運だと思って諦めてほしい。」
「はぁ……。」

とぼとぼとラステイション最下層に向かい、駐輪場にダイナミック駐輪しておいたＶＯＢを起動させる。
無心に走り出し、向かうは旧リゾート区。流石に急ぐ必要があるだろう。
途中色々挽いた気がするがまぁ気にすることでもないだろう。

……リゾート区が見えた。
崖を飛び出し、見えた広そうなところに狙いを定め、ＶＯＢを乗り捨てる。

爆発した様子はないので適当に軌道修正し建物に着地、足が痛い。
端末から地図をだし、位置を確認する。予定地より少し離れた建物だったようだが…。

…どうやって移動しよう。少し前のアニメで見た移動方法……やってみるか。

～視点【フロム】↓【アイエフ】～

ラステイションの教祖、神宮寺ケイとの取引で色々集めることになってしまい、挙句その途中でラステイションの女神候補生ユニに遭遇してネプギアと決闘まで始めだした。

その間、私とコンパは暇ではあるんだけど……

「ねぇ、コンパ。」

「どうしたですあいちゃん？」

「気付いて……ないでしょうね、その様子じゃあ。」

「……？」

「何かいるわよ。多分異常種。こっちを見てる。」

「ふぇっ！？も、もんすたーさんですかぁ！？」

「さぁ……？」

モンスターとは違う、何だろう…観察されているような…？

少なくとも、私かコンパを見ているっていうのは確実だけど…

「ふぇえぇ～ぅぅう……」

「あんたは、狙われてるかもしれないのにそんな気の抜け…コンパ！伏せて！」

「はうっ！？あわわわ！」

コンパの目の前に出したカタールが弾かれる。

カタールを出さなきゃコンパは……いや、こんなことを考えたくはない。

問題は……撃った奴。

「私のコンパを、傷つけさせはしないわ！」

「あ、あいちゃーん！？」

コンパの敵は、私の敵……！

～視点【アイエフ】→【フロム】～

「気付かれた…！？急ぎ過ぎたか…！」

レールガンをグレネードライフルに変形させ、息をひそめる。

今の一発で場所を特定される…ありえないことじゃないけど、こっちに注目が来たのなら結果オーライだ。

久々の対人戦だ。笑いながらとまではいかなくても、楽しくヤロウ。

そうでもなければ、やってられない。

「殺し合いにマナーも何もないけどさ、楽しく殺ろうじゃないか。なぁ！」

このとき、今日の夢の化け物が、私のどこかで目覚めたのかもしれない。

何故って、このときの私は……

笑っていたから。

０－９（後書き）

ユニギアタイマンだと思ったか？
フロムＶＳアイコンだよ！！

ついにガチバトルになって火薬少女ふろむ★マギカにならないか若干不安だったりする。というかもうなってる。

……そういえば、この時点って日本一いたっけ…？
いたら……まぁ、なんとか辻褄合わせよう。（未来の自分に無茶振り）

次回……丸ごと戦闘予定！予定は投げ捨てるもの！

０－１０（前書き）

ガチバトルで二話ぐらい使う予定だったんだけど…あれ、あれぇ～……？

まぁ全てはこの時点で既に日本一がいるということに前話上げた時点では忘れていたという致命的ミスなんですけどね…ＨＡＨＡＨＡ。

0－10

「……。」

リゾート地の建物の上、私は仰向けに寝転がりながらミサイルランチャーを携えている。
傍から見ればそこはかとなくシュールだがこれでも私は命がけだ。

ユニとネプギアの決闘の邪魔をされれば、国がヤバいというレベルとまで教祖に釘を刺されてしまった。

邪魔者二人の生死は問われていないが、まぁ殺しても特に問題はないだろう。精神的に幼そうなユニが何を言うかはわからない、が。
ともかく、初弾を防がれて位置がばれてしまったかもしれない、というのが一番の不安要素でユニとネプギアからは興味を逸らすことができた、というのが一番の安心要素だろう。
さて、まずはどう動いたものか……。

「角度から見て、こっちから来たはずなんだけど……」

来た。プランはいくつかあるが、まぁ好きにやろう。
私がしくじれば私が死んでついでにユニも死んでラスティションが終わる。
……おお、怖い怖い。

「あ、あいちゃ～ん。待ってくださいですぅ～！」
「コンパ…今あたしたちは命狙われてるのよ！？ちったぁ真面目にやりなさいっての！」
「はぅぅぅ～……」

「……まさか、もう移動していた、とかね……。」

さて、と……。

とりあえず連中が見えるところまで移動し、ミサイルを構える。こちらは基本的に小回りが利かない。大多数には強いが少人数（但し一人を除く）に弱い。そういう大火力型。言わば大鑑巨砲主義。出来ればさっきのレールガンで片方は削っておきたかったけど、失敗に終わった以上グダグダ言う必要もない。隙を見せたら発射。着弾までおそらく6秒。反応するには十分だが…。

「…いないみたいね。もう移動したかもしれないし、別方向探すわよ。ネプギアの邪魔はさせない。」

「ま、待ってくださいですあいちゃ～ん・・・！」

照準は既に付いている、熱源追尾機能正常、仕留める……！

発射した直後砲身と身を隠す。数えて4秒後、爆発音が鳴り響く。ユニとネプギアが驚いて決闘中断なんてやらかさなければいいけど……。

撃ち込んだのは4発。普通なら即死通り越して跡形も残らないが女神狩りなんて考える連中だ。ミサイルでも無傷なんて出鱈目があるかもしれない。

私は正攻法は得意だが銃撃戦オンリーなんだけどねぇ……。

爆煙が晴れ、様子をうかがう……

うわ、無傷かよ…出鱈目あったし。最悪だ……

「…そこにいたのね。出てきなさい、マジェコンヌの手先！」

何かいつの間にかマジェコンヌ扱いされてるし。まぁやってることそこまで変わらない気もするけどさ。これでもれっきとしたラスティション市民なんだけどねぇ。

とりあえずもう居場所は完全に特定されているわけだし、素直に立ち上がる。

私の姿を見た二人は、驚愕の表情を浮かべている。

「下っ端じゃないってのはわかってたけど、こんな女の子が、ねぇ…。」

「見かけは同年代じゃないかね。」

「え、えーっと……そこのひと～！危ないから降りてきたほうがいいですよ～！」

「「……」」

「ともかく、ネプギアじゃなくて私たちを攻撃した理由は何なのか聞きたいところだけど。」

「冥途の土産に相応しい理由でもないさ。ただ邪魔だったからだけ。」

「……何、ただの殺人鬼？」

「これから死ぬ相手にならどう思われても、構いやしない！」

ミサイルをグレネードランチャーに変形させ、撃ちこむ。

即座に16連装ミサイルを変形、追加で撃ちこむ。熱源追尾だから当たってほしい。

あと残ってるのは冷凍ガス放射器、レールガン3発、グレネードランチャー、スナイパーキャノン……。

近距離で使えそうなのなんてガス放射器しかない。あの教祖、私が細かい戦闘が苦手なの知ってるくせにこんなことやらせやがって…！

「げほ、う、っく…大丈夫、コンパ…！？」
「あぅうぅ～……だ、大丈夫ですぅ、今回復するですぅ～……。」

セーター少女（コンパって名前なのだろうか。）が手をかざすと、二人の傷が見るからに回復し始めた。
……ああ、なるほど。回復魔法か…だったら……。

ランチャーにスモークグレネードを装填、撃ち込んだ後にレールガンに変形させる。私が構えると同時にスモークグレネードが爆発し、1フロアほどが煙に包まれる。

「煙幕…！？逃げる気！？」
（そんなつもりはないけどね・・・）
「あ、あいちゃ～ん…どこですぅか～…？」
「コンパ！とりあえず動き回りなさい！」

あれだけ必死に対策を練っているようだが言ってしまえば私のレールガンはサーモスコープなわけで。
声だろうと伏せようと一切関係はないものだったりする。別に何か予感がしたとかそういうわけではない。元からサーモスコープだ。
レールガンは狙撃銃だからね。

回復をしていたのはセーター少女。ついでに胸が大きい方…。

「ところがぎっちょん！」
「へ？ッ…！？」

突然、背中に衝撃が走り、私の体が前方、空中に飛ばされる。建物自体がそこまで高くないため大した被害はなかったが、高度の優位

が消えた。それ以前に…

「新手、か……。」

「アイエフ！コンパ！この正義のヒーロー日本一が来たからにはもう安心よ！」

……あれ。何だろう。こいつ馬鹿っぽい。

何か私をあそこから叩き落としただけで満足しているように見える。

十分効果あったけどさ。

「日本一！」「日本一さんですぅ！」

背後から歓喜の声。スモークもあっさり晴れてしまったようだ。

さぁどうする私。前門にはだだっ広いフロアと逃げ道があるが二人。

後門には馬鹿と逃げ道のない建物……

ああもう、よくわかんないときばっかり通信送ってくる癖に私のピンチはスルーかハスキー教祖は…！

「さぁ、て。もう逃げられないわよ？あんた一人で三人を同時に相手、できる？」

「…無理だね。私は対多数は得意だが一人でない少数相手は苦手なんだ。」

「意外に諦めがいいじゃない。」

「そうだね。君たち全員を殺すのは諦めた。」

「なら、神妙にお縄をちょうだいだー！」

「……一つ聞こう。」

「…何よ。」

「君、先ほど持っていた武器はどこに行ったんだ？」

「……袖の中よ。」

「そうかい……。」

「何を企んでるか知らないけど、あんたの頼みの綱はあの銃みたいだし。あんたに手はないわ。」

「さて、どうかな？」

「口が減らないわね。日本一、押さえつけて。」

「よっしゃー！」

先ほど私を蹴った馬鹿（日本一って名前のようだ）が私後ろから私を羽交い絞めにする。ただでさえ後ろ手の状態だったので私は実質身動きはできない。

「これ以上白を切るつもりなら、最悪命の保障ができなくなるんだけど。」

「私は殺しているんだ。殺されもするよ。」

「……少し、痛い目にあってもらうわよ。」

「誰が、何だろうね…？」

「あんたに決まってるでしょうが！日本一、少し離して。」

「……」

「ちょっと、日本一？」

「日本一さん…？」

二人が後ろの日本一の反応に顔を顰める。

私が腕を少し引くと、後ろからドタッと言う音が聞こえた。

目を白くした二人を余所に立ち上がり、腕に付けたブレードの電源を切る。

血が付かないというのはいいものだ。

「日本一さん！日本一さん！！」

「さっきヒントまであげたのにねぇ。何故【相手も同じ方法で武器

を隠していると考えなかったのか】。」
「こ、んのお！」
激昂したっぽいコート少女（そういえばこいつだけ名前わからない）が袖からカタールをだし、私に斬りかかる。
まぁ激昂した攻撃の性か、やたら単調で避けやすい。
コンパ（だっけ？）の回復魔法が終わる前に何とか逃げ出したいが、欲を言えば銃を回収したい。
しかし私のレーザーブレードは稼働時間がすこぶる悪い。先ほど５秒ほど展開したがあとできて２５秒程度。要所要所でしか使えないという緊急用。こんなの使いたくないんだけどねぇ。
「この、この…！」
「近づけば勝てると思ったのならあんたは相当単純という結果になる。」
大きく私にカタールを振り、無理に振った所為で体勢が一瞬崩れる。
そこに軽く足をかければ…。
「きゃあっ！？」
「近距離が得意な奴が下手な狙撃をして敵を誘い込み、得意分野で処理するなんてトラップは意外にあるんだよ。覚えておきな。」
傍らに落ちていた銃を拾い、ＶＯＢのある方角（多分だけど）に向かって走りだす。
追ってくる様子は無いため、せめてＶＯＢを回収してユニとネプギアの結末を何とか知りたいものだが。
……今頃通話か、あの腹グロ教祖…

「やぁフロム。調子はどうだい？」
「戦闘中かもしれないのに空気が読めないな教祖様。」
「それはすまなかった。」
「白々しい…依頼だが、失敗かもしれない。」
「ほう。君は自分の実力にかなりの自信を持っていると思っていたが。」
「どんな根拠があって…。」
「まぁそれはいいじゃないか。ともかく、失敗ということは、ユニとネプギアの決闘が邪魔されてしまった、と？」
「過去形じゃない、未来形だ。さっきまで時間を稼いだが新手が現れて敗走中だ。」
「ふむ……。ならば、ユニが帰って来た後合否がわかるということだね。その時間を稼いでいる間に決闘が終わったということを祈ってほしい。帰還してくれ。」
「……ッ、了解…」

通話を切ると、ふとため息が漏れる。
敗走と言うのは、見逃されることの次に情けない負け方だ。
……どちらがよかったと問われれば、そんなものは答えられはしない。
でも私は傭兵だ。恥をかけば生き残れるのならそれを選び、泥にまみれて生きる、という業界人間みたいな生き様が傭兵にはふさわしい、と私は思っている。

無様に置かれていたＶＯＢを立たせ、起動させて跨る。
……決闘、終わっていてくれ。私にはそう願いながらＶＯＢを走らせることかできることはなかった。

０－１０（後書き）

意外にあっけなくユニギアタイマン編（？）が終わり、そろそろあと2，3話ぐらいで……終わらないだろうなぁ。予告詐欺に定評のある私だし。

０－１１（前書き）

ついにｃｈａｐｔｅｒ０終了のお知らせ。
え？ルウィー？キラーマシン？ナンノコトヤラサッパリ
大丈夫、ルウィーにはいく……かな？

0－11

ラステイションに到着。ダイナミック駐輪をする気にもならなかったので普通に駐輪して、とぼとぼと歩き、エレベーターに乗る。
もう昼だというのに、エレベーターには人はいない。だからか、ついため息が漏れる。
私はだいぶメンタルが弱かったのかもしれない。メンタルの弱い傭兵は長生きしないのだけど、ね…。

「……ユニ、大丈夫かね…。」

私が今口に出すほど心配することが、まさかユニのこととは。
まぁ、私が失敗していれば、何かいろいろあって国がヤバいとすら言われているんだ。多少案じたってバチが当たるわけでもない。

……自分にすらそんな言い訳をするところで、私も末期なのかね。
そんなことを考えながら鈍重な足取りで教会へ歩いて行く。３５０００ｃｒｅｄｉｔの赤字、依頼の失敗。最悪国の崩壊。…最悪だ。

そんな暗い気分で教会についてしまった。
…あの教祖様相手に何を言い、何を言われればいいのだかね。

「やぁ。無様な敗残兵。新手は手ごわかったかい？」
「…言ってくれる。まぁ否定はしない。敗走したのは確かだしな。」
「まぁ、今ユニから連絡があったけどどうやら君の苦労は無駄じゃなかったようだよ。依頼は成功だ。」
「……」

「納得がいかない、というような顔だね。傭兵は依頼と報酬にしか興味がない、という風に僕は認識していたのだけど。」
「そうだが、依頼内容は排除だ。私は時間稼ぎしかできていない。」
「君も頭が固いね。僕の目的であるユニとネプギアの決闘妨害阻止は成功したじゃないか。なら、依頼は成功だろう?」
「…そうだが、私は敗走している。一人も仕留められていないからな。そのあたりはどうするのだ?」
「……。そうだね。もし彼女らが再び障害となるならば本当に消す必要があるね。それも【暗殺】という形で。」
「一つ、聞きたい。」
「何かな?」
「あいつらは、ネプギアとユニの決闘にどう関与している?あいつらはネプギアとどう関係しているんだ?」
「……彼女らはただの邪魔者。君が知る必要があるのはそれだけさ。」
「…そうかい。」

私はケイに背を向け、歩き出す。正直、依頼報酬に納得はできていない。……依頼主が成功と取れば成功…ということなのだ。
これに異論を唱えることなど、できやしない。

扉を開けると、何か黒いものが飛び込み、私に激突。
そこまで重くない衝撃だが私もそこまで重くないのでそのまま倒れ込んだ。

「い、っつぅ……きょーそさまー」
「何だい?君の間延び声はあまり心地よく聞くに値しないね。」
「毒舌聞いてる暇ねぇんだよ。コレどうすんの?」

そう言いながら私は覆いかぶさる黒い物体を指差す。

「コレ……？って、ユニじゃないか。」

そう、さっきまでネプギアと死闘を繰り広げていた（らしい）ユニ。
戻ってくるのが徒歩にしては早い。
…私が遅かったのかもしれないな。

「ねぇ……」
「…？」「ユニ…？」

私に覆いかぶさり、うつむきながらつぶやくユニ。何やら凹んでいる様子。負けたのだろうか。

「フロム、あんたはさ、負けることってどう思う？」
「…はい？」
「負けるってさ、嫌よね。自分が相手より劣っているってことが明確になってさ。」
「……」
「私、お姉ちゃんの妹だから、恥ずかしくないように振る舞って、強くないといけないのに…負けちゃったよ……！」
「……」
「……。」

とっさに教祖に対し「お前の女神だろ、何とかしろ」とジェスチャーを送る。
すると教祖はやれやれ、と言った風に首を振る。おそらく「自分でなんとかしてくれ」だろう。薄情な教祖だ。
とりあえず、ユニの頭をなでる。せめて退いてほしいのだが…重くはないが教会の床で女神様と抱き合うなんてことは正直ゴメンだ。

割と本気で。

「この子供女神……」

「な、何よ！あんたに何が…！」

「私がわからないと思ったから自分語りしたんだろうに。」

「……。」

「あんたみたいに高潔で行動一つ一つに責任重大な女神様のことなんてわからないしわかりたくもない。説教できる身分でもないし、したくもない。だから少しだけ言わせてもらいます。」

「言ってみなさいよ…。」

「誰かに全面的に勝っている、劣っているなんてことは絶対にありえない。勝っている部分は必ずある。問題はその勝っているところで劣っているとこを如何にしてフォローするか。何でもできるように見える奴はフォローの仕方が上手いだけだ。フォローの仕方次第で誰でもできるんだよ。できないのはやり方が下手なだけ。」

「……」

「…とにかく退いてくださりませんか女神様。」

「あ、ごめん……。」

涙目で私の上からユニが退く。

まさか教会で寝転がることになるとは…と自嘲しながら起き上り、埃を払う。

「はぁ、それで教祖様？私はもう帰っていいんですよね？」

「構わないよ。ユニも連れて行くといい。僕は慰める等そういうのが苦手でね。師匠の君に任せるよ。」

「追加料金」

「ユニの小遣いを削るよ。」

「了解。」

「……」

「じゃ、失礼しました…。」
「行ってくるわ……」

ユニと共に教会を出、昼ちょっと過ぎのラステイションを歩く。
真上に上がった太陽がまぶしく、若干暑い。

「ねぇ、フロム…。」
「なんでしょうか女神様」
「何で、私やケイには敬語、使ってるの？」
「女神なんて国の宝物に一市民の私がタメ口なんて聞けるわけないでしょうに。」
「あんたは、私の師匠でしょ。」
「傭兵です。」
「……」
「……。」
「フロム。女神とか、教会に、恨みとかあるの…？」
「…説明義務はないんで。」
「じゃあ義務付けるわ。」
「……ド畜生、帰ったら教えますよ。」
「はぁ……。」

何やら、ユニに本格的に懐かれたようで、妙に聞かれてくる。
どういうことなんだろうか。面倒なことになったなぁ……。

～視点【フロム】→【？？？？】～

そこは、荒廃という言葉がよく似合う場所だった。
壊れたゲーム機のような残骸ばかりで構成された景色、視界にところどころ入る謎のチューブ。これを見ていることに退屈以外の感情を感じることはなかった。

ただ戦いたい。ただ殺したい。ただ殺されたい。その衝動は自分の中で激しく盛る。自らの愛斧をふと見ると、飾られた髑髏が自分を煽っているように見えた。【コロセ、コロセ、コロセ】と。
その衝動に耐えるという考えは自分は持っておらず、衝動は自らを支配していた。
いや、最初から自分の中には殺意の衝動しか存在していなかったのだろう。

…今、目の前には四人の女が存在する。マジックの奴には殺すなと言われているが、衝動が臓腑から湧き上がる。女神、女神、女神！正直自分には女神だろうが人間だろうがなんでもいい。殺せれば、戦えればいい。

「よぉ……。てめぇ以外の女神は全員屈服してるぜ…？」
「く、ッ……！私は、絶対に諦めないわ…きっと、あの子が助けに来てくれる…！」
「そう願ってんのはてめぇだけだ。他の奴等を見てみろよ…。」
「…ノワール、ブラン、ベール……。」
「女神が犯罪神に平伏すなんざ、とんだ笑い話だよなぁ？俺はてめぇらみたいなのを殺せれば十分なんだがな…。」
「どうかしらね…。すぐにあの子が、あんたを逆に殺すんじゃない

…？」

「楽しみだ…アア楽シミダナァオイ！俺ヲ殺スンダ、殺シ合イダ！」

「ジャッジ。」

「……チッ、何だブレイヴよぉ。」

ブレイヴの所為で殺る気も削がれちまった……。

ったく、この正義バカはよぉ。

「…女神の屈服は順調なようだな、ジャッジ。」

「俺は殺せねぇだけでやってらんねぇよ。」

「そういうな。マジックの考えだ。我々の得になるのは確かだろう。」

「ケッ、俺の得になるんならさっさとこいつらを殺させろってんだ。」

「あまり癇癪を起すな。今女神を殺せば侵略が困難になるだろう。」

「チッ……そうだ、おいブレイヴ。俺のハンシンはどうした。」

「お前の中途半端な説明では探せるものも探せなくなる。」

「俺が行きゃあ一発でわかるんだがな。」

「お前には墓守の仕事があるだろう。」

「勝手に……死人にしないでちょうだい…」

「黙ってろ！！」

「ッ、がぁ……！？」

「ジャッジ。マジックに殺すなと言われているだろう。」

「殺しはしねぇ。ただ、俺はつまらねぇんだよ……！」

「ハンシンとやらは探しておく。トリックには期待できないがな…。

では、失礼する。」

「早くコイよ…女神…ハンシン……！俺と、殺すためによう……！」

「ヒャハハハハハハハ！！！！」

～chapter end～

0－11（後書き）

～次回予告～

女神が失踪して三年。その三年という期間はあまりにも永く、大きい。
その現実に少女が絶望するのは、いわば必然だった。
世界は、あまりにも非情。それを理解するには、少女は幼すぎたのかもしれない。

次回、超次元ゲイムネプテューヌｍｋ２＋。ｃｈａｐｔｅｒ１【希望を誘う夜見の道】

ネプギア「アイエフさん、コンパさん、日本一さん…みんながいてくれるから、私は戦える！もう何も怖くない…！」
日本一「何だろう、台詞を取られた気分……」

１－０（前書き）

ついに第一章。ここからがスタート（キリッ。
原作本編は基本的に投げ捨てるのでその辺注意を。
この１－０の時点で投げ捨てておりますので。マジで。

あとジャッジさんがやけにおとなしいとか突っ込んだ人はジャッジさんの暇潰し鉄会ってくださいね。

10

「……よう。」

…またお前か黒いの。ラステイションの兵器か何かかお前は。黒いし。

「ハッ、そんな生ぬるいもんじゃねぇよ。お前と同じ殺人狂さ。」

お前みたいなデカブツに同類扱いされるとは心外だな。私はいつから殺人兵器になったんだ。

「最初からだ。そう、お前は俺と同じようにただ殺すためだけに存在するんだよ。」

殺すのが目的とは、随分な気狂い様だな。私は殺しはするが生きるために殺してるわけ。弱肉強食っつう自然の摂理に従ってるだけだよ。

「なら何故ほかの手段を取らない？」

……。

「生きるためには、進んで殺す必要もない。世界にはさまざまな仕事って奴があるんだろ？」

「だがお前はその中で殺すことを選んだんだ。自分から。殺すために！」

何が言いたいんだよデカブツ。

「俺を見かけたら、声をかけろ。そして、殺し合おう。ハンシンよぉ。」

……見つけたらな。デカブツ

「ジャッジだ。俺の名は、ジャッジ・ザ・ハード」

大層な名前だな。裁き（ジャッジ）なんて、殺人狂には勿体無い名前だ。

「俺が望んだ名前じゃねぇよ…。お前の名前の方が羨ましいさ。なぁ、デッド・ザ・ハード。死（デッド）の名を冠するなんて殺し屋に相応しいじゃねぇか。」

そんな名前はいらん。私は生まれてから死ぬまでフロムだ。一傭兵（レイヴン）だ。忘れんなデカブツ。

「そうかい……楽しみにしてるぜぇフロム。てめぇが、あの女神を連れてここに来るのをな…！」

～～～～～～～～～～～～～～～

「……嫌な夢だ。」

目が覚めると、目の前には見覚えのある黒髪と、私より若干小さい

何かが視界に入った。
私の記憶ではその条件に当てはまるのはただ一人、女神候補生様のユニなのだが…
……おい待て待て。

「…なぜいる。」

声をかけるも、未だ熟睡中のようで唸り声を上げるだけ。

…所謂間違いを犯したって奴か？いやいや待て。コレに私が欲情するわけがないだろう。それ以前に同性だ。
じゃあ何だ、何故私はこいつと眠っていた。服が肌蹴ているのはこいつか私の寝相が悪いということで説明はつく。

よく考えろ、というか思い出せ。何故この女神様がここにいるのか。

～昨日　ラステイション上層～

「そういえばフロム。あんた生活費は別に稼いでるとか言ってたけど、どこに住んでるの？」
「下層の安いアパートですよ。正直寝る場所としか考えていませんし。」
「……下層の？」
「安いアパート。なのでどうしたものか悩んでいたのですが…。」
「ありえないわ！」
「でしょうね。」
「話からして、恐らく住む最低限のものしかなさそうね。」
「その通りですけどね」
「流石に女神がそんなところ行くわけにもいかないし、そういうわけでここに泊まるわよ！」

「……上層…のホテル…？」

～現在～

ああ、そうだった、そうだった。女神様の所為だった。
しかし、ホテル特有の微妙に広い部屋が若干眩しい。カーテン越しに太陽光も少し入り、多少の視界は確保されている。……何故同じベッドかの疑問は残るが。

「う、ん……。」
「起きやがりましたか黒女神様。」
「おは……よ…！？」

目を覚ました途端凄い勢いで起き上がるユニ。私と同じ混乱してないかこいつ。

「あれ、私の部屋、こんな白かったっけ…」
「本当に私と同じ動揺してるし…」
「え…えええええええええええええ！？」
「うるせぇ」
「あ、あああああんた、なんでいるのよ！？」
「私が聞きてぇよ。」

顔を真っ赤にして見るからに私と同じ混乱をしているユニ。
だが間違いを犯したりはしていない。そもそも犯しようがない。同性だし。

「き、昨日、何かあった…？」
「記憶の限りでは何も。」

「ほ、ほら、何かやっちゃったとか…」
「同性相手に何を言っているんだ女神様」
「女の子同士でもあるかもしれないじゃない！」
「何を期待しているんだ」

ふと、携帯のことを思い出す。ほぼ毎日メールで依頼連絡をするのだから今来ても不思議ではないはずだ。

【Ｆｒｏｍラスティション教会　Ｔｏフロム
Ｔｉｔｌｅ：依頼連絡
昨夜はお楽しみだったかい？
ユニとのピロートークも構わないが、依頼連絡をさせてもらうよ。
今回は少し重要な案件だから、起きたらできるだけ早く教会に来てほしい。
勿論ユニも連れてね。かなり長丁場な依頼になるからできる限り遠出の準備をしてほしい。
出来る限りの弾薬や武器を持ってくるといい。じゃあ、待っているよ。】

……何だ、どこかで見ているのかあの教祖。

「何よ、ケイからのメール……？……！！？？」

携帯を覗き込んだ途端ユニが顔を真っ赤にさせる。まぁ、そうだよね。そういう反応するよね。

「な、なななななな…！？」
「とりあえず、家戻ってありったけの弾薬持っていくか…。」

「ちょ、ちょっと…！」
「何ですか女神様。考えている間違いとか私は一切心当たりないんで。服は寝相悪かっただけじゃないんですか？」
「うっ…言い返せない…」
「（寝相悪いんだ…）じゃ、行きましょうか。朝食も取らないとな…」
「ま、待ってってば…！」

置いてあった銃を取り、後ろでに担いで部屋を出る。すぐにユニも来てホテルを後にした。

その後私の家（安アパート）で着替えなりありったけの弾薬を持ってきて教会…ではなく行くのは朝食の適当なナック。ハンバーガーは人類の朝の源である。朝っぱらからハンバーガー齧る傭兵って何かアレだなー…。一応運動は過ぎるほどしてはいるんだけどさ。

「やぁフロム、ユニ。昨夜はお楽しみだったようだね。」
「わかってて言ってるよな教祖様。」
「と、とりあえず私も着替えてくるわ……。」

教会に着くなりユニが教会の奥に走り去る。女神の服ってあんなしかないんだろうな…。私が言えることでもないか。

「それで、わざわざ呼びつけるほどの依頼ってのは？」

「プラネテューヌの女神候補生ネプギアがラステイションのゲイムキャラの協力を取り付け、ラステイションを発った。」
「ゲイムキャラ、ねぇ…。わざわざそんなこと言うってことはネプギアに関連する依頼かい？暗殺とか。」
「流石に他国とはいえ女神を暗殺なんてことはしないさ。むしろ逆だよ。ルウィーに行ってネプギア達に協力してやってほしい。」
「……報酬は？」
「そうだね……彼女の目的を考えれば…金銭での報酬は難しい。君が良ければ、ユニの御付にでもしようか？ユニも君に懐いているようだしね。」
「それは報酬ではなく嫌がらせか罰ゲームの類だと思うんですがね」
「なかなか酷いことを言うね。」
「まぁ、別に今決める必要もありませんさ。終わった時には多額の弾薬費を請求してやるんでよろしく。」
「覚悟は決めておくよ。準備はいいのかい？」
「ギルド連中には携帯端末から連絡はできますし、それにまぁ、ルウィーってのも言ってみたかったんですよ。」
「…そう。ルウィーに着いたらまずは教会を訪ねるといい。僕から連絡は入れておくよ。あとは……「私も行くわ！」……」
教祖が振り向くと、見るからに旅支度（何か色々持ってる）のユニが立っていた。まさかとは思うが…ね…
「教祖様。いいんですかあの我儘娘」
「いいんじゃないかな？ユニがいいのなら。ユニとノワールが不在の分の事務仕事は残ってるけどね。」
「……フロム。私もついていくわ。ネプギアに負けてられないもの。」
「私を巻き込むかい……。」
「傭兵なんでしょ。それに私の師匠なんだから、付いていくのは当

然よ。」
「そうですか……。」

どうやら、譲る気はないらしい。何この我儘娘。
しかしまぁ、ここまで準備されてしまうと、どうにも断れなくなり…。

「わかりましたよ…。今から出発すれば…ＶＯＢで夕方には着くかな。」
「シェアの回復は任せてほしい。ネプギアがいつの間にか稼いでくれていてね。」
「また随分やり手なこって…。では、失礼します。」
「ケイ、行ってきます！」

教会を出、最下層でＶＯＢを起動して乗り込む。
ユニが乗ったのを確認してから、カタパルト（仮名）に狙いを定め、一気にアクセルを吹かして飛び出した。

目覚めたこーころはー走り出したー…ってね。

１－０（後書き）

しかし、サブタイが何か寂しい気がしてくるこのごろ。
ｃｈａｐｔｅｒ名はそれなりに考えていても話のサブタイは全然考えていない不始末。

どうしよう……。

一章のメイン登場人物（前書き）

なんとなくでのもの。あんまり意味はないかもしれない。
1章で予定しているメイン人物すべてなのでどう絡むかを予想したりも…そんなするほど人口いねぇよこの小説。
あ、あとゲハピク勢は省略します。考えるの面倒臭いんで。

サーセン

一章のメイン登場人物

フロム
我等が主人公。ジャッジさんとかユニとか色々面倒なのに好かれる体質（？）。
同性趣味は本人にはないらしい。

ユニ
一応一章メインヒロインのラステイションの女神候補生。
大分デレ期。
フロムとは逆に軽火器マイスターを目指しているらしい。
ネプギアを強くライバル視している。

ジャッジ・ザ・ハード
ちょくちょくフロムの夢に出てくる黒いデカブツ。
フロムをデッド・ザ・ハードと呼ぶ。ラステイションの兵器ではない。

ネプギア
プラネテューヌの女神候補生。
真面目な優等生タイプで心優しい完璧超人（？）っぽいが時々無意識に毒舌に。

西沢ミナ
ルウィー教祖。穏やかながらも若干腹黒い。女神二人の母親役。

ロム・ラム

双子のルウィーの女神候補生。
姉妹仲はかなり強いがかなり子供っぽい。大人しいロムが姉で活発なラムが妹。

下っ端
犯罪組織マジェコンヌのマジパネェ構成員。マジック・ザ・ハードの直轄らしい。
本名はリンダ。

ワレチュー
鼠っぽい姿のマジェコンヌのマジパネェ構成員その2。
下っ端とは違って頭は周るがコンパにゾッコンなためよく空回りする。

ブレイヴ・ザ・ハード
ガオガ○イガーみたいな姿のハード四天王のひとり。
四天王の中では突っ込み役。

トリック・ザ・ハード
ぬいぐるみみたいな姿のハード四天王のひとり。
年齢二桁以上はババァと言い張るほどのロリコン。

アイエフ
プラネテューヌ諜報部。幼馴染のコンパを溺愛している。
愛用の携帯電話をなくすと精神対抗するが基本的には常識人。

コンパ
プラネテューヌの見習い看護師。

ド天然の巨乳少女。アイエフの愛情にあまり気づいていない。

日本一
世界を又にかけるヒーロー（自称）。
元々貧乳だがコンパがいると余計貧層に見える。
若干アホの子。

がすと
世界を又にかける錬金術師。
見た目は幼女だがトリック・ザ・ハードは反応しない。
実年齢は二桁以上なのかもしれない。

一章のメイン登場人物（後書き）

もしかしたら追加するかも。

1－1（前書き）

ゲイムギョウ界なのにゲームっぽい話が一切出てこない不具合について。
しかしマジェコンヌェ……下っ端は布教活動してたけどワレチューはコンパにゾッコンだしジャッジはとりあえず殺したいお年頃だしブレイヴは正義バカだしトリックは変態しマジックはマザ（ファザ？）コンだし。統率取れてねぇなぁこいつら。
と思ってしまうのでした。

1―1

ルウィー。
ゲイムギョウ界の北方に位置し夢見る白の大地と呼ばれている。
魔法文化に栄え、マジェコンヌの生まれた地とも言われゲイムギョウ界の中で最もマジェコンヌによる浸食を受けているという。
そんな状態で、女神候補生が未だ生き残っている、というのが何より不思議だ。ルウィーネットでのゲイムギョウ界でのワールドシェアは１０％あるかないかというところまで言っているらしい。
ネプギアがこのルウィーにいるということはラステイションと同様ルウィーのシェア回復に努めてはいるだろうがそう簡単にシェアが回復…したな。ラステイション。

夕暮れ時。夕日が光るルウィーの町並みはなかなかどうして美しい。
まぁ傭兵が感じるべき感傷ではないのだが、まぁそこは気にするべきところではないのだろう。
恐らく、教会というのは見える中で一番高い建物なのだろう。
早速、向かうとしようか。

「ようこそ、ルウィーの教会へ。フロムさん、ユニさん。」
「……あんたがここの教祖？」
「はい。ルウィーの教祖、西沢ミナと申します。ラステイションからわざわざようこそ。」
「…どうも。」

ルウィーの教祖はあの腹グロとは違って何やらいい印象。

問題は女神連中……。

「たっだいまー！」

「……いま。」

後ろから、二つの子供の声。

振り返ると、コート姿の子供が二人、立っていた。教会の関係者…？

「おかえりなさい。今お客様が来ているのであまり騒がずに。いいですね？」

「はーい。」「はーい…。」

「子供…？教祖様の娘か何か？」

「いや、それは絶対に違うと思う」

「違いますよ。あの子たちはこの国の女神候補生、ロムとラムです。」

「「……え？」」

さっきの子供が女神？女神は基本的に少女か何かの姿を模っていると思っていたけどあれ少女通りこして幼女だよね！？女神って何歳なんだろう…というか女神って寿命あんのかな…？

「ねーねー。あんたたち、どっから来たの？」

さっきの子供の一人（どっちがラムでどっちがロムなんだろう……）が話しかけてきた。

女神候補生……ユニが何かしなければいいが。

「私らか？ラステイションからだが……」

「へー……あのプラネテューヌの女神みたいに私たちのシェアを横

取りしようってことじゃないでしょーねー…」
「私は一市民だ。シェアにどうこうできる立場じゃない。そんなことできるのは、そっちのユニだ。」
「こっちに振らないでよ!?……コホン。私達はケイ…ラステイションの教祖に言われてルウィーに来たの。シェア目的ではないわ。」
「ほんとーにー……?別の国の女神は悪い女神だって本に書いてあったー!」
「ラムちゃん……あんまりうたがうの、よくないよ……?」

先ほどだから黙っていたもう片方（こちら、水色がロムのようだ。）がラム（ピンク色）を宥めだす。
どうやらロムがストッパーのようだ。

「つか、他国の女神＝悪ってどこの帝国思考だよ…」
「まぁ、ルウィーは一番歴史のある国だから、そういう本があっても不思議じゃあないわね……。」

「それで!あんたたち、一体何しに来たの!?」
「知らん。これから何をするか決めるのはそこの教祖だ。私はあくまでも傭兵だ。金と依頼でしか動かん。」
「……。」
「へー……まぁ、宜しくしてあげるわ。私はラム。で、こっちがロムちゃん。二人揃ってルウィーの女神候補生よ!」
「傭兵、フロム。」
「一応ラステイションの女神候補生、ユニよ。」
「ネプギアみたいに悪いことしないなら、見逃してあげなくもないわ!いいわね!」
「イラッ」「口に出さないであげて…」

「それで、教祖様。私たちの寝床はどうすればいい？手頃な宿屋でも紹介してくれるとありがたいのだが。」
「……あ、はい。教会にいくつか空いている部屋があります。使ってください。案内しますね。」
「ねーミナちゃーん、ご飯はー？」「ごはん……（わくわく）」
「もうちょっと待っていてくださいねー。」

……親子か、おい。

「あまり広くはありませんが、ゆっくりくつろいでいってくださいね。」

広くない、と教祖は言っているが、私からみれば全くそんなことはない。二人部屋…いや、３人はいけそうなほどのスペースだ。ベッドも３つある。
とりあえず手頃な場所に銃や弾薬類を置き始める。えーっと、グレネードランチャーとブレードにパイルバンカー、推力用高圧火炎放射器とグレネード、ミサイル、レールガンの各弾薬１００発程度。あとはエネルギーユニットと小型の充電器……

「こうしてみてみると、とんでもない荷物ね……」
「そういう女神様はどうしてるんですか、主に弾薬。」
「心配いらないわよ。私の銃は基本的に素粒子分解して持ち運んでいるから。好きな時に出せるわ。弾薬も主にエネルギー弾だからね。充填を怠らなければ弾切れなんて滅多に起こらないもの。」
「羨ましいこって。」
「……ねぇ、フロム。」
「なんでしょうか、女神様。」

急にユニの声のトーンが下がる。随分と感情の上下が激しいようで。

「何で、ずっとそうやって余所余所しい喋り方するのよ。」

「何度も言っていますが女神様相手に不敬な態度取れないからですよ。」

「じゃあ、私のことは呼び捨て、あとタメ口で喋りなさい。って言ったら？」

「謹んで辞退します。」

「……フロム。フロムは、女神が嫌いなの？」

「好きか嫌いかの二極化をすれば嫌いに当てはまるでしょうね。」

「何故……？」

「説明義務はありません。女神は、人のトラウマを掘り起こすのが趣味なのですか？」

「……ごめんなさい。」

「謝る必要があることをしたのですか？」

「……」

「……」

部屋は何の音も立たず、ただ静寂。

私は、ただ黙って銃の整備をしていた。そうでもしなければ、落ち着かない。

……デッド・ザ・ハードか。ジャッジとか言う奴が何者なのかは知らないが、ああいうのと同類…ムカツクような、どうでもいいような。

少なくとも、女神の小間使いよりはマシなんじゃないかなと、そう思っている私もいたのだった。

1ー1（後書き）

最初に四天王が出てくるのってどこだっけか……。
……トリックかブレイヴか…どっちでももうちょい先だしその前にひと波乱来るな……。起こすの私だけど…。

1－2（前書き）

そろそろ暗くなってくる頃。一章なのにこんな展開激しくして大丈夫か？
大丈夫…じゃないよね、うん。

本格的に暗くなるので閲覧注意…するほどじゃないよね。まだ。

1―2

時刻は夜。
白が主体のルウィーの町並みは夜ということもあって暗いが、街灯の光もあって雪が輝き美しく見えた。
…静かな夜だ。久しぶりにこんな静かで涼しい夜は久々かもしれない。
こんな時間帯にはいつもリントさんや新米ちゃん、イーノ辺りに連れられて飲み会だった…。

……ん？遠くに土煙…。

遠目だが、明らかに体色のおかしい異常種が二体見えた。
このあたりからしてアイスフェンリル、そしてエレメントドラゴンだろうか。
そして、体色がおかしいということは…汚染体。
異常種は基本的に汚染することはない、と言われている。理由はしらないけど。
しかし、これは大変なことになったのかもしれない。
汚染体は通常に比べて大体1．5倍と言われている。
異常種はそれ一体だけで一個中隊は必要だ。それも相討ちで。
それが二体、しかも両方汚染体だ。最低でも一個師団は時間稼ぎに必要だろう。
あれに太刀打ちできる存在と言えば……

「フロム…！ってうわっ、暗っ！？」

女神、だが……。

「どうしました、女神様。」
「あ、えっと、大変よ！ルウィーに汚染された異常種が襲ってきたって…！」
「さっき目視しました。あれは今の人間じゃあ太刀打ちできませんね。」
「なら話は早いわね！ルウィーの女神候補生の二人も行ったみたい。早く私たちも行かないと…！」
「パスで。」
「……え？」
「今言ったでしょう。アレは人間では太刀打ちできません。女神様方に任せます。」
「で、でも！」
「貴女様は私に犬死しろと。なかなか外道だ。女神様は言うことが違う。」
「ッ…！いいわよ！私だけで行く！」
「健闘を祈っています。」

「……女神も、人間も自分のことしか考えることはできない。……女神って、【神】なんだろう……？」

静かな、暗い部屋。私の呟きは誰にも聞こえることはなく消えていく。

「神ほど無情な存在はない。神は上位の存在だからこそ、下位を弄び……あっけなく捨てる。」

「女神が何だ……あんなの、ただの兵器じゃないか、生体兵器…それが女神の正体なんだろ？」

「人間が作った兵器は人間が扱って真価を発揮する。誰が作ったともしれぬ女神という兵器を誰が扱えるんだよ…！」

「女神に頼ってどうする……！兵器に情けをかけられるなんて、兵器に全て任せるなんて、そんなの…人間じゃない、そんなのはただのクズだ、魅せられた愚者だ！私は人間だ、傭兵だ…！」

弾薬と銃を全て回収し、グレネードライフルを背負う。
女神に任せるな。女神に任せれば……死人が増えるだけだ。
女神は人間なんぞ救っちゃいない。神は人間なんぞ救っちゃくれない。
人間を救うのは、いつだって人間だ。

「……人間を救うのは、人間（わたし）だ……！」

窓ガラスを飛び割り、外へ飛び出す。
屋根を伝っていけばすぐに着くだろう。
戦火が広がりつつある方向へ、私は飛び出した。

～視点【フロム】→【リンダ】～

「へっへ、こいつぁすげぇや…。汚染ディスク…いい代物じゃねぇか。」

今アタシの手元にあるまがまがしい色のディスク。マジック・ザ・ハード様からもらった一品だが、まさかモンスターを自在に汚染させることができるとは…！マジック様も人が悪い。こんなものを隠し持っていただなんて…。

「当然ッチュね。モンスターの異常種はもともと人間では歯が立たないッチュ。それを汚染させたのを二体送り込んだッチュから、ルウィーの陥落も時間の問題ッチュ。」
「しかしよぉ、壊滅させちまっていいのか？マジェコンヌ様の信仰とかよ。」
「統計によると、ルウィーをじわじわと浸食するより崩壊させたほうが対抗シェアもなくなって効率的ッチュ。気にせずやればいいッチュよ。」
「まぁ、二体居れば十分だろうし。アタシ達は高見の見物と洒落込もうか？」
「そうッチュね。愛しのコンパちゃんは今ルウィーにはいないはずッチュ。居もしない下っ端を探して……くぅ～！追いかけるならミーの偽物にしてほしかったッチュ～！」
「てめぇは目立たなすぎなんだよ。ちいせぇし。」
「何を！下っ端の癖に生意気ッチュ！」

「いた！見つけたよ！」

「「……え？」」ッチュ」

突然、横からアタシ達に声がかかる。聞き覚えがある声だ。そう、いつかの流行らなさそうなヒーローマニアのガキ……ってことは……！

「案の定、近くに潜んでいたわけね。下っ端。」
「下っ端さん！モンスターさんたちを止めてください！みんな困ってるんです！」

やっぱり、女神候補生のガキ…！いつも苦汁を舐めまわすような日

々だったが、今日こそはアタシの勝ちは確定している。慌てる必要は、ねぇ。

「なんだ、意外に遅かったじゃねぇか。」
「なんですって……！」
「汚染は自然現象ッチュ。いくらなんでも汚染までミー達の所為にされるのは心外ッチュ。」
「まぁ、それを利用したのは事実だがなぁ。お前らのことだ、きっとアタシ達を犯人に仕立て上げて探すと思ってたんだよ！」
「くっ…！卑怯なー！正々堂々戦えー！」

「ああいいぜ、戦ってやるよ。だが、アタシらに構っていると町がどうなっちまうかなぁ？」
「瞬殺すれば問題なしよ！行くわよネプギア！」
「はい！」

ククク…。馬鹿の相手は楽でいいぜ…♪

～視点【リンダ】↓【フロム】～
町の端からは、二体の汚染された異常種に薙ぎ払われる防衛隊らしき人間たちと、奮戦する女神候補生三人が見えた。
……ん？三人ということは、ネプギアとユニのどちらかがいない、ということか…
まぁどちらでもいいがな。

さぁ、人間を救おう。
そう決意し、私はグレネードライフルを持ち走り出した。

1―2（後書き）

フロムの女神嫌いの原因が、ちょくちょく出てくる時間帯に。
これが最初からクライマックス、という奴なのだろうか……。
というかこれキラーマシンいらないよね、絶対。
これでキラマ出てきたら…どうなることやら。

1－3（前書き）

暗くしようと私必死杉ワロタァ……。
もうだめだ、（話の支離滅裂度が）おしまいだぁ……！

1―3

「女神様方を援護しろ！少しでも町に近づけるな！命を捨ててでも女神様方を守るんだ！」

防衛隊連中は、どうやら差し違える気満々のようだ。……こう見てみると、空しくも見える。過去本で読んだ悪魔とやらの存在を今なら信じることができる。奴等は女神ではなく、夢魔。夢を与え、人間を搾り取り、最後には捨てる悪魔だ。

それに魅せられた存在が、今の防衛隊か……畜生。いつからこんなことになっていたんだ…

いつから人間はこんなに脆弱になっていたんだ…！

「いいか！女神様の命は俺たちの数十倍は重い！絶対に傷一つつけるんじゃないぞ！差し違えてでもお守りしろ！」

「その必要はない。」

屋根から飛び降り、司令官らしき相手に話しかけてみる。望みは薄いが、一応な。

「女神は人間より強大かつ強靭だ。今人間がでしゃばってもアレ相手には壁にもならん。ただの犬死だ。」

「例え犬死であろうと、女神様の為に死ぬのなら本望だ！それでこその防衛隊！」

「…そうか。じゃあ死ね。」

持っていたグレネードランチャーをレールガンに変形させ、司令官の脳天を撃ちぬく。

即死した司令官はゆっくりと、血を吹き出しながら倒れた。

「司令官が流れ弾による不慮の戦死を遂げた！これ以上の女神の戦闘への介入は無駄に死傷者を生み出すだけだ！この場は女神に任せ全軍撤退せよ！繰り返す！全軍撤退せよ！」

司令官が持っていた通信機を使い、防衛隊に呼びかける。
周りにいた連中も、やはり命は惜しいのか逃げ出した。

「いい子だ…。この戦闘、化け物以外は立ち入り禁止だからなぁ！」

レールガンをもとに戻し、戦っている方向へ走り出す。
汚染した異常種、神を騙る悪魔。そして人間（わたし）。

化物じゃないのは私だけだ。ああ、楽しみだなぁ！生きる望みの薄い殺し合いってのは！

建物群を抜け、すぐ近くにいたのは紅いアイスフェンリルや黒いエレメントドラゴン。本来ならばアイスフェンリルは群青、エレメントドラゴンは真紅色のはずだ。汚染とは、なんとも恐ろしい事象だろうか。
いるのはユニ、ロム、ラムの三人か……お人よしなネプギアがいないとは。早くも本性が見え隠れしそうだな。

「ともかく、女神の不必要さを出来るだけアピールしないとな…と。」

グレネードライフルを構え、アイスフェンリルに向けて一発撃ちこむ。今回は奮発してやろう。ありがたく思え化物共。

「グァ…グァァァァァ！！」

……効いてない、か。現代兵器の名折れだな、こりゃ。

「フロム！？あんた…！」

「あんた、傭兵！？」

「……？」

「邪魔だから下がってろ人外共。こいつらは私が殺る。」

一気に飛び出し、ミサイルをアイスフェンリルに撃ちこむ。

多少は怯んでいるが、効いている、というわけにはいかないようだ。

エレメントドラゴンは女神連中に意識が向いている…。

私の倍近くある巨体から放たれる氷の息や爪。

まぁ残念ながら体の大きさと威力は比例する。、しかしそれに伴い振りの大きさまで比例される。

数十ｃｍ移動するだけで避ける程度の単調な攻撃。

だが人間は強大な敵に対し本能的に恐怖し、冷静さを失う。

現代兵器も歯が立たない。【今の人間】では勝てないとはそういうことだ。

「グァォルルルル…！」

「腹が減ったんだろう化物。爆薬でも食ってろ害悪がぁ！！」

強く息を吐こうと大きく息を吸い込んだ時、グレネードランチャーを口に突っ込み、発砲。

その状態から変形させ推力確保用高圧火炎放射器。

寒冷地に適応している奴は熱に弱いという実例がある！

「しっかりウェルダンまで焼いてやるよ犬畜生！」

引き金を引き、喉の奥まで火炎放射を撃ちこむ。
そしてすぐに引き抜いて距離を取る。

「グァァ……グォ

何か鳴いていたが、途中でアイスフェンリルが破裂し、血肉が飛び散る。

「ったく、ちっと頭を使えばこんなもんか。汚染異常種ってのも大したもんじゃない。さて、あっちは…。」

「グォォォォォォォォ……」
「はぁ、っく……。」
「ラムちゃん・・・だいじょ、うぶ…？（おろおろ）」

エレメントドラゴンが断末魔を上げながら倒れる。
女神連中はボロボロだが、エレメントドラゴンの汚染体を倒したという事実ができた。

チッ、仕留め損ねたか。
……待てよ、よく考えれば私が倒したという証拠はなく、寧ろすべて女神の手柄となる……しまった、考え不足だったか…。

弾薬費はルウィーの教祖、そうだ、あの腹グロ教祖に大型手当も貰わないとな…。

とりあえず…帰るか。

「ちょ、ちょっと、待ちなさいよ、フロム…！」
「……。なんですか女神様。」
「あんた、何で…！？防衛隊の人たちは…！？」
「あの連中ならちょっとお願いして引いてもらいましたよ。それにしても、人間では太刀打ちができないと知っておいて放っておくとは。女神様は思慮深い。私には理解できませんよ。」
「あんた、は……！」
「私は殺すのが仕事なんで、では。」

銃をしまって歩き出す。私は大した傷はついていないし、体力もそこまで減っていない。
殺し合いはブレインだよ、女神様。

「ちーっすフロム屋でーっす。弾薬費の請求に来ましたー。」
「え？あ、はい！？」

教会に入った私の第一声に戸惑う教祖。あ、面白い。

「汚染異常種、ぶっ殺したんで報告ついでに請求を。３０００ｃｒｅｄｉｔ、これに書いてある口座にお願いします。」
「あ、は、はい。後ほど、振り込んでおきますね…。」
「どーも。じゃ、私は寝るんで。おやすみなさい。」
「はい、おやす……あ、そうだ。女神様方は…。」
「後片付けでもしてるんじゃないんですか？私は殺すのが仕事ですし、片づけに義務はありませんからね。では……。」

……まぁ、特に空腹感もないし、寝ようかね。

～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～

「よう、デッド・ザ・ハード。」

…ジャッジ・ザ・ハード。またてめぇかデカブツ。私の夢の中に住んでるのかお前は。

「両方だよ。てめぇの中には俺が、俺の中にはてめぇが住んでいる。」

……

「てめぇも感じたんだろう?俺をよ。俺の鼓動、俺の意識、俺の意思、俺の憤怒がよぉ…!」

…お前の所為か。

「てめぇの本性だよ。てめぇは俺なんだ。俺のハンシンなんだから、当然だろう?」

何が目的だ。

「てめぇか俺、どちらが本当の俺になるか競争するためだよ。」

……本当の、お前ねぇ。

「何も俺だけに限った話じゃねぇ。トリックやブレイヴの野郎にもハンシンはいやがる。あいつらは興味ないみてぇだがな…。」

お前がハンシンを求めるのは、本当の自分になり、より殺すためか。

「よくわかってるじゃねぇか。これは俺とてめぇの勝負だ。勝った方が負けた方を取り込んで本当の俺になる。どうだ？」

…拒否権は無いんだろうな。乗った。今の私には女神を打倒する力が必要だ。戦略も地力が無ければたてられん。

「成立だ。まず俺たちが出会わなければ話にならねぇ。暫くは手伝ってやるよ。仲良くしようぜ、デッドよぉ？」

私をデッドと呼ぶな。私はフロムだ。いいなジャッジ。

「じゃあフロム。手土産ついでにいいことを教えてやるよ。てめぇの近場に、ブレイヴの奴のハンシンがいるぜ…。気をつけな…。【ハンシンは、人間とは限らない】からよ…。」

……そうかい。精々気を付けるよクソッタレ。さっさと消えろデカブツ。

「ククク……。楽しみだ、楽しみだぜぇ、デッドォ…！！！」

……。

1－3（後書き）

何かフロムの強化フラグが立ってますが、回収相当先です。具体的に言えば三章ぐらい？あまり正確ではない具体的な予想ですけど。

ああ、あと。【フロムは生粋の人間】ですよ。うん。

しかしこれは…叩かれるかもな…。

1－4（前書き）

今回から大きく原作から外れる予定（今更）。
あ、あとメインキャラの一人（人間）の死亡が確定されました。
まだフラグもロクに立ってないんで予想は難しいでしょうが、
【まだ出てきてはいない】とだけ。

1―4

「……最悪の目覚めだ」

朝。ふと目が覚めると、白い天井が目に入った。
それと同時に、夢の中のジャッジとの会話が鮮明に思い出され、なんとも気分が悪い。

軽い嘔吐感はあるが、特に問題はない。それより、もっと問題なのは……

（よぅ…。聞こえるか、デッドォ……）

頭の中からジャッジの声が聞こえだしたことだ。
何だ私は。厨二病かなにかか？厨二病患った傭兵ってタチが悪すぎる。というか何よりうるさい。

「おいジャッジ、勝手に人の頭の中に語りかけてくるんじゃねぇよ反応する私のことも考えろド畜生」
（つれねぇこと言うんじゃねェよ…。仲良くしようぜ兄弟…？）
「誰が兄弟だ誰が……。あと私は女だからな。」
（男だとか女だとかそんなくだらねぇことを考えるなんて、らしくねぇなデッドよぉ。）
「……。少し黙ってろジャッジ。」
（ゲヒャヒャヒャ…！）

頭に響く声を抑え、ベッドから起き上がる。
……とりあえず軽く着替えて教祖に依頼でも貰うかな。

飯は適当に……。

「おはようございます、フロムさん。朝早いですね。」
「教祖ってのはいつ起きていつ寝てるんだかね……。」

階段を下りて広間に出ると、完全に目が覚めている教祖に迎えられた。
なんとなく悔しいので悪態を吐いておく。

「そうだ、これからラムちゃん達を呼んできてくれませんか？朝ごはんはコーンスープとパンですよー。」
「…意外に庶民的だな、女神の食事ってのは。」
「女神も、そこまで大層なものではないんですよ。候補生なんて、普通の女の子とあまり変わりません。」
「……」
「貴女が女神に対し何を思っているのかは私は知ることはできませんが……。どうか、あの子たちを悲しませないでください。これは、西沢ミナという一人の人間のお願いです。」
「……善処するよ。」

少し前、腹グロみたいに話したくないタイプではないと思ったが撤回しよう。
教祖ってのは、食えない奴しかいないようだ。

正直、女神の部屋がどこかというのを知らなかったのだが、割とあっさり見つかった。
というか【ロムちゃんとラムちゃんのお部屋】とかわいらしいプレ

ートの飾ってある扉が見つかったのだ。

（女神候補生ねぇ…。あのガキじゃあないらしいが……。殺してもいいんじゃねぇか…？）

「頼むから黙っててくれジャッジ……。私がスパイしているような気分だ…」

（スパイだぁ…？お前は全ての敵ですべての味方なんだろ…？）

「……言いえて妙だよ。だから黙ってろジャッジ。　女神様ーはいりますよー」

ちょうど両手がふさがっていたので（嘘）、仕方なく扉を蹴り開ける。

部屋の中では女神候補生二人がコート姿で楽しそうにゲームしていた。早起きだなこの幼女共。まだ5時だぞ。朝の。

「あら、あんた、傭兵の……。」

「フロム。」

「そう、それ！で、フロム？何の用よ。」

「教祖が朝食の準備をするから女神様方を呼べと。」

「はーい。いこ、ロムちゃん！」

「ぁ、うん……。」

ラムが嬉々として部屋を出ていくが、ロムが私を見て怯えている様子。

…私はそこまで表情に感情が出やすいのだろうか。

「…どうしました？」

「……！（ビクッ）　こわい……（ふるふる）」

「人の顔見るなり怖いとはまた失礼な……。私は強面のつもりはないんだが…。」

こわい、と言い残しロムもラムを追って部屋を出て行った。
……正直、私も女の端くれなわけで、突然顔みて怖いと言われると傷つく。若干。

（ゲヒャヒャヒャヒャ！随分と嫌われ者じゃねぇか、なぁデッド？）
「……。飯、食うか……。」

ジャッジを無視して広間に向かうことにする。こいつの甘言に付き合うとロクでもないことが起こる気がするのだが……。もう遅いのかもしれないな。

「はぁあぁぁ～……。」

昨日来た時の謁見の間の雰囲気とは打って変わって、なんともアットホームな雰囲気が目の前に広がっていた。

「ロムちゃん！私のちょっとあげるね！」
「ありがと、ラムちゃん……。」
「うん、ルウィーの料理も結構悪くないわね。」
「ルウィーの料理……と言っていいのでしょうか。割と有り合わせですし。」
「本当に庶民的だなおい…。」
（羨ましいねぇデッドよぉ。俺つまらねぇ反応しかしねぇ女神共を見張ってなきゃいけねぇってのによぉ。この女神共を殺したくて仕方がねェ。）

まぁ、基本的に外食ばかりの私にとってこういった食事は割と珍し

い。
それ故か若干落ち着いていたりもするのだが…。そういってもいられない。何より頭の中のジャッジがうるさい。
どうやら私以外には聞こえていないようだ。つまりジャッジに返事を返すということは、傍から見れば痛い人だ。そんなレッテルは正直勘弁してほしい。

「…ごちそうさま。教祖、多少聞きたいことがあるのだがいいか？」
「あ、ふぁい、どうぞ。」
「……。ネプギアの所在を聞きたい。元々私たちはネプギアにちょっかい出すために来たわけだしな。」
「あ、そういえばそうだったわね。」
「忘れてたのかそこの駄女神」

「ネプギアさん、ですか…。確か、街で宿を取っているはずです。今宿にいるかはわかりませんが…。そのうち教会に顔を出すと思います。」
「オーライ。私は少しギルドに顔を出してくる。そこの駄々っ子連中の相手は任せましたよ、女神様。」
「自分に苦手なことは一切ためらわずに私に投げるのね……。」

ユニやら駄々っ子連中が何か反論しているが聞こえない。
食器を教祖に言われたところに置いておき、さっさと教会を出る。
朝日が昇りはじめ、白い雪に反射して夕日とはまた違った味わいがある光景だ。
もっとも、あまりにも身近過ぎてルウィー国民は見飽きているのだろうが。慣れとは怖い。

街をぶらぶらしていると、先ほどまで延々と頭の中で響いていたジャッジの声が止んでいたことに気付く。

多少慣れかけたというのに。…まぁ、いいか。

ギルドは万国共通……四国共通なのだろうか、ラスティションのものと対して変わっていたりはしない。
依頼契約の端末もラスティションのものと同型。通信機もだ。内外装はラスティションが黒っぽいのに比べてルウィーは白っぽい。国のイメージカラーの問題だろう。さて、手頃な依頼は……

【Ｔｉｔｌｅ：連続殺人事件調査　Ｃｌｉｅｎｔ：西沢ミナ
最近連続で起こっている謎の殺人事件の調査の依頼です。ある日から、ルウィー国内で5～9歳ほどの女の子の物と思われる人片が何度も発見されています。その人片と、最近行方不明になっている女の子のＤＮＡパターンが一致。誘拐殺人と断定できます。本来ならば女神や警察が管轄する仕事なのですが、女神候補生も幼い子供。そのターゲットの範疇内なのです。それに、警察は現在、街から出ることができません。そのため、此度の依頼をすることになりました。この事件に関連する調査、出来れば犯人の確保を依頼します。調査の結果、確保の是非で報酬は増減させていただくので、そのつもりで。】

……連続殺人事件、ねぇ。

「ジャッジ、何か知っているか？」
（俺はお前の道具じゃねぇよデッドぉ。）
「少し気になったものでな。人片ってことは、その元の部分がどこかに行ったことになる。心当たりはないか？」
（……あの野郎だな。年齢一桁のガキが主食の変態野郎だ。）
「…知っている、となるとそいつもザ・ハードか。そいつのハンシン……少し気になるが…。」

（デッドは、あいつの眼中にはなさそうだが、な…。）
「それならそれで好都合だ。私が食われる心配はない。」
（頼むぜぇ、デッドォ…。お前を殺すのは俺なんだからよぉ……。）
「善処するよ。ジャッジ。」

自分のパスコードと依頼承諾のキーを入れ、ギルドを後にする。さて、今日はネプギアを探すつもりだったが、面白いことになりそうだ……。

１－４（後書き）

アニメまど〇☆マ〇カ三話と公式キャラ紹介のページを一緒に見ていたら思いついてしまった話の流れ…。
あ、日本一はマミりませんよ。一応。

その代り……。

ではまた次回。

1－5（前書き）

今回は短め。というか全体的に一話一話が短い気がする。
私の気力が一回に二時間しか持たないからなのだが…。まぁ一話＝一回で書けるわけでもないから、どちらにしろ短いのは変わらないのかもしれない。
【むむむ。】

1―5

「教祖。仕事をもらいに来たぞー」

扉を蹴り開け、謁見の間（こう言うと何か城っぽい）に入ると、まだユニがスープを味わい続け、教祖がその光景を微笑ましそうに観察していた。何やってんだこの駄女神。

「何やってるんだお前ら…」

「いや、ちょっとラステイションとは違った感じに感銘を受けていて……」

「まぁユニはどうでもいいから進めよう。教祖、ギルドで連続殺人事件調査の依頼を見つけてな。受けに来た。」

「……そうですか。あなた方が…。」

「え、何？何の話？」

「少し黙っててくださいませんか女神様」

「依頼内容の通り、先日から行われている小さい女の子のみを目的にした誘拐殺人事件が多発しています。その犯行現場も統一性がなく、警察組織の人たちも操作が手詰まりになっています。あの子たちに頼むには、あの子たちが幼すぎますので…。」

「…で、破片に関しての情報は？」

「はい。残された部分は手や足ばかり。断面は全て千切れたような切れ方をしています。」

ジャッジの言っていた【ザ・ハード】。年齢一桁のガキを主食とする…の割には妙に不可思議な部分もある。

何かを誘っている気がするな…。

「…件が件なだけに、囮を使うこともできないわけか。」
「はい……。」
「私やユニも犯人の守備範囲外だろうしな…。まぁいい。こちらもこちらで調べることにする。ネプギアも見つける必要があるしな。」
「お願いします…。」
「ユニ、いい加減食い……」
「終わってるわよ。話してる間にね。」
「そうかい……。」

いつの間にか準備万端だったユニを連れ、教会を後にする。
よくよく考えればユニがいるとジャッジと話せないわけか……。
犯人を知っていそうなジャッジと話せないのは若干のハンデになるわけだな…。うまく分担させられればいいが…。

「それで、依頼ってどういうの？またビル壊すわけ？」
「そんなビルが周りにあって尚且つ壊す必要があれば壊すだろうがな。」
「うっ・・・・・。」
「単なる殺し屋探しだ。このあたりでたびたび変死体が発見されているからその犯人の手掛かり、できれば犯人の確保をしろ、とな。」
「へぇ～……まぁ、私はこれでも目がいいからね。まっかせなさい！」
「無い胸を張ると虚しく見えるぞ」
「うるさい・・・ぐすん……」

……まぁ、私も胸は大きい部類ではない。むしろまな板だ。
まぁ胸が大きいなんてのはロボットにでも乗らなければ完全に邪魔な脂肪の塊だ。当たり範囲が増えるようなものだしな。
そう考えるなら、ユニは狙撃戦に秀でているのだろう。まな板とい

うことは、俯せの際に気付かれにくいからな。

っと、モノローグが脱線した。
とりあえず、街で情報を集めることにし、ユニを派遣する。
若干スルーしていたが、ジャッジは行方不明になった女神の【見張りをしている】と言っていた。
つまり、女神の場所を知っているということだ。
……本格的にスパイの気分だ。

「ジャッジ。少し聞きたいことがある。」
(あぁ？なんだデッドォ。)
「お前、少し前女神の見張りをしていると言ったな。あれはどういう意味だ。」
(そのままの意味だよ。対して反応もしやがらねぇ女神共の見張りをしているんだよ。俺はできればこいつらを殺してぇがな。)
「…やはり、女神はそこにいるわけか……。」
(目的なんざ俺は知らねぇがな。)
「……女神連中は私にとっては殺してくれて構わないがな。それで。お前が知っている犯人と言う奴を教えてくれないか、兄弟？」
(ハッ…！まぁ、最終的に生き残るのは俺とお前のどちらかだけだ。教えてやってもいいな。トリック・ザ・ハードって奴だ。俺みてぇに見りゃすぐわかる姿してる。)
「……一つ思ったんだがジャッジ。お前と私で記憶の共有とかできないのか？」
(んなことできやしねぇし興味もねぇ。俺はてめぇと殺し合いができりゃそれでいいんだよ…。)
「…期待はしていなかったさ。っと……。」

視界の隅に見覚えのある姿を見つけ、咄嗟に建物の影に隠れる。
正直隠れる必要は…あるな。うん。

紫色の紙とセーラー服…といえばネプギアか。面倒な時に面倒な奴を見つけてしまった。

（いるじゃねぇか…あの時の女神のガキ……！）

「落ち着けジャッジ。私が殺す理由はない。それ以前に……。」

そう。ネプギアと共にいる連中だ。

何か天然そうなセーター、見るからにサイズの合っていないコート、よくわからないスーツ（？）。

……完全に一致。ネプギアとユニの決闘を邪魔しようとしていた連中だ。

しかし、そんな連中がネプギアの身内だったとすると、何故邪魔しようとしていたのか……。

ネプギアは偶に毒を吐く以外はドが付くほどのお人よしとさえ言われている。

そんな奴がわざわざ身内に決闘の邪魔をさせるのだろうか……。

待てよ？女神は基本的にシェアのことを考える。人間は道具かシェア創造装置ぐらいにしか考えていないだろう。そして連中が身内で、ユニのメンタルが弱いことを知っていれば…。

……ネプギアの本性見破ったり、かな。

さて。まぁ連中に見つかって敵対されたり～なんて面倒臭いことは正直勘弁だ。

なのでさっさとその場を離れることにしよう。

とにかく、どうにかして調査を進めないとな……。

トリック・ザ・ハード……ルウィーの女神候補生の始末程度にしか使えそうにないが…できれば確保したい。

そう考え、私はその場を後にした。

1―5（後書き）

ジャッジが妙に大人しく感じるでしょうけど、あいつバルバトスみたいな……あ、無理だ。原作だといつもあんなだ。

ちなみに、今のところ作者の脳内ではマジック以外のハンシンは確定しています。

原作の因縁やザ・ハード共の趣味を考えて予想してみましょう。当たっても特になにもありませんけど。

1－6（前書き）

トリックさんはきっと真面目なぬいぐるみなんだよ。幼女が絡むと我を投げ捨てるだけで、幼女が絡まなければ残念がるけど真面目なぬいぐるみなんだよ。主食幼女だけど。

1―6

ネプギア達から即行離れ、再度トリック・ザ・ハード（ついでにユニ）を探す。
トリックの守備範囲は5~9ぐらいまでの幼子……というか幼女。
ルウィーの女神候補生、ロムとラムならジャストミートだろうが……。私はもともと人付き合いが苦手だ。どうにも人探しと言うものは苦手なのだ。なのに何故受けたのか？ジャッジが挑発してきたからだよコンチキショウ。

現在地、森林っぽいところ。
……うん、迷った。

何分前からここに入り込んでいたのか。そんなことは知らん。という知らなくてもいい。
何よりも問題なのは、出れるかどうかだ。
リーンボックスとルウィーにはやたら自然が多い、と言われている。まぁ、確かに紫と黒よりは白や緑のほうが自然っぽさはあるだろう。
森林と樹海の違いは何か。個人的には木々の大きさだと考えている。太陽光が入らないほどの森は樹海。太陽光が入り、空が見えれば森林だ。私はそう定義している。

……さて。現実逃避もこれぐらいにしてまず脱出手段を考えよう。

まず、方角。……わからん。というかどの方向に街があるのかもわからん。この森がルウィーのどっちにあるのかがわからん。

次、太陽。……どっちだ？恐らくまだ昼前だろう。多少空が見える

が、太陽は見えない。
周りを見渡せば、全体的に葉の緑と幹の茶色。そして何かよくわからないぬいぐるみっぽい黄色。
これでどうやって帰れば……ん？

「……」
「……」

今、私の目の前にいるのは私より大きいぬいぐるみ（？）。
ぬいぐるみ特有の肥満体かと思える腹のデカさ、人間とは思えない口と牙。

…うん、トリック（仕掛け）とは無縁の奴だな、こいつ。

「……何だお前」
「なんだ、幼女じゃないのか……」

私を見るなり見るからに（表情は無いようだが）落ち込む目の前のぬいぐるみ（極大）。
ああ、こいつがトリックか…。

「あんたがトリックか？」
「む？幼女でもないくせに話かけるとは、貴様、何者だ！」
「幼女にこだわり過ぎだろうに……。デッド・ザ・ハード。あんたらの間で広まっている噂の存在、ハンシンの一人だよ。」
「……ほう。ハンシン、ジャッジの与太話かと思っていたが…実在していたのか…。」
「急に真面目になりやがった……。」

「して、デッド・ザ・ハード。このトリック・ザ・ハード様に、何

か御用かな？」
「これでも人間の中で傭兵っつう仕事をしていてね。一つ手合せ、どうだい？」

黄色い巨体、その口に向けてグレネードライフルを向ける。
口の中、つまり体内にダメージを与えるってのは対大型の基本戦法だ、通常弾丸なら意味は薄れるが、爆発物なら効果は高い。

「ほう。ジャッジがあれほどまでに興味を占めるハンシン、試させてもらおう。」
「思う存分見るがいい、さ！」

即座に銃口をトリックの足元に向け、一発撃ちこむ。
安易な発想だが、座っているということは、安定が基本的に悪いということ。手短いし。
一度倒せば起き上がるかどうか、の実験も兼ねる。

撃ち込んだ後、木々に潜り込んで様子を見る。
どがーん。トリックの足元で爆発が起こり、爆発の衝撃でトリックの体が後ろに傾く。
…が、すぐに戻った。あの体勢の安定性すごいな…。

「どうした、ハンシン。まさかこのトリック様に傷一つつけずに逃げ出すなんてことはないよな？」
「残念ながら女神やあんたらみたいな化物と違って体はか弱い人間でね。絡め手しかできないもので。トリック様に策（トリック）ってのを教えてあげますよ。」

とは言ったものの、グレネードが至近距離で爆破して無傷とは。ザ・ハードの体は何でできているのだか。

外殻強度は折り紙付。次は内部強度を試してみようか。

とりあえずスモークグレネードを装填、もう一度トリックの足元に撃ちこんでから火炎放射に変形させる。

「ぬおっ！？」

スモークが出てから跳び出し、トリックの口に火炎放射を突っ込み、撃ちこむ。

流石に、口の中まで固いってのはそうはいないはずだ。

「おお、温い温い。人間の兵器の限界だな。」

「…ッ！？」

咄嗟に火炎放射を引き抜く。スモークが晴れると、トリックが咀嚼するそぶりを見せていた。

恐らく、銃をかみ砕くつもりだったのだろう。

危ない危ない。この銃は特注品で一丁１２０００ｃｒｅｄｉｔはする。まぁ予備はあるのだがな。

「どうやら、お前自身では何もできないようだな。その武器の威力も大したことはないようだしな。」

「チッ……。ザ・ハードの強度ってのはどうなんってんだおい…。」

グレネードはどうか知らないが、口の中を焼いても対して効果がない。となるとできるとすればどうにかしてグレネードを撃ちこむか、虎の子の近距離武器を刺し込むか…。レールガンは貫通せずに弾かれるだろう。

「それで？お前の言う策（トリック）は終わりかな？」

「冗談。仕事もあってね、破片の一つでも頂きたいもので！」

グレネードを頭に向けて撃ちこむ。爆破して多少身体が揺れるも対してダメージは食らっていない様子。
だが、隙ができればそれでいい。

「右腕、貰う！」

トリックの右腕めがけて拳を振りかぶり、思いっきり殴る。
拳が当たると同時トリックの右肩が弾けとび、右腕が落ちる。

「ぬぉぉおっ！？」
「ハッ、ざまぁ。」

着地と同時にトリックの右腕を掻っ攫って離れる。正直これ以上戦う意味はない。

「人間の兵器の売りは多種多様性でね。全て見切るってのは無理だと思ってくれないかね。」
「……ほう。確かにハンシンを見誤っていたようだ。今日も幼女が食えて機嫌がいい。これで退散しよう。」
「まぁ、また会うでしょうから、ジャッジのやつによろしく行っといてくれないかね。私、あいつのハンシンらしいんで。」
「…覚えておこう。」

そう言い残し、トリックは消えて行った。
残ったのはトリックの右腕。まぁ、これだけで十分報酬はもらえるだろう。
さて、まぁ一応依頼は達成だ。

あとは教会に帰って報酬を……。

「ルウィーの町、どっちだ……？」

そういえば私、遭難していたっけ……。

～視点【フロム】↓【？？？？？？】～

「よう、トリック…。良い様じゃねぇか。俺のハンシンにやられたんだろ？」

「…悪趣味な奴め。わざわざ味方の敗戦を盗み見していたか。」

「ハッ。てめぇより悪趣味な奴が存在するわけねぇだろ。」

「……。まぁいい。これから身体を修復してまた幼女を探さないといかん。」

「ちったぁ見張り変わりやがれボケ人形。」

「何のことかな？」

「帰還の挨拶！ただいまと言わせてもらう！」

（（あー、うるさいのが来た……））

「ジャッジ、トリック！お前たち仕事はどうした？」

「みりゃわかんだろ、真面目にやってるよ畜生」

「腕が壊れたのでな。修理に来た」

「なんと…！始末書物だぞ、トリック！して、何にやられたのだ。」

「俺のハンシンだよ。」

「ほう…。噂に聞くハンシンか。トリックを撃退するとは……。好

意を抱く。」
「……はぁ？」
「興味以上の対象ということだ。そのハンシン、私も会ってみたいものだな。」

「勝手にしろ。ルウィーでも探しゃいるんじゃねぇの？」
「ルウィーには幼女の女神候補生がいると聞く…クゥ…！無い右腕が疼く…！」
「バーカ」

「ブレイヴ・ザ・ハード、出るぞ！」

１－６（後書き）

多分、この小説のブレイヴはＣＶが中村悠一。
トリックさんを真面目にするとブレイヴとキャラが被る↓正義馬鹿↓馬鹿↓ガン〇ム↓グ〇ハム。某ねぷ子さんもブシ仮面さんになってたりするし。
こんなの絶対、おかしいよ。（いろんな意味で）

１－７（前書き）

今回、一番最初のキラーマシン（一戦目）でネプギア達との合流という予定、崩☆壊。

これより先、一話一話を8割ぐらいその場の思い付きで執筆していきます。（というか０－３からずっとそうだけど）

……こんな小説じゃ大丈夫、じゃないよねー。

1―7

「はぁ…やっと、ついた……。」

私がルウィーに到着するころには、既に夕方だった。
昨日とは同じぐらいの時間帯だが景色をみた感想は全く違うものになるのが人間の感傷の複雑さなのだろう。

ふと、自分の右手を見ると、手の甲が若干焦げている。恐らく軽度の火傷だろう。
袖に隠したもう一つの武器、パイルバンカー【ＮＩＯＨ】。赤熱した大型の釘射出機を手の甲に装着している。
当てればグレネードが効かないようなザ・ハードの体を弾け飛ばせるような威力を誇るが、射程が何と数?。しかも撃ちこむとほぼ確実に手の甲が火傷する。フィストショット（本来は腕に着けるショットガン。つまりは殴ると同時に発砲するもの。）の定めと言う奴だ。

しかしまぁ、なんというか、とにかく……腹が減った。
まぁルウィーには着いたんだ。教会に戻って報酬貰って夕食でも…。
…おなかすいた。

「おかえりなさい。結果は出ましたか?」
「確保には失敗。まぁ腕の破片とその他情報は得た。とりあえず食料を何でもいいから分けてほしい。干し肉でいいから。」
「えーっと…保存食でいいなら、少しは用意できますが…。」
「それでいい。費用は報酬から天引きでもなんでもしてくれ。」
「構いませんよ。少し待っていてくださいね。報告はその後。」

「はい、どうぞ。」

教祖に渡されたのは、ラステイションでもよく売っている携帯食料だった。

チョコレート味か…プレーン味がよかったがまぁ文句を言う立場でもあるまい。

「では、結果を聞きたいのですが…あの、ユニさんは…？」

「さぁ？では、報告を始める。」

報告したことと言えば、トリック・ザ・ハードという存在が犯人（？）であり、その腕の破片を奪取した。ぐらいだ。

まぁそれぐらいしか報告することがないのだが、これぐらいの報告で十分だろう。

「以上だ。」

「トリック・ザ・ハード…どこかで聞いたことあるような…。とにかく、調査、感謝します。報酬金は口座に振り込んでおきますので。」

「毎度あり。」

「ただいま～……。あーもう、どこいったのよフロムって…ば……」

「……」

この駄女神、まさか一日中私を探し回っていたのか……！？

いや、連絡を入れなかった私も私だが。つか女神に連絡ってどうすりゃよかったんだ…！？

「…依頼は終わったぞ。」
「え、嘘ぉ!?すごい情報入ったから自慢しようと思ったのに……。」
「私に自慢してどうすんだ…。」
（おいデッドォ……。）

…嫌なタイミングでジャッジが話しかけてきやがった。
こちとらそんなテレパシー的なことできないっつうのに…。

（テメェも気づいてるんだろうが…あの黒い奴、ハンシンだぜぇ…？誰のかは、知らねぇがな…。）

……ユニが、か…。
女神が敵対するザ・ハードの一人だとは、なんとも皮肉なものだ。
まぁ、ユニなら……いや、いいか。

「もう依頼終ったから、とりあえず明日からはネプギアの捜索を始める。いいな？」
「う、う～……了解…。」

ユニがとぼとぼと部屋に戻っていく中。私は、若干後悔していた。
ネプギアはまだいいが、その取り巻き連中と私は数日前に殺し合いをしている。
私は傭兵という立場上昨日の敵は今日の友、今日の友は明日の敵。
というのは日常茶飯事だと思ってはいるのだが、女神みたいな綺麗事の塊みたいな奴に付き従っているということは似たような思考と考えていいだろう。
そんな状態で会ってみろ、最悪ユニまで離れてあっと言う間に1対5の完成だ。
それは正直勘弁してほしい。

（おい、デッドォ……。気をつけなぁ…。テメェんところに、ブレイヴの馬鹿が行きやがった。）
「…ブレイヴ……新しいザ・ハードか。気を付けよう。それにしても、お前に馬鹿と言われるブレイヴとやらの知性が気になる。」
（ハッ、俺様は頭脳明晰だよ。殺すことしか考える気がねぇだけだ。）
「…お前も十分馬鹿だよ、ジャッジ」
出来るだけ小声でジャッジと話しながら、私も部屋に戻ることにした。早寝早起きは割と基本。うん。
通路の扉をくぐり、閉めようとしたとき。聞き覚えのある声がした。
「ミナさん、大変なんです！」
あれは、ネプギア、と取り巻きの連中……？
「……そうですか。ホワイトさんが…。」
「キラーマシンの起動には大分手こずっていたわ。早くても侵攻は明日になるでしょうね。」
「明日……。」
「私たちは、これから少し休憩してからゲイムキャラ修復後、夜襲をかけるわ。できればルウィーの女神候補生の二人の協力もほしいのだけど…。」
「……申し訳ありませんが、あの子たちは協力してくれるとは……。」

「手こずりそうじゃないか。手を貸そう。」

扉を開け、謁見の間に入る。
ネプギアの他には、知らない奴が一人混じっているが……。まぁ、いいだろう。

「あんた……！」
「あー！何時かの悪者！」
「悪者とは非道い言われようだな。私は傭兵でね、敵も味方も依頼者次第ってこと。」
「ころころと敵味方を変えるなんて、卑怯者だー！」
「やかましい。それで、プラネテューヌの女神候補生様？私を雇ってみない？それなりの腕は保障するけど。」

「え、えっと……。」
「ネプギア。あまりこいつを信用しないほうがいいわ。いつ後ろから刺されるか。」
「そうです！日本一ちゃんだって刺されたんですよぉ！」
「あれは名誉の負傷だー！弔い合戦だー！」
「……。」
「外野うるせぇうるせぇ。あれはああいう依頼を受けてただけだっつのわかりやがれド畜生。それで、ネプギア様？私を雇う？雇わない？」
「……えっと…遠慮します……。」

ネプギアは少し頭をひねると、そう頭を下げながら断った。
…まぁ、正直どちらでもよかったわけだが。

「そうかい。まぁ女神に雇われるってのはこれ以上は正直願い下げにしたかったし、好都合ではある。私を雇いたかったら言ってほし

いね。」
「…考えて、おきます。」
「じゃ、私はこれで失礼するよ。教祖、あとで聞きたいことがある。」
「あ、はい…。あとで、ですか？」
「私はこれでも臆病者でね。戦いでも敵が何をしてくるかを臆病なほど分析するタイプなんだ。たとえば自分と同じ隠し玉を持っているかもしれない、とかね。」
「……ッ！」
「それに私は傭兵稼業をやっているがメンタルが弱いほうで。これ以上敵意のこもった目で見つめられると…。」
カバーからライフルを取り出し、ネプギアに向ける。
それに合わせて、ネプギア以外の全員が各々の武器を取り出してきた。物騒な連中だほんと。
「実に腹が立つ。本当、殺意の衝動に目覚めてしまいそうだ。」
「…なに、やる気？今度は5対1なんだけど。」
「ああ、そうか…。あんたらはプラネテューヌの連中だったな。ならばルウィーの教会がどうなろうと知ったことではない、と。女神の権力争いとは恐ろしい。」
向けた銃をさっさと背中のカバーに入れ、部屋に向かうことにする。後ろから何か言われているみたいだが、私は一言返すだけに止めておいた。
「残念だが、女神を敬愛している人間がいると同時に女神を嫌悪している人間がいるってこと。覚えておいてほしいね。」

通路に入り扉を閉め、部屋に向かって歩き出す。
今はただ、寝て休みたい気分だ。

1－7（後書き）

～ザ・ハード情報局～
ブレイヴ「朝昼晩全時間帯共通での挨拶！すなわちおはこんばんちは！」
ジャッジ「いつの時代だよおい」
トリック「それより、何故こんな男三人でむさ苦しく後書きに居座らねばならんのだ！欲を言えば幼女がいいが、せめてマジックぐらいはいてもいいだろう！」
ジ「作者がまだマジックのキャラ決めてないんだから仕方ねぇだろうがボケ人形。最悪ブレイヴみたいになんだぞ」
ト「むぅ…それは、できれば勘弁願いたい…。」
ジ「お前に自尊心があったことに俺は驚いてるぞ」
ブ「これから毎回、読者の君の視線を釘付けにする情報を私たち、ザ・ハードがお送りする。メインパーソナリティーは私、ブレイヴ・ザ・ハードが務めさせていただく！」
ジ「とはいってもよ、トリックじゃねぇが少しばかり華がねぇよな。」
ト「全くだ。幼女受けしない黒ボット、幼女受けしないガオガ○イガー。それに対して愛くるしいボディーのこのトリック様しか華がないというのは、ゆゆしき事態だ。幼女がいないと。」
ジ「テメェが一番ガキ受けしねぇだろうがなんだその口と牙と舌は、あぁ？引きちぎんぞボケ」
ト「や、やめろ！この舌は幼女をペロペロするための大事な舌なのだ！」
ジ「だったら少し黙ってろボケ、話が進まねぇんだよ」
ブ「では、ザ・ハード情報局第一回で解説するのは、ズバリハンシンだ。」

ジ「ハンシンってのは、俺たちザ・ハードに一人ずつ存在している鍵みたいなもんだ。俺たちとそのハンシンが殺し合い、殺した方が【真の自分】になれる。」

ブ「私は根拠のない戯言だとは思っていたのだがな…。実際にトリックを撃退したとなれば、私も好意を抱かざるを得ない。」

ジ「もうお前も黙ってろ変態野郎」

ト「グフフ…このトリック・ザ・ハード様のハンシンはそれはもう愛らしい幼女なのだろうな……♪」

ジ「テメェのそんな願望が叶うわけ……」

リンダ「失礼します。ジャッジ・ザ・ハード様、ディレクターからです。」

ジ「あぁ？なんだよ放送中に……」

ト「どうしたジャッジ？まさか、幼女がここに来るとか！？」

ジ「…テメェのハンシン、本当に幼女らしいぞ……」

ト「……」ジ「……」ブ「……」

ト「イィィィィィヤッホォォォォォォォォォオ！」

ジ「トリックはあのまま放置しておいて、ハンシンに関する説明は何回かに分けてやるつもりだ、今回はここまでにしておくぞ。」

ブ「あえて言わせてもらおう。覚えておくがいい、読者諸君！我等マジェコンヌはいつでも君の入信を待っているぞ！」

ジ「詐欺には気をつけろよー」

～この放送は、犯罪組織マジェコンヌの制作でお送りしました～

ト「イィィィィィィィヤッハァァァァァァァァ！」

ジ「まだやってるし」

ブ「切り捨て、御免！」

ト「ひ、ひでぶぅっ！？」

1－8（前書き）

今回、あの面倒臭い奴再登場。

というかいい加減女神勢を（自主規制）させてもいいんじゃないかな。

出番相当先だから自分でも待ち遠しい。でも途中の展開が思いつかない。

どうしよう。どうしよう。

1－8

「ユニ。戦闘準備して町を出るぞ。」

部屋に入るなり、ユニに一言かけてから装備の点検を始める。

ユニは「何事よ、一体…」とかぶつくさ言っていたがネプギアに一泡吹かせる、と言ったら俄然やる気を出した。まったくわけがわからない。

「キラーマシンの詳細、ですか…？」

ネプギア達が去った後。私たちは教祖から情報を得ることにした。

偶には嫌がらせもいいだろう。それに、モノによっては特別報酬でも貰えそうだしな。

「ああ。先ほど連中が言っていたキラーマシン。あんたらがやけに危惧していたみたいだからね。賞金でもかけてくれれば喜んで破壊に行くのだが。」

「……。わかりました。貴女方にキラーマシンの破壊、及び再出原因の排除を依頼します。」

「受諾した。報酬は？」

「…一体に付き、１００００ｃｒｅｄｉｔ。」

「……♪場所は？」

「ルウィーの北西、巨大なキューブ上の建物、世界中の迷宮です。…お気をつけて。」

ルウィーからＶＯＢで十数分。巨大なキューブの建物とは実に言いえて妙だったというのがよくわかる謎の建築物が目の前に存在していた。透けてるし。

「やれやれ。ＶＯＢが無ければどれほどかかるのか…。」

「……。」

「…ユニ？」

先ほどから妙にユニが静かだ。いつもは煩い……というわけでもないが、結構喋るタイプだ。…なんだろう。

「ユーニー。」

「ひゃぁっ！？な、何！？」

「何じゃねぇよ。これから殺し合いが始まるんだから油断と驕りは厳禁だからな女神様。」

「わ、わかってるわよ！ただ、フロムがいるんだからそれなりになんとかなるんでしょうなーとか、考えてるわけじゃないわよ！？」

「聞いてねぇよ。複数いることは確定してるんだから半分は譲ってやるから。」

「……えっ」

「女神が人間に頼るなド畜生。」

「う～…わかったわよ……。」

「まぁ、なるようになるだろうさ。」

キューブの内側に入ると、まるでドット絵を超ズームしたような場所だった。目に悪い光景だ。

その上、そこら中にドラ〇エのキラ〇マシン２のようなロボが大量に蔓延っている。

見た目が2なのに1とはこれいかに。

「ユニ、この一帯のは任せる。恐らく20体程度だろう。見る限り関節が弱そうだ。気張れよ！」

「え、ちょっと、フロム！？」

グレネードライフルを構え、ユニを置いて走り出す。ああいうロボットの生体認識はどうせ程度の知れた体温認識だろう。ジャミングでもすれば……まぁ、チャフグレネードなんて物は持ち合わせてはいないのだが。

軽くスモークを撃ち込んでとにかく奥に突き進む。

数分ほど走り続けると、遠くから銃撃音が聞こえた。恐らくユニが始めたのだろう。

眼前には大量のキラーマシン。視界内にも15体はいる。

…まぁ、あれだけ（全長5mぐらいか？）大きければ、もしかしたら弾薬を使う必要すらないかもしれない。

「認識　認識　認識」

「確認　確認　確認」

「生体反応　断定」

「排除　排除　排除」

どうやら、あちらは殺る気満々なようだ。

「はぁ……。人間だけを殺す兵器かよ。」

私は銃を構え、キラーマシンの群に向かって走り出した。

～視点【フロム】↓【ユニ】～

「こん、っのぉ！」

二挺の銃を連結させて、キラーマシンの腕の細い部分、間接を狙い撃つ。

自分の弱点をわかっているかのように他のキラーマシンがカバー。

あーもう、何よこいつら……！

「わかったわよ…。銃身が焼けつくまで撃ち続けてあげる！」

二挺拳銃をしまい、別にアサルトライフルを二挺取り出し、そのままキラーマシンに向け引き金を引く。

反動で手が痺れそうになるけど、そこまで気にはならない。

ひたすら撃ち続けると、偶然当たったのか一体が地面に落ちる。

……あんだけ撃って一体。私の持ってるのなんて、軽火器ばっかり…。フロムに対抗してこんな銃ばっかり。愛用の女神化するときの銃も持ってきてないし……。

銃撃が止んだと理解したのか、キラーマシンが突然近づいてきた。

リロード、間に合わない…！

「お姉ちゃん…フロム……！」

咄嗟にライフルを前にだし、目をつぶる。

……。あれ？

「斬り捨て、ごめぇえええええん！」

目を開けると、目の前ではキラーマシンとは別のロボット（？）が、私に背を向けて、佇んでいた。傍らには、真っ二つにされたキラーマシン。

…何事？

「気配を探り、只管探し求めた……。まさか君に出逢えようとは……。乙女座の私としては、センチメンタリズムな運命を感じずにはいられない……。」

「…はい……？」

「私の名はブレイヴ・ザ・ハード……。君の存在に心奪われた男だ！」

……今、フロムの気持ちが少しだけわかった気がする。

その時、私の思考は一言しか浮かばなかった。

（何か変なのが出てきた……。）

そう、この一言だけしか。

1－8（後書き）

～ザ・ハード情報局～
ジャッジ「ザ・ハード情報局二回目。メインパーソナリティー代理のジャッジ・ザ・ハードだ。ブレイヴの奴は本編に出てきたからこっちにはいないぞ。」
トリック「ザ・ハード四天王が参謀、トリック・ザ・ハードである。全世界の幼女よ、ボクチンが君たちをぺろぺろしてあげ」
ジ「テメェそんなにその舌千切られてぇみてぇだな、あぁ？」
ト「ぎゃあああぁぁああ！痛い！痛いぞ！幼女がぺろぺろできないじゃないかぁ！」
ジ「ああ、そうだ。マジックが女神共のうんたらかんたらが終わったって言っていたな。せっかくだからあいつらをゲストとしていれておくか。」
ト「ならば、ぜひ幼女を「黙ってろ」……ハイ」

ホワイトハート「……ホワイトハート、です」
ジ「しかしまぁ、デッドの奴がシュールとか言いたくなりそうな構図だよなぁ…。俺、トリック。そしてこの女神。なんだこれ」
ト「むむ…幼女……ではないようだが…クッ、惜しい女神だ…！」
ジ「お前の存在が惜しいぞ、いろいろとな」
ホ「……。」
ジ「さて、おい女神。せっかくだからテメェがハガキ読め。あんな第一回なのに妙にハガキ来てるしな。」
ホ「…わかった。【R・N・：これから毎日マジェコン買おうぜ？さんから。ザ・ハード情報局の皆様、こんにちは。マジェコンヌ信者として、ドゥンドゥン聞こうと思っています。質問なのですが、ザ・ハード四天王の方々は仲がいいのですか？悪いのですか？気になったので。これから楽しみにしています。】」

ジ「一言でいえば最悪だ。」
ホ「……。」
ト「まぁ、話を聞かないブレイヴ、殺人しか考えないジャッジ。祈っているだけで何もしないマジック。そんな無能ばかりの中このトリック様という天才がいるのだ。なじめないというのも無理はない。」
ジ「テメェ、そんなに殺されたいみてぇだな……。」
ト「ほう、右腕がないとはいえこのトリック。ジャッジ程度に遅れは取らん！」
ジ「そうかい…。おい女神。相手してやれ。」
ホ「……わかった。」スッ
ト「お、おい待て！女神は卑怯だろう女神は！」
ジ「トリックの名を持つお前が言うことかねぇ…？やっちまえ、女神。」
ホ「……テンツェリントロンペ」
ト「アッーー！！！！！！」

～この番組は犯罪組織マジェコンヌの制作でお送りしました～

ジ「しかしまぁ、マジックの奴もよくやるよなぁ…。俺には殺ししか思いつかねぇ。」
ホ「……。」

1－9（前書き）

興く（投稿が）遅かったじゃないか……

当初に予定していた【手こずっているようだな、手を貸そう】と【遅かったじゃないか…。】の両方をついに消火し終えて若干満足。

一本満足。

1－9

～視点【ユニ】～

「君を探し求めていた、フェイク・ザ・ハード……。ジャッジの話、やはり真実であったか！私が乙女座であったことをこれほど嬉しく思ったことはない…！」

「えーっと……。」

突然、私の目の前に現れたロボット（？）、ブレイヴ・ザ・ハード。

…何だろう、よくわからないのに妙な既視感を感じる。

「認識　認識」

「非生命体　非生命体」

「生命体破壊　生命体破壊」

「ちょ、ちょっと！？あいつら動きだしたわよ！？」

「ふっ…心配は無用だと言わせてもらおう。私とフェイクの間に水入りは無用！」

私から向き直し、キラーマシンの軍団に向けて大剣を振るうブレイヴ。

…何だろう。この既視感（二回目）

「敵対反応　敵対反応」

「迎撃　迎撃」

「向かってくるか…！ならば見せよう、この私、ブレイヴ・ザ・ハードの奥義を！」

剣を構え、飛び上がったかと目で追うと、視界にブレイヴは存在していなかった。
突然、ガキィンと金属音が鳴った。その方向を見ると、キラーマシンが先ほどと同じように真っ二つになっていた。
その後現在進行形でキラーマシンが続々と斬られて行った。しかし、肝心の斬っているだろうブレイヴの姿がまったく見えない。
……身体が微かに震える。多分、恐怖なんだろう。

「ふっ……。これにて打ち止めか。」

突然、ブレイヴの巨体が目の前に現れた。
この男（？）はあの巨体で、目に見えないスピードであのキラーマシンを易々と殲滅してしまった。

恐らく、私では、こいつにはかなわない。戦いになるかどうかすら怪しい。
…でも。私は女神だ。お姉ちゃんの、女神ノワールの妹なんだ。
身体の震えを抑えながら、ブレイヴに二挺のアサルトライフルを向ける。

「なるほど。やる気になってくれたか。その心意気や良し！」

先ほどと同じように、ブレイヴが飛び上がる。
目で追うと、今度はちゃんと空中に存在していた。何を考えているのか知らないけど、空中なら当てられるはず、と考えて、ライフルを乱射する。

「その手を読まないと思っていたのか……？」

「なっ……！？」

ブレイヴが剣をしまうと、上半身を１８０。回転させて背中の羽を開いた。

……変形！？

「人呼んで、ブレイヴスペシャル！」

「名前ダサッ！？」

名前に一瞬緊張感を失ったが、変形したブレイヴは本当に速い。目で追えないほどだ。

なんとかしないと、見失って…！

「アンドリバース！」

「えっ……」

いつの間にか再度変形し、大剣を向けていたブレイヴ。

後ろからで、間に合わな……

「……。ここまでだ。」

「…何よ。情けのつもり？」

少し勢いをつければ私を切れそうな所を、ブレイヴは寸前で止めた。

……これで、三連敗。ネプギア、キラーマシン、ブレイヴ…。何よ、私、弱いじゃない……。

「邪魔が入った。決着は後日。さらば！」

ブレイヴが変形し、空中を飛んで消えて行った。

……私の周りにはブレイヴが駆逐したキラーマシン。

なんだろう。この、変な感じ…全部、どうでもいいや……。

「…ニちゃ…？……ちゃん！」

～視点【ユニ】↓【フロム】～

「これで12体、か。」

両腕関節を粉砕され、無力化されたのが7体、同士討ちで核を破壊されたであろう奴が3体。ＮＩＯＨで貫いたのが2体。

攻撃手段が両腕の武器のみ、尻尾と思わしき部分は浮力装置かな。

あれで攻撃したら衝撃でうけなくなる等の危険があるから使えないのだろう。私にとってはありがたい話だ。

視界にはまだ…最低１０体はいそうだ。

弾薬の心配はないが、多少の疲れが出てきた。隠れ出ての市街戦とは別に常に動き回る必要があるこんな奴らだ。気配も存在しない。

駆動音が聞こえる程度に出ていて本当に助かった。

「排除　排除　排除」

「ああもう、学習装置ってもんはねぇのかよテメェら！」

大きく振った右手の斧を軽く避け、関節に向けてグレネードを撃ち込み、抉る。

なんかもう、単調な作業になってきている。緊張感ねぇなぁ…。そこまで危惧するような…ものか。

スピードもそれなり、威力は抜群。強度も関節を除けばかなり強固だ。弱点を知らずにやれば、確かに勝てないだろう。ユニも7体ぐらいは破壊しておいてくれたほうがいいのだがな…。

っと、１４体目。
…若干行動パターンも読めた。破壊までの最適化手順もできている。
……少しペースを上げるか。

数分後。周りには大体３０体前後のキラーマシンの残骸。
一体の上に座り、持ってきた飲料水（ペットボトル）を一気飲み。
あー、水分補給大事ホント大事。

飲み干したペットボトルを投げ捨て、周りに意識を割く。銃声はしない。あっちも終わったみたいだが…。
こっちに向かってくる足音が複数。この状況でこんなところに来る集団と言えば……

「……キラーマシンが…こんなに……！？」
「まさか、たった一人でこの量を…！」

そう、ネプギア達だ。

「遅かったじゃないか……。目的は既に果たしたよ、私たちがな。」

連中に向け、銃を突きつけて、私はそう言い放った。

1－9（後書き）

～ザ・ハード情報局～
ジャッジ（以下ジ）「ブレイヴの奴、大した活躍してんなぁ。」
トリック（以下ト）「全くだ。さて、ザ・ハード情報局を始めよう。今回のゲストはどうするのだ？」
ジ「用意済みだ。おい！」
ブラックハート（以下ブラ）「はい……。」
ト「…前回の奴と大して反応が変わっていないぞ、ジャッジ！」
ジ「本編中にも言ってんだろ、大した反応もしねェ女神を見張ってるってよ。」
ト「むむ…女神に幼女がいないことが悔やまれる…。」
ジ（候補生にはいるけどな）
ト「何か言ったかジャッジ」
ジ「さてね。さて、今回の説明テーマ、ハンシンその二だ。」

ジ「今回や少し前を見て思った奴もいるんじゃないか？俺たちが何時【ハンシンでの呼び名を知った】のか。」
ト「…ふむ。なんの疑問もなくデッドやフェイクと呼んでいるな。」
ジ「まぁ大した理由もねぇよ。見て、そいつが自分のハンシンだとわかって、自然と名前が思い浮かぶんだよ。……俺とデッド。ジャッジと黒ガキ。何か名前が繋がって…そうで対して繋がってないな。」
ト「はやくボクチンのハンシンもこないかなぁ♪はやく思いっきりペロペロ「テメェまだ懲りてねぇか」当然だ！幼女をペロペロすることこそが我が生きがい！」
ジ「何でそんなことを断言できるんだかね……。また女神に殺られてぇか？」
ト「…すまない。それは勘弁してくれ。」

ジ「幼女幼女とド低能はこれだから困る。常にさまざまな殺し方を考えている俺様を見習えドボケ。」
ト「お前も対して変わらないだろうジャッジ！」
ジ「ア〝ァ〝！？文句あんのか？」
ト「今日こそは堪忍袋の緒が切れたぞジャッジ！懲らしめてくれよう！」
ジ「おっしゃぁ、一度ザ・ハードをこの手でぶっ殺してみたかったんだ！」

ブラ「……。」

～この放送は犯罪組織マジェコンヌの制作でお送りしました。～

パープルハート（なんでこいつらこんなことやってるんだろう……。）

１－１０（前書き）

一章も地味に十話突入。でもまだ２／５ぐらい（のはず）。徐々に暗くなっていく（ように頑張っている）ストーリー。常に支配ＥＮＤを見た時のテンションで読むことをオススメします（今更）。

……というか、もうメーカー云々関係ないよね、単なるフロムって名前オリキャラだよね。

1－10

「……あんたが、キラーマシン達を？」

コートの少女（アイエフと言ったっけか）が私に敵意をまき散らしながら話しかける。

どれだけ敵視されてるんだろうね、私は。

「まぁね。教祖から依頼を受けて殲滅中。意外に弱かったな。ユニの奴もあっさり終わらせたようだし。」

「…ユニなら、さっき気絶していたところを保護したわ。周りには大量のキラーマシンの残骸があった。」

「なんだかんだであいつも殲滅したか。となれば、あとはあんたらの仕事だ。ユニを保護してくれた礼は言うが、まぁそれだけ。これでも最近金欠気味でね。」

「……言っとくけど、少なくとも私はあんたを信用する気はないから。」

「依頼主でもない相手に信用される筋合いもないさ。じゃ、あとは任せた。まだキラーマシンがいたら関節や尻尾を狙いな。簡単に無力化できるからよ。」

「……」

ネプギア達の横を通り、迷宮の外に向かう。連中も奥に向かうようだ。

通り過ぎる時、他が進むなか一人残っていたネプギアが私に声をかけた。

「貴女が何を考えているかはわかりません。でも、ユニちゃんと友達なら、私とも友達になれますよね…？」
「さてね。私は傭兵だ。何時誰が何故敵かなんて依頼主次第さ。私を雇えば、友達にも戦友にもなれるだろう。」
「……ジャッジ・ザ・ハード。彼のことを知っていれば、何時か教えてください。」
「……。失礼するよ。」

ＶＯＢでルウィーに帰る途中。私は物思いに耽っていた。
三年前、行方不明になった女神達の中唯一生還した女神候補生、ネプギア。
……ジャッジを知っていても不思議ではない。なら何がおかしいか。
【何故私とジャッジに関連性があると思ったのか】だ。
デッド・ザ・ハードの名はそれこそジャッジ等ザ・ハード連中しか知らないはずだ。
……。なんだ。ネプギア、何を知っている？
ジャッジの【ハンシンは人間とは限らない】。これはおそらくユニのことだろう。
……ネプギア。恐らく目下の最凶の敵。ゲイムギョウ界のプラネテューヌシェアが圧倒的に増えていることも納得できる。ラステイション・ルウィーもついでに回復しているようだが、どさくさに紛れてシェアを差し込んでいる。

…ダメだ。情報が少ない。とりあえず、ユニを迎えに行くかな。

「ちーっすフロム屋でーす。」
「おかえりなさい、フロムさん。ユニさんなら、部屋で休んでいま

すよ。」
「……依頼は失敗だ。報酬は貰えないよ。ユニを運んできた奴って誰かわかる？」
「…それは、がすとですの。」
振り返ると、デカい帽子（？）を被った少女が佇んでいた。
…何か、表情に憂いがある。……なんだろうか。
「がすとは、あなたとおはなししたかったですの。少しつら貸しやがってほしいですの。」
「……ユニは大丈夫なのか？」
「もんだいないですの。肉体的そんしょうもなかったですの。」
ルウィーのシンボル、教会兼……塔。
そのそれなりに高層部、展望台に私と彼女、がすとはいた。
「……傭兵、フロムでよかったですの？」
「ああ。依頼か？」
「すこし、相談にのってほしかったのですの。…フロムは、ザ・ハードというものをしっているですの？」
「……知っているとしたら？」
「だとしたら…がすとを、ザ・ハードに会わせてほしいですの。」
「……。」
「……その様子だと、しっているみたいですの。……ハンシン、勿論、しっているはずですの。」
「…あんたがハンシンだとして、私にそれを話してどうなる？私がザ・ハードなんてものを知らないかもしれないぞ？」
「そんなことはありえませんの。がすとは、導かれてしまったので

すの。」
「……詳しく聞こう。」

～視点【フロム】↓【がすと語り】～

がすとは錬金術師、という職業をしているですの。その名の通り錬金術と言う、いわば一種の合成術で生計を立てているですの。
…がすとの故郷では、その錬金術が盛んで、国からの錬金術の依頼があったりもするですの。
がすとは、ある錬金術の学校の生徒だったですの。所謂飛び級ですの。
がすとはもともと孤児で、生きるため、どうしても金が必要だと思っていたですの。そこで残っていた家、アトリエを使って錬金術を勉強しながら生きていたですの。
ある時、学校の錬金術の卒業試験で、アトリエで店を開くことになったですの。がすとは自前のアトリエの場所もよく、順調に、快調に進んでいたですの。
……でも、長くは続かなかったですの。
ある日、がすとのアトリエに城の兵隊が押し入ってきたですの。
何かと思えば、がすとが違法な商売をしている、と通報があった、と。
がすとの故郷は錬金術を押しているだけあって、法律も結構きっちりしてるですの。
その通報は、がすとのクラスメイトからのものだったですの。
数か月前、そのクラスメイトが一度がすとのアトリエに来ていたですの。
がすとは、必死に無実を訴えたですの。でも、誰も信じてはくれなかった。クラスメイトは一人も。
……がすとは国を追われ、放浪していたですの。

そしてある夜。夢で、女の人と会ったですの。あのひとは、【マジック・ザ・ハード】と言っていたですの。
あのひとは、【ザ・ハードを、我等を探せ。我等を見つけることができれば、世界に自分を知らしめることができる、自らのあらゆる幸せを謳歌できる】と。
……そして、いつしかルウィーに流れ着いていたですの。

～【がすと語り】↓【フロム】～

淡々と話すがすとの目に光は無く、絶望という言葉がよく似合う状態だった。
…そういえば、謁見の間で見た時も、私を光の無い目で見つめていたな。

「……私は、デスペア・ザ・ハード。絶望の名を持つザ・ハードですの。」
「…デッド・ザ・ハード。死の名を持つザ・ハードだ。」

「絶望。私には、とても似合う響きだと思っているですの。……フロム。フロムは、希望とか、奇跡とか、魔法とか。そういう、自分に都合のいいこと、考えたりはするですの？」
「…しないと言えば嘘になるが、そうすることはないな。傭兵っつう仕事上、現実と向き合わなければ生き残ることはできやしない。」
「……そうですの。そう思っているなんて、フロムは大人ですの。私の錬金術を見ると、ルウィーの人たちはみんな奇跡だ、魔法だなんていうですの。……でも、この世に希望なんてものは既に残ってはいないですの。」

「奇跡も魔法も、ないんですの。」

見るからに幼い、トリックすら反応しそうなほど幼く見える目の前の幼女。

しかし今感じる風貌は、達観したような雰囲気を醸し出していた。

同時に、不思議と既視感を感じていた。信頼していた者の裏切り。

何もかもに絶望し、希望を失う。

…信じられるのは、自分だけ。

……そう、か。私か。

1－10（後書き）

～ザ・ハード情報局～

ジャッジ「大分一章も佳境に入って来たな。リーンボックスにすら行ってないのに」

ブレイヴ「帰還の言葉を述べさせてもらう！ただいま！」

ジャッジ「うっせぇ、静かに帰ってこれねぇのかテメェは。」

ブレイヴ「あえて言わせてもらおう。不可能であると！帰った時にはただいまと言う、私は常識を重んじる人間だ！」

ジャッジ「テメェ人間じゃねぇだろ。てか常識重んじるならまずうるせぇ。黙れ。」

ブレイヴ「断固辞退する。」

ジャッジ「うっせぇ……。まぁいい、ザ・ハード情報局……っと、トリックの奴どこ行った？」

ブレイヴ「トリックならば、先ほど【幼女分が足りない！】と言いながら出て行った。」

ジャッジ「今度女神共にボコらせておくか。さて、今回のザ・ハード情報局もまぁ、またハンシンだ。今回は【がすと】こと【デスペア・ザ・ハード】だ。」

ブレイヴ「これでハンシンも三人か。」

ジャッジ「そうだな。マジックの奴も何かちょっとだけ出てきてやがるし。」

ブレイヴ「ああ、もうわかりきっているだろうが、デスペア・ザ・ハードはトリックのハンシンだ。マジックのハンシンは作者もいまだに考え付いていない。」

ジャッジ「一瞬紫のガキ（ネプギア）っつう案も出ていたが黒ガキ（ユニ）がいる以上被るのはよくない、と判断して没。未だ決まっていない。」

ブレイヴ「常にその場しのぎしか考えない、か……。私も堪忍袋の

緒が切れそうだ。」
ジャッジ「放送終わってからにしろ。あ、そうそう。このザ・ハード情報局で何か聞きたいことあったら感想か何かで言ってくれ。作者ならば喜んで回答するだろう。」
ブレイヴ「勿論、今後のネタバレになる場合は控えさせていただく。」
ジャッジ「とは言っても一話一話が８０％ぐらいその場の思い付きだしな。ネタバレもなにもないんじゃねぇのか？」
ブレイヴ「大筋（と言うより断片的）は考えている。皆が望んだまど〇☆マ〇カネタもやる予定だ。今回は別にしてな。」
ジャッジ「…さて。今回は割かし真面目にやったな。トリックがいねぇと何だかんだで進むもんだ。」
ブレイヴ「全くだ。さて、私はフェイクを追うことにしよう。」
ジャッジ「ストーカーも程々になー」

～この放送は、犯罪組織マジェコンヌの制作でお送りしました～

パープルハート（洗脳されるのと、三年以上パイプに縛られるの、どっちがマシなんでしょうね……。）

1－11（前書き）

今回、この小説の重大な分かれ目。
フロムという以上、所々に大きな分かれ道があるのは必定。
……どうしよう。

1―11

～【パープルハート】～

……このギョウカイ墓場でジャッジ・ザ・ハードに敗れ、囚われてから早三年。

この縛られた体勢にも慣れたが、一切変わらない景色に、徐々に精神も弱まってくる。

少し前。私の親友、アイエフとコンパが私達を助けに来た。がその作戦はほぼ失敗。ネプギアを連れ出してくれたのが唯一の望みだった。

…いつかネプギアが、助けてくれる。

……そう、思っていた。

「……よぅ、ムラサキ。」

「…何の用？私はまだ、絶望してはいない……！」

「俺としてはてめぇが絶望しようがしまいがどうでもいいんだよ。ナニカを殺せればな。それに、あいつらのようになれば、楽になれるかもしれねぇぞ？」

ジャッジの斧が向いた先。

私の仲間、ブラックハート、ホワイトハート、グリーンハート。

彼女らは縛られることなく、ただ佇んでいる。ただし、目の光を無くして。

「私は、楽な喜びより苦難の先の喜びを取るタイプなのよ。いい加

滅諦めてくれる？ネプギアを逃がした時点で、あんた達は詰んでいる…！」

「ゲヒャヒャヒャヒャ…！そうかい……。」

「…ジャッジ。手こずっているようだな。」

突然現れた、黄色いぬいぐるみみたいなマジェコンヌ四天王のひとり、トリック・ザ・ハード。

……私相手にザ・ハード二人。女神を手中に収めることはそれほどまでに重要、ということはわかっているのだが…。

「プラネテューヌが女神はこのトリック・ザ・ハードに任せてくれたまえ。ジャッジ。貴様はほかの女神の監視でもしたらどうだ？」

「……チッ」

「…さて。直接対面するのは初めてかもしれんな。我が名はトリック・ザ・ハード。お前たち女神を絶望させることが今の役目。」

「ジャッジにも言ったけど、あんたたちがネプギアを逃がしてくれたおかげで絶望する気はないわ。いつかネプギアが助けてくれる。私はずっとそう信じるだけよ。」

「……ふ、む。大した姉妹愛だな。実に気に食わん。それに比べて、ブラックハートとホワイトハートは実に薄情だな。妹がいるにも関わらず、あっさりと絶望してしまった。女神の名折れだと、思っているのではないかな？」

「……ッ」

「即答出来ないというのは少なからず思っているということだ。女神は本来自らのシェアを賭けて戦いあう間柄だからな。疎ましく思うのも仕方のないことだ。」

「そんなこと、そんなことない…！私は、ノワールも、ブランも、ベールも…！ネプギアも、ユニも、ロムもラムも！私は、皆好きだ

から……！」

「そんなことを無理して言う必要はない。事実、三年以上前には戦っていただろう？我らマジェコンヌの侵略が始まる前までは。」

「それはっ……女神は、シェアがなきゃ生きられないから…！」

「当然だ。女神はシェアがなければ生きられない。何よりも生きるためだ。生物なら当然の選択だ。例え女神であっても、生存本能というものは存在するからな。仕方ないのだ。」

「なら…！」

「そう。仕方がない。シェアは無限に有限だ。どうしても、どうしても他者より先へ、他者より上に行きたがる。仕方がないことなのだ。だから、例え女神が死のうとも、仕方のないことなのだ。弱者は強者に食われ、吸収される。弱肉強食の摂理は女神のシェア争いにも勿論当てはまるのだ。」

「……」

「そうだ。一つ、いいことを教えてあげよう。この映像を見てくれたまえ。」

……これは、リゾート地…？ラステイションかしら……。

映っているのは私と同じ、紫色の髪の…ネプギア！？

「そう。これに映っているのは君の妹、プラネテューヌの女神候補生ネプギアだ。そしてもう一人映っているのは、ラステイションの女神候補生ユニ。」

【彼女らは何故、戦っているのかな？】

トリックが見せた映像では、ユニと、ネプギアが戦っていた。それも、女神化するほどの、本気で。

ネプギアとユニ。直接会ったことはなかったけど、私やノワールのイメージが映っていたはず。
…何故、戦っているの……？

「そう！君たち女神がいなくなって、女神のシェアは激減した。勿論女神だけではなく、女神候補生もシェアが無ければ生きることはできない。だから戦っている。生存本能の赴くままに、互いのシェアを奪い合っているのだ。」
「ネプギア……ユニ……。」
「残念ながらこれは録画でね。この結末は撮ることができなかったんだ。もしかしたらこれでネプギアが敗北し、死亡。そしてラステイションにシェアが吸収されるかもしれない。逆もしかりだ。」
「……」
「どうかな？いつまでもなけなしのシェアを奪い合うより、我らの施しを受けてみないか？我らは寛大だ。求めるものには与えよう。望むものには叶えよう。我らが犯罪神マジェコンヌ。犯罪神だと臆することはない。とても慈愛にあふれるお方だ。君たち女神にも、施しを下さるだろう。」
「あ、ぁ……。」

徐々に、目の前が暗くなってくる。自分が、絶望しかけていることがわかる。
でも、何もできない。反論、できない。
……ごめんなさい、い…ネプギア……。

～視点【パープルハート】→【ジャッジ・ザ・ハード】～

「ジャッジ！パープルハートの洗脳を完了したぞ。」

「お前、自分を参謀っつったりしてたけど本当だったんだな…。」
「やかましい！さて、あとは女神候補生たちを待つのみだ。再び女神たちを縛っておくのだ。」
「…ぁ？なんだってんなことしなくちゃなんねぇんだよ。」
「頭の弱い奴め。信仰とは、畏れだ。恐怖だ。絶望だ。トリック・ザ・ハードの仕掛け（トリック）を信用したまえ。」
「……チッ。わかったよ。」

～視点【ジャッジ・ザ・ハード】↓【フロム】～
「じゃあ、がすとは女神さま達のところに行くですの。」
「ザ・ハード。あまり人に言わない方がいい。言ってもユニだ。それ以外には決して言うな。いいな？」
「わかってるですの。がすとは口が堅くてとっても用心深いですの。……それに、言って余計に敵を増やすのは私も望むところではないですの。」
「…そうかい。」

がすと…いや、デスペアと別れ、私は部屋に戻った。…ユニは大丈夫だろうか。

「ユーニー……いない？…どっかに言ったか、あの駄女神。」
部屋に入ると、ユニの姿がない。気絶らしいが、回復してどこかに行ったのだろう。
手のかかる女神だ。

「……あ、フロム…。」

「よぅ、女神様。生きてるか？」

待つこと数分。ユニが帰ってきた、が…。表情が暗い。

……最近暗い奴としか会っていない気がする。

「…その、ごめん、なさい。私が足引っ張ったから…」

「別に。女神様の落ち度ではないでしょう。」

「……！そ、そう、よね……！私は、ちょっと油断して、疲れちゃっただけで…」

「で、殲滅したのは誰だ。」

「……わ、わたしよ、当然！私は、女神よ！？」

「ユニの武器に斬撃ができるものがあるとは思えない。それにあれの装甲をバッサリ切るような筋力もないだろう。お前が倒せたのは精々1、2体だろう。」

「……」

「……」

「……ブレイヴ・ザ・ハード。って名乗っていたわ。」

「ブレイヴ……。あいつが…。」

「知って、いるの……？」

「多少な。……ユニ。何か言われたか？」

「…私を、フェイク・ザ・ハードって、呼んでいたわ。」

「……だろうな。なら、話すしかないだろうな。」

私は、ユニにほとんどのことを話した。

ジャッジ・ザ・ハードのこと。ハンシンのこと。マジェコンヌのこと。

……私が知る限りのこと。

「マジェコンヌの配下、四天王の半身……。私みたいな、女神がスパイみたいな存在だったなんてね……。」
「私もそう思っていたさ。まぁ、私も徐々に慣れてきたんだけどな。ジャッジの奴の影響だとは思っているが。」
「……私も、そんな感じになるの…？」
「さてね。デッドの名を持つ私が殺しを楽しむように、デスペアの名を持つがすとが希望を感じなくなるように。フェイクの名を持つユニも、恐らくは何か起こるんだろ。」
「……ごめん。少し、外の空気吸ってくる。」

ユニが出て行った部屋の中。
……。

私は、今思っているのはジャッジと出会い、殺し合い、真の自分になること。
……だったら、別のザ・ハードはどうするんだ?恐らく、味方ではあるのだろう。
なら私は、ユニに対して何をするべきなのか。
人間として殺すべきか。ザ・ハードとして味方するべきか……。
…人間には人生の分かれ目ってのが多くあるが、ここが私の人生の分かれ道か。

……どうしたもの、かね。

1－11（後書き）

～ザ・ハード情報局～
ジャッジ「ザハードジョウホウキョクー」
女神四人「ぱちぱちぱちぱち」
ジャッジ「……おい、トリック」
トリック「なんだねジャッジ。」
ジャッジ「あいつらに効果音をやらせるな、余計むなしくなる」
トリック「……次回はやめさせよう。」
ジャッジ「そんなわけで今回のザ・ハード情報局。感想なんて一人二人ぐらいしか来ないだろうけど緊　急　告　知だ。」
トリック「正直嫌な予感しかしない。幼女は絡むのか？」
ジャッジ「お前関係ねぇよ。今回の本編最後、【人間としてユニを殺すべきか】【ザ・ハードとしてユニに味方するべきか】の二つの選択肢がある。これをどうするべきか今作者は非常に悩んでいる。具体的に説明すると暴君ハバネロか激カラムーチョのどちらかの選択並だ。」
トリック「基準がわかりにくすぎるだろうに。いうなれば、女神候補生のあの活発な方と、大人しい方のどちらを（直接的な意味で）食べるかの悩みぐらい…」
ジャッジ「そっちもわかりずれぇよ！」

ジャッジ「っつうわけで、暫く感想制限を投げ捨てる。次話を書くまでに…感想、来るといいな…」
トリック「わかりにくい遠い目をするんじゃない。」
ジャッジ「ちなみに、作者的な正規ルートは前者、【人間として殺すべき】だ。こっちだと超ＢＡＤＥＮＤフラグが建つ。ＢＡＤＥＮＤが正規ルートって結構ありそうだよな。」
トリック「後者、【ザ・ハードとして味方するべき】の場合、ユニ

とがすとちゃんにフラグが建つ。出来ることならボクチンががすとちゃんにフラグを建ててぺろぺろ…」
ジャッジ「やっちまえ」

パープルハート「エクスブレイド」
グリーンハート「シレットスピアー」
ブラックハート「トルネレイドソード」
ホワイトハート「テートラシュラーク」

トリック「アッーーーーー！！！！！！！」

～この放送は、犯罪組織マジェコンヌの制作でお送りしました～

フロム「またこのオチだよ（失笑）」

1－12（前書き）

前回の感想が2：1だったのでユニルートになりましたードンドンパフパフー。

人間ルートと言ってくれた椿さんマジすいませんでした。

さて、ユニとラブラブさせながらダークにする方法を学ばなきゃな……。

1―12

「……」

ユニがいない部屋。短期間でどうにも奴は私の頭の中に居ついているようだ。
私の頭には色んなのが居つくなぁ、ったく。

「……デッド・ザ・ハード…」

ふと、自分の名を呟く。少し前まで頑なに否定していたというのに、何故ここまで違和感がなくなってしまったのだろうか。
デッド、死。死を冠する人間。
……私は、人間のはずだ。
だが、私はザ・ハードになってしまった。人間が、人間でなくなってしまった。
私は、女神に籠絡されたグズ共を人間とは認めていなかったのだが、まさか私自身が人間でなくなるとは。
ハッ、全く笑い話にもならない。

……ユニ。ブラックシスター。フェイク・ザ・ハード。
女神候補生としての、女神としての、ザ・ハードとしての名前。
…私は、ザ・ハードになってしまった。人間ではない。

人間を救うのはいつだって人間だ。人間ではなくなった私に、人間は救えない。
なら、ザ・ハードになった私は、何ができる。死の名の通り、殺すだけか。

……ああ、そうだ。殺すだけだ。殺すことで、何ができる。
一を捨て、二を救う。十を捨てて、百を救う。
……ダメだ。やめやめ。私に世界をどうするだとか見知らぬ人を助けるだとか正義感溢れる漫画のヒーローは不似合だ。私は殺し屋。そこはどうしたって変わらない。

殺し屋ができること。ネプギアならば、殺さなくてもできる道はある、とでもいうんだろう。正統派優等生なんてそんなものだ。だとしたら、ユニ。癪だが、あいつに流れを任せるのもいいかもしれない。それに、私はあいつに雇われているわけだ。
【ユニの師匠及び世話】が依頼内容なら、あいつのメンタルケアも仕事の内か。あーやだやだ。そういうの苦手なんだよね。

起き上がり、備え付けの洗面台で軽く顔を洗う。
ルウィーの気候上、どうしても寒く、冷たい。
だが、頭は冷えた。
何時だって必要なのは冷静さ。冷静さを失えば、待つのは死だけ。
……生き残るのは私と、ユニと、がすとだ。ド畜生のロボット共。

～視点【フロム】→【ユニ】～

さっきまで、フロムがいた展望台。
先ほど、私は意識を取り戻して身体ならし程度に歩いていたら、フロムを見つけた。誰か、大きな帽子をかぶった女の子と話していた。
……その内容は、私が聞くべきことじゃなかったのかもしれない。

あの子の名は、デスペア・ザ・ハード。
フロムは、デッド・ザ・ハード。

そして私は、フェイク・ザ・ハード。
あの時はザ・ハードなんて何なのか知らなかった。だから、フロムと同じザ・ハードなんてって、少しだけ嬉しく思ったりもしていた。

フロムが部屋に戻った後、時間を見計らって部屋に戻り、フロムと話した。

ザ・ハード。マジェコンヌ。ハンシン。

女神が敵対する犯罪組織マジェコンヌ。その四天王と言うべき存在の、半身。それが、フロムたち。そして、私。

そんな話を聞いて動転した私は、部屋を出、走り続けた。ただ、認めたくなかったんだ。
女神候補生の私が、お姉ちゃんの妹の私が。知らずの内にマジェコンヌのスパイになっていたなんて。

……。
寒い。ラステイションの気候は結構安定、どちらかと言えば若干暖かい。
それとは逆に雪地帯のルウィーだと、私の服はどうにも合わない。
…今更かもね。
今までは一切気にしていなかったけど、こうして落ち込むと余計に寒く感じる。

私、どうすればいいんだろう。
私がマジェコンヌの手下だったのなら、お姉ちゃんにも、ケイにも顔向けができない。

……少し、街を歩こう。フロムには、悪いことしちゃったな。帰ったら、謝ろう。

街を歩くと、所々に見える子供たち。横目に、子供たちの集団が見える。
子供たちの手に持っているのは、マジェコン。女神が駆逐しなければならないもの。
…でも、私は、女神じゃなくてザ・ハード。
自然と、子供たちに話しかけていた。

「ねぇ、君たち。何してるの…？」
「おねえちゃん知らないのー？今日からマジェコンで新しいゲームが落とせるようになったんだよー！」
「そう……すごいわね…。」

無。今の私の感情を一文字であらわすとこうだろう。少し前の私や、ネプギアなら、即座に取り上げるだろうに、今の私は、肯定した。
マジェコンをだ。

「そうだ！おねえちゃん、マジェコン持ってないんでしょ？ひとつあげる！」
「いらないわよ。私、ゲームあまり持ってないの。」
「そっかー…。じゃあお姉ちゃん、またねー！」
「またねー！」
「ええ、またね……。」

…この世界、ゲイムギョウ界。マジェコンヌに侵略され、世界のシェアの８０％以上を奪い去って行った。

……そんな圧倒的勢力差を、どうして埋められるのだろうか。

「あ、あんた！こんなとこで何してんのよ！」
「…あなた達……。」
「どうし、たの……？」

ロムとラムだ。恐らく彼女らも散歩なのだろう。
……彼女らは、この世界に希望を持っているのだろうか。

「…別に。何でもないわよ。」

とっさにいつも通りの顔をして、二人に対応する。
……こんな私を、誰にも知られたくなかったから。

「ほら、もうすぐ夜でしょ！あんたたちももう帰ったら？教祖の人、心配してるかもよ？」
「あ、確かに！いこ、ロムちゃん！」
「う、うん……。」

二人に手を振り、また一人ぼっち。
…がすとなら、フロムなら。同じザ・ハードなら。
こんな最低な私を、認めてくれるかな……。

…帰ろう。かえって、フロムに謝ろう。

～視点【ユニ】→【フロム】～

おかしい。

何がおかしいか。ユニも、ロムもラムもいない。
この塔の中は割かし探し回った。展望台もな。
教祖にも聞いたが、「お散歩でしょう。遅くなる前に帰ってきなさいといつも言っていますし。すぐ帰ってきますよ。」と返された。
何ともお惚け教祖だ。

結局、教祖以外ロクに見つけられずに部屋に戻ってきてしまった。
……暗い部屋。部屋を常時暗くしておけば、夜目が効くようになり、視界の幅も広くなる。
言わば一種の訓練だ。

まぁ、今考えたのだがな。
くだらないことを考えながら、適当に食料をだし、貪る。
……チョコ味だ。不味い。

「フ、フロム……。ただいま…。」

数分後。ユニが帰って来たが、かなりおどおどしている。別人じゃないかこれ。

「おかえりなさいませ女神様。あと扉閉めろ」
「…もう、女神様なんて呼ばないでよ。ちゃんと名前で呼んで。」
「……どういう心境の変化…とは聞かないけど。世間体と言うものを考えてほしいね。」
「そんなの、私と貴女にはどうでもいいでしょ!?私も女神じゃなくなって、あなたも人間じゃなくなったのよ!」
「そうだな。…私たちは、ザ・ハードのハンシンだ。」
「なら、そうやって、余所余所しくしないでよ……もうネプギアと、仲直りなんてできやしない、ケイと軽口をたたきあうこともできない、お姉ちゃんに、顔向けできない……!」

ユニが、泣いていた。
あれだけプライドが高そうにしていたユニが、私の前で情けなく泣いていた。
……私は、何も言えなかった。

「ねぇ、フロム…。ううん、デッド……。私たち、どうなっちゃうの……？」
「対応するザ・ハードと殺し合い、死ぬか、殺して【別の何か】になるか。」
「どちらにしろ、私たちが私たちでいられるのは短いのね…。」
「…ああ。」
「……デッド。」
「なんだ、フェイク」
「お願い…今、少しだけ泣かせて……。そうしたら、もう、私（ユニ）を捨てるから……。」

ユニが私の胸に抱き着き、泣いた。
私には、抱きしめることも、頭をなでることもできなかったけど、ただ黙ってユニの泣き声を聞きながら、窓越しに空を見ていた。
…自分（フロム）を、人間を捨てるっていうのは、私にもまだできていないのだろう。
そうすれば、今までの自分は全てなかったことになるのだから。

……私たちは、どうなってしまうのだろうか。

それはきっと、神でも知りえない。

～ｃｈａｐｔｅｒ　ｅｎｄ～

1－12（後書き）

～ザ・ハード情報局～
ジャッジ「おい。ｃｈａｐｔｅｒ1終わったぞ」
作者「いや、ノリで書き続けていたらいつのまにか…。」
ジャッジ「いつの間にかじゃねぇよ、ｃｈａｐｔｅｒ0と対して長さ変わらねぇじゃねぇかよ、話数に至っては一話しか違わねぇのかよ！」
作者「一話も多ければ十分だろ！」
ジャッジ「開き直んな！」
作者「さて、ユニルートに入ったことによりこれ以降ユニとイチャラブすることが多くあるかもしれません、が！まぁ暗いです。最近まど〇☆マギ〇に嵌ってねー。」
ジャッジ「おい、その言葉何回目だ」
作者「数えてない」
ジャッジ「【死の審判】」
作者「アッーーー！！！」

～この放送は、犯罪組織マジェコンヌの制作でお送りしました～

～次回予告～

突きつけられた現実。ザ・ハードのハンシン。
ユニ、フロム、がすと。
三人の未来は二つに一つ、殺されるか、殺すか。
これは、人間でも、女神でもいられない。ただハンシンという存在の彼女らの、円舞曲……。

次回、超次元ゲイムネプテューヌｍｋ2＋、ｃｈａｐｔｅｒ2。【

絶望奏でる彼の怨嗟】。

ユニ「もう、私にはあなたしかいないのよ…だから……。」

あなたは、信じられますか？

2ー0（前書き）

今回、深刻な地の文不足注意。
地の文より会話文の方が思いついてしまって…。表現力不足びくんびくん

2－0

「……。」

朝だ。いつの間にか寝ていたのだろうか。
今日は珍しく夢にジャッジが出てくることもなく、良い目覚め……

「ぅ…フロムぅ……」

じゃなかった。そうだ、こいつがいた。
恐らく女神の中で最もプライドとプレッシャーが強いであろうこいつが、受けた衝撃。
そんなものは私の知る余地はないのだが、まぁ今のこいつにとっては同族が最もほしい所なのだろう。
……ザ・ハードとして生きると決めてしまった以上、これに付き合うことになるんだろうなぁ…。今からでも憂鬱だ。

「おい、ユーニ。人の胸で泣きながら眠るんじゃねぇこちとら着替え少ないんだ」
「うぅ～……」

多少揺すってみるが、どうにも起きる気配がない。
…仕方ない。寒さは我慢しよう。

ユニが掴んでいるジャケットを犠牲に、布団から抜け出す。
……寒っ。

替えの……ない。…ふむ、どうしたものか。流石にワンピース（っぽいの）だけだとどうにも寒い。本来ジャケット一着で何とかなる

ようなものでもないのだが意外になんとかなるのが私の（色々仕込める）ジャケットだ。
無いとどうにも寒い。むしろこれから布団に入りたくなるような寒さだ。朝の寒さって本当に怖い。

…やっぱジャケット着よう。流石にベッドから落とせば起きるだろう、こいつも。
ユニが掴んで離そうとしないジャケットを持ち、思いっきり引く。

「ひぃぇっあああああ！？」

……物凄く奇妙な悲鳴と共にユニが転げ落ちた。
とりあえず奪い取ったジャケットに腕を通す。あー、寒さにも暑さにも対応できるって本当素敵。

「あ、ったたた……。あ、あれ、フロム？」
「何だよド畜生。こちとら朝から微妙な思いして機嫌が若干悪いんだが」
「あ、えーっと……べ、別にいいじゃない！ほら、ね！？」
「疑問符付けんな、正直疑問持ってるのはこっちなんだから」

……おい待て、何でそこ照れる、何で顔を赤くする。

「とりあえず、これからやることを整理するぞ。」

「まず、私とユニの今までの目的。これはいわばネプギアのストーカーだな。」
「別にストーカーって言わなくてもいいんじゃないかな……」

「いいんだよわかりやすいから。そして、問題はその取り巻きだ。」
私の持つ端末から、画面が現れ、ネプギアやその連中の画像が出る。
「このアイエフ、コンパ、日本一とは私は過去に殺し合った仲でな。若干嫌われている。」
「殺し合ったのに嫌われているもないでしょ……。」
「傭兵なら殺し合った次の日に味方ってのもよくある話なんだよ。それで、次にネプギアが向かうと思われる場所は、リーンボックスだ。」
「リーンボックス…。確か今は女神が存在しない国なのよね。」
「何故か女神候補生が存在しないことで三年前の女神失踪から即行でマジェコンヌの属国化した。現在ではルウィーより治安が悪いと言われているな。」
「でも、女神がいなくても教祖がいるでしょ？」
「教祖が何と言おうが宗教には偶像ってのが必要なんだよ。消えた偶像なんて何の価値も存在しない。」
「そう考えると、プラネテューヌもよく持ちこたえたわよね。」
「それはおそらく教祖、イストワールの手腕だろうな。プラネテューヌの教祖イストワールについてはお前のほうが知っているだろう。」
「まぁ、それなりには……。」
「さて、リーンボックスへの定期便にＶＯＢは乗せれたっけか…たしか違法改造してるんだよなあれ」
「ああ、違法改造してたんだ……。あれ、フロム。着信来てるわよ。ケイから。」
「……絶妙なタイミングだな」
『やぁフロム。ユニもいるね。仕事はどうだい？』

「知らん。恐らく順調じゃねぇの？ネプギア連中にはひどく嫌われていてね。」
「おや、また君も嫌われることをしたのかい。」
「白々しい……」
『先ほど西沢ミナから連絡が来てね。ネプギアが今日ルウィーを発ったらしいんだ。依頼は成功だよ。』
「そうですかい……。報酬はいつもの口座に。」
『振り込んでおくよ。とにかく、帰還してほしい。次の依頼が待っているんでね。引き続きネプギア達のストーカーをしてもらうから。』
「……おい教祖、もしかして私らに盗聴器か何か仕掛けてないか？」
『流石にそんなことはしないさ。あまり余計に疑いをかけないでほしい。次の依頼に関しては帰還してからにしてほしい。』
「そうかい……。」

端末の通話を切り、一息。
…あー、私に安息の地はないのか、ない（自問自答）。
とりあえず立ち上がり、荷物を纏める。
次に行く場所はリーンボックス、ゲイムギョウ界の南国だ。火山もあるしな。
ユニも急いで手荷物を粒子化させている。羨ましい機能だよド畜生。

ルウィー教会、謁見の間。珍しくロムとラムもいる。

「つうわけで、私らも依頼は終わったんで帰ることになったんで。」
「そうですか…寂しくなりますね。」
「ネプギアちゃん……ユニちゃん、また会える…？」

「当然でしょ。女神候補生同士なんだから。」

いつの間にかユニとロムは仲良くなっていたようだ。
しかしまぁ、あんだけ泣いて、絶望していたのにここまで立ち直るとは……。
フェイク（偽り）……ああ、そういうことか。

「それで、次にどこにいるかとかは…？」
「ま、ネプギアのストーカーが仕事なんだからリーンボックスだろうな。」
「リーンボックス……。」
「じゃあそういうことで。行くぞユニ。」
「はーい。またね、ロム、ラム。」
「ばいばーい！」
「ばいばい……。」

ユニがロムとラムに手を振るのを横目に、教会を出る。
恐らくまた来ることになるんだろうが、この雪景色も今は見納め。
教会前に置いてあるＶＯＢを起動させ、ユニを載せる。

……。
「おいユニ」
「…何？」
「……いいや、後で聞く。つかまってろ」
「うん…。」

ユニが自分に抱き着くのを感じ、ＶＯＢのアクセルをかける。
騒音一歩手前の音と共に、一気に走り出す。
ＶＯＢで大体……どれぐらいだっけか。まぁいい。速度第一で走って行こう。

はい、とーちゃく。
こういう移動って何かあればＶＯＢの武器も使えるんだけど、出ないんだよね、ほんと。バイクに対してはモンスターも驚くのだろうか。
いつもの駐輪場にＶＯＢを止め、近場のエレベーターで上層部に上がる。
数日ぶりのラスティションだが、ルウィーのイメージカラーが白に対してラスティションのイメージカラーが黒だからか、妙に視界が黒ばかりだ。
ルウィーに着いた時もこんな反応してたような、私。

エレベータの金網越しの海も久々に見る。
…そんな感傷に浸りたいのだが、その障害がここに一つ。

「……」

そう、ユニだ。
ラスティションについてから、ユニが私の腕から離れようとしない。
ここはラスティションで、その女神候補生（）のユニが抱き着いている相手なんて、通常姉の女神ぐらいだろうに、これは若干視線が痛くなりそうだ。主に教祖の。

「……」

私の腕に抱き着いてはいるようだが、視線は私を…というかおそらく何も見ていないのだろう。目に光がない。

ザ・ハードに浸食された奴らはどうしてこう目に光がなくなるのだろうか。
もしかしたら私も目に光がなくなっていたりしているのだろうか。
むむむ……。

っと、最上階。教会もある最上層だ。本来なら私は縁がないはずだったのだがね。

「…おかえり。まず状況の説明をお願いできないかな？」
「寧ろ私が説明してほしいんだが、こいつの心境を」

教会に着いても、ユニは相変わらず目の光を失ったレイプ目で私の腕に抱き着いている。
ツンデレなんてなかった。

「ラスティションについてからこんな感じ。恐らく何言っても無駄だろう。」
「一体どんな方法でユニを落としたんだい？興味を抱くよ。」
「抱くな。頼むから、このまま依頼の話をしてくれ。」
「ふむ、じゃあ始めようか。」

「これからの君たちの仕事は、リーンボックスでのシェアの差し込みだ。以前ネプギアがラスティションのシェアを回復させていたとき、こっそりプラネテューヌのシェアを差し込まれていてね。どうやらルウィーでも同様の出来事が起こっているようだ。なかなかやってくれるよ。」
「それで、先に取っておくと？」

「そう。リーンボックスのシェアを軽く落としておくために、移動の際、船にこれを仕掛けてほしい。」

そういって教祖が私に箱のようなものを手渡す。

リーンボックスのシェアを落とす、移動、箱……つまり…

「そう、爆薬だ。あの定期船はラステイションとリーンボックスの協議でできたものなんだけど、それをリーンボックス側の不手際と見せかけて事故を起こすんだ。できればそれなりに人数は犠牲にしてほしいね。昼の便に爆発するように朝の便に乗り、そうだね…降りるときに1時間でセットしておいてほしい。その便にラステイションの重役は乗らないように手配しておいてあるから、犠牲になるのは一般人だ。」

「…ハッ、またド畜生のような依頼をしてくれる。人の命を何だと思っているんだか。」

「傭兵の君が言うのかい?傭兵の君にとっては金は命より重いのではないかな?」

「……完敗だ。あんたに口では勝てる気がしない。」

「光栄だね。じゃあ、頼んだよ。これからすぐの便だ。運が良ければネプギアにも会えるかもね。」

「…それだけは勘弁願いたいね、ストーカーが見つかったら洒落にならない。」

「そうかい。」

爆弾をしまって、席を立つ。結局ユニは一切喋らず私の腕に抱き着いたまま。何があった…とは言えないよなぁ。

色々と混乱しかけている頭のまま、私たちは教会を後にした。

2－0（後書き）

～ザ・ハード情報局～

ジャッジ「さて、ｃｈａｐｔｅｒ2いわばリーンボックス編だ。」

トリック「本来ならば未だ登場したことあるのはジャッジのみだな。」

ジャッジ「そういえば、今回にあった依頼、どこかで聞いたことあるような…」

トリック「詳しくはアーマードコア3をやってみてほしい。マジェコンで落としてもいいぞ！」

ジャッジ「俺はどっちでもいいけどな」

トリック「しかし、あのタイプのゲームは本当に幼女がいないから困る…」

ジャッジ「あの世界観やシステムでどう幼女を絡ませるんだボケ」

トリック「言っておくが！幼女は全面的に認めるがロリババァだけは認めんぞ！見た目幼女でもババァだからな！」

ジャッジ「基準がわからねぇよ……。さて、今回のザ・ハード情報局だが…何を説明するか若干ネタ不足だ。」

トリック「意外に早かったな。」

ジャッジ「前々回あたりから情報局というよりただの楽屋裏みたいな雰囲気だったしな」

トリック「一度質問を募集していたが、あれはどうなった？」

ジャッジ「一回に付き感想は1～2個しかつかないのにそんな質問が来ると思うか？」

トリック「すまなかった」

ジャッジ「さて、まぁ次回までには時間稼ぎの説明ネタも考えておくかな……。」

トリック「では、今回はここまで。撮影終わったら幼女ぺろぺろしに行こう…」

ジャッジ「そういうことは放送終わってからほざけ」

～この放送は犯罪組織マジェコンヌの制作でお送りしました～

フロム「今回オチもなく終わったな……。」

ｃｈａｐｔｅｒ2のメイン人物、というかハンシンの三人について（前書き）

今回のメイン人物は登場人物というより、本当に中心人物を抜粋。
まぁフロム・ユニ・がすとだけなんだけどね。

chapter2のメイン人物、というかハンシンの三人について

フロム（デッド・ザ・ハード）
殺し屋の半身。その性質は殺戮。

つまりはいつもの主人公。
最近ユニにデレデレになられ若干困惑しながらも徐々にデレ始めている。
人間を救うのはいつだって人間、の持論は今も持っているようでもう自分には人間は救えないと逆に開き直っている部分も。
今まで以上に残酷になるかもしれない。大体ジャッジの所為。

使用（予定）武器
基本的にグレネードライフルが変形したもの。弾薬は別途に持っている。
どんな変形だよ、と感じたらヴァンキッシュで検索してみよう。あれフロム作品じゃないけど。

グレネードライフル：いつものグレネード。通常・スモークの二種類の弾頭が存在する。
レールガン：ダイトウリョウ愛用の強力レールガン。多分コインよりは強い。
ミサイルランチャー：四発装填と十六発装填の二つが存在する。
火炎放射・冷凍ガス放射器：別に一機で両方吐けるわけではなく、別個の物。まぁどちらも変形でるのだが。
月光（レーザーブレード）：鋼鉄だろうとなんだろうと焼き切る高出力レーザーブレード。隠し玉として使えるように小型化しすぎた結果数十秒しか展開できなくなった。本当に奥の手用。
ＮＩＯＨ（パイルバンカー）：グレネード直撃も効かないザ・ハー

ドの装甲も貫くほどの超火力超低射程の超浪漫武器。殴ると同時に使えば多分必中。使うたびに右手の甲が火傷する。

ＮＥＷ！
フロムキャノン：最近ラスティションで開発されている兵器使用に特化したある粒子をチャージ、濃縮してぶっぱなす代物。人体や植物に大きな害をもたらす。

ユニ（フェイク・ザ・ハード）
銃撃の半身。その性質は虚勢。

ザ・ハードのハンシンという現実を突きつけられ若干精神が崩壊しているため、情緒が不安定気味。
フロムに対してはデレデレを超えて依存しかけているが、他人には元の気丈な様子。
フェイク（偽り）の名の通りである。

使用（予定）武器
武器を素粒子化して持ち運んでいる。弾薬はエネルギー弾なので充填を怠らなければ弾切れは基本的に起こらないそうな。

ハンドガン（デザートイーグル）：本来なら反動がヤバい拳銃。ガン＝〇タの如く使いこなせるように修行した時期もあったらしい。
アサルトライフル：本来なら一丁を両手で持つものだが、両手に一丁ずつという離れ業でよく使われる。反動は何とかなっているようだが照準はブレまくり。下手な鉄砲数撃ちゃあたる。
ガトリングガン：六本バレルの殲滅用機関銃。流石に反動が強く走ったり跳びながらは撃てないらしい。

ショットガン：近距離用散弾銃。これも両手に一丁ずつで乱射する。散弾なだけあって意外と当たる。

スナイパーライフル：遠距離用狙撃銃。ユニはもともと狙撃の才能がある（フロム談）らしく、命中精度は高い。問題はユニがやりたがらないこと。

ビームライフル：戦艦の主砲並の出力があるらしいライフル銃。近～中距離ようだが速度・威力は折り紙つき。連射能力は高くない。

がすと（デスペア・ザ・ハード）
創造の半身。その性質は絶望。

故郷を追われ、すべてに絶望しきった少女。常に目の光がなく、達観しているように話す。
自らに幸せをくれるというザ・ハードを探し、ネプギアについていくことにしたようだ。
座右の銘は「奇跡も魔法もないんですの。」

使用（予定）武器
その場で武器（道具）をつくりだして攻撃する。
調合には２０秒ほどの隙ができるが、同じ道具ならば一気に複数作ることも可能。

テラフラム：傍から見れば十尺玉。火力を濃縮しているため、ヤバい威力を誇る。
ラングレヘルン：ぶつければ即座に凍りつくほど冷たい爆弾。どうやってがすとが握っているかは不明。
爆雷針：これが刺さると晴れだろうが屋内だろうが問答無用で雷が

落ちてくる。雷の威力は本当にヤバいから注意。
アル＝トネリコ：ある塔を模して作られたという超危険な爆弾。１００階建てぐらいならこれ一つで木端微塵に吹き飛ぶだろう。
がすとの武器はまだあるかも？

chapter2のメイン人物、というかハンシンの三人について（後書き）

若干魔女っぽい説明が出ている？気にしたら負けだよ。割とあってるし。

今回三人だけだけど、この三人が主役だとわかってくれれば幸いです。割と本気で。

2－1（前書き）

……なんだろう。最近ユニのキャラがわからなくなってきたような。情緒不安定になったというか…純粋にキャラがわからなくなったような……こまけぇことはいいんだ（ｒｙ

2―1

「船が出られないだぁ？」

リーンボックスやプラネテューヌに続く船が集まるラステイション最下層の港。

現在、リーンボックス行きの定期船が全線欠航という異常事態が起きているらしい。

「はい。現在リーンボックスで定期船の故障が相次いでいる、と情報が入っていまして。事態の確認、収束まで定期船は全線欠航になっています。」

「先を越されたか……ネプギアもおそらくはまだ行ってはいないだろう。ＶＯＢで先回りするか。」

とりあえずユニを連れて駐輪場でＶＯＢを拾い、港まで軽く走る。

海が太陽光を反射してやたら眩しい。そして潮臭い。

「ねぇ、フロム…？これって、水上走行できるの……？」

「多少無茶ではある。水上走行に必要なのは本来浮力と推力だ。一応ホバーもついているがそこまで期待はできん。だから純粋に推力だけで走る。舌を噛まないように……ん？」

視界に、一隻の帆船が。というかゲイムギョウ界にあったんだな、あんな時代に投げ捨てられたような船……。

「ユニ。スナイパーライフル。誰が乗ってるかわかるか？」

「待って……。」

「…ネプギア。」
「ハァ!?」
「それに、ほかの三人と…デスペアもいる。」
「定期船がないからて自前で用意するか普通……?」
「……撃つ?」
「撃つな。とりあえず接近する。しっかりつかまってろ。」
「…うん。」

ユニがスナイパーライフルを消し、私に抱き着く。……ユニが振り落とされなければいいが。
ＶＯＢのホバー（気休め）を付け、アクセルを吹かして飛び出す。
少し着水したが、そのままアクセル全開で走り、水上数ｍｍを走る。
おお、意外にいけるもんだ。

そのまま速度を上げ、視界にある帆船に合わせ並走する。
どうやらネプギア連中もＶＯＢに気付いたようだ。

「あんた……!」
「よう、デスペアとプラネテューヌの女神候補生とその他大勢。定期船ではなく自前で船を使うなんて、お急ぎかい?」
「えっと、何の用でしょうか?」
「別に、ただ女神候補生様がそんなお急ぎとはね。」
「……用はそれだけ?」
「連れないこと言ってくれる。まぁ、私らは先回りさせてもらうよド畜生とも。じゃあデスペア、また。」
「……。」

遠目に大きな陸地が見えたため、アクセルを吹かして帆船を追い抜く。

「ユニ。少し飛ばすぞ。」
「……。」

ユニからの反応は抱き着く強さが強くなる程度だったが、返事として受け取り、全速力で走り出す。
水飛沫も置き去りにして、水上を走る。視界の端にいる海豚のような奴も……ん？

「キュェエェエエェ！！！」
「……こんな時にかァアアァアア！！！」

ぬいぐるみのような体色から、おそらくドリームドルフィンだろう。
こんなときに襲われるとは…。ＶＯＢの武装は横には対応してないんだよド畜生。

「ユニ、牽制射撃！」
「了解……！」

ユニが返事をした直後、後ろで発砲音が。
…あれ、でもユニ、私に抱き着いたまま……？

まぁ、それは後でいいだろう。あと数分で陸地だが、完全に敵視されたようだ。ぬいぐるみみたいな姿しやがって。

「ユニ、近づかれないように牽制。もしくはＶＯＢの前方に追い込め。それで片が付く。」
「了解…。」

ＶＯＢの主兵装、ビームマシンガンを起動し、そのままリーンボックスに向かって走る。

後ろでは銃撃戦が続いているようで、どうやら牽制を選んだようだ。
徐々にドリームドルフィンの声が遠ざかる。巻いたかな？

っと、ちょうどリーンボックスの陸地が見えた。

「歯食いしばれユニ、着陸する！」
軽いウイリーと同時にアクセル全開。軽く跳び上がって陸地に乗り上げる。
あーあ、潮だらけだド畜生。往復耐えられるのかねぇ。

手頃な場所にＶＯＢを止め、備え付のカバーをかける。多少のカムフラージュにはなるだろう。

「さて、あとはリーンボックスに向かうだけか。」
「……。」

降りると同時に、ユニがまた私の腕に抱き着く。
……はぁ、これに関しては諦めるしかないかな。

リーンボックスの方向は多少わかっているが、……まぁ、そのうち着くだろう。
そう考え、ユニと共に海岸線を歩き出した。

2－1（後書き）

～ザ・ハード情報局～
ネプテューヌ「ヒャッハー！生放送だー！」
フロム「馬鹿が増えた……おいジャッジ、こいつ洗脳したんじゃないのか」
ジャッジ「俺が知るか、トリックに聞け」
ネ「ふっふっふ…このねぷ子様に洗脳なんてものが効くと思ってくれては」
フ「……」（無言でレールガンを頭に押し付ける
ネ「すいません……後書き補正です…」
フ「というわけで、たびたび後書き補正でこいつらの洗脳が解けるが、まぁ本編に影響は出ないから大丈夫だろう！きっと！」
ジ「適当だなおい……。」
ネ「えーっと、今回の解説は、私たち女神についてだよーん！」
フ（ウゼェ……）

ネ「今、私たちは三年前のギョウカイ墓場侵攻時にマジェコンヌに敗北。ずっと縛られてたんだよねー。まぁ、その上洗脳なんてされちゃったんだけど。」
フ「本人に解説されると何かシュールだな……。」
ネ「実は、作者自身もずっと謎に思っていることがあるんだよね。」
フ「と言うと？」
ネ「何で三年間もずっと縛られてたのに女神化解けてないんだろ。短くないとはいえそれなりに稼働制限時間ってのはあるんだけどね。」
フ「ゲーム本編とイベントの補正だろ」
ネ「メメタァ！」
フ「おいジャッジ、女神チェンジできねぇのか。」

ジ「しても、次アレだぞ？」

ノワール「……（チラッ」

フ「ああ、アレが来るならこいつのままでいいや」

ノ「……（がーん」

ネ「およよ、フロムたんノワールが嫌いだったの？」

フ「…過去にいろいろあった。つかこれ後書きの漫才コーナーで話すようなことじゃないからな、ほんとに。本編のシリアスな場面で話すようなことだからな」

ジ「ほんとにな……。どうでもいいが作者の順位では白女神（ブラン）＞ムラサキ（ネプテューヌ）≧黒い奴（ノワール）≧緑の奴（ベール）だ。ゲイムギョウ界大選挙でも一切戸惑わずに白いのに入れてたしな。」

ネ「ブランがこの放送来るのってノワール考えると次々回だよね。……次回のフロムたんに嫌な予感しかしないけど」

フ「十年来のこの恨みはらさでおくべきか・・・・・」

ネ「なんかヤバいこと言いだしてるし…こ、今回はここまで！」

ジ「つかザ・ハード情報局だよなここ、デッドならまだしもなんで女神がいるんだ」

フ・ネ「「今更！？」」

～この放送は、犯罪組織マジェコンヌの制作でお送りしました～

ユニ「私たちも出ることになるのかしら…」

がすと「だとしたら、めがみ様ときょうえんはかんべんですの。まぶしすぎてがすとがかすむですの。」

フロム「こいつも女神嫌いだったんだ……」

2－2（前書き）

みんつぶのサブイベみたいなことをやりたくても、ネプギアＰＴ加入が未だ未定……。ゼロは私に何も教えてはくれない……。

2―2

「うわぁ……」
「……。」

なんたらの緑の大地、リーンボックス。私も度々行くのだがどうしてもこのよくわからない形の建物は理解し難い。わけがわからないよ。

港の方向を見ると、先ほどの帆船がかすかに見えた。どうやらネプギア達も到着しているようだ。
……そうだ、一応教祖に連絡しておくか。

『やぁ、フロ……惚気なら切るよ。僕も暇じゃないんだ。』
「嫌味だろ、ゼッタイ嫌味だろオイ」
『冗談だよ。君がそんな周りに自慢するタイプとは思えないからね。だがユニを落としたのは事実だろう？』
「ウゼェ……いいから本題だ。ラステイション～リーンボックス間の定期船が全部止まってるらしいが、どういうことだ。」
『さて。それは僕にもわかっていないんだ。リーンボックスでも何が起こったかわかっていない。恐らくマジェコンヌだろう。爆薬は取っておいてくれ。先払い報酬にしておくよ。』
「へいへい。やることはネプギアのストーカーね。」
『ああそうそう。一つ注意があるんだ。先ほど君たちやネプギアが行く旨をリーンボックスの教祖、箱崎チカに伝えようと思ったんだが…どうやら不在のようなんだ。教祖が教会を開けるというのはよっぽどのことがないかぎりありえない。女神ベールに相当ご執心の彼女とはいえ、何かあったかもしれないよ。気を付けてほしい。』

「…了解。」

「教祖が不在、か……。面倒事にならなければいいが…無理だろうな。」

「……。」

「…おいユニ、いい加減立ち直れ。ネプギア達と出くわす可能性もあるんだ。」

「そうね…ネプギアと、仲直りするチャンスだもんね……。」

あ、こいつ仲直りする気ないな。というか諦めてるな。豆腐メンタルな女神だ……。

それはともかく、教会に向かうことに。

リーンボックスの教祖、箱崎チカ。当然私も会ったことは無い。はぁ、ここ数日で三人の教祖に雇われることになるとは…嬉しいやら悲しいやら。

リーンボックスの街中を歩くなか。何か見たことのあるような奴が出てきた。うん、会いたくなかった。

「お早い到着だなネプギア。女神不在のリーンボックスにシェアを差し込みに来たか？」

「随分嫌味ったらしいこと言ってくれるじゃない。そういうあんたはユニを連れて何故リーンボックスに来たの？」

「何だってネプギアではなくあんたが返事するんだかね…。私はこいつの護衛だ。傭兵らしい任務だろ？」

「……何を企んでるの？」

「さて、何を企んでると思う？」

「それが思いつかないから聞いてるんだけど」

「ネプギアが私を雇ってくれるんなら、味方と判断して教えられるかもしれないけどなぁ。」
「…くっ」
「そこまで敵視する必要もなかろうに。それとも何か、お前たちはユニと敵対でもしてるのかね？」
「そんなわけないでしょ。……私は、ネプギアとねぷ子を守りたいだけよ」
「自らの手に余るとは思わないのかねぇ？」
「……」

「ユニちゃーん！」
「…何よ、ネプギア」
「私ね、私ね！ユニちゃんと仲直りしたかったんだよ！」
「……そう。」

ネプギアとユニも何やら話しているようだ。
……なんだこの感じは。

「ねーユニちゃーん。」
「……」
「ユーニーちゃーん！」
「何よ……」
「えっと、私と仲直りしてほしいなー、なんて……。」
「別に、どうでもいいわよ。」
「あ、えっと、じゃあ、仲直りしてくれるんだ！やったー！」

「子供かおい。」

「ねぷ子の例を考えると、どうにも言い返せないわ……」
「それで。あんたらはこれからどうするつもり？シェアを回復するのは楽だろうけど厳しいだろうね。」
「どっちよ……！ネプギア！」
「あ、はーい。」

アイエフがネプギアを呼び、何やらひそひそ話を始めだした。人の前でやるなそんなこと。

「…フロム、だったわね。」
「なんだい？私を雇うとでも？」
「……雇う気はないけど、少しついてきてほしいのよ。」
「ほう？それは私に得のある話かな？」
「教祖に会うのだから、得になるとは思うけど。」
「ほう、教祖に……。ん？待て。リーンボックスは女神どころか教祖も不在と聞いたぞ？教祖の居場所でも知ってるのか？」
「へ？チカさんなら、教会にいましたよ？」
「……ふむ。聞き出すか。ユニ、行くぞ」
「…了解」

「え、ちょ！？」
「ま、待ってよユニちゃーん！」

ネプギアとアイエフの制止を投げ捨て、教会に向かう。
これは、何やら嫌な予感がするな…。

「ちーっすフロム屋でーっす。」

教会の扉をいつもの如く蹴り開け、ずかずかと中に入る。
そこには、長身の女性。恐らくこいつが教祖だろう。

「なっ！こんな時に……な、何の御用でしょうか？」

……おい、何だこの溢れる偽物臭は。

「何の御用とは、ケイの奴も随分杜撰な連絡をしてくれたものだ。箱崎チカに連絡しておくと言っていたのに。」
「あ、ああ、そう！ケイさんから、も、もちろん聞いていますよ。」

（ユニ、銃を貸せ）
（……はい。）

「ケイから聞いているのでしょう？なら早く情報をもらいたいものだが。」
「あ、はい、えーっと、ちょっと待っててくださいね。」
「急いでほしいね。ネプギアもあまりノロマではないだろうから。」
「な、何故そこでネプギア…さんの名前が出るのでしょうか…？」
「ケイはどこまで適当な説明をしたんだか。私の依頼はネプギアのストーカーだぞ？ネプギアにそんなバレルわけにはいかないだろうに。」
「あ、えぇーっと……。」
「さて。そういえばおかしいな。何故あんたはケイから連絡を受けているのかね？」
「……へ？」
「先ほど、ケイから連絡があってね。箱崎チカと連絡が取れなかった。と言っていたよ。」
「あ、えー……」

「連絡が取れなかったのに、何故私の話に合わせるように話をしていたのだろうね？……おい、【箱崎チカ】。私の名を言ってみろ。」

ユニから渡されたショットガンを向け、【箱崎チカ】に聞く。

「ぐぬぬ……！チッ！」

「煙幕……。」

突然、教祖が何かの玉を叩き付ける。それと同時に白い煙が立ち上がり、視界が封じられる。

……。だが、先ほどの髪のデカい影が見え、それに向けショットガンを数発撃ち込む。

「……逃げられたか。」

数回パスッ、という着弾音が聞こえたが、悲鳴は聞こえなかった。声は耐えたのだろうか。地味にタフな奴だ。

「……」

「さて、どうしたものか……。まぁ、ネプギアに手柄をやるのも癪だし、偶には私が解決しますかね……。」

ユニにショットガンを返し、教会を後にする。

ふむ…どこもかしこも面倒くさいことになっている。

ここはひとつ、マジェコンヌの奴に協力を取り付けてみるか。ついでにこの問題も解決して金も貰おう。

2－2（後書き）

～ザ・ハード情報局～
ノワール「ザ・ハード情報」
フロム「チェンジで。」
ノ「はやっ！？せめて言いきらせなさいよ！？」
ジャッジ「肩身がせめぇ……」
フ「喧しい、女神の中で唯一女神化で逆に幼くなる奴が」
ノ「それ何も悪くないわよね！？ネプテューヌやブランよりかはマシでしょ！？」
フ「白いのは元からあんなだろうが」
ノ「ううう…本編で女神嫌いの理由が開かされるまで私ずっとこんな扱い……？」
フ「理由明かされてもそんな扱いだろうな。ジャッジ、フェイクを呼んでくれ」
ジ「俺は小間使いじゃねぇんだぜデッドォ……」
フ「でも素直に呼びに行くお前は嫌いじゃない」

ユニ「はぁ、来たわよ……」
がすと「きょうせいとびいりさんかとはずいぶんな扱いですの。」
フ「うっせぇうっせぇ。ザ・ハード情報局なんだから本来ザ・ハードがいるべきだろ、コレじゃなくて」
ノ「コレ扱いなんだ……。てかそんなこと言うなら前回言いなさいよ！ネプテューヌの方が邪魔でしょこれ！？」
フ「そこは認める。だが私のトラウマ補正というものがある、異常だ。」
ユ「あー……お姉ちゃん、どんまい。」
が「弱者は投げ捨てるものですの。しかたないですの。」

ノ「ユニまで……。とりあえず、ザ・ハード情報局、始めるわよ……。テーマは【武器】。」

フ「私もあまり人のことは言えないが、女神共はどっから武器を出してるんだ?」

ユ「恐らく、全員素粒子変換してると思うわ。できる量には個人差も大きいと思う。ダントツは私よ。」

ノ「収容量としては、ユニ＞ネプテューヌ＞ブラン＞ネプギア＞私＞ベール＞ロム&ラムかしら。」

ユニ「私が一番使う武器多いからね…。本来なら一種類なんだけど、フロムに影響うけてこんな感じに……。」

ノ「ネプテューヌも刀を二本出して滅多切りとかやってたわね。」

が「それ以降は基本的に武器一個分しか収容できないですの?」

ノ「そういうわけじゃないわ。私もこんな感じの剣だから、それなりに出して投げつける、って戦い方もできるわ。エネルギー消費が半端じゃないからそうできないんだけど。」

フ「ふーん……。っと、珍しく情報局らしいこととしたな。今回はここまでだ。」

ノ「次回以降来てもいいわよね!?」

フ「ユニ次第だな。」

ノ「ユニ!」

ユ「フロムがいいなら。」

フ「じゃあ無理だな。では、また次回。」

~この放送は、犯罪組織マジェコンヌの制作でお送りしました~

ノ「そんなぁ~……。」

女神三人「「「……。」」」（肩ポン

（2ー3＋おまけ）ーたくさん（前書き）

今回書ききった直後に戻るボタン的な要因で書いたのがすべて消え、心が折れたので内容をなくなった気力のまま書いたので全体的に内容が半分ぐらいに薄くなっております。許して。あの書き終わった後消えた時の喪失感とか絶望感とかヤバいの。色々と。三時間が消えたの。三時間の結果。

（2－3＋おまけ）－たくさん

「さて、どうしたものか……。」

教会を出ても、先ほどの人影はなかった。意外に逃げ足が速い。

さて、手掛かりもなしにどうやって探せばいいか……。

…おや、ネプギア達だ。私たちを追ってきたのか？

「み、見つけたわ…！」

「どうやら私の予感は当たっていたようだ。教祖は偽物。今さっき逃げてった。」

「偽物……やっぱり！」

「あんたらと敵対したくはないんだけど、私はあの偽物にちょっとした用がある。ま、そこで待ってな。」

「そうもいかないわよ。」

「教会にいたのが偽物のチカさんなら、どこかに本物のチカさんがいるはずです！探さないと！」

どうやら、あっちも引く気はないようだ。あー頑固者って嫌だねほんと。

「……じゃあ、ここで一つ提案だ。共闘しない？」

「共闘……？」

「雇うってわけじゃない。ちょっと共同戦線でも張らないか、とね。」

「はい、もちろん！」

「ちょ、ネプギア！？決断早すぎない！？こいつ敵よ！」
「何時まで引きずってるんだよ」
「でも、ユニちゃんが認めるひとなんですから、きっといい人ですよ！」
「そんな単純な……コンパもなんか言ってやりなさいよ。」
「あいちゃん。ぎあちゃんを信じてあげてくださいです。」
「コンパまで……うぅぅ～……わかったわよ。」
「交渉成立。まぁ、少しの間よろしく。」
「よろしくお願いします！」
「はぁ……。」

「……ねぇ。デスペアと…あのスーツの子。どこいったの？」
「あれ？そういえば、日本一とがすとがいないわね。」
「日本一さーん、がすとちゃーん？」

……デスペアが行方不明？あいつがそんなはぐれるような奴とは思えないが…。

「あーもう、どこ行ったのよあいつら…！ネプギア、コンパ！今すぐ探すわよ！」
「は、はい！」
「りょーかいです～！」

「あーあ、行っちゃった。」

ネプギアじゃなくてアイエフが仕切ってるんだな……と無駄な思考はこれぐらいにして、
ネプギア達が視界から消えてから、私は適当に歩き出す。情報収集なら人の多いあっちが適任だろう。

そういえば、ユニが抱き着いてこない。後ろからついてきてはいるようだが……。まぁ、いいか。

～おまけ　テイ○ズスキット的な会話集～

【今までなにを？（ネプギア・ユニ）】

「そういえば、ユニちゃんはいままで何してたの？」

「何……って、ずっとフロムの傍にいたけど。」

「そうなんだー……。今度、フロムさんのことも教えてほしいなっ♪」

「…機会があればね。ほらネプギア、行くわよ。」

「あ、待ってよユニちゃーん！！」

「……言えるわけ、ないじゃない」

【ムカツクあいつ　（アイエフ・ネプギア・フロム・コンパ）】

「あ～…もう！」

「アイエフさん、不機嫌ですね……。」

「あいちゃん、何があったでしょうか……」

「あんにゃろー、いつもいつも人の邪魔ばっかして…あーイラツク！」

「過度なストレスは体に悪いぜー？カルシウム取れカルシウム。」

「あんたがストレスの原因でしょうが！」

「酷い言われようだ。いつ邪魔をしたんだか。」

「そんなの決まってるでしょうがー！」

「…フロムさんだったみたいですね。」
「もう少しすれば、あいちゃんもわかってくれるです。」
「だといいのですけど……。」

【女神嫌い1　（ネプギア・フロム・ユニ）】
「お姉ちゃん、大丈夫かな……。」
「……」
「おや、姉の話題に乗らないのか。」
「判ってて言ってるわよね」
「勿論。」
「…あの、フロムさん。」
「ん？」
「フロムさんって、女神が嫌い、って前言っていましたよね…。どうしてなんですか……？」
「……そうさねぇ。しいて言えば、口が手より長いから、かな？」
「…？」
「女神ノワールも、どうして手が短かったようで……。私みたいな奴を生み出してしまったわけだ。っと、おしゃべりが過ぎたな。先に行くぞ。」
「ま、待ってよ、フロム……。」

「どういう、ことなんだろ……？」

（2－3＋おまけ）－たくさん（後書き）

～ザ・ハード情報局～
ブラン「ザ・ハード情報局。」
フロム「結局四女神全員やんのか……？」
ジャッジ「知らねぇよ。」
ブ「大丈夫、ネプテューヌやノワールの二の轍は踏まない。」
フ「さいですか……。」
ブ「じゃあ、今回のザ・ハード情報局。テーマ【ザ・ハード浸食】。」

フ「本編で私やユニの性格が安定しない理由だ。デッド・フェイク・デスペアとそれぞれのザ・ハードの本質に徐々に浸食されているわけだ。」
ジ「浸食度は結構まちまちだな現在（2－3時点）だとデッド：50％　フェイク30％　デスペア：75％ってところか。」
フ「デスペアはザ・ハード浸食を喜んでいる節もあるからな。浸食が速いんだろう。では今回はここまで。一回書いたのをもう一回書くって心労がマッハ」
ジ「まぁ、言ってやるな……。」

～この放送は、ザ・ハード情報局の提供でお送りしました～

ブ「そういえば、ロムとラムは…」
フ「トリックに食われた」
ブ「何ィ！？」
フ「嘘だよ。」
ブ「て、っめぇ・・・殴られてぇか！」
フ「戦いたいならジャッジとやってろ」

ブ「ぐぬぬぬぬ……」

２－４（前書き）

今回、あの伝説の変態武器登場。

あとハンシン三人のザ・ハード浸食１００％の妄想が止まらないんだがどうすればいいんだろうか。

2－4

デスペア達を探すアイエフ達。
それについていく私とユニ。いつのまにか町を離れ、草原地帯を進んでいた。
……って、何で!?

「日本一とがすと、それだけじゃなくてネプギアとコンパにも発信機をつけておいてあるわ。その結果、南の火山地帯にいることがわかったの。」
「用意周到だなおい……。」
「は、発信機!?あいちゃんはわたしが迷子さんになると思っていたですかぁ～!?」
「今までコンパが迷子になった数、教えてあげようか?」
「あ、あぅぅ～……」

「漫才はそれぐらいにしておけ。囲まれたぞ。」

周りをザっと見ると何もいないように見えるが、草に擬態したモンスターが周囲３６０。に存在している。
まぁ、リーンボックスの環境を投げ捨てるようなまねをするならばあっさりかたずけることはできるのだが…。

「さて、どうする?」
「行く方向は南よ。突っ切るしかないでしょ!」
「オーライ。全員、１０秒稼げ。私が道を開く」

グレネードを変形、全体的に刺々禍々しいキャノン砲を出す。

命名、フロムキャノン。コジマとかヤマダとかそんな感じの粒子を高濃度圧縮、打ち出す外道武器である。
というかこれ、どう考えても生物に撃つような武器ではないことは保障する。

チャージ開始、砲身の先端に緑色の若干綺麗な光が溜まりだす。
それと同時に全員が飛び出し。各個に時間を稼ぎ始めた。

10.
アイエフが飛び出した花っぽいモンスターを切り裂く。

9.
コンパがデカすぎる注射器をモンスターに差し込み、謎の液体を注入、爆発。

8.
ネプギアが早速女神化してＭＰＢＬ（だっけか）で花とついでに周りの木々を薙ぎ払う。

7.
ユニが大量の軽火器をだし、乱射している。なんか大変なことに。

6……

「ああもう！我慢できるか！０だァ！」
「えええぇえ！？」

引き金を引くと、緑色の光が前方に向け、照射される。
多大な反動に結構強く踏ん張りながら照射を続ける。

…数秒後、照射が収まり、強制的に変形、グレネードライフルに戻る。
目の前は森ごとモンスターが薙ぎ払われ、火山まで緑色の粒子溢れる道ができていた。

「…っけほ、けほ……。」

突然息苦しくなり、咳が出る。むむむ、やっぱり自分への影響もあるか……。

「ふ、フロム！大丈夫……！？」
「問題はない。急ぐぞ…！汚染度は低いはずだ……！」

火山地帯。火山なんて、街から遠目でしか見たことはなかったが…意外に使われていたような跡がある。

「けほっ……。」

先ほどから、妙に咳が出る。何かしらの影響は出ると思ったが、さすがに顕著だな…。

「ねぇフロム…。」
「……問題ない。アイエフ達は先行したか…。」
「火山深部、って言っていたわ。フレイムフェンリルには気を付けて、って。」

「オーライ…。」

視界が緑色のフィルターをかけられたようだが…まぁ、大丈夫、だろう。

重い足を上げ、歩き出す。何だ、頭、というか身体が重い。

「…ユニ、先に行け。私は役に立たなそうだ。」

「あ……りょ、了解…。」

ユニが先に走りさるのを見てから、周りの壁に寄りかかり、座る。

かなりの嘔吐感、不定感覚で出る咳、おそらく高熱…。

フロムキャノンに使われている粒子。環境と人間に多大な影響があるというが…チャージ半分でもこの影響か…。フルチャージできるのはいつの日か…。

…少し、寝るか……。

「……。」

「あんたは……」

２－４（後書き）

～ザ・ハード情報局～
ベール「ザ・ハード情報局。四女神最後の一人。グリーンハートこ
とベールですわ。」
フロム「本当に全員来やがった……。」
がすと「事実上死亡が確定しているくせに、無駄にでしゃばると死
期が近づくですの。」
フ「死亡確定してるのって……（台本確認）……ああ、そうだな」
ベール「さて、今回は【ザ・ハード浸食】パート２ですわ。」

フ「前回、私たち三人は徐々にザ・ハードの本質に浸食され、果て
にはジャッジやブレイヴ、トリックと完全に同類になる。具体的に
どうなるかは……絵師がいないから説明できない！すまん！」
べ「投げ捨てるのぉー！？」
フ「作者は本格的に絵ができないんだから仕方ない。メイン三人の
ザ・ハード浸食１００％に関しては何となく考え付いている。が。
登場なんて最悪しねぇ。」
が「それはなんのいみがあるんですの？」
フ「自己満足。」
が・べ（えぇぇ～…。）
フ「まぁ、魔女化と似たようなことになると考えてくれて構わない。
要望があれば詳しく（ボスモードで考えて）説明する回を設けよう。
本文でな！」

が「需要は皆無だとはわかりきってはいても、つい言ってしまう性
分みたいですの。」
べ「……では、今回はここまで。次回でお会いいたしましょう。」

～この放送は、犯罪組織マジェコンヌの制作でお送りしました～

フ「そういや、何だかんだで一番円滑に進んだな。」

が「そりゃあ、見かけ一番年増だからですの。」

べ「……（´・ω・`）」

2－5（前書き）

需要はなかったけど出る予定があんまりないザ・ハード浸食１００％の三人の説明を近々やる予定。やる意味？自己満足（ドヤァ

あ、あとありえないほど短いので注意。

2―5

～視点【ユニ】～

「っは、はぁ、はぁ……。」

私は、ただ只管火山内部を走る。
火山というだけの気温や湿度が徐々に私の体力を奪う。
なのに、何故だろう。息が切れる、と思っているのに、何かおかしい。
何か、自分がここにいないような、そんな感覚……。

……ううん、そんなの気にしてる場合じゃない。
とにかく、走り続ける。最奥へ。

数分、走っただろうか。周りに進む道も見当たらない。少し見渡すと、火口付近に、ネプギア達の姿が見えた。

咄嗟に銃を二挺出し、走りだす。
ネプギア達は何やら苦戦しているようだ。敵は前に見たことある下っ端っぽい奴。

……あれ、私、どっちの味方をすればいいんだろう…。
…決まってる。私は……私は……。

足の動きが止まり、立ち止まる。
……目の前で戦っている。のに。

自然と両腕が上がり、銃を構える。
二挺の銃が狙うその先に向け……引き金を引いた。

～視点【ユニ】→【フロム】～

……ここはどこだ。
屋内……リーンボックスか…？

「……あ、起きた……。ケイヴちゃん、おきたで～。」

…人の声。聞いたことのある声だ。

「目を覚ましたか。」
「っつぁ……。」

目の前には、長身赤髪の女性と、青髪の少女。
……。この青髪、どこかで見たような…。

「プラネテューヌとラステイションの女神候補生が南へ向かうのを見た、と連絡があってな。最初に見つけたのが君だ。」
「…ネプギアとユニのことか……。」
「そうだ。知っていることがあれば教えてほしい。」
「……その前に、自己紹介ぐらいしてもいいんじゃない？」
「…そうだな。私はケイヴ。」
「うちは、５ｐｂ．聞いたこと、あるかな？」
「５ｐｂ．……リーンボックスのカリスマアイドル歌手か。」
「知っててくれたんやな。感激やぁ～。」

「……で、ネプギア達について、だな…。」

言われるまま、私は簡単に事の詳細を話した。（まぁ、マジェコンヌの手先が教祖に化けていて逃げたのを追いかけた、ぐらいだがな。）

「教祖に化けていた、か……。だとしたら、あのことも納得だな…。」

「どのことかは知らんが、連中はどうするんだ。私に構ってばかりでいいのか？」

「何を強気な……。私が保護しなければ貴様は死んでいたぞ？見るからな高温、異常な動悸。持病というわけでもないのだろう？」

「…まぁ、そうだけどな。だが、今頃ユニ達がどうなっているかわからん。私はここで休ませてもらう。」

「…そうだな。行くぞ、５ｐｂ.」

「りょーかいやぁー。」

二人が去り、静かになった部屋。

「…けほっ。」

未だ、不定期に出る咳。

なんたら粒子の汚染とは恐ろしいものだ。もう一度、撃てるのだろうか……。

先知れぬ汚染の不安。そして、ザ・ハードへの畏怖。

……私は、今は何もできない。

そう自嘲しながら、静かに眠りについた。

2－5（後書き）

～ザ・ハード情報局～
フロム「女神共も出番終わったし、ようやくまともなザ・ハード情報局になったな…。」
ユニ「…まぁ、そうね。」
がすと「ここから先はザ・ハードの聖域ですの。人間、女神、その他諸々はかえりやがれですの。」
フロム「さて、対してネタもないしさっさと情報局始めるか。今回は【ザ・ハードの特殊能力】についてだ。」

ユニ「私たち三人の中では現時点では恐らくがすとしか使えないだろうけど、ザ・ハードにはそれぞれ特殊能力を持っているわ。」
フロム「私（デッド）は無条件即死（ゲーム的な意味ではない）、ユニは本物が存在しない、つまりは疑似不死身。デスペアは、いわば幻覚だな。相手を絶望させることに特化した、な。これは浸食率が増すごとに使えるようになる。ユニの場合、まぁ勝手になるわけだがな。」
ユニ「流石に、不死身ってのは堪えるわね……色々と…。」
がすと「まぁ、絶望を与えるのがしごとながす……私にはぴったりですの。」
フロム「ユニやがすとはともかく、私に至ってはおそらく浸食率１００％近くないと使えないだろうがな……。」
ユニ「浸食率が１００％になるってことは、魔女化すると同じように考えてもらっていいわ。…これ言ったっけ？」
フロム「まぁ、いいだろ。では、今回はここまで。また次回。」

～この放送は、犯罪組織マジェコンヌの制作でお送りしました～

フロム「今回、色々と地味な放送だったな。」
ユニ「ジャッジやトリックがいないからじゃない？」
がすと「まぁ、いちおうしゅじんこうはがすとたち三人だからいいんですの。」
フロム「…それでいいや。」

2－6（前書き）

ついに今回、原作キャラ死亡に。正直当初の予定にはなかったんだけど……。

私の予定は基本的に投げ捨てられるものだからなぁ……。

ここからガリガリ堕ちていく（予定）なので、色々注意？

2－6

～視点【がすと】～

「ね～がすと～。一体どこまで行く気～？女神様たちとはぐれちゃうよ～？」

「……。日本一は女神様ががすと達がいないと誰かにやられるほど貧弱だと思っているですの？」

「そういうわけじゃないけど…。」

今現在、私と日本一がいるのはリーンボックス中央部、ガルガン平原。

日本一は私の見立てでは最も頭が弱い。私の目的からすれば、一番簡単に洗脳、いや懐柔できるだろう。

万が一、できなかったとしても。絶望させ自殺でもさせられれば、仲間意識の強い女神達なら強く哀しみ、まぁ軽く絶望はできるだろう。

絶望が存在意義の身としては、これは一種の食事。食物連鎖とは実に恐ろしいものですの。

「ねー、がすとー。」

「……。日本一。少し、話があるですの。」

「話……？」

「そうですの。か弱い人間の悩みを聞き、解決するのもヒーローの役目とはよく言うですの。」

「…！そういうことなら任せて！このゲイムギョウ界のヒーロー日本一に、何でも話してちょうだい！」

「頼もしいですの。」

なんとも、単純バカだ。

「がすとは、人助けというものの意義がわからないんですの。」

「人助けの意義？そんなの、困っている人がいるからに決まってるじゃん！」

「……。なら、その人助けによって迷惑する人間がいるとすれば？」

「そんなのはただの悪役って言うんだよ。人助けをして嫌がるなんて、そういるわけない。ね？だから、人助けってのはいいことなの。」

「……わかりやすい説明。日本一は流石ですの。」

「へへーん。」

人助けをしていやがる……か。

人間に【助ける】ことが目的の奴なんてそうはいない。いるとするならばこの日本一みたいな単純な奴ぐらいだ。

大半の目的は、【助けることでの見返り】だ。その見返りを独り占めしているような奴がいるならば、当然挙ってつぶしにかかるだろう。過去そうして潰されたのが私。がすと。

悪く思わないでほしいですの、日本一。人間なんて、結局は絶望にまみれるのがお似合いなんですの。

「あ、日本一。あれを見るですの。」

「へ？」

私が指を指したのは、エレメントドラゴン。と、それに襲われているスライヌ。

割と普通にある、食物連鎖の光景だ。

「へ……危ない！助けないと！？」

「何を言っているですの、日本一？あんなのはにちじょうふうけいですの。」

「そんなこと言ってる場合じゃ！あの人、食べられちゃうよ！」

……。日本一には、スライヌがスライヌに見えてはいないみたいですの。

単純馬鹿には本当によく効く。

「ああもう、とにかく助けるよ！」

「まぁまぁ、そんなに焦ることないですの。」

走り出した日本一の足を払い、転ばせてその背中に座る。じたばたしているようだけど起き上がれない様子。随分と非力ですの。

スライヌが食べられる間、優雅にティータイム。

あ、この紅茶結構いけるですの。

「日本一も紅茶……。っと、食べられちゃったみたいですの。」

目前数十m先では、スライヌが無残に食いちぎられてしまったようだ。

まぁ、日本一の目にどう映っているかはわからないけどですの。

「あ、ぁあぁ……！がすと、何で、何で……！」

「がすとには日本一が何を言っているのかわからないですの。」

「何がよ！あんな、人が殺されたのよ！」

「……だから？」

「えっ……！？」

「人一人殺されたからなんだというですの？がすと達の人生は何一つ変わることはない。」
「ぅ……ぅぅぅぅぅぅぅう！」
「と、っとっと。」
突然日本一が力を入れ、私を振り落とす。危うく紅茶もこぼしかけたが、なんとか無事だった。
「がすと、あんた、あんたはぁあああぁああ！！！」
日本一が涙を流しながら、私に愛用のプリニーガンを向け、走り出す。
徐々に刃が迫るなか、私の思考は、レヘルンの如く冷静だった。
「……人殺し。」
「…ッ！」
目前で、黄色い刃が止まる。
悪役は成敗しても、ヒーローは【殺さない】。そんな時代遅れな考えが、日本一の中には存在するのだろうか。
「……。この世は、勧善懲悪とはいかないですの。それを来世で学ぶといいですの。」
今、日本一の目には何が映っているのやら。そんなこと私にはわからないけど、きっと身動きもできないようなものなのだろう。
取り出したテラフラムに火をつけ、日本一の足元に転がす。
どうやら、彼女にはそれも見えていないようだが。
「さようなら、悲劇のヒーロー。」

その場から立ち去った数秒後、激しい爆音が響いた。

～視点【がすと】→【ユニ】～

「ぁ……あ、ぁ……！」

本当に自分の声なのかと思うほど掠れた声。
私の撃った銃弾は、ネプギアを掠り、アイエフに、あたった。

「ユニ……ちゃん…？」

ネプギアの声が、遠くに聞こえる。
数mぐらいしかない距離が、ネプギアとの距離が、本当に、永く感じる。

「何で…ユニちゃん……」
「私は！わたし、は……。」
「コンパさん……アイエフさんの手当を……」
「わ、わかったです！あいちゃん、しっかりするです……！」

「どうして撃ったのか、言ってくれないの、ユニちゃん……」
「……。」

言えるわけ、なかった。私が、マジェコンヌの手先になっていたなんて。生まれた時から、運命付けられていたなんて。

「何の理由もなく、アイエフさんを、撃ったの…ユニちゃん……！」

強く怒りの籠った声。

ネプギアが光を纏い、女神化する。

その手に持つ剣を、ネプギアは二つ、持っていた。

「だというのなら…アイエフさんを…私も殺すというのなら……！」

「ハッ、隙有りィ！」

「私が……！私が…！」

突然ネプギアに後ろから跳びかかった下っ端。ネプギアに鉄パイプを振り下ろす。

ネプギアはそれをわかっていたように片手で受け、もう片手の武器で下っ端を吹き飛ばした。

「私が、ユニちゃんを殺してしまうかもしれないの…！」

「……。いっそ、そのまま斬りかかってくれれば……。いや、もう引けないか。」

もう、後には引けない。ネプギアに持っていた銃を向ける。

後戻りはできない。私は、女神（ユニ）を捨てた。私は、化物（フェイク・ザ・ハード）になってしまったんだ。

2－6（後書き）

～ザ・ハード情報局～
ジャッジ「……なんだかんだで、久々だよな、このメンツ」
ブレイヴ「うむ。」
トリック「いい加減マジックも出てきていいだろうに。前回の青いの５ｐｂ．のように大幅に変わっているのだろう、どうせ。」
ジャッジ「……」
ブレイヴ「……」
トリック「…なんだね、その目は」
ジャッジ「お前、ザ・ハードと幼女以外にも名前覚えられたんだな…。」
トリック「ぬぁんにお！ボクチンはザ・ハード１の戦略家だぞ！」
ブレイヴ「さて、彼らはそのまま遊ばせて私は仕事と行かせて頂く。今回の議題は、【ザ・ハードの能力２】だ。」

ジャッジ「前回、デッドたちがザ・ハードには各々特殊能力を持つ。って言っていたな。それは勿論俺たちにも存在する。それに最初からザ・ハードだからもちろん具現している。トリック」
トリック「では、順番に説明しよう。ジャッジ（審判）の特殊能力は、二極化だ。」
ジャッジ「白か黒か、赤か青か。それを完全に分ける、そして当てはめるのが俺の能力だ。生死の二極化ぐらいしか俺はやらないがな。」

トリック「次はブレイヴ（勇気）だ。ブレイヴの能力は、肉体状態の精神依存。つまり、ブレイヴの精神が砕けたりブレイヴ自身が負けと認めない限りブレイヴは不死身というわけだ。」

トリック「そしてこのボクチン、トリック（仕掛け）だ。能力は罠の自由設置。自由と言っても、使えるものは限られているし設置から発動まで時間もかかる。だが、さまざまな罠をその場で設置できるわけだ。その気になれば、幼女だって好きにペロペ「放送中ぐらいは……な？」…コホン、すまなかった。わかりにくい、と思ったら【影牢】や【刻命館】で検索してほしい。」

トリック「マジックはハンシン自体が不明なため今は伏せておく。さて、これぐらいだな。」

ジャッジ「途中で我を忘れなければ１００点だったのにな」

ブレイヴ「だが、あくまでも真面目にやるその意志。私は認めたい。」

トリック「褒められるならば幼女に褒められたいものだな。では、今回はここまでにしよう。」

～この放送は、犯罪組織マジェコンヌの制作で、お送りしました～

トリック「そういえば執筆中に携帯で感想欄見ていたが、質問が来ていたぞ」

ジャッジ「何ィ！？だったら次回にでもやるしかねぇな！」

ブレイヴ「なら何故途中でそれに関してのテーマにしなかったんだ？」

ジャッジ「続いてるんなら、終わらせたいだろ？」

トリック「なるほど……。」

2－7（前書き）

なんだか最近一話一話で全然進んでいない疑惑浮上中。
むむむ……。戦闘も基本手早く終わっちゃうし…。策略方面でガンバ・・・った結果がこれだもんなぁ……。

2―7

～視点【ユニ】～

私を襲う、二本の剣。

ネプギアの怒りに任せた剣は、そのほとんどが空を切り私に当たることはない。

私に当たりそうな剣には軽く銃弾をあて、反動で怯む間に距離を取る。

……何やってるんだろうな、私。

何で、今更戸惑ってるんだろう……。

「マルチプルビームランチャー、ツインバースト……！」

ネプギアが私に両手の剣を向ける。銃にもなんにもなる剣。…私も、ほしかったかも。

…初めて見た、ネプギアの【殺す気】の攻撃。

……私にも、元女神のプライドが残っていたのね。

「……。ネプギア。あとは、任せたわよ…。」

「…ぇ、ユニちゃ」

二つの光が、私に近づく。世界がスローモーションになる感覚。

不思議なもので、光が私まで届くまでがとても長く感じる。…本当に、不思議。

……今なら、言っても、いいかな。

「…ごめんね。フロム……。」

光が、私を包み込んだ。

～視点【ユニ】→【ケイヴ】～

「この静寂……遅かったと言うのか…。」

火山坑道入口。いつもなら土管やベーダー、そしてフレイムフェンリルでにぎわうここが、溶岩の音しか聞こえない。

５ｐｂ．と私だけでは力不足かもしれんが、応援を呼ぶ暇もない。

あの少女を助けて猶予も残されていないだろう。

「なぁ、ほんまにここに女神様たちが入ったん…？ここ、結構な危険地帯やで…？フレイムフェンリルでるし…。」

「そのフレイムフェンリルの気配や声もない。女神候補生達かもしれないし、また別の何かかもしれん。」

「うち、戦いは得意やないんやが……。」

「戦闘そのものはできずとも戦闘補助なら得意中の得意だろう、５ｐｂ．。……行くぞ。」

「ちょっと待った、ですの。」

「ッ！？」

「だ、誰！？」

背後から幼い子供の声。即座に振り向くと、白い耳付き帽子と、女神のプロセッサユニットのような装甲が身体のところどころについている…少女ともいえないような子供だった。

……だが、一切、気づかなかった。気配を、感じなかった…！

「がすとの名は、がすとって言うですの。旅の錬金術師をしているですの。」
「……すまんが、今我々は一刻を争う仕事中なのだ。話は後にできないか。」
「…女神様たちなら、心配はいらないですの。」
「ッ！？」

知っている…！？私たちの目的を……！？
なんだ、この子供は。私の胸を埋めるのは、不安と恐怖。
恐怖は捨てたつもりだったのだが紛れもなく私は目の前の少女に恐怖している。
言い表しようのない不安が、私を襲う。何だ、何なんだ、こいつは。

「……リーンボックスの教祖。確か箱崎チカと言ったですの。」
「……教祖様が、何だと言うのだ」
「ケイヴちゃん……あかんよ…この子、暗くて、深い……！」

「箱崎チカというのは……アレのことですの？」

「何……なっ……！」
「教祖…様・・・・・！」

少女、がすとが指差した先。その先、坑道の壁には、リーンボックスの教祖、箱崎チカが【磔】になっていた。
その下では、溶岩が待ち望んでいるかのようにボコボコと音を鳴らしている。
放っておけば、落ちる……！

「……。誰がやったかは知らないけど、あのままじゃあ危険じゃないですの？」

「そうだ……！彼女は人間だ、そもそもこんなところにいていい場所では……」
「……待って、ケイヴちゃん。」
「５ｐｂ．……？」

「…ねぇ、がすとちゃんって、言ったよね。」
「そうですの。がすとはがすとですの。よろしくですの。」
「ウチは５ｐｂ．。ねぇがすとちゃん。君、【何かを別の物に見せる】ことって、できる？」
「…何故、そう思うですの？」
「ちっと驚いたけど…。あの教祖様、人間の波長を出してないんや。そうやね、多分鉱石か何かやない？」
「……驚いたですの。まさか波長なんてもので見破られるとは思わなかったですの。」

がすとが指を鳴らすと、教祖様の姿が消え、鉱石になった。……幻覚、ということか。

「これを破るなんてかなりキレ者ですの。がすとではかないませんの。」
「…何が目的だ。誰の差し金だ！」

「誰の差し金でもありませんの。しいて言えば、時間稼ぎ。【死】が来るまでの時間稼ぎですの。」
「なんのことだ！」
「教えてあげないですの。じゃあ、がすとは失礼するですの。さようなら。」

がすとが私たちの後ろに何かを投げる。
それに反射して、後ろを向くと、がすとが走り去っていた。
幻覚の他に、超高速移動も持っているというのか…！？

「逃げられたか……。」
「……ううん。まだいるで。どこかに隠れてる。」
「…くッ。頼んだ、５ｐｂ．。私では幻覚は破れん。」
「任せときや……。」

５ｐｂ．がギターを取り出し、軽く音を出し始める。
……こんなところで、時間を使っている場合ではないというのに…
…！

～視点【ケイヴ】→【？？】～

……何故だろう。

「ユニ、ちゃん……！」
「あいちゃん、目を開けてです！あいちゃん……！」

…何故、こんな光景が見えるんだろう。

「どうして……」

私は……

「ユニちゃん…私……。」

もう、死んだはずなのに…。なんで…。

「何で……。」

私は、私とネプギアを見ているの……？

2－7（後書き）

～ザ・ハード情報局～
ジャッジ「祝、初質問」
トリック「いやっはぁー」
ブレイヴ「どんどんぱふぱふ」

？？？？「……」

ジャッジ「……おい、マジックがいるぞ」
トリック「本当だ……」
ブレイヴ「もしや……今日は破滅の日か…！？」
ジャッジ「おいマジかよ…俺まだ殺したりねぇぞ！」
トリック「ボクチンもまだ幼女ペロペロしたりない！」
ブレイヴ「武士道とは…死ぬ事と見つけたり…。」

マジック「……。」

ブレイヴ「……待て。何かおかしくないか？」
ジャッジ「そうか……？」
トリック「いや、待て……。」

ブ・ジ・ト「「「小さい……」」」

マジック「……。」↑全長５０ｃｍ

ブレイヴ「……気にせず始めよう」
ジャッジ「そうだな……今回は、始めての質問。【浸食の進行】についてだ。」

ジャッジ「まず、浸食はどうすれば進むか。基本的には、なれの果てに関連した事象に触れることで進む。デッドだと死、フェイクだと虚勢・嘘、デスペアだと絶望だな」

ブレイヴ「つまりブレイヴは殺す度に、フェイクは虚勢を張るたびに、デスペアは絶望を振りまくたび浸食が進む、というわけか。」

ジャッジ「ああ。こうすると浸食しやすさはデッドが一番早そうだが、実はそうでもない。ザ・ハードの能力や本人の精神で浸食が遅くなることも多い。」

トリック「デスペアは、最もザ・ハードを受け入れ、食事をするかのように周りを絶望させようとする。その結果もっとも浸食が速い。１話に１、２％は浸食が進んでいるだろう。」

ブレイヴ「フェイクはプレイドが高い、メンタルがあまり強くない、能力が自動発揮なため必要浸食率が低い、といった理由で浸食されやすいのだが…どうしても執着があるようで滞っているようだな。」

ジャッジ「問題はデッドだ。最も浸食が速そうに見えるが、実は一番遅い。ザ・ハードを受け入れてはいるが、人間の吟じは捨てていないようだ。それに、能力も強力だからな。浸食がどうしても遅れる。まぁ、あれだけ殺せばどうしても浸食率は上がるがな。」

マジック「……。（トリックの頭の上に乗る」

トリック「マジック…。人の頭の上に載らないでくれないか。幼女なら歓迎するがマジックは勘弁してくれ。」

マジック「……。（残念そうに降りる」

ジャッジ「さて……。まぁこれぐらいだな。１００％になった時、どうなるか…。いつか本編で語られるだろう。では今回はここまで。また質問があったらよろしく頼むぞ。」

ブレイヴ「感謝する。」
トリック「ご褒美にペロペロしてあげるぞぉ～」

ジ・ブ「「それは褒美じゃねぇ」ではない」

トリック「わかってはいたが言われると傷つくな……。」

～この放送は、犯罪組織マジェコンヌの制作でお送りしました～

トリック「じゃあ、このトリックん人形を」
ジャッジ「いらねぇよ」
トリック「マジックを」
ジ・ブ「「どうぞどうぞ」」

マジック「……！？」

2－8（前書き）

定期更新なんかなかったと言っておきながら最近毎日投稿している私。
毎日投稿だとアクセス解析したときの日ごとのグラフが全部長くてちょっとうれしい。数字は別にして。

2－8

～視点【コンパ】～
「……これで、よし。」
あいちゃんの手当を終え、一息。
出血も止まり一安心です。

「ユニちゃん！！」

ぎあちゃんの声に反応し振り向くと、ユニちゃんの体が徐々に光り出していました。
その光と共に、ユニちゃんの体も消えだし、ぎあちゃんが必死に呼びかけていました。

「ユニちゃん…！やだ、ユニちゃん……！」

ぎあちゃんは、徐々に消えるユニちゃんを抱きしめ、譫言のように名前を呼んでいました。
そして、ユニちゃんの体が完全に消え――

「ユニちゃ……嫌ぁあああぁあああああああああああああ！！！！！！！！！」

耳を劈く慟哭。
このときの私には、ぎあちゃんにかける言葉が見つからず。

私は、捕らわれた教祖様を助けに行きました。
…それが、間違いだとも知らずに。

～視点【コンパ】↓【がすと】～

坑道を進み、ネプギア達を探す。
あの青髪、５ｐｂ．。まさか幻覚が波長なんてもので破られるとは思わなかった。
まさか天敵を発見してしまうとは思わなかったですの。
……ネプギア、と…フェイク？
ネプギアに抱かれ、フェイクが徐々に光輝き…消えた。

「ユニちゃ……いやぁあぁぁあああぁぁあああぁぁあああああ！！！」

周囲に響きわかる叫び。
……ああ、いいことを思いついた、ですの。

「女神様。どうしたのですの？」
「ユニちゃんが……ユニちゃんが……！」
「ユニ……フェイクが死んだですの？」
「ユニちゃん……」
「よかったじゃないですの。」
「……ぇ？」
「本来、他の女神候補生なんてライバルみたいなもんですの。言わ

ば敵。ライバルが減ったなんて、思わぬ収穫ですの。」
「……ッ！」
「そもそも、何故そこまで苦しむのか理解に苦しむですの。ライバルが減って悲しむなんてバトルマニアですの？」
「ユニちゃんを……貶さないでぇ！」
「お、っと。ですの。」

突然剣を私に向かって振り上げる。そこまでユニのことが好きだったのですの？
まぁ、それなら利用もしやすいですの。

「ユニちゃんを……ぇ…？」
「何よ、ネプギア。私が何だって？」

…口調をまねるというのは実に難しいですの。
声は、あっちで勝手に変わるから楽でいいですの。

「ユニちゃん…！ユニちゃあああああん！」
「め…ネプギア！？な、何よ…。」
「私、ユニちゃんを殺しちゃったと思って……！よかったよ、ユニちゃぁぁあん……。」
「…そうよね。ネプギア、私を殺したのよね。」

ネプギアを軽く突放し、尻餅をついたネプギアを見降す。いやぁ気分がいいですの。

「ネプギア、私を殺したのよ？なのによかったって、何？また殺せるって意味？」
「そ、それは……ユニちゃんが、アイエフさんを……。」
「だから？ネプギアが私を殺したのには変わらないでしょう？」

「ぁ……ごめん、なさい…。」
「許すと、思ってる？」
「ごめんなさいごめんなさいごめんなさい

教祖様！」

チッ、５ｐｂ．……。

厄介なのに追いつかれたですの。幻覚が解けてしまった…。

「あ、あれ……？ユニちゃんじゃなくて…がすと、ちゃん…？」

「……。厄介なことをしてくれたですの。」

「いきなり波長が消えた思たら、やっぱり逃げてたみたいやね。がすとちゃん！もう逃げられへんで！」

「…確かに、これは分が悪いですの。ここは退散するですの。フェイク。隠れてないで出てくるですの。」

「うっ……。」

「ユニ……ちゃん…？」

やっぱり、隠れてたですの。がすとと同じように、徐々に服が装甲のようになっているユニ…いや、フェイク。

「ユニちゃん……だよね…？」

「……ええ。」

「ユニちゃん……ユニちゃあああん！」

「ッ！近寄らないで！」

抱き着こうとするネプギアに、銃を向け制す。まぁ、そうでしょうですの。

「ユニ…ちゃん……。」

「ごめんなさい…ネプギア…。私はもう、女神じゃなくなったのよ……。」

「ユニちゃん……。」

「さようなら、ネプギア……次、出会ったら…私を、本当に殺す気できなさい……。行きましょう、デスペア…。」
「合点承知、ですの。」

取り出した石とテラフラムを真上に投げ、フェイクがそれを撃ちぬいて爆発。それと同時に幻覚を発動し、破片全てをフェイクと私に見せる。

「しまった……！ケイヴちゃん！これだけあると波長がわからへん！逃げられるで！」
「構わん！教祖と女神候補生の保護を最優先だ！」

どうやら逃がしてくれるようですの。
お言葉に甘え、失礼するですの～。

2－8（後書き）

～ザ・ハード情報局～
マジック「……。」
ジャッジ「おい、何か言えよ」
トリック「仕方あるまい。マジックの体に発声機能はないのだ。」
ジャッジ「ないのかよ……。じゃあ何ができんだこのマジック」
トリック「話すこと以外、だ。前にボクチンが黒焦げにされただろう。戦闘能力もザ・ハード1だろう。」
ジャッジ「こんなテーブルの上に座ってエネルギー結晶貪ってる全長５０ｃｍのこいつがかぁ？」
トリック「事実だ。」
ジャッジ「あーやだやだ…。デッドといいこいつといい。何だって見た目弱そうなやつが強いんだか…。」
トリック「おや、ザ・ハード1の剛勇のジャッジ・ザ・ハードが臆するのか？」
ジャッジ「煽りのつもりか？ひっかかんねぇぞ。」
トリック「意外に頭も周るのだな、ジャッジ。見直したぞ。」
ジャッジ「てめぇに褒められてもうれしかぁねぇな」
トリック「幼女じゃないとダメか？」
ジャッジ「てめぇじゃねぇんだよ」

マジック「……。（鎌を構える」
ト・ジ「「すまんかった」」
マジック「……。（筆談開始」【こんかいのてーまはにんげんかんけいについて。】
ジャッジ「平仮名しか書けねぇのかよ！？」

トリック「この小説の人間関係だが……実に面倒くさい。まず、デッドの関係する恋愛感情の相図だが…。」

【フロム↑ユニ↑ネプギア（↑ロム↑ラム）↑ブラン】

トリック「という、果てしなく面倒くさい構図になっている。あと、右の括弧付とかのは……まぁ、シスコンの一線を超えた。とだけ言っておこう。」

ジャッジ「この手の話はついていけねぇ。マジックとトリック、任せたぜ」

マジック「……。」【わかった。】

トリック「先ほどの構図の矢印は全て恋愛感情だ。デッド本人は同性趣味はないと言っているだけあって誰にも向いていない。フェイクに対する感情はあれだろう。手のかかる妹か何かなのだろう。」

マジック「……。」【じじついもうとじゃん。のわーるの。】

トリック「事実手のかかる妹ではあるみたいではあるがな。これを一番ひっかきまわすのが、ボクチンのハンシン、デスペアだ。人間を絶望させられそうなものがあったら容赦なく引っ掻き回す。幻覚まで使ってな。今回のがいい例だ。過去にも恋仲を引き裂いたりとかしているらしい。」

マジック「……。」【まさにひとのかわをかぶったあくま。】

トリック「ザ・ハードだものな。では今回は此処までにしよう。コンパとアイエフ、ケイヴと５ｐｂ．はいろんな意味で相思相愛だ。それが恋愛感情かは別にして、な……。」

マジック「……。」【まさにげどう】

～この放送は、犯罪組織マジェコンヌの制作でお送りしました～

ブレイヴ「何故この議題で私が出んのだ！」

ジャッジ「出るネタがわかりきってるからだろ。」

2－9（前書き）

今回、ひじょーにもじかい注意。
今回からユニに違和感を感じたあなた。デッドにぶち殺されるかデスペアに蹂躙されるかの二択を選ぶ権利を差し上げましょう。

あと今回の話題だけど……
髪下ろしたユニの画像はよだと！？私がほしいわ！（切実）

2－9

～視点【がすと】～

「ん～……！シャバの空気はさいこーですのー♪」

「シャバって……。」

流石に火山から出ると、空気が美味しい。

今までそんな気分を味わったことなんて割となかったので新鮮な気分。

「さて。これから本格的にネプギア達と敵対することになってしまったですの。後戻りはできないですの～。」

「……わかってるわよ。そんなこと。もう、私はユニなんて名乗れないし……。だから…。」

ユニが自らのリボンを外し、髪を下ろす。

…随分と印象がかわるですの。

「…私は、フェイク・ザ・ハード。もう女神にはなれない。」

「……。意外に割り切りがいいですの。がすとの知っているユニはもうちょっと無駄にプライドが高いお嬢様（失笑）だったですの。」

「何でよ…。」

「まぁ、過去の話は今は気にしないですの。まずはデッドを探すですの。」

「そうね…。フロム、どこに言ったんだろ……。何もなければいいけど…。」

「いなくなった時点で十分何かあったですの。」

「……まぁそうよね。」

「とにかく探すですの。」
「ええ…。」

～視点【がすと】↓【フロム】～

……暇だ。
数十分ほど眠っただろうか。すっかり体調は回復したようで、視界もクリアだ。
…しかし、身体が動かない。
どうにも力もうと、どうにもこうにも動かない。
まるで金縛りだ。
……金縛りって、暇だなー。誰かこないかなー。

……ん。ドアがノックされている。
しかし私は声も出せないし動けない。だれかーきづいてー。

…どうやら音の主は去って行ったようだ。
……暇だ。

「はぁあぁあぁあぁあぁあ！」

うわーぁ。
窓からユニが飛び込んできた。窓蹴破ったなこいつ。

「やっと見つけたわ、フロム…！」
「全く。まさか窓を蹴破るなんて、人間の常識では計り知れない外道ですの。」
「発案したのあんたでしょ！？」

……こいつら、何がしたいんだろうか。

「と、とにかく！大丈夫……じゃないわよね。デスペア、フロムの荷物持てる？」

「問題ないですの。」

「えっと、フロムの服……。は、大丈夫よね。いい、フロム。これから私たちはプラネテューヌに行くことになったわ。それで、えーっと…動けない、わよね…。」

「さっきまでウザったいほど喜んでたくせになにを恥ずかしがってるですの。」

「い、今言わなくてもいいでしょ！？」

おい、お前ら。勝手に話し進めんな。何かやるんならさっさとしろ。まぁ、口も動かないんで呼吸するのが精いっぱいなんだけどね……。

「じゃ、じゃあ……。い、いくわよ、フロム。」

…。

何をするかと思えば、単に私を背負っただけだった。

ユニの身長は私より少し低いぐらいなので、若干足が引きずられている。気付け、ユニ。

「さ、行くわよデスペア！」

「りょーかーい。ですの♪」

ユニが私を背負って窓から飛び出し、屋根を飛び跳ねながら進んでいく。

よくデスペアもついてこれるな…。

……しかし、私の胸中にあるのは、疑問ばかり。
そう、ユニの雰囲気だ。
何か、言い表しようのない違和感を感じるのだが…金縛りにあっている身、どうにもならない。
ただ私は、このユニに謎の、不安を感じていた。

2－9（後書き）

～ザ・ハード情報局～

マジック「……。」【ざ・はーどじょうほうきょく。】

ジャッジ「……おい」

マジック「……。」【なに？】

ジャッジ「何でおれとお前の二人だけなんだよ」

マジック「……。」【とりっくもぶれいぶもそとにではらっているし、じゃっじはかもりできほんひまでしょ。】

ジャッジ「その墓守にさせたのもテメェだけどな…。」

マジック「……。」【だって、みはりひつようだもん。じゃっじいちばんまじめにふきょうしなさそうだし。】

ジャッジ「……チッ。ザ・ハード情報局はじめっぞ。今回は……すまん。ネタがない。」

マジック「……。」【えっ。】

ジャッジ「ネタがないんだ。その代り、今作者がボスモードの三人について一話分使って説明を挟む予定だ。ぶっちゃけ、今まで説明しちまってるし、何より本編で浸食１００％になって魔女化（仮）するのなんて一人ぐらいだしな。実際はやりたかっただけだろうが。」

マジック「……。」【だれだかわかるの？】

ジャッジ「この言葉がヒントだそうだ。」

【あたしって、ほんとバカ。】

マジック「……。」【もろばれじゃない？】

ジャッジ「俺もそう思う。では、短いが今回はここまでだ。また次回。」

～この放送は、犯罪組織マジェコンヌの制作でお送りしました～

マジック「……。」【それにしても、そのきょたいでいすにすわってこんなことするって、にあわない。】

ジャッジ「今更それに突っ込むんじゃねぇよ……。」

ハンシンたちの浸食１００％ボスモード状態。（挿絵？描いてくれる人なんていない）

デッド・ザ・ハード（フロム）
四人の中で最も攻撃力と防御力が高く、よく即死も撃ってくるエゲつない奴。
その代り状態異常にかかりやすく、麻痺らせでもすれば暫くは封印できるだろう。
防御力が高い上にＨＰもバカ高い（７０万）ので、麻痺らせた後放置してからフルボッコにしてやろう。

要注意技
０７－ｍｏｏｎｌｉｇｈｔ：至近距離で偶に撃ち込んでくる。これだけで十分即死級ダメージ。
ＮＩＯＨ：密着状態で偶に発動。２キャラ分貫通し、即死級ダメージ。
抗えぬ死：所謂即死。行動二回の度に撃ってくる。ただ物凄くデッドが遅いためその間に全員が三回ぐらい行動できる。

フェイク・ザ・ハード（ユニ）
四人の中で一番能力が地味。
しかし、最後に倒す必要がありそれまでは何度倒そうと【証明失敗】という技（？）でその場に復活する。
能力自体は通常ボスぐらい。というかニセブラックハート。
放ってかないといけないのだが放っておくと地味にウザい。しかも地味に状態異常耐性も持っている。本当に地味にウザったい奴である。

要注意技

存在の証明：戦闘開始時に発動。
証明失敗：フェイク以外のザ・ハードが残っているときにフェイクを倒すと発動。フェイクがその場で全回復し復活する。
証明成功：最後にフェイクを倒した際に発動。フェイクが消滅し、勝利となる。
ファイネストアーツ：全方位２キャラ程度の長さに只管軽火器を撃ち込む。近いほどダメージがデカい。

デスペア・ザ・ハード（がすと）
全状態異常を付与したり全能力を低下させたりと、とにかくいやらしい。
その上デスペア自身に回避５０％増加なんてものも付与されているため、テクニカルサポートでもしないかぎりまず当たらない。
当たればすぐ倒せる（ＨＰが３万）ので、真っ先に倒す必要がある。

要注意技
魔のエリキシル剤：単体に全状態異常を付与する。メーカー勢にウイルスしても仕方ないけどね。
絶望のチーズケーキ：単体の全能力を下げる。これと→の魔のエリキシル剤は当然のように連発してくる。
絶望を分けてあげるですの：魔のエリキシル剤と絶望のチーズケーキに加え、大ダメージまでしてくる。滅多に撃たないが、別に撃たれなくても魔のエリキシル剤で十分えげつない。

マーベル・ザ・ハード（？？？？？）
他のハンシンたちと違ってマント姿で登場。ところどころ紫色の光が出ている。
マーベル自体には大した攻撃能力はない。というか一切存在せず基

本的に何もしないが、誰かのＨＰが半分を切ると只管味方の回復と強化を行うある意味デスペア以上に鬱陶しい奴。こちらには幻覚の回避補正はないが、毎ターンＨＰが5割回復する。（まぁＨＰはデスペアと同じ3万なのですぐ落ちる）

要注意技

１の奇跡：単体のＨＰを３０％回復する。デスペアやフェイクならともかくデッドの回復をされるとウザい。

２の奇跡：単体の全能力を上昇させる。デスペアの絶望のチーズケーキと組み合わさるとまさに絶望。

３の奇跡：デスペア・デッドが倒れた際、一回だけ復活させる。が、既にマーベルが倒れている際は発動しない。

奇跡も魔法もあるんだよ：フェイクとマーベルだけが残った時、フェイクに対して使用する。まさに奇跡か魔法のように超強化される。

まぁ見ようと思わない限り見れない技である。

対策

理想としては貫通攻撃でマーベルとデスペアを撃破（同時かマーベルを先に撃破したい）。

戦闘開始時には距離があるのでその間に一人にテクニカルサポートなどを積んでおこう。

間違っても正攻法なんてやってはいけない。デスペアに状態異常や弱体化を巻かれフェイクに近接攻撃の邪魔をされマーベルに回復や強化されデッドに蹂躙されるだろう。ほぼ確実に。

幸いもっとも怖いデッドは遅い上に状態異常に弱いので麻痺安定。

一人に囮になってもらいマーベル→デスペアの順に急いで撃破。撃破に時間がかかったりマーベルとデスペアの間にデスペアのターンが来たりすればもう絶望しか見えない。

フェイクは地味だが無視できないぐらいのダメージをちょこちょこ撃ち込んでくるので、偶にかまってあげよう。瀕死ぐらいにしておけば後が楽。

また、この戦闘ではユニとがすとを参加させることができない（敵にいるため。ニセブラハとかと同じ扱いでいいんじゃないかって？こまけぇことはいいんだよ！）。

オススメＰＴとしてはネプテューヌ（サブネプギア）は必須。そしてテクニカルサポートにノワール。回復にコンパかロム。そして麻痺のベールかラムだろう。

というわけで、ネプテューヌ（サブネプギア）、ノワール、コンパｏｒロム、ベールｏｒラムがオススメ。

サブ効果の状態異常無効はデスペアに対して圧倒的なアドバンテージがあるため、あえてコンパをロムのサブにしたりベールをラムのサブにするのもあり。

ネプテューヌはネプギアの効果でステータスが下がらないので安心して積もう。

ハンシンたちの浸食１００％ボスモード状態。（挿絵？描いてくれる人なんていない）

……正直すまんかった。

2－10（前書き）

そういえば、リーンボックスって折角島国なのに観光船とかないのかな…。本編では観光なんてしてる暇なかっただけだと思いたい…ナァ。

2－10

「……。」

よし、身体も動く。
しかし未だに私はユニに背負われたままで、ユニとがすとはいまだ屋根伝いを飛び跳ねている。
一体どこに行くんだかな……。

「おいがすと。一体どこに行くんだ私たちは。」
「どこか、と言うと…。目標なプラネテューヌ。そのために船に乗るですの。勿論密航。」
「ほう、船に……おい待て、ＶＯＢはどうするんだあれはどう頑張っても二人乗りが限界だぞ？」
「……ああ、いいことを思いついたですの。」
「またロクでもないこと思いついたなこいつ……。」

がすとの考えた作戦はこうだ。
まず、がすとが事前にフェリーにこっそり入り込む。

そして私とユニとＶＯＢは普通にフェリーに乗り込む。
その後船長室、操舵室、機関室と順々に制圧（勿論皆殺し）し、最終的に船を完全に制圧。
そしてハイジャックを名乗り、そのままプラネテューヌに接岸する前にＶＯＢは脱出。がすとは幻覚を使ってこっそり逃げ出す。
証拠も完全に残らない完璧（失笑）な作戦だとがすとは言い放った。
馬鹿だろこいつ。

流石にグレネードとかは使えないよなぁ…船が沈んじゃあ何の意味もない。

「じゃあ、がすとは先に行くですの。手筈通りに行くですのー。」
「へいへい……。」
「……／／／」
「ユニ。このままＶＯＢの場所まで。」
「了解……／／／」

「お、っと。」

背負われた状態から降りるというのは意外と難しい。が、まぁ身体は動くようになった。体調もオールグリーンだ。

ＶＯＢのカバーを投げ捨て、起動させる。
…うん、さすがにカバーがあっても若干潮や砂は被っている。走っていれば直るかなー。

「ユニ、乗れ。」
「……。」
「さぁて、これから世紀の大犯罪だ。おお、こわいこわい。」
「フロム、私…。」
「言わなくていい。大体予想は付く。」
「フロム……。」
「私にとってはお前がユニだろうとフェイクだろうと関係はない。弟子か、雇い主か。まぁ相棒でもいいかもな。まだ実力不足だが。」
「…。」
「まぁ、同族意識の強いお前だ。私ら意外に頼る相手がいないんだ

ろ。なら頼れ。そして強くなれ。以上。」
「……うん。」
「いつ出航の奴かわからんから、発進するぞ。」
「……ええ！」

「大人二人とバイク一台。」
「はい、確かに。」

…意外に行けるんだな。違法改造していたはずだが。

まぁ、割とあっさり入れたのはいいことだ。出しやすそうな場所に置いておこう。
ＶＯＢから降り、階段を上がる。

おお、割と豪華だ。高い金支払っただけはある。
この豪華客船をハイジャックねぇ。がすとの奴もエゲツないことを考える。
さて、がすとはどこかなー、と。

「デッド。」
「ああ、デスペ……ア……何の冗談だド畜生」
「ちょっとした遊び心ですの。気を悪くしたなら後で晴らすですの。」
「チッ、悪趣味な奴。」
「……。」

私に声をかけたがすとは、何のつもりかノワールの姿を取っていた。

ああ、こうして密航していたわけか。
しかしノワールは行方不明中だろうに。何だ、ザル警備かおい。

「この船は所謂観光船ですの。リーンボックスを一周してここに戻ってくるですの。」
「…それで、いつベットするんだ？」
「そうですの……。出航から…1、2時間で賭けはじめるですの。勝てば大儲けですの。」
「……？」
「オーライ。…。じゃあそれぐらいまで軽く船内を回るか。」
「ですの。」
「ま、待ちなさいよ！」

船の仲は、部屋（どうやら私のところは二人部屋のようだ。がすると大丈夫か…？）、カジノ、展望室、食堂と観光船らしい設備がついている。
部屋に着くと、まぁそれなりの金を払っただけあってそれなりに豪華だ。まぁ二人部屋だけどな。ホテルとかによくある感じだ。

「はー……。疲れたー…。」
「フロム、あんた特に何もしてないでしょうに。」
「たしかにー…ですの。私はこのベッドを使うからもう一つをデッドとフェイクはもう一つのを使うですの。」
「ふぇっ！？」
「何でだよ…。普通一番デカい私が一つでユニとお前で一つだろうに。」
「そんな常識は投げ捨てるものですの。それにユニはまんざらでもないですの。」
「あ、ええっと、そのフロムがいいんなら、私は別に……」

「…まぁ、私は構わないけどな。」
「ほ、ほんと!?」
「急に機嫌よくなりやがったですの…。」

適当に寝転がる私に抱き着くユニ。なんだかんだで慣れてきたな…。

「ユニ、私は寝る。時間になったら起こせ。」
「りょー・・・かい……。」
「駄目だこりゃ…。がすと。」
「了解ですの。がすとは、もうちょっと探検するですの～♪」

「……眠い。さっきまで寝てたのにな……。」

突然の眠気。先ほどは冗談で言ったつもりだったのだが、本当に…
眠い……。
抱き着いていたユニを抱きしめてみると、意外に抱き心地がいい。
まぁ、いいか。そのままこのまま寝よう…。
おやすみ……。

２－１０（後書き）

～ザ・ハード情報局～

ジャッジ「結局前回のは何だったんだ？」

マジック「……。」【もうそうがむしゃくしゃしてやった。ほんとうにすまないとおもっている。だがわたしはあやまらないばいさくしゃ】

ジャッジ「はぁ……。暇だな。」

マジック「……。」【まったく。いいかげんだれかきてもいいとおもうんだけどね。ひまひまひまー。】

ジャッジ「俺だって墓守暇で他にこれぐらいしかやることねぇんだよ我儘言うんじゃねぇガキかテメェ。」

マジック「……。」【むー。あとでめがみたちであそんでくる。ほうそうこーどかんぜんあうとなすがたにしてやる。】

ジャッジ「待て、それは本気で待て。それで一番被害でるの俺だからなそれ」

マジック「……。」【べつにいいじゃん。わたしたちざはーどによくじょーなんてかんじょーないでしょ？】

ジャッジ「ああねぇよ、俺には殺人欲しかねぇ。だがよく考えろマジック、仮に奴らが乗り込んでくるとしてだ。それで最初に見るのがあれだぞ、放送コード完全アウトな姿の女神共とそれを見張る俺だぞ。どう考えても俺が被害食らうだろうが！」

マジック「……。」【そのはっそうはなかった。】

ジャッジ「やめろよ、ほんと……じゃあ、今回は番外編だ…相変わらずネタがないからな…。」

～メイン三人に聞いてみた。ｂｙリンダ～

ジャッジ「…何やらせてんだよマジック」
マジック「……。」【りんだってあたまもつよさもびみょーだけどしんこーしんはつよいからねーいろいろやらせてみたかった。】
ジャッジ「ひでぇ理由だ…。」

質問1：好きな人・嫌いな人は？
フロム「好きだろうと嫌いだろうと殺す時は殺すしな。気にしたことはない」
ユニ「す、好きなひとっ！？え、えーっと……そんなこと言えるわけないでしょー！」
がすと「絶望を認める人間が好きで、認めない人間が嫌いですの。嫌いな人間は絶望に叩き落すですの♪」

質問2・自分の半身元をどう思うか？
フロム「悔しいけど、あいつと私は同類なんだろう。認めたくなかったけど。」
ユニ「正直、私とブレイヴって正反対な気がするのよね。なんで半身なんだろ。」
がすと「幼女趣味がなくなればがすとと仲良くなれるですの。幼女趣味がなければ。」

質問3・いつかぶっ殺す！みたいな感情を持った相手はいる？
フロム「女神ノワール」
がすと「がすとを陥れた奴等ですの。」
ユニ「即答！？あ、えーっと…。わ、私はいないかなぁ！」

質問4・この中で現在一人は死ぬのが確定しています。誰だと思いますか？

フロム「ユニ」
がすと「ユニですの。」
ユニ「何で私なのよ……。どうせがすとじゃないの？ほら、因果応報って言葉あるし。」
がすと「どうせいい商売しても嫉妬で叩き落されるんだからどうしたって悪い結末は悪い結末ですの。」
フロム「妙に説得力があるな」

リンダ「今回はここまで、マジック様ー、何でこんなことやらせるんですｋ」

マジック「……。」【そこまでおもしろくなかった】
ジャッジ「哀れな奴だなおい…。じゃあザ・ハード情報局、また次回。」

～この放送は、犯罪組織マジェコンヌの制作でお送りしました～

ジャッジ「ネタがないんだがどうすればいいんだろうか」
マジック「……。」【かんそうこじき】
ジャッジ「お前ならそういうと思っていた」

２－１１（前書き）

私にしては、この小説続いてるよなぁ…。と思う今日この頃。そしてこの小説人気微妙だよなぁ…。とも思う今日この頃。まぁ終始支配ＥＮＤみたいなノリじゃあ人気も出ないか…。

2－11

～視点【がすと】～

さーて。出航までもう少し、数十分ぐらいあるですの。観光船のカジノは出航時に始まるため探検と言っても若干暇ではあるですの。

…とりあえずその辺の売店の飲み物を盗むですの。私にしてはやることが小さいですの。

……ふむ。探検するとは言ったものの一通り周ってしまってやることも対してないですの。

周りを見れば割と人もいる。まぁがすとほどの身長の子供はいないみたいだけど。

どうやって時間を潰そう……。

『これより、リーンボックス一周の旅、船が発船します。』

…あ、何だかんだしている間に出航したようだ。

時間は1、2時間ぐらいはあるんだからがっぽり稼ぐですのー。

えーっと…初期金額は５０００ｃｒｅｄｉｔ。換金もできたはずですの。終わるころにはきっとうはうはですのー♪

「ロイヤルストレートフラッシュ、ですの。」

私の能力、幻覚を使ってどうやってイカサマするか。一番簡単なのはポーカーだろう。

何のことはない、ファイブカードなりロイヤル（ｒｙなりに見せるだけでいい。その後すぐ切られるためイカサマはバレない。全てに対して見せるのは多少集中力がいるけど、まァ問題ないですの。

いやぁ、ボロいボロい。ですの♪

「イ、イカサマとは心外ですの。これでもがすとは真っ当な商売根性が自慢（だった）ですの。カードは確かにハート。そしてＡ，Ｊ，Ｑ，Ｋ，ついでにジョーカーですの。何か文句あるですの？」

「む、むぐぐぐ……。」

「どうでもいい言い訳とか聞く時間ないんですの。さっさとチップよこせですの。１０００＊５＊５００で２５０００００ですの。当然ダブルアップ。」

「……どうぞ。」

「７、ですの……。ハイ、ロー、ロー、ハイ、ハイですの。」

７、Ｊ、１０、２、３、Ｋ……。上出来ですの。

幻覚は使っていなかったけど意外になんとでもなるもんですの。がすとは強運ですの。

と、言うわけで…。

「２５０００００＊２＾５＝８０００００００ですの。ま、このぐらいにしてやるですの。」

軽く言い残し、チップを全て換金。
酷い札束ですの。闇取引のトランクケースの中みたいですの。
えっさほいさと引きずりながら、部屋に向かう。
重いですのー。ＶＯＢに積んでほしいですのー。

～視点【がすと】↓【フロム】～
……どれぐらい寝ていただろうか。一時間ぐらいか？
私の胸には相変わらずユニがすり寄ってきている。猫かお前。
さて。まぁ起きてがすとを探したいものではあるのだが…。
うん、ユニが邪魔だ。
世の男たちなら泣いて羨みそうなこの構図だが、何度も言うように私は同性趣味はない。はず。
しかし。さっきがすとに精神的攻撃を与えられていたユニだ。少しは休ませてやるのも…あれだ、現場指揮官のやることだ。
…言い訳みたいだな。随分と。

「ただいまー。ですの。」
「ああ、おかえりがすと。すまないが諸事情によって寝返りが打てないが理解してくれ。」
「リア充爆発しろ、ですの。」
「…ん？がすと、何引きずってるんだ？」
「トランクケースを借りたですの。カジノでがっぽがっぽしたですの。５０００ｃｒｅｄｉｔが８０００００００ｃｒｅｄｉｔになったですの。」
「うっわぁ、ひでぇ額だなおい。ってか私の金使っただろお前」
「まぁ全額あげるから許してほしいですの。あとでＶＯＢに積んで

おくですの。」
「あとでな。ユニの所為で動けん。」
「諸事情明かすのですの？」
「……しまった。」

むむむ、まぁどこからどう見てもユニが原因ではあるが…。

「イチャイチャするのは構わないけど見せつけるのは勘弁してほしいですの。幻覚で絶望してやろうかですの。」
「別に私はそんなつもりはないんだがな。」
「フェイクなんて名前の癖に隠す気がないからがすとは機嫌が悪いですの。」
「そんなこと言われてもねぇ…。」
「どうでもいいから起きるですのフェイク。もうすぐ時間ですの。パーティの始まりですの。」
「う、ううん……。」
「おいただでさえ船で揺れるのにこれ以上揺らすな、私が酔う」
「船上戦闘訓練ぐらいしておけですの。」
「揺れてるならまだいいけど揺れてるところでさらに揺らすなっつってんだよ」
「知ったこっちゃないですの。イチャイチャするのを見せられるがすとの身にもなりやがれですの。」
「ぅ〜……。」
「ああもう、髪乱れてんぞ。といてやっから櫛貸せ」

「……。これから大量殺人に続いてハイジャックまでする奴らのすることではないですの……。」
「まぁ、いいだろ。戦闘には浪漫とエレガントさと効率が必要だからな。」
「効率とその他二つは同居できないですの。」

「いいんだよ。」

……一応女神であるユニが何故この作戦に何も言わないのか。それが一つの疑問だった。

しかしもう後戻りはできない。これから行う世紀の大犯罪。私は殺すのが仕事だからな。精々楽しんでやろうじゃないか。そうだろう。ジャッジ？

2－11（後書き）

～ザ・ハード情報局～
マジック「……。」【ざはーどじょーほーきょくはっじまるよー】
ジャッジ「しかしまぁ、ついにメンツも固定されてきたな。」
マジック「……。」【ひまだもんねー。】
ジャッジ「さて、今回は質問が一つ、ちょっとした裏話が一つだ。質問から始めるぞ。」

マジック「……。」【しつもんは、ざ・はーどのはんしんがそのはんしんいがいにたおされたらどうなるか、ね。】
ジャッジ「言ってしまえば、何も起こらん。トドメをそのハンシンが刺さないと真の自分にはならない。」
マジック「……。」【へー。つまりときにははんしんをたすけないといけないわけ。】
ジャッジ「までデッドはそんなヤワじゃあねぇがな…トリックんとこのガキなんかはすぐ死にそうだが。」
マジック「……。」【まーべる・・・でばんまだなのかな……。】
ジャッジ「まぁ、結論としては何も起こらない。だから自らのハンシンは時には助けないといけないわけだな。ブレイヴなんかがいい例だろう。さて、ここからはちょっとした裏話だ。」

マジック「……。」【ちょっとまえ、ぼすもーどのめいんはんしんでなまえだけでてたね。まーべるざはーど。】
ジャッジ「さて、ここで問題だ。マジックのハンシン、マーベル・ザ・ハード。その正体を当てた奴は一日マジックペットの権利をやろう。」
マジック「……。」【えっ。】

ジャッジ「ああそうそう。もう一つ質問があったな。【下っ端はフロム・ユニ・がすとの三人がハンシンだと知っているのか】だ。確かお前の部下だったよな？」

マジック「……。」【まぁいいや。りんだのことだろうけど、たぶんはんしんのそんざいじたいしらないとおもうよ。おしえてないし。】

ジャッジ「ちょっと前ルウィーで汚染ディスク渡したっつってたよな？あの時に話したりしなかったのか？」

マジック「……。」【おせんでぃすくわたしたのどちらかといえばわれちゅーにだし。おしえてもとくになにもないしー。】

ジャッジ「…まぁ、そうだろうな。テメェのことだし。では今回はここまでだ。」

～この放送は、犯罪組織マジェコンヌの制作でお送りしました～

ジャッジ「マーベルの正体のヒントはボスモード説明の紫の光だ。紫って言えば、十分狭まれるよなぁ？」

マジック「……。」【べつにむらさきいろのひかりぐらいだれでもだせるとおもうけど。】

ジャッジ「いいんだよ。その辺は。」

2－12（前書き）

なんでこう重要な虐殺場面が適当に簡略化されるんだ！読者、お許しください！

……こう、戦闘は長続きしないものだし……。

どうしたものか。むむむむむ。

2－12

～視点【がすと】～
作戦を開始。デッドとフェイクは適当に任せ、私は船長を暗殺するですの。
えーっと、船長室は…あったですの。

「失礼するですの～。」
「なんだ、君は。ここは関係者以外「そんなことは関係ないですの。ほら、後ろを見るですの。」む……？な、っ……！？」
「……どうしたですの？がすとはこっちですの。」
「ひ、いいいいい…！」

突然、船長さんが怯えだす。とてもシュールですの。

「随分と弱い。じゃ、さよならですの。」

ナイフを取り出し、おびえて動かない船長さんの喉元に刺す。
返り血を気にせずそのまま喉をかきまわし、引き抜く。

うわ、がすとの一張羅が返り血で真っ赤ですの……。
痙攣する船長さんを蹴り倒し部屋を漁ることにする。

金目の物……。ないかなーですのー。

～視点【がすと】↓【フロム】～
「ったく。たった数人相手に意外に手間取ったな。」

「ごめんなさい……。」

私とユニの周りには脳天や心臓を撃ちぬかれた人間＊たくさん。
私も随分非情になったもんだな。何の感情も起きない。

「さて、操舵室は制圧した。フェイク、機関室を制圧しろ。私はこのまま広場を制圧する。」
「……了解」

「……」
「ぅ、ううぅ……。」
「何だ、まだ生き残りがいたのか。」

軽火器は…持ってない。
グレネードを変形、レールガンにしておく。

「何が……！」
「目的か？そうだな…。この船だ。それで証拠を残したくはないのでね。全員死んでもらうことになった。恨むなら…そうだね、守ってくれない女神でも恨むといい。」
「貴様…！」
「そうだね…。私もたまには神に祈ってみるか。」

引き金にゆっくりと手に掛ける。
……さよならだ。

「エイメン。」

～視点【フロム】↓【ユニ】～

……。私は、なんてことをしているんだろうか。

後悔なんて、あるわけないと思っていたのに。まだ、私は……。

「誰だ！」

「……マジェコンヌ、ザ・ハードが一人。フェイク・ザ・ハード。」

「マジェコンヌ……！一人で来るとは…！」

「……純銀マケドニウム加工水銀弾頭弾殻、全長３９ｃｍ重量１６ｋｇ１３ｍｍ爆裂徹甲弾専用銃……」

二挺の拳銃を出し、目の前の人たちに向ける。

今まで向けることすらためらっていたのに。

「【ジャッカル】。」

一気に走り出し、距離を詰めると同時に一発発砲。

一人、悲鳴を上げる暇もなく頭が吹き飛び、絶命した。

こんなところだから、ロクな武装もないんでしょうね。観光船、だもの。

「正直、私は殺したくなんかないけど……。ごめん、なさ」

言い切る直前。私の視界を鋼鉄が占めていた。

私の頭を貫通したもの、おそらく銃弾でしょう。

ゆっくりと私のからだが倒れるのを、私は【撃った人間たちの後ろから】見ていた。

とても、客観的に自分の死が見える。

……とても、気持ちが悪い。

「さようなら。」

撃って安心した様子の人たちに銃をあてがい、容赦なく、引き金を引く。

たった数十秒で三人、首なしの死体ができた。

……。私……最悪だよ…。

「フロム……。制圧、終わったわよ……。」

『そうか。こちらも今しがた終わる。』

『いやぁあぁぁあ！助けてえええええ！！』

『うるせぇよド畜生が！汚物は全員消毒だオルぁー！』

……フロムは、デッドとしても宿命を受け止めている。デスペアだってそう。

でも私は、女神のころを引きずってばかり……。ダメだなぁ、私……。

私も、デスペアやフロムみたいになるのかな…。なりたいのか、なりたくないのか……。どうなんだろう。

～視点【ユニ】↓【がすと】～

操舵室の制圧は…。お、終わってるですの。

さーて、進路をプラネテューヌに変更、っと。

無人のカジノから持ってきた大量の現金とか食料。ＶＯＢに詰め込めるだけ詰め込んだですの。脱出用意は完璧ですの。

……しかし、一つ解せないことがあるですの。
私、デッド、フェイク。ザ・ハードは四人…。つまりあと一人、ハンシンが存在するということになる。
これだけ私たちが活動しているというのだが…どこかに潜伏しているのだろうか…？
もしかして……。むむむ、どうしても推測の域を出ないですの。
手頃な椅子に座り、紅茶とチーズケーキで一服。一仕事の後のチーズケーキは極旨ですのー……。

デッドとフェイクを待ち、私はこのまま血生臭い操舵室でチーズケーキを頬張ることにした。

2－12（後書き）

～ザ・ハード情報局～

マジック「……。」【まぁ、そうだよね。】

ジャッジ「主語を入れろ」

マジック「……。」【まーべるのしょうたい、ねぷてゅーぬがいっぴょうといすとわーるがいっぴょう。まぁぷらねてゅーぬのこのふたりにしぼられるよね、ふつう。】

ジャッジ「予想はできていたがな。ああ、言っちまうとどっちかが正解だ。正解すると…なんだっけか？」

マジック「……。」【とりっくいちねんぶん。うちのとりっくはようじょをなめるんじゃなくてかじるすぐれもの。】

ジャッジ「優れているの意味がわからなくなってきたぞおい。てかお前一日分だと本当は」

マジック「……。」【すこしはだまされたっていいじゃん。】

ジャッジ「生憎俺らザ・ハードにそんな面倒くせぇ感情は設定されてねぇよ。」

マジック「……。」【じゃあいいや。こんかいのざはーどじょーほーきょくは、ふね。】

ジャッジ「基本的にリーンボックスと他国は船でつながっている。リーンボックス－ラステイション－プラネテューヌ－リーンボックスと三角状に航路が存在する。飛行船でも使えばよさそうだが、女神の半重力ユニットはいまだ公用＋実用化のめどが立っていないらしいな。立たれても困るんだが。」

マジック「……。」【ひこうせんがでてきたらぎょうかいはかばにたいぐんでこられそう。まぁみぜんいんがいればむそうはできそうだけど。】

ジャッジ「つまんねぇ殺しは勘弁だぜぇ？」
マジック「……。」【ぎじぷろせっさゆにっと】
ジャッジ「それいじょういけねぇ」
マジック「…！…！」【ぐあああああああああ】

～この放送は、犯罪組織マジェコンヌの制作でお送りしました～

マジック「……。」【ひどいめにあった・・・。】
ジャッジ「ざまぁ」

2－13（前書き）

今回、ｃｈａｐｔｅｒ2通称リーンボックス編1終了。

次、ｃｈａｐｔｅｒ3はネプギア視点に。今まで悪役側だったから微妙に暗くならなかったけど、ネプギア視点だと暗くなる…といいなぁ。

2―13

「デスペア。船内の制圧が終わったぞ。」
「意外に遅かったですの。私がチーズケーキ一つ食べ終わるまでには終わらせてほしかったですの。」

船の全てを制圧（勿論全員殺した）し、操舵室に戻った途端血生臭い死臭とデスペアの皮肉が飛んできた。
こいつこんなんで私らで一番頭が回るのが何かムカツク……。

「って、てめぇが殺したのなんて船長一人だろうが。私らは船室全部回ったんだぞド畜生」
「トップを最初に殺すのが最も効率的ですの。それに、虱潰しに探したと仮定して考えていても1分20秒遅かったですの。あと20分でプラネテューヌ領海ですの。」
「となると、脱出か。がすとお前はどうするんだ?」
「問題ないですの。唯一の生存者として一芝居うつですの。稀代の脚本家デスペア・ザ・ハードに任せるですの」
「脚本家に演技を期待しろっつの?」
「私は脚本・演出・美術・音響・演技何でもこなせるスーパー脚本家ですの。」
「あ、本業は脚本なんだ…。」

「じゃあ、これからVOBを起動して脱出してほしいですの。ハッチはこっちで開けるですの。」
「了解。行くぞユニ」
「…ええ。」

ユニを連れ船の下層、駐車層に向かう。

ＶＯＢはハッチに近い場所に止めてあるためハッチが脱出しやすい。
ナイス私。
……って、積載量がギリギリ…。どれだけ詰め込んだんだこん中に。
まぁ、そこは今はいいか。

「ユニ、乗れ。」
「……。」
「デスペア、ハッチ開け！」
『了解ですの～。』

船のハッチが開き、視界には青い海と青い空と遠目にリーンボックス。
アクセルを吹かし、ホバーを起動させて飛び出す。
そして着水、と、ちょ、意外に沈む、水は、水は不味いって！

～視点【フロム】↓【がすと】～
……。デッドたちは行ったみたいですの。
ハッチはそのままにして私は手頃な船室に行き、押し入れの中に入る。
調査が入れば、私は生き残りとして何の不自然もなく入国できるですの。
そして、データを漁ればすぐＶＯＢとデッドたちの存在も割れるですの。
デッドたちには悪いけど、これは一種の策略ですの。
悪く思わないでほしいですの、デッド。

さぁ、舞台は新たな場面に入るですの。恐らく私の見立てでは最後の一人はプラネテューヌにいる。まさか行方不明の女神だとは思え

ないけど……。
まぁ、あらゆる事態に対して視界を広め、最善の策を講じる。
それが私、デスペア・ザ・ハード。

世界の脚本は、私が書いてみせる。見ていやがれですの、女神。

～視点【がすと】→【ネプギア】～

目が覚めると、ベッドに横になっていました。

……とても、気分が悪い。
私がどうやってここにきたのかはわかりませんが、その前のことは覚えていました。
…ユニちゃんと、がすとちゃんが、裏切った。

ユニちゃんは、お姉ちゃんも、ノワールさんも助ける気がなかったんだ。マジェコンヌの一員になって、私を殺すつもりだったんだ……。

……私は、ユニちゃんのことが好きだったのかな。
お姉ちゃんはお姉ちゃんだし、コンパさんとアイエフさんはお姉ちゃんの友達で、私に対しては何か、見守るような目で見ていた。いーすんさんなんか、まるでお母さんのように私やお姉ちゃんを見ていたと感じていました。

私の、初めての友達だったのかもしれません。
友達みたいに一緒にいる時期は短かったけど、私は忘れることなんてできませんでした。

…でも、いなくなった。
私を、見下ろしていた。

……信じれば、裏切られるの…？

ふと、がすとちゃんの言葉が思い浮かんだ。

『女神様。信用というものは、迂闊にするものではないですの。あまり周りを疑わずにいると、いつか裏切られて痛い目を見る。いいですの？』

光の無い目で見つめられながら言われ、私は怖がっていた。そして、忘れようとしていた。
…そっか、そういうことだったんだ。

誰かを頼ったりして、楽をしようとするから、こうやって辛い思いをするんだ。
こんなに、辛い思いをするんなら、誰も信じることなんてない。
例えどれだけ辛い目に合おうと、今以上につらいことなんて存在しない。

もう、誰にも頼らない。
私一人で、お姉ちゃんを助けるんだ。

静かな部屋の中。
私は一人で、そう決意した。

～Ｃｈａｐｔｅｒ　Ｅｎｄ～

２－１３（後書き）

～次回予告～

少女は、優しすぎた。
彼女は周りの全てを信じ、全てを認めていた。

少女は、優しすぎたが故に、歪んでしまった。
彼女は周りの全てを疑い、全てを認めなくなってしまった。

少女はただ、進む。
愛する姉を、親友を、取り戻すために。

次回、超次元ゲイムネプテューヌｍｋ２＋。ｃｈａｐｔｅｒ３【君が遺した道標】。

信じられるのは、私だけ。

3－0（前書き）

ｃｈａｐｔｅｒ3は言わばネプギアの時代。
ヤンデレ化したネプギアがまど〇（ｒｙ　ばりに疑心暗鬼になって色々やって絶望するような予定。私の予定は基本的に投げ捨てられるものなので
気　に　す　る　な　！

あ、ずっとネプギア視点です。

3－0

……二度目の火山。
私は、この場所を忘れることはないでしょう。
私が、本当に始まった場所、になるのだから。

「あなたが、ゲイムキャラですね」

火山最深部。緑色に光るディスクに、私は話しかける。
すぐに返答が帰って来た。

「…あなたは……」
「プラネテューヌの女神候補生、ネプギアです。貴女を奪いに来ました。」
「奪い……女神候補生が、何のつもりです！」
「そのままの意味です。御託を並べる暇はないんですから。あんまり我儘を言うと、怒りますよ？」

女神化し、二つのＭＰＢＬを向ける。
引き金を引けばすぐにでも破壊できるけど、破壊しては意味がない。
もうがすとちゃんはいないのだから。

「……好きにしてください」
「はい。そうします。」

ゲイムキャラのディスクを掴み、Ｎギアに収納する。
もう、ここに用はない。さっさと帰りましょう。

「ギアちゃん！一体どこに言っていたです！・」

リーンボックスの教会に戻ると、所々に包帯を巻いたコンパさんが開口一番にどなってきた。
耳がキーンってする。

「火山です。ゲイムキャラさんの協力を取り付けてきました。」
「ゲイムキャラ……！？ギアちゃん、いつの間に…」
「何時の間にも何もありません。もう時間もあまり残されてはいないんです。チカさん。ゲイムキャラさんは借りていきます。では。コンパさんはアイエフさんと暫く休んでいてください。ここからは、私一人で行きます。」
「ギアちゃん……！？どうしちゃったです……！？」
「どうもしていません。アイエフさんはけがを治すことに専念してください。では。」
「待って、待ってくださいです！ぎあちゃん！！！！」

教会を出、すぐに女神化して半重力ユニットを作動。
上空に浮いてプラネテューヌに向かう。

…と、突然Nギアが鳴りだした…いーすんさんからだ。

『ネプギアさん？今どこにいますか？』
「いーすんさん…プラネテューヌとリーンボックスの間の上空です。」
『上空……？アイエフさんとコンパさんは？』

「アイエフさんがユニちゃんに銃で撃たれて怪我したんです。コンパさんはその治療で。」
『ユニ……ラステイションの女神候補生が…！？…そう、ですか…。申し訳ありませんが、プラネテューヌに向かう前に行ってもらいたい場所があります。』
「向かってもらいたい場所……？」
『プラネテューヌの南西の海に浮かぶ島が、犯罪組織の襲撃を受けているのです。』
「南西にある島……。確か、街が一つとダンジョンが一つありましたね。」
『恐らくは、プラネテューヌ国内に活動拠点を築こうとしているのではないかと。それに、もう一つ気がかりなことがあります。』
「…なんでしょう。」
『リーンボックスを一周する観光船がハイジャックされ、現在プラネテューヌに向かっています。その船に、ラステイションの女神候補生、ユニが乗船するところが目撃されています。』
「ユニちゃんが…！？」
『リーンボックスから入った情報です。何故彼女が観光船に乗っているのか、疑問は残りますが、そちらの対処もお願いします。まずは南西の島のマジェコンヌの討伐を。ハイジャックされた観光船は諜報部にできるだけ情報を集めさせます。』
「…わかりました。」
『ネプギアさん。貴女の行く道に奇跡があらんことを。』

通信を閉じ、Nギアをしまうと同時に進路を少し変える。
マジェコンヌ。お姉ちゃん達を捕まえ、がすとちゃんやユニちゃんを裏切らせた犯罪組織。
そんな、そんな組織のひとなんて……！

「私が、一人残さず殺します！！！」

待っていて、お姉ちゃん。ユニちゃん。

絶対に、助け出して見せるから。

3－0（後書き）

～その頃のいーすんさん～

『……。』

「…あの、イストワール様？」

『何でしょう……。』

「えーっと、その、少しお願いしたいことが……。」

『わかりました。』

～十数分後～

「あ、あの…イストワール様…」

『死因は転んだ際通りすがった車に轢かれて……。なんとも哀しいことですね。奇跡の代償とは。』

「イストワール様……？」

『何でしょう……。』

3－1（前書き）

基本的にｃｈａｐｔｅｒ3はネプギア・イストワールを中心に動きます。

まぁ、もう予想はついているかとは思うけどね……。マーベル。ヤンデレネプギアの需要ってあると思うんだ。私ヤンデレ派だし。ヤンデレネプギアでのギアテューヌとかあると思うんだ。

3―1

空を飛ぶこと数分。大陸より少し離れたところに、街のような明かりとキューブ状のダンジョンがある島を見つけた。恐らく、あの島。

着地して女神化を解く。なんだか、すごく気分が悪い。

なんだろ……。

……あ、いーすんさんからだ。

『ネプギアさん。聞こえますか？』

「…はい。」

『街の方は誰かが守っているようです。1時間は持つと思われます。』

「……。」

『それで、それまでにダンジョンに潜伏していると思われるマジェコンヌを排除してください。』

「わかりました…」

『ネプギアさん。あまり気落ちしないようにしてくださいね。あなたが無理をすれば、悲しむ人がたくさんいます。』

「私が傷ついて悲しんだって、誰も私の代わりなんてしてはくれません。私一人でやらないといけないんです。」

『ネプギアさん……』

「じゃあ、切りますよ、いーすんさん。」

世界各地に存在するキューブ状のダンジョン。

その中がどうなっているからいつも変わっているって。いーすんさんが言っていた。

……つまり、迷うのは確実…。急がないと……。

「排除、排除…」
「邪魔を、しないでください…！」

女神化して、背部ユニットのブースターを全開に。
全速力でダンジョンを回りながら、マジェコンヌのひとを探す。
ＭＰＢＬを撃ちながら進んで行く。周りには徐々に残骸が増えていく。

……遠くに、灰色の人影。
間違いない。下っ端さん。
マジェコンヌの……ひと……！

「…あーイライラする！あんなちっちぇぇ町潰すのに何時間かかってんだ！汚染モンスターフル出動させてんだぞ！」
「恐らくはあっちに助っ人がいるッチュ。そうでなければ汚染モンスターがいれば数分で落ちる街のはずッチュ。」
「折角マジック・ザ・ハード様から汚染ディスクをいただいたってのに、こんな成果をあげられないんじゃ左遷されっぞ！」
「もうされてるッチュ。」
「うっせぇ！」

「…こんにちは、下っ端さん。」

「……ん？聞いたことある声…って！女神のガキ！？こんなところにまで追ってくんのかよ！どんだけ情報はえぇんだ！」
「落ち着くッチュよ下っ端。どうやら一人みたいッチュ。」
「は…そうだな！おいガキ、何のつもりかしらねぇが、まさか一人

でアタシたちとやり合う気じゃねぇだろうな？」
「…勿論そのつもりです。あなた達マジェコンヌに容赦なんかいりません。」

ＭＰＢＬを下っ端さんたちに向け、一発発砲。
一応威嚇射撃のつもりでしたが、意味は無いみたい。

「絶対に、殺します。」
「随分と余裕じゃねぇか。しかしまぁ、てめぇは学習しねぇな。出ろ、リュウオウ！」

『グォォォオォォオオ！！！！』

下っ端さんが呼び出したのは、とっても大きい、ドラゴン種のモンスター。しかも、汚染体・・・・・。
…敵がどんなに強大でも、私は、負けません。マジェコンヌ信者や関係者を一人残らず、全員殺すまで！

「私は、立ち止まれないんです！」

ブースターを吹かして大きく跳び、両手の剣を振り下ろす。

「かかった！ワレチュー、やれ！」
「合点承知ッチュ！」

「よし、いけ……え、ガッ！？」

視界が揺れた。
すぐに、吹き飛ばされたと理解し、違和感に気付いた。

女神化が、解けている……！？

「だから学習しねぇっつったんだよ！こっちには女神化阻止の兵器があるってこと忘れてたんじゃねぇの？バッカでー！」

「一度見破った兵器が二度と通じないなんてことはないッチュ。下っ端もたまには頭が回るッチュ。」

「うるせぇ！」

女神化が、使えない。

女神化しない私たち女神候補生は、人間と大して変わらない。しいて言えば、頑丈。

……でも、それだけで十分！

「お、立ち上がるってのか。いいぜ、存分にこいつが相手をしてやるよ！」

「無謀な奴っちゅ。せめてコンパちゃんがいればよかったッチュ。」

「そりゃテメーの願望だろ。」

「……勝てるかどうかなんて考える暇はない。私は死にません……マジェコンヌを滅ぼすまで、お姉ちゃんとユニちゃんを取り戻すまで……！」

「私は！殺されても死んだりしません！！」

「はぁ、思い上がりも程々にしておけ！やれリュウオウ！」

『グォォォォォォォォ……。』

「わた、しは……！」

ドラゴンの、大きな手が私に振り下ろされ、私の視界は、真っ暗になった。

～視点【ネプギア】→【イストワール】～

「観光船の様子はどうなっていますか？」
『現在、諜報部とプラネテューヌ警察が合同して調査を行っています。生存者は一名。衰弱しています。』
「衰弱……？わかりました。教会で保護すると警察に伝えてください。諜報部は調査を続けてください。」
『了解しました。』

「マジェコンヌの進行は押さえられていますか？」
『恐らく、あと４５分が限界かと！』
「ネプギアさんに期待するしかありませんね……。わかりました。引き続き応援を送ってください。」
『了解しました！』

異常事態なだけあって、諜報部本部は騒然としていました。
一応指示を出してはいますが、マジェコンヌを抑えられるでしょう方々は殆ど出払っていますし、唯一の頼みはネプギアさんだけ。
続くマジェコンヌの増援に耐え切れなく前に、ネプギアさんが大本を立ってくれるのを祈ることしか、私たちにはできませんでした。

『イストワール様！面会を求める方々が！』
「面会、ですか……？」
『はい。奇跡目当てではないようです。傭兵と名乗っています。』

「傭兵……？わかりました。すぐに向かいます。」

「…あなた、達は……。」
「かの教祖、イストワール様に顔を覚えていただけるとは光栄だ。」
「……。」

ネプギアさんが言っていた傭兵、フロム……。そして、ユニ……？
どういうことなのでしょう……。何故、彼女らがここに…？
…いえ、詮索は後にしましょう。まず、私には聞くことがあるはず。

「何の御用でしょうか。奇跡ですか？」
「私は奇跡なんて眉唾なものは信じないタチでね。ちょっとした営業さ。」
「営業、ですか……？」
「そうさ。」

「私たちを、雇わないか？」

これが、私の運命の分かれ道だったのかもしれません。
私に存在する奇跡を起こす力。この力による私自身の運命も。末路も。

このときに、決まっていたのかもしれません。

～視点【イストワール】→【ネプギア】～

……視界が、ぼやける。
身体が、動かない。

「よう、ネプギアァ…？どうだ？散々倒してきたアタシに踏まれる気持ちわよぉ？」

口も、何も動かない。
私、どうなってしまうの……？

「まぁ、ここで一人女神を始末できたってんなら大金星だ。アタシの手で葬ってやるよ。」

下っ端さんが、私に向かって大きく鉄パイプを振り上げる。
あれが振り下ろされれば、私は、死ぬ。

――――死にたくない…私は……！

「しね、ない……！」
「もうおせぇ！」

スローモーションで、鉄パイプが私に振り下ろされる。
咄嗟に、剣を付きだす。

鉄パイプに私がぶつかる前に、私の剣が、下っ端さんの胸を貫く。

「下っ端！？」
「な、ッ……！？」

思いっきり剣を振り、下っ端さんを切り裂く。
それと同時に強く血が吹き出し、下っ端さんが倒れる。

「おい、マジかよ……！？夢なら、覚め…て……」

動かない体に鞭うち、立ち上がる。
下っ端さんが血まみれで、臓物を切口から吹き出し、死んでいた。

「下っ端……リュウオウ、奴をかたずけるッチュ！ボクは逃げるッチュ！」
『グォォォォォォォ！！！！』

なんだろう。体が、重いのに、まともに言うことを効かないのに。
負ける気が、しない。

…女神化、できる。
いける…！

「プロセッサユニット、セット……」

女神化しても血だらけなままの体を必死に動かし、ブースターを吹かす。
剣を構え、一気に……！

「ここから、いなくなってえええええええ！！！」

ドラゴンが火を吐こうとした口に、剣を刺す。頭を貫通し、さらに血が噴き出す。
剣を残して離れ、剣を爆発させる。

頭がなくなったドラゴンがゆっくりと、下っ端さんの上に倒れ、消えていく。
徐々に、粒子となって消えていくドラゴン。消えた後、下っ端さんの死体も存在していなかった。

……もう、痛くはない。女神化すれば、痛みもなくなるのかな…？
なら、大丈夫。もう、何も痛くない。

大丈夫だよ、お姉ちゃん。ユニちゃん。
私は、ゼッタイに死ンダリしない。
助け出すマで。マジェコンヌを滅ぼスまで。
絶対ニ、死んだりシナいから。

3－1（後書き）

～まじっくのおへや～
ジャッジ「おい待て」
マジック「……。」【どうしたのじゃっじ。】
ジャッジ「どうしたのじゃねぇよ！なんだよまじっくのおへやって！ザ・ハード情報局どこいったんだよ！」
マジック「……。」【もうかいせつすることがないしねたもないからここでだらだらくっちゃべることにした。】
ジャッジ「ああ、そうかい……。」
マジック「……。」【まぁこんかいはなにもないけどね！】
ジャッジ「ないのかよ！？」

～この放送は、犯罪組織マジェコンヌの制作でお送りするはずでした～

マジック「……。」【りんだぁ…。】
ジャッジ「そういやあいつマジックの直轄だったな」

3－2（前書き）

アーク、お許しください！

今回のネタを→の一文でわかったら天才だと思う。

別にチャー○じゃなくてね。アークの部分だからね。

3－2

ダンジョンから出、街に着いた。
数十分前まではマジェコンヌの襲撃に晒されていたというのに、すっかり回復している。
……。

「おー！あんたはいつかのギアっちじゃないカー！」
「…あなたは、ファルコムさん……でしたっけ？」
「オウイェス！旅人ファルコムさんでーっす！」

私に声をかけてきたのは、相変わらず大きなギターボックスを背負ったひと、ファルコムさんだった。
……なんだろう。前会った時には、この明るさにあこがれたけど…。
今は、疎ましく思える。

「…では、私はプラネテューヌに戻ります。」
「オーケーイ。また会えるといいねぇ～♪」
「そうですね……。」

飛び上がって上空に静止。プラネテューヌに向かう。
……ゲイムキャラは四体揃っているのだから、今すぐにでもギョウカイ墓場に行けないかな…。

～視点【ネプギア】→【イストワール】～
「…ユニさん。貴女とネプギアさんに何があったか。私としては聞きたいですね。」
「……。」

「言えない、というわけですか……。」

謁見の間。私とユニさん。そしてフロムさんの三人がそこにいました。

「気にするな。…と言ってわかってくれるような相手でもないか。」

「そうですね。せめて目的ぐらいは、話してほしいものです。」

「マジェコンヌの四天王に会いたい。」

「彼らに……ですか。」

「そう。連中と私たちにはちょっとした因縁があるわけさ。」

「……。」

「…ギョウカイ墓場に行くためには、ゲイムキャラたちの協力が必要です。そして、そのゲイムキャラ達の力はネプギアさんが保有しています。ネプギアさんの協力が必要ということになりますが？」

「……ふむ。なら問題ないだろう。」

『イストワール様！例の観光船ハイジャックの生き残りを保護しました。』

「…わかりました。通してください。」

扉が開くと、そこには諜報部の方と、抱きかかえられた見るからに衰弱している幼い女の子がいました。

「その子については私に任せてください。あなたは引き続き調査を。」

「了解しました！」

諜報部の子が謁見の間から出る。

それと同時に、ソファに寝かされた子が突然、何ともないように起

き上がりました。

「保護してくれて感謝感激ですの。ありがとうですの。」
「……がすと。何してんだお前」
「ちょっとやりたかっただけ、ですの。」
「……どういうことか、説明していただけますね？」

フロムさんが言うには、この方、がすとさんと彼女等は知り合いで、ハイジャックのことは全く知らなかった、と。
運がいいようですね。奇跡のようです。

「…それで、がすとさん？何故、衰弱したように？」
「プラネテューヌに向かう、という話をこっそり聞いていたですの。プラネテューヌ教祖がさまざまな機関を統括していることは有名ですの。」
「まぁ、がすとがいるというのなら問題はないな。ネプギアはいつ戻る？」
「あと数分、というところでしょうか。」
「ならいい。がすと、私らにあいつらの姿を重ねてほしい。」
「了解ですの。」

がすとさんが指を鳴らすと、突然がすとさん、ユニさん、フロムさんの姿がゆがみ、別の姿となりました。
順に、日本一さん、アイエフさん、コンパさん…！？どういうこと、なのでしょうか…。

「これで問題ないでしょ？」
「おい、私がこの姿ってのは何かの嫌がらせか」

「私も、その姿はやりたくなかったわ…。」

上から日本一さんの姿のがすとさん。コンパさんの姿のフロムさん。アイエフさんの姿のユニさんの言葉です。
姿だけではなく、声も全く同じ。どういう原理なのでしょう…。
流石に口調等は自分でまねる必要があるようですが。

「これは、一体……？」
「ネプギアの協力を取り付ければ文句はないんだろう？」
「……まぁ、そうですが…。」
「…ただいま帰りまし……」

おや、ネプギアさんが帰ってきました。
かなり困惑している様子…。
…何故でしょう。私は、彼女たちを止める気にならない……？

「遅かったわね、ネプギア。」
「折角あいちゃ……ぷふっ、あいちゃんの治療が終わったから急いできたのにですー。」
「そーそー。どこいってたのさー。」

「…アイエフさん、コンパさん、日本一さん……。」

……何故。今私が言えば、彼女らの目的は一瞬の内に崩れ去ります。
なのに、私は、何故彼女らに協力しているのでしょうか…。
……彼女らと私が、何か、同じような感覚が…。

「揃いましたね。ゲイムキャラ四人全員から力を借りられたようですね。」
「となると、ついにギョウカイ墓場に行けるわけね。」

「です！」
「それで、もうすぐにでも行けるの？」
「まぁ、はい。しかし長旅でみなさん疲れているはずです。休んで……おや。諜報部からですね。」

『イストワール様！緊急事態です！』
「落ち着いてください。何でしょうか？」
『ルウィーで犯罪組織の一斉蜂起が行われたようです。数日で９割近くのシェアを奪われた、と。』
「９割……！？そうですか。事態の全容がわかるまで迂闊に手を出さないようにしてください。飛び火しますよ。」
『了解しました。』

「聞いての通りです。皆さん。疲れているとは思いますが、すぐにルウィーへ「その必要はありませんよ。いーすんさん。」ネプギアさん…？何故そう言いきれるのです？」
「…私一人の方が、ルウィーには早くつきます。ゲイムギョウ界の中心の山を越えていきます。アイエフさんたちは休んでいてください。」
「ハァ！？ネプギア、あんた何言って…！」
「邪魔ですから。」
「……。」
「うぅ～…女神様にそう言われると、なんか自信無くすよぉ…。」

「では、いーすんさん。行ってきます。」
「…行ってらっしゃい。」

「随分と疑心暗鬼だな。」

姿が戻った後、最初に口を開いたのはフロムさんでした。

「その原因を招いたのは、貴女方なのでは？」

「違いない。だろうがすと。」

「ですの。……でも、数日で9割のシェアがマジェコンヌに移るなんてあり得る話じゃないですの。」

「つまり…？」

「ザ・ハードの誰かが来ている可能性があるですの。」

「そういや、ルウィーではトリックなりブレイヴなりがいたりしたな。」

「そうね…ブレイヴは私に会いに来た、って感じだったけど。」

「…では、貴女方はどうするのですか？」

「そうだね。西の湿地帯を抜けていこうか。」

「うぇ、がすとはどうするですのー？」

「ふーむ…どうにかならないか？」

「なるわけないですの…。」

「…方法はあります。私は、望むものに対して奇跡を起こすことが可能です。全知全能、とはいきませんが。」

「オーライ。それでがすとをルウィーに送れるか？」

「可能です……。しかし、私のこの奇跡には、代償があります。奇跡に応じた、代償。」

「……ルウィーに瞬間的に送った、その後は？」

「そうですね……。1，2日は極度の全身筋肉痛で動けなくなると思います。」

「…どうする、がすと。」

「問題ないですの。体のどこかが吹き飛んだりしない限り、がすとにはエリキシル剤という万能薬があるですの。」

「それが飲めるほど体が動けばいいがな…。まぁいい。それで頼む。

ユニ、行くぞ」
「了解……。」

ユニさんとフロムさんが教会を飛び出し、私とがすとさんが残りました。
すぐに奇跡の用意をし…と言っても、大した用意も必要ではないのですが。

「では、いきますよ。」
「お願いするですの。」
「……第６６６拘束機関解放。次元干渉虚数方陣展開。」

詠唱と同時に私の周りに多数の魔法陣が浮かび、それらが徐々にまわりはじめます。

「…それに意味はあるですの？」
「イメージの問題です。では…ハァッ！」

掛け声と共にがすとさんの体が光り輝き、そして飛び去って行きました。
多少体力を使った私は、だらしなくも本の上に倒れ込みました。

「……。」

ふと、頭の中によぎった、一つの言葉。
【マーベル・ザ・ハード】。

ザ・ハードということは、マジェコンヌ四天王の名。
…しかし、このマーベル・ザ・ハードと言う名は、私にとても、合っている気がしました。

私の名はイストワール。この世界の史書だと、いうのに。

3－2（後書き）

～まじっくのおへや～

ジャッジ「タイトルと俺の図体が一切マッチしてねぇ……」

マジック「……。」【きにするな！】

ジャッジ「気にするわ！あんなメルヘンチックなタイトルなのにいるのは全長５０ｃｍのテメェとこの図体の俺だぞ！？常識的に考えろおい！」

マジック「……。」【じゃっじにじょうしきてきにとかいわれるとなにかくやしい】

ジャッジ「俺にだって常識ぐれぇアルワァ！俺は頭の中は殺すことしか考えていねぇだけだ！」

マジック「……。」【それどやがおでいうことじゃない。】

ジャッジ「俺らに表情なんてねぇだろ」

マジック「……。」【それはこう、あれ。いんすぴれーしょんてきなかんじでりかいしてる。】

ジャッジ「全然意味わかんねぇからな」

マジック「……。」【でも、なにはなせばいいかわからん。これじゃあきかくだおれけいのまつろがあるんだが】

ジャッジ「俺が前回言ったよそれ。」

マジック「……。」【じゃあ、こんなかんじでぐだぐだはなすだけのばしょだけどきいてくれれば、それはとってもうれしいなって、おもってしまうのでした】

ジャッジ「聞いてねぇよ。じゃあな。」

～この放送は、犯罪組織マジェコンヌの制作でお送りしました～

マジック「……。」【よげんする、このちゃぷたーよんできゃらがさんにんしぬ】

ジャッジ「マジで！？」
マジック「……。」【ごめん。てきとーにいった】
ジャッジ「……なんでこんな奴が俺たちんなかで一番つえぇんだよ……」

3－3（前書き）

作者、あなたは狂っているんだ！（割とマジで

う～ん、最近自分でもよくわからない方向に行っていると思っていたり。

そしてＹＯＵＴＵＢＥの本編動画見るとこの状態でのメンツ大杉ワロタァ…。

このＳＳだとコンパ・アイエフ：リーンボックスで治療中　日本一：死亡　５ｐｂ．：空気どころかＰＴ加入してねぇ　なんてありさまだし…。ネプギアどうなる。

（べ、別にシェアクリスタルの存在を忘れて何かないんだから……思いっきり忘れてます、割とマジで）

3―3

ルウィーに到着。
……特に何か起きた、という様子には見えない。
とにかく、一度教会に行ってみよう…。

「あ、ネプギアさん…。」
「遅かったですの。」
「がすと、ちゃん……。」

教会には、見るからに暗い表情のミナさんと、相変わらず無表情のがすとちゃんがいた。
……よくも

「よくも、私からユニちゃんを奪っておいて、私の前に顔を出せますね…！」
「なんのことですの？がすとが何もしなくてもユニは裏切ったですの。」
「そんなこと、信じられると思いますか…！？」

剣二本を生成し、がすとちゃんに向ける。
がすとちゃんは無表情のまま、ずっと私を見つめ続ける。
…イラつきます

「殺します」
「出来ると思うですの？」
「ね、ネプギアさん！待ってください！」

「邪魔ですミナさん！邪魔するなら、殺します。」
「まぁ少し落ち着くですの。まずは話を聞くですの。」
「聞きません。殺します。」
「全く、脳筋ってのはこれだから困るですの。」

突然、ズゥゥーン、という地響きが部屋中に響いた。
斬りかかろうとしていた私は体勢を崩し、転んでしまう。

「何…！？」
「何か来たですの。」
「女神様達の部屋からです！」
「マジェコンヌの手下……！？」

私は勝手にそう結論付け、走り出す。
がすとちゃんは、後回し…！

「はぁ、下っ端に行くはずの仕事が全部こっちに周ってきたッチュ…。」
「文句を言うでない。清き幼女のためなのだ。それに吾輩のストッパーが必要だからな。」
「はぁ。ボクは頭脳派なのに…ッチュ。」

「ここ…！」

声のする扉を開ける。そこには、大きな黄色いぬいぐるみと、下っ端さんといた鼠さん。
…そして、ロムちゃん。

「ロムちゃん！？何があったの！？」
「……。（ぷいっ）」
「これは、一体……！？」
「……。」

ラムちゃんたちも到着したようだ。が、ロムちゃんの様子がおかしい……？
いいや、そんなことはどうでもいい。それより重要なこと…！

「あなた…マジェコンヌの人ですか……？」
「い　か　に　も！マジェコンヌ四天王が一人、知略のトリック・ザ・ハードとは吾輩の事だが？」
「……そうですか。なら容赦はいりません。殺します。」
「ほう、だがお前に吾輩に傷をつけることができるのかな？ジャッジ歯が一切立たなかったお前が。」
「あのときとは違います。今の私に優しさなんてふざけたものは存在しません。私は、マジェコンヌへの憎しみだけで動いています。最初から、殺す気です。」
「なるほど……。」

「ネプギア……？あんた、一体どうしたの……？」
「女神様。あれには近づかないほうがいいですの。殺されてもがすとは知らないですの。」
「あ、あんた何言ってんのよ！」
「言った通りですの。」

「しかし、女神二人というのは些か分が悪い。ここは引くとしようか、ワレチューよ。」
「合点承知ッチュ。ほら、行くッチュよ！」
「はい……。」

「逃がすと、思ってるんですか?!」

女神化しブースターを思いっきり吹かす。
飛び出して黄色い巨体を狙って剣を突き立てると、女神化したロムちゃんが杖でそれを阻んだ。

「…何のつもりですか?」
「……。(ふるふる)」
「邪魔をするなら、容赦はしませんよ」
「……光よ。我が前に」
「詠唱?目の前でっ!」
「ダメぇ!」

突然私の腕にラムちゃんがしがみつく。
それを見計らってロムちゃんの魔法、光球が輝き、視界が白一面になる。

「しま、っ……!」

視界が戻ると、荒らされた部屋だけ。逃げられた、ようですね…。
それよりも……

「ラムちゃん……?」
「ひっ…!?な、何よ……!」
「私、いいましたよね……?邪魔をするなら容赦はしない、と…ラムちゃんだって例外じゃないんだよ…?」
「な、何よ、やる気…!?」
「…死ん「そこまでですの。」…がすとちゃん。また邪魔をする気ですか……?」

私とラムちゃんの間に短剣を差し込むがすとちゃん。
…やっぱり、一人の方が楽、ってことなんだね……。

「今女神を殺す理由はないですの。あるですの？邪魔をした以外の理由ですの。」
「……」
「ないみたいですの？なら話は早いですの。やつらを追うですの。ちょうど…」
「よう、女神共。元気そうじゃないじゃん？」
「ラム…ネプギア……。」
「援軍も到着したみたいですの。」

がすとちゃんは、少しだけにやけてそう、言い放った。

～視点【ネプギア】↓【イストワール】～

……上下左右。全てが平行でない、宙域的感覚…。これは、夢……？

「……。」

「……。」

あなたは…マジック・ザ・ハード……？

私の夢に入り込んだ理由……？

「……。」

……ッ!?そんな、馬鹿なことがありえるとでも言うのですか…!?

「……。」

…そう、ですか。彼女らも…。私を、どうするつもりですか……?

「……?」

そんなこと、私は嫌です。私は世界の史書イストワール。その責務を捨てる気はありませんよ。

「……。」

なっ…!?ネプギアさんが……!?

「……。」

確かに、そうですが……。

「……。」

……。

もう、消えてください。

「……。」

さようなら、マジック・ザ・ハード。

3－3（後書き）

～まじっくのおへや～

ジャッジ「……暇だ」

ジャッジ「……トリックはおろかマジックの奴まで本編に出てきていねぇし…」

ジャッジ「ブレイヴの奴今何やってんだろうな……」

ジャッジ「しかし、いくらシリアスが壊れるからって読唇術させるってのもどうなんだろうな…」

ジャッジ「……また次回」

3－4（前書き）

今回から、ネプギア発狂。
ネプギアは基本的にユニとネプテューヌと打倒マジェコンヌ以外興味はないんですが……。

3－4

教会の窓から飛び出し、ロムちゃんとトリックを探す。あれだけの巨体、隠し通せるとは思えないけど……

……ん？爆発…。行ってみよう。

「いいッチュか？今の貴様の任務はとにかく暴れることっちゅ。ルウィーを崩壊させるッチュ。」

「……はい。」

「……本当にマジェコンヌは、存在すらもけがらわしいですね。」

ロムちゃんを連れ、街を破壊していた鼠さん。

コンパさんには悪いけど、殺すのは確実です。

「来たッチュね。卑怯な手になるッチュが、女神！やっちまうッチュ！」

「はい……」

ロムちゃんが私に杖を向ける。

……ラムちゃんやユニちゃんならともかく、私にそれが通用すると思っているの？

「別に、私はロムちゃんがどうなろうと知ったことではありません。ロムちゃんがマジェコンヌの手に堕ちたというのなら…私が介錯します。」

「待ちなさい！ネプギア！」

「……何の用、ラムちゃん。巻き込まれても知りませんよ」

「何でロムちゃんと戦うのよ！ロムちゃんは洗脳されているだけなのよ！？」

「だからなんですか。洗脳されようが裏切ろうがマジェコンヌの味方をするなら私の敵です。」
「あー…もう！少し黙っててよ！私が何とかするから！」
そういい、ラムちゃんが私の前に立ち、ロムちゃんに対し叫び始めた。

「ロムちゃん！私よ！ラムよ！」
「……。」
「ッ！危ない！」
「えっ？きゃっ！？」

ラムちゃんを掴んで引き戻す。
すぐ前までラムちゃんがいたところは、何が起こったか爆発したように地面がえぐれていた。

「懲りましたか？」
「そんなわけないでしょ……！ロムちゃんは、私が助けるんだから…！」
「……好きにしてください。駄目なら殺すだけです。」
「あんた…！！」
ラムちゃんを離し、ロムちゃんを見る。
あちらから仕掛けてくる気がないようですね。迎撃に気を回すってことは、何かの時間稼ぎでしょうか……？

「ロムちゃん…！私がわからないの！？ずっと一緒にいたでしょ！？」
「……【デトネーション】」
「あ、ぐぅ、あぎっ……！」
「ラムちゃん……！もういい、退いてください！」

ラムちゃんを後ろに引き、そのまま投げ飛ばす。
その勢いでロムちゃんに向けて剣を振る。
ロムちゃんは杖で受け止めるも、あくまでロムちゃんか余裕はなさそうだ。

「わかりました…。あくまで敵対するというのですね……」
睨みつけても、ロムちゃんは無表情で私を見つめる。
……その無表情、がすとちゃんと被って不愉快です

「女神！もういい時間帯ッチュ！一度撤退するッチュ！」
「……はい。」

ロムちゃんが鼠さんを抱き上げて飛び上がる。やっぱり時間稼ぎ…。
追うには追えるが……仕方ない。

「ラムちゃん。教会に行きますよ。」
「ロムちゃん……ロムちゃあああああああああん！！！！！」

……少し前の私のような慟哭。
少しだけ、ラムちゃんに私の姿が被った。

「おかえりなさいですの。その様子だと逃がしたみたいですの？」
「……何故、私の目の前にわざわざ出てこれるのですか」
「何のことですの？」
「それに、ユニちゃん……！」
「……」

「わかってるよ、ユニちゃん。」
「…ぇ、ネプギア……？」

「ユニちゃンは騙さレテいルんだもんネ。すぐに助ケテアゲルから。」
「ひっ……！？」

出来る限りの笑顔で言ったのに、なぜか怯えられた。
……ああ、そうなんだよね。ユニちゃん。
ユニちゃんもきっと洗脳されてるんだ。だから、私が怖く見えるようにされてるんだね。
…大丈夫、ユニちゃん。絶対にユニちゃんもお姉ちゃんも助けてあげるから。
大好きだよ、ユニちゃん。

「さて。話が進まんから私が進めさせてもらう。トリックが逃げた方向は大体わかりきっている。」
「…どこですか」
「ルウィーの西、世界中の迷宮の南西にあるアタリー湿原だ」
「……何故、そうと言い切れるのですか？」
「統計だよ」
「……わかりました。今すぐ行きます」
「ま、待ってください！」
「……何ですか。ミナさん。」
「ここに、小さいですがイストワールさんからデータをもらい作ったシェアクリスタルがあります。これを使えば、彼女たちの洗脳を…」
「いりません。」
「……ぇ…？」

「一度洗脳され、敵、それもマジェコンヌに回ったひとに何故容赦をしないといけないのですか？」
「洗脳されてるんですよ！？彼女たちの意思じゃあ…！」
「洗脳されるからですよ。また同じことで洗脳されるかもしれないじゃないですか。」
「……あなたは、何を戦っているんですか…！？」
「マジェコンヌですよ？私はマジェコンヌを壊滅させるまで、全員殺すまで、絶対に立ち止まらない。死なない。進み続けるだけです。」
「いい加減にしてよ！」
「ラム様……」
「ちょっと待った。長ったるい話は苦手でな。フェイク、デスペア、行くぞ」
「え、ちょ、フロム！？」
「フェイクー。おいていくですのー。」
「う、ぅ～……ま、待ちなさいよ…！」

フロムさん、ユニちゃん、がすとちゃんの三人が、教会から出ていく。
……ラムちゃんが、流れる涙を拭おうとせず、私をにらみ続けていた。

「いい加減にしてよ……なんで、何でそんな、ロムちゃんを傷つけるなんて言えるの！」
「邪魔だからです。マジェコンヌに味方するんですよ？存在する価値がありません。」
「それはロムちゃんの意思じゃない！ロムちゃんは、今絶対悲しんでる！」
「洗脳されたひとにそんなことを考える暇があるとは思えませんが」

「そんなことない！ロムちゃんは今苦しんでいる！だから、私が助けるの！ミナちゃん、シェアクリスタル貰うわ！」
「ラム様……」
「ネプギア、あんたは女神なんかじゃない！あんたは、マジェコンヌと何一つ変わらない、サイテーな奴よ！」
……そう言い残し、ラムちゃんは女神化して飛び去って行った。

……

「ワタしが、マジェコンヌ……？」
「ね、ネプギアさん……？」
「私が、誰ヨりモマジェコンヌを憎ンデいるわタシがマジェこんぬトカワらない……？フフふ……らムチャん……？オ死おキが必要ダヨね……？」

スコシずつ、すこシズつ
アルいて、あタリー湿ゲンにむカウ。

らむチャン……？直コロしてあゲるから、マッテてネ……？

3－4（後書き）

～まじっくのおへや～

マジック「……。」【ただいまー。】

ジャッジ「おせぇよ」

マジック「……。」【ちょっとまーべるとあってきたからー。】

ジャッジ「知ってるよ」

マジック「……。」【こんかいからじのぶんもこわれてきたよー。さくしゃのきち○いどがためされる！】

ジャッジ「俺が常識人になるんだし、無理じゃねぇの？」

マジック「……。」【ですよねー。また次回！】

ジャッジ「あの女神に救いがあると思うかねぇ？その辺も考えてみな…。」

3－5（前書き）

希望を信じた女神。絶望に殉じた女神。
女神、人間を導く者。

しかし、その身体は人間とは変わらず。
しかし、その最期は人間より悲惨に――。

3―5

ゆらゆら。ユらゆラ。

頭にノイズが走っている。

ゆラ――――。――――ユ――――。

……あれ…？

私、何をしていたんだっけ……？

……そうだ…マジェ――――を……――――ぼ――――。

……――――――ヌって、なんだっけ…。

…それよりも、もっと、大事な――――を、忘れタような…。

……あレは、何だロう。

……マ――――ンヌなら、――――な――――。

～視点【ネプギア】↓【ラム】～

ミナちゃんからシェアクリスタルを渡され、湿原に向かう。

私の頭の中にあるのは、ロムちゃんの無事…と、あと一つ。ネプギアのこと。

前会った時、ネプギアはウザイほどやさしくて、私たちのシェアの回復なんて、し始めた。

それでロムちゃんに懐いて、それがくやしくて。

……でも、羨ましくて。

ずっと、私はロムちゃんのサポート役だった。皆は私が全部やってるように見えているらしいけど、そんなことない。
私は、ロムちゃんの身代わりをしてるだけ。
勉強とか、ロムちゃんの言うとおりにしていれば全部できた。
戦いだって、ロムちゃんは怯えることもあったけど私が守っていれば、倒してくれたりした。
……ロムちゃんは、いつも私にありがとう、って言ってる。
…それはもしかして、いつも私の道具になっていてありがとう、ってことじゃないのか。
いやいやいや。ロムちゃんは私の、私の……
……双子、だけど…ロムちゃんがお姉ちゃんなんだよね…。
私には、ロムちゃんみたいな才能もないし、ネプギアみたいに優しくもない。
……私って、いる意味あるのかな。

お姉ちゃんみたいに強くて、優しくて、かっこよくもないしロムちゃんみたいにかわいくもないし。

……ロムちゃんを、お姉ちゃんを助け出して、また私は、ロムちゃんの身代わりにならないといけないの……？
…少しずつ、こころが黒くなっていく感じ。
……私、ルウィーの女神候補生失格なのかな。
ネプギアみたいに、なるのかな……
もしそうなるのなら、せめてロムちゃん……助けたいな……。

「……ほぅ。彼のネプギアが来るかと思えば来たのは君か。」
「…ええ。私。」
「トリック様、我を忘れないようにご注意をッチュ。」

「もし我を忘れて食おうとしたときには、手筈通りに頼むぞ、ワレチュー。」
「了解ッチュ。」

…いつの間にか、私はトリック・ザ・ハードと対峙していた。
……傍らにはロムちゃん。

「それで、どうするかね、ルウィーの女神候補生の片割れよ。」
「決まってるでしょ。あんたとその鼠をぶっ倒して、ロムちゃんを取り戻す！」
「出来るかね？吾輩はザ・ハードが一人。生半可な実力では傷一つ付かんぞ？」
「それでもよ……！ロムちゃん！」
「……」
「なるほど、呼びかけか……面白い。片割れよ。立ち向かうといい。」
「……はい。」

ロムちゃんが私

「いいんでチュか、トリック様？」
「構わんよ。結果は変わらん。」
「トリック様のそういう思慮深いところは好感を持てるッチュ。」
「お前が幼女ならよかったのだがな」
「ボクはメスッチュ」
「本当か！？」
「嘘ッチュ。というかメスならかぶりついていたッチュか？」
「……今は彼女らを見守ろうか」
「急に戻っても意味ないッチュよ」

「ロムちゃん！私よ！ラムよ！」
「……。」
「ロムちゃん……！……。私ね。ずっとロムちゃんの言うとおりにしてた。ロムちゃんと一緒にいれば、なんとかなると思ってた。ロムちゃんは、何だってできたんだから。」
「……」
「でもね。私、もうロムちゃんに頼らなくても、戦えるよ。私一人でも、戦える。私一人でも、大丈夫。」

杖を構え、ロムちゃんに向ける。
こうやって、ロムちゃんと戦うなんて初めてかもしれない。
……大丈夫。何でも、どんなことでもロムちゃんに勝てたことはないけれど。
ロムちゃんを、元に戻す。それだけなら、できる……！

「……。」
「ロムちゃん……今、助けてあげるから……！」

「【アイストルネード】」
「【エクスプロージョン】！」

ロムちゃんの氷の竜巻と、私の爆発。
氷と炎なら勝てるように見えるけど、ロムちゃんの竜巻は続けて出てきて、私のはいっしゅんの爆発。
…勝てるわけはない。
横に跳んで、竜巻を躱す。
せめて、近づければ…シェアクリスタルで、なんとか……！
……よし、行く！

「お姉ちゃんから教わった魔法……。あれができるなら、これも……！エターナルフォースブリザードのバリエーション……！」

「……」

「【タイムストップ】！！」

魔法陣に杖を突き立て、氷を回りに這わせる。

……うまく、いった？

【タイムストップ】。

相手を時間ごと凍らせるエターナルフォースブリザード。それの効果範囲を広げて周りの時間を凍らせる。正直、今の今まで試したことはなかった。

ぶっつけ本番だったけど、うまくいった、のかな…

周りの景色は全部薄水色。ラムちゃんも、後ろのトリックたちも、全部止まっている。

やった…成功したんだ……！

魔力を使いすぎたからか動きにくい……。

ふらついた足でロムちゃんに近づき、持っていたシェアクリスタルをあて、魔法を解く。

ロムちゃんに当てたシェアクリスタルが光り輝いて、私たちを包む。

……ロムちゃん。私は、もう一人でも、戦えるよ……。

「らむ、ちゃん……？」

「ろむちゃん……よかった、戻ったんだね……。」

「ラムちゃん…わ、わたし……！？」

「大丈夫、もう、大丈夫だから……」

「幼女と幼女が抱き合う。良い光景だ。感動的ですらある。」

「だが、無意味だ。」

突然、ロムちゃんのいた場所の床が開き、ロムちゃんがトリックの方にふっとばされる。

それと同時に、私の体が、突然、うごかなくなった。

ふと、下を見る。

私の胸から、槍、みたいなものが生えている。

…違う、背中に、刺さってる…

痛い、りょううでにも、ささってる。

……やだ、しにたく、ないよ……

ろむ、ちゃん……

3－5（後書き）

～まじっくのおへや～

マジック「……。」【つばきちゃん、おゆるしください！】

ジャッジ「それ最近毎回言ってねぇか？」

マジック「……。」【いってるね。そろそろたいじょうぐみとかであとがきできるんじゃない？】

ジャッジ「そんなに死んでっか？」

マジック「……。」【まだふたりだね。】

ジャッジ「まぁ、俺たちも二人だがよ…あいつらに接点あんのか？」

マジック「……。」【ないね。】

ジャッジ「駄目じゃねぇか……。」

マジック「……。」【こんかいのさいご、なにがおこったかって？いますぐ2－6のあとがきをみてきやがれぃ！】

ジャッジ「スプリングフロアはともかく、槍なんて飛ばせたっけか……？まぁ出来そうな気はするが。」

マジック「……。」【だーくねすいりゅーじょんはないよ！あんなでかいわなしかけられないだろうし。さつじんおるごーるとかびょうしゃめんどいし！】

ジャッジ「おい、描写めんどくせぇが本音だろ」

マジック「……。」【えへっ】

ジャッジ「…また次回。」

マジック「……。」【じかい、ろむかくせい！するかはわからない。】

ジャッジ「未定ならいうなよ！？」

3－6（前書き）

魔物は民を殺し、
英雄は魔物を殺し、
民は英雄を殺す。

仮にこの英雄を女神に例え、民を人間に例えてみよう。
……そのままなのだ。
女神は人間の為に、自らの為に魔物を殺す。
魔物は自らの命のために人間を殺す。
そして人間は、自らの命でもない、ただの情けない意思の為に女神を殺す。

人間とは、実に愚かなものだ。
自らを守護する守護女神を、まるで自分が殺されたがっているかのように殺すのだから。

――――――『世界全書』第3章【人間】１２６pより

3－6

～視点【ロム】～

わたしは、ずっと、おくびょうでした。

わたしは人と話すのが苦手で、ずっと、ラムちゃんに手伝ってもらっていました。

ロムちゃんはわたしがなんでもできるっていっていたけど、本当はちがうの。

何をするにしても、すごくこわくて。ラムちゃんがいないと何もできなくて。

……ずっとラムちゃんにたよりっきりで。

ラムちゃんは、「気にしなくていいよ。ロムちゃんと私はずっといっしょだもんね！」って、行ってくれた。

わたしは、それをずっと信じていました。

……いま、このときまでは。

「ぁ、……。」

私は、突然目を覚ましました。さっきまで、部屋でねむっていたはずなのに。

目にうつったのは、傷つきながら私に手を押し付けていたラムちゃん。

「ら、ラム、ちゃん……？」

「ロムちゃん……よかった、戻ったんだね……。」

「ラムちゃん…！わ、わたし……」

「大丈夫、もう、大丈夫だから……。」

「実にイイハナシだ。感動的だな。」
「だが、無意味だ」
突然ゆかが跳ね上がり、わたしのからだがうしろにふきとばされる。
とっさに一回転し、体勢を立て直す。跳ね上がった床がおりたとき。
わたしは、目を疑いました。
「あ、あぁ……」
ラムちゃんが、三本の槍に、貫かれていました。
すぐ、治療しないといけないのに。いつも、ラムちゃんがけがしたときに治療していたのに。
……足が竦んで、うごけない。
「ぁ……ェ……？」
ラムちゃんの女神化が解かれ、ゆっくりと前のめりで倒れる。
ラムちゃんが死んだ証に、倒れたラムちゃんの体から光の粒子が溢れだしました。
「ラム、ちゃん……？」
徐々に強く光るようになり、そして、ラムちゃんの姿が、完全に消えた。
「ぁ……」
信じられなくて。夢だって思ってて。
わたしは、そのまま意識を失いました。

～視点【ロム】→【トリック・ザ・ハード】～
……これで女神候補生一人を確保、か。
消える前に食べることができなかったのが心残りだな。

「ワレチューよ。この女神候補生をギョウカイ墓場へお連れするのだ。丁重に扱えよ。」
「了解しましたッチュ。ぅ、重いッチュー……」
「文句を言うな。転送ディスクをやる。」
「流石トリック・ザ・ハード様！頭がいいッチュ！」
「褒めてもこれ以上は何も出ん。」

ディスクを使い、ワレチューが女神候補生と共に光に包まれ消える。
……さて、吾輩にはまだ仕事がある。次に来るとすれば……
…む、どこからだ……？

「ＤＭＰＢＬ（ダブルマルチプルビームランチャー）……オーバードライヴ…！」
「上かッ！障壁展開！」

ディスクを上に放り投げ、軽い障壁を張る。
……ふむ、長くは持たないな。

スプリングフロアを吾輩の足元に設置。
……二秒、持ってくれるか？

徐々に障壁に罅が入る。が、間に合った。
スプリングフロアを作動、吾輩の床が跳ね上がり、吾輩を横に弾き飛ばす。
吾輩はぬいぐるみが如き体故跳ね飛ばされた程度ではただの移動手

段に過ぎない。

「逃がサナい……！」
「ぬっ！？」

吾輩の跳ぶ方向から、突然の衝撃。
大したダメージはなく弾き飛ばされただけだが、吾輩にとっては最悪の状況だった。

……今攻撃した女神候補生ネプギアは、吾輩が移動するということを予測していたのだ。
吾輩は智将だ。予測で勝てなかったというのは大きなアドバンテージを敵にむざむざ渡すということになる。

「……」
「む……？」

妙だ。ネプギアから意志を感じない。
吾輩の知る限りではネプギアには常に何らかの意志が存在していた。
それが、ない……？つまり、何も考えていないということか……？

「ミツケタ。」
「何…？」
「いタ！いたヨ！まジェこんヌだ！コロ死てヤる！」
「なんだ、この威圧感は……」

乾いた笑いで吾輩に剣を向ける女神。
……憎悪に堕ちたか。それでよく神を名乗れたものだ。
しかし手持ちの罠の種類は少ない。
見破られるのも時間の問題だな…。

「アハハハハハハ…！」
「……ふむ」

何も考えていないというのは単純に見えてかなり厄介だ。
単純な奴は一つのことしか考えない。だから誘導が簡単だ。
だが何も考えていない奴は本当に何も考えていない。だからあらゆる予想を上回る場合がある。
あのように狂うほどならなおさらだ。
…どうしたものか。
ともかく、周囲にランスシューターを設置しよう。

「死ね……シね屍ネ止ネ死ンでシマえぇぇええ！！！」
「向かってくるか…！」

高速で向かってくるネプギアに対し、設置したランスシューターで迎撃。
が、華麗に身を翻して避ける。そのような冷静さは持ち合わせている…いや、本能で避けているのだろうか。厄介だな。

「女神候補生ネプギアよ。何故吾輩に単騎でかかって来たのかね？」
「殺死テやル……！」
「最早言葉も通じないか……」

それでは、モンスターと何も変わりはしない。哀れな神よ。堕落した神に、未来はないというのに…

「どうやら、吾輩が手を下す必要もなくなってしまったようだな。哀れな女神よ。」
「……ハハはハはは！」

「女神よ。ラステイションだ。今ブレイヴの奴が貴様と、フェイク…女神候補生ユニを待っている。そして、我等が牙城、ギョウカイ墓場に赴け。貴様らの敵が待っている。」

「…！？ユニ、ちゃん……！」

転送ディスクを発動し、ギョウカイ墓場へ戻ることにする。

デッド・フェイク・デスペア。そして未だ動き出さないもう一人、四人のハンシン。

我らがザ・ハード四天王四人に続いて洗脳した女神四人。

そして一人ながら当千の力を持つネプギア。

この三つ巴がどう動くか……。

策を練り直す時間をブレイヴが稼いでくれればいいのだが、な…。

3－6（後書き）

～まじっくのおへや～

マジック「……。」【あ、とりっく。おかえり。】

トリック「む、マジックか。ジャッジとブレイヴはどうしている？」

マジック「……。」【じゃっじははかもり。ぶれいう〝はらすていしょんでふぇいくをまつって。】

トリック「やはり吾輩の読み通りか。あのブレイヴのことだ、愚直に待つだろうと思ったさ。」

マジック「……。」【ずいぶんあちこちいってるみたいだね。そんなからだでたいへんじゃない？】

トリック「我等ザ・ハード四天王に疲労は存在しない。だろう？」

マジック「……。」【だよねー。】

トリック「もう流れも佳境だ。我等のうち誰かが死ぬこともあるだろう。」

マジック「……」【そうだね・・・・・・】

トリック「では、また次回。」

3－7（前書き）

今回前半ギャグ後半ホラー回。

まさか、こんな作品でホラーが出るなんてね…。

あ、ネプギアしょっちゅう恐ろしくとか言われてるけど、気になったら【ヤッテヤルデス】で検索してみよう。それで出た怖い奴がそれだ。

作者はＰＩＸＩＶで見てトラウマになったから見てトラウマになって精神病になったりトラウマになったり何か合っても一切責任は取りません取れません。

3－7

～視点【トリック・ザ・ハード】～

ギョウカイ墓場に戻ると、相変わらず全長５０ｃｍのマジックが出迎えに来た。
…だれしも見かけによらないということで、マジックはこれでもザ・ハード１強く、そして単純でもない。マジェコンヌ様への信仰心も人一倍……。
いつもの奴を見ていれば、そうとはとても思えないのだが…。

「……。」【あ、とりっく。おかえり。】
「女神候補生を一人捕獲した。ワレチューに既に連れて行かせたはずだ。これで奴らにまともな女神は残っていない。いるとすれば、フェイクか。」
「……。」【……ふぇいくはぶれいう〝にまかせるよ。でももうすぐ、やつらはくるよ。そのつかまえためがみこうほせいをそたいにまじぇこんぬさまをげんせによみがえらせる。あれ？そういえばそのわれちゅーは？】
「吾輩は転送ディスクを渡してそのままだが。奴が何か失敗したとでもいうのか？」
「……。」【じゃっじはなにかしらないかな？】
「…聞いてみるか。」

「嫌味か？いや嫌味だなテメェぶっ殺すぞ」
「全く、毎度毎度短気だなジャッジ。短気は損気だ。」
「知るかボケ、俺はいつまでこの何もしねぇ奴等の見張りをしねぇといけねぇんだ、いい加減飽きてきたぞつか見張る意味もねぇだろ」

「ふん。だから短慮だと言うのだ。我等に敵対する女神はもはやネプギアとフェイクのみ。フェイクはブレイヴが担当している。んが万が一ブレイヴが破られた際にここに進行するように仕向けた。」
「袋のネズミってわけか。」
「そうだ。だから決して女神達に頼ろうなどと考えないことだ。奴らはあくまで保険だからな。」
「わぁってるよ。最初から殺す気しかねぇ。」
「勇ましいことだ。」

「は、はぁ～……。やっとついたッチュ…重いッチュー。」

む、ワレチューが着いたようだな。

「おそかったなワレチューよ。女神候補生はどうした?」
「この通り、背負って来たッチュ……。」
「へぇ。こいつもあの女神共みたいに縛っとくのか?」
「幼女を縛るとは褒められた行いではないぞジャッジよ」
「テメェが言うな」
「まぁ、この女神候補生はいわば素体だ。マジックがマジェコンヌ様復活の際の素体に使われるそうだ。」
「犯罪神にの素体に守護女神候補生をねぇ…。随分気の利いたことすんだな、テメェ。」
「吾輩は策士だからな。」
「ハッ。それで、俺は続いてここの見張りか?」
「ああ。貴様は迎撃部隊の一番槍だからな。」
「ま、殺せるんなら文句はねぇさ。あのムラサキのガキとの決着も付けてぇし。」
「大した戦闘狂どもだよ、お前もブレイヴも。では、吾輩らはマジックに素体を送るとしよう。ワレチュー、吾輩に任せるがいい。」
「お、お願いしますッチュ……。」

ワレチューが吾輩の頭に女神候補生を載せる。
それと同時に吾輩もマジックの元に移動し始める。

「……クショ…」
「む？何か言ったかジャッジ？」
「何も言ってねぇし聞こえてねぇよ。どうせ聞き間違いだろ？」
「む、お前にしては理解が速いなジャッジ」
「ウルセェ、さっさと行けそして死ね」
「ふむ、ではさらばだ。」

～視点【トリック・ザ・ハード】↓【フロム】～

「…どうする？」
「どうするって……。」
「どうするんですの…？」

湿地帯に潜んでいた私たち。
いや、正直「手こずっているようだな、手を貸そう（キリッ」とかやろうとしてたんだよ。
割とそういうのかっこいいでしょ？私はそう思う。
…まぁ、そんなこと言ってる場合でもないんだがな。

女神候補生ラムが死亡。ロムは連れ去られネプギアは暴走。
もう女神達駄目かもわからんね。
まぁそれはともかく、ネプギアはおそらくトリックの言うことを真に受けてラステイションに行きそうだ。
どうしたものかね。こちらとしてもユニを連れ去られると困るのだが、がすとがいる時点でネプギアが味方になるとは思えない。

どうにかしてラステイションに先に帰り、ブレイヴを何とかするしかないか……。

「ともかく、今のネプギアは災害か何かと思えばいい。できるだけ接触せずにラステイションに向かうぞ。少し無理があるが此処に来た時と同じくＶＯＢで三人乗りする。いいな？」

「ええ、りょうか……ふ、フロム……！」

「後ろ、ヤバいですの。」

「後ろがヤバい？…まさか……」

ギリギリとカラクリのように後ろに振り向くと――――

「ゆニちゃん、ミィつケタ♪」

ニタァ、という擬音がよく似合うほど恐怖をあおりそうな笑顔で、ネプギアは私達を見ていた。

「んマッジ、かよォ！」

「フロム、下がって！」

咄嗟に後ろに飛び跳ねると、横からユニが放った銃弾がネプギアを襲う。

一瞬の時間は稼いだ。十分だ。

「そこでずっと彷徨ってろ！デスペア！」

「合点承知ですの！」

ネプギアの真下にスモークを撃ち込み、デスペアが幻覚を魅せる。

何も見えないってのは感覚が一時的に研ぎ澄まされる。研ぎ澄まされるっていうのは幻覚が入る隙ができるってことだ。

恐らくあの状態のネプギアにも効くだろう。

「撤退するぞ！デスペアはできるだけ時間を稼げ！スモークは切らさねぇからな！」

「了解…！」

「いやぁこわいこわいですの。」

『どコ…！？ユニちゃン！オネぇチゃん！サビしいヨぉぉぉぉオ！！！』

ったく、何の怨嗟だよ…！

いくら逃げても響くネプギアの声。

あいつを一目見た時の本能的な恐怖。

ああ、怖い。あいつは恐怖そのものだよチクショウ。

デスペアは平然としているが、ユニの精神的ダメージはデカいだろう。

…この後ブレイヴと戦えるのか……？

…いや、まず今を考えろ。逃げられなければ死あるのみだ。

止めてあるＶＯＢを緊急起動。武装も起動し、発進用意を進める。

「ユニ、がすと、乗れ！」

ユニが私の後ろに、がすとが私の前に座る。若干苦しいが、まぁ大丈夫だろう。

激しくアクセルを吹かし、車体を１８０。回転させて走り出す。

三人乗りのハンデはあるがＶＯＢは私が改造に改造を重ねた変態バイクだ。そう追いつかれることもない。

「行くぞ！」

ルウィー領内を超高速で突っ切る。
最高速は出せないが既存の乗り物では最も早い部類だろうと思ってはいる。

「流石に巻いたわよね…？」
「おいやめろユニ、考えたくない」
「確実にフラグですの。」

だがまぁ、ミラーにはネプギアの姿は無い。
少しの間は安心できるだろう。と思って前に向きなおす

「…おい……」
「嘘でしょ……？」
「……。」

「コンにチは……♪」

私達の眼前には、私達の方向、つまり後ろを向きながらＶＯＢと同等のスピードをだし
私達に歪んだ笑顔を向けた

ネプギアがいた。

3－7（後書き）

～まじっくのおへや～

【いまはだれもいません。】

3－8（前書き）

短めだけど、今回でｃｈａｐｔｅｒ3終了。何だかんだで進むもんだなぁ…。
全ｃｈａｐｔｅｒがいくつあるかって？

＼気にするな！／

3－8

～視点【フロム】～

「ユニ、牽制射撃！」
「了解！」
「宛ら縦スクロールシューティングの中ボスですの。」
「あんな中ボスがいるか！」

ユニが目の前にネプギアに大量の銃をぶっ放し、ついでに私もＶＯＢについたビームマシンガンをフルで撃ち込む。
がすとは…何もするな、頼むから。

「キャはハはハハはは！！！！」

撃ち込まれた際に舞い上がった砂塵を振り飛ばし、私達に銃を向ける。無傷かよチクショウ。
ＶＯＢを撃ちぬかれて爆発でもすれば、私ら全員お陀仏だな。マジで。

「フロム、効いてないわよ！？」
「知らん！牽制は当てるもんじゃねぇ！いいから撃ってろ！」
「ま、少し手は貸してやるですの。」
「テメェの命もかかってんだよ！少し黙ってろ舌噛むぞ！」

軽く前を持ち上げてアクセルを思いっきり吹かす。
元々ホバーで浮いているため思いっきりＶＯＢの車体が跳びあがる。

「ちょ、ふ、フロム！？」

「ユニ！いいから撃ってろ舌噛んでも撃て！」
「う、う～…！了解…！」
「ついでに手土産もくれてやるですの～。」

ユニが銃を撃つついでにがすとが爆弾をばら撒きだす。
流石に反応しきれなかったのか止まって私達を見ていたネプギアは、
私達の着地と同時に爆破に巻き込まれたようだ。
……これで死んでくれりゃ…いや、死なれたは死なれたで面倒なんだよな……。

「とにかく……逃げる！それ一択だ！急いでブレイヴを見つけるぞ！」
「恐らくあんまり効いていないですの。逃げるんだよォー！ですの！」
「あんなネプギアと戦って大丈夫なの…！？」
「どっちがですの？」
「誰でもよ！」

車体を９０。回転させ、ラステイションに向かう。
今、私の頭には化物（アレ）から逃げることで一杯だった。
そりゃあさ、気づくわけがないさ。
効いてないとは思っていたけどさ。

「アハは♪」

まさか、既にＶＯＢが撃ちぬかれていたなんて、さ。

～視点【フロム】↓【ブレイヴ・ザ・ハード】～

ラステイションの上空。遥か遠く、澄んだ空。
私は来る好敵手をただ無心に待ち続けていた。

我が宿命の好敵手、フェイク・ザ・ハード。
そう。私と彼女は最初から運命の赤い糸で繋がっていたのだ。
ならば今その赤い糸の宿命に従い、彼女を打倒す。それが私の正義、
そして生きる意味だ。
……どこまでも遠く、どこまでも美しいこの空。
私はこの空を愛している。
正直いうなれば、私はマジェコンヌの目的だの、女神の構想だの、
そんなものはどうでも良いのだ。
ただ、この果てしなく愛おしい大空を、自由に飛ぶことができるのなら。

……来たか。
む…？この機動音…フェイクではない……。

「別の女神か！」
「キャハハハハはは！！！」

一気に間合いを詰め、二本の銃剣を振り下ろす女神。
私は愛剣にて受けるが、中々に重い。
しかし、私の心には何一つ響かない！

「確かに太刀筋もよい、威力もあるよい剣だ。しかし私の心には一切響かない！私の心は、正義は！フェイクを渇望しているのだ！」
「ユニちゃンはワタ死のモの……！まジぇコンヌがアァァぁぁぁァア！」
「憎悪の剣は私には通じん！」
「マジぇこんヌなンカいるカラ、セカいハァアァァァァァァ！」

「存在そのものが矛盾している貴様が言えることかァ！！！」

女神の剣戟を切り払い、愛剣をネプギアに突きつける。
その瞳には憎悪しか存在しない。私は決して、憎悪では倒せん。

「貴様らは守護女神だろう！守護女神とは民を守り国を守る君主であろうが！その女神である貴様が憎悪に飲まれるとは、片腹痛い！
私は断言しよう！そんなことでは私はおろかジャッジすら倒せないだろう！」

「ふざケルな…！」
「む……？」
「フザケルな！ワタ死カらぜんブうばッタクせに！がイアクのクセにィイイイイ！！！」
「フェイクと戦う前の余興には十分だ。君の想い、私が斬り捨てて見せよう！」
「アァァアァァァァァァァ！！！」

激昂し目に留まらぬほどの速度で二本の剣を振る女神。
速く、重い剣。私の剣は一本しかないためか、徐々に私の装甲にも傷が付き始める。
そして少しずつ滲み始めて来たこの女神の想い。
…独占欲、か。
あまり褒められたことではないが、それが君の想いならば受け止めよう。
そして――――

「寸劇は、これにて終幕とさせてもらう！」
「オォォォォォオォォォォォォォ！！！！」
「斬り捨てゴメェェェェェェエエン！！！」

女神の二本の銃剣、我が一本の大剣。
三本が交差し、そして――――――――。

～Ｃｈａｐｔｅｒ　Ｅｎｄ～

3－8（後書き）

～次回予告～
人間を救うのはいつだって人間。
では、女神を救うのは女神なのか？
女神に人間は救えない。では人間に女神は救えるのか？
それを知るため。例え無駄だとわかっていても。
進まねばならない道は、存在するもの。
例え、それが奈落も、煉獄も。
地獄すら、生ぬるい道だったとしても。

次回、超次元ゲイムネプテューヌｍｋ２＋。Ｃｈａｐｔｅｒ４．【追憶を駆ける風】。

風は駆ける。
愛する人を、親しき女神を、全ての生命を守るために。

４－０（前書き）

Ｃｈａｐｔｅｒ４の主役はずっと忘れかけられていたあいつ。
割と明るめ予定。３ほどじゃあないと思うけど……。

4－0

～視点【アイエフ】～

ふいに目が覚める。
先ほどまで見ていた火山の風景は、綺麗な緑色の天井に変わっていた。

「ここは……」
「あいちゃん！」

ふと、ずっと聞きき続けてきた声がした。
振り向くと、コンパが、目に大量の涙を浮かべて佇んでいた。

「コンパ……？」
「あいちゃあああああああん！！！」
「にぎゃあああああ！？」

突然コンパが私に抱き着く。
その衝撃で倒れ込むついでに、私の体に強烈な痛みが走る。

「あいちゃん、あいちゃあああん……」
「ちょ、コンパ……？どうしたのよ……？」

「ああ、眼覚めたんやね。」

コンパとは別に、さらに声が。
扉の方を向く。
……誰？

「ウチは５ｐｂ．。あんたらを助けた者や。」
「正確に言えば私もだ。私はケイヴだ。」
５ｐｂ．…っつうと、世界でも有名なアイドル歌手…。
一体なんで……？
…あれ？

「私達、を…。ねぇ、一体何があったの!?コンパ…そうだ、ネプギアは!?がすとは!?日本一は!?」
「ま、まぁまぁ！少し落ち着きいや！」
「お前を撃ったのは女神候補生ユニだ。その後がすとと名乗る少女が我々の前に現れ、共に去って行った。」
「…ぇ……？がすとが…？じゃあ、日本一は、ネプギアは…！」
「少し落ち着け。まだ傷は癒えきっていない。」

目を下ろすと、いつものコートではなく、素肌に包帯がサラシみたいにまかれている。
その１か所が、赤黒く染まっていた。
……私は、撃たれたのか。

急に力が抜け、ベッドに倒れる。
……
何も考えられない。

「それで女神候補生、ネプギアだが……」
「ネプギアは……？」
「……」
「目が覚めてからすぐ、ゲイムキャラを強奪して逃亡したって…。」
「……!?強奪ってどういうこと!?」

「わからへん…チカさんはそうとしか教えてくれへんかったし…。」
「ゲイムキャラはどこにもいなかったそうだ。ゲイムキャラも失われ、これまで以上にリーンボックスはマジェコンヌの毒牙に晒されることになるだろう。」
「そんな……」
「…どうする。お前たちは、あの女神候補生と旅をしていたのだろう…？今や彼女も行方不明だ。」

目の前が、真っ暗になる。
ネプギア、何があったの……？あんたはそんなことする子じゃないでしょ…？
ねぷ子……私、ネプギアを任されたのにこの様よ…。
……。いや、まだよ。

「ケイヴ、って言ったっけ。私は、いつから動けるようになるの？」
「そうだな。銃弾もどうやら実弾ではなくエネルギー弾だったようだし、当たり所も良かった。無理はできないだろうが今すぐにでも動けるには動けるはずだ。」
「そう……。」

両手を軽く上げ、握って離して。
…うん、ちゃんと動く。

起き上がり、呻くコンパを軽く揺らす。

「今すぐにでも発つわ。ネプギアを、連れ戻さないと。」
「…そうか。私はリーンボックスから離れられん。こいつを連れて行け。」
「ウチのこと!?何でウチなん!?」

「私はリーンボックスから離れられないと言ったろう。アイエフ。先ほど言っていた日本一、という奴の特徴を教えてほしい。私達のほうで探しておく。」
「う～…ウチが同行するんは決定なんね……」

その後、数刻経って。
いつものコートに身を包んだ私、若干涙目のままだけど一応回復した模様のコンパ。
そして、物凄く笑顔の５ｐｂ.
…私達３人で、教会を出た。

……待っていなさい、ネプギア。少し待ってて、ねぷ子。
二人とも、私達が連れ戻して見せるわ。

４－０（後書き）

～まじっくのおへや～

マジック「……。」【ひまだね。】

ジャッジ「……ああ、暇だ。」

ブレイヴ「暇の極みだな…。」

トリック「暇とは恐ろしいな…頭の回転が遅くなる…。」

ジャッジ「幼女ってちいせぇガキのことだろ？マジックとかそのまんまじゃねぇの？」

トリック「マジックのように物理的に小さいというわけではない。それ以前に【小さい】ではなく【幼い】だ！」

マジック「……。」【どっちでもいいよ。】

ジャッジ「どっちでもいいな。」

ブレイヴ「……。」

トリック「……暇だな…。」

マジック「……。」【そうだ、しりとりしよう。】

ジャッジ「いいな。言いだしたマジックからだろ？」

ブレイヴ「ふっ、喉が鳴るな。」

トリック「吾輩に語彙で勝てると思うなよ？」

マジック「……。」【みかん。】

ジャッジ「……。」

ブレイヴ「……。」

トリック「……。」

ジャッジ「暇だな…。」

ブレイヴ「暇だ…。」

トリック「暇だなぁ…。」

マジック「……。」【ひまだね…。】

４－１（前書き）

～お詫びと訂正～

４－０書いた後に気付いたんだけど、３－０の時点でアイエフ起きてたみたいなんだよね。このままだと色々あれだったんで起きていたのをコンパに修正しておいた！

思い付きでやるとこうなるからね、ほんと。マジすいませんでした。

……（棒椿ちゃんの学園ものマダカナー）

4―1

何時振りかに帰って来たプラネテューヌ。
ねぷ子を助けるため、ネプギアと私とコンパの三人で旅立ったと思ったら、帰ってくる頃にはネプギアは発狂して行方不明、代わりには、よくわかんない５ｐｂ．…。
まぁ、今は帰って来た感動が何よりも大きかった。

「帰って来たわね…プラネテューヌ。」
「です…。」
「へー、ここがプラネテューヌなんやなー。やっぱ色々ムラムラしいわ～。」
「……５ｐｂ．？ムラムラしいって、何？」
「ん？紫々しいの略や。何や？まさかああいう方向で考えたん？」
「そ、そんなことないわよ！ねぇコンパ！？」
「そんなことって、どんなことです？」
「うっ……そ、それは～……。」
「なんやアイちゃ～ん？まさかこんな純真無垢な子手籠めにしとった～ん？」
「ば、馬鹿言ってんじゃないわよ！」
「てごめ…？」
「ああもういいから！早く教会に行くわよ！」

やっぱり、５ｐｂ．は放っておくとロクでもない。
コンパが毒される前に、なんとかしないとな…。
とかそんな考えながら、携帯をいじくりつつ教会に向かった。

「御帰りなさい、アイエフさん。コンパさん。そしてようこそ、５ｐｂ．さん。プラネテューヌへ。」

教会に入ると、発つ時と同じような微笑を浮かべたイストワール様が私達を待っていた。

…複雑な気分。

「あの、イストワール様…。」

「ネプギアさん、のことですか？」

「…ッ、はい……。」

「……。」

「ネプギアさんは、リーンボックスから突然ここに飛来しました。そして、プラネテューヌのマジェコンヌを殲滅してからルウィーに向かいましたが…その後の行方が分かりません。Ｎギアの反応も、です。」

「じゃあ……！」

「はい。完全に行方不明です。最期の反応はラステイションでしたが……」

「ラステイション…あそこももう女神がいなくなっていて……とにかく、ネプギア捜索に向かいます。いいわねコンパ、５ｐｂ．？」

「はいです！」

「もーまんたいや！」

コンパと５ｐｂ．の返答を見て、イストワール様がため息ひとつ。

正直、苦労人なんでしょうね。人かどうか怪しいけど。

「わかりました。こちらでも色々情報は集めさせていますので、アイエフさんの携帯にその都度連絡を送ります。ネプギアさんに会っ

たら、せめてゲイムキャラだけでも回収してください。彼女等がいなければ、ギョウカイ墓場に行くことすらできないのですから。」
「…はい！」
「……そうだ、一つ提案があります。あなた達もあったことがあるでしょう傭兵、フロム。彼女の元にユニさんともう一人…がすると、と言いましたね。その二人がいました。……何かネプギアさんに追われているようでしたので、彼女等を探すといいでしょう。私が探してもいいのですが、三日はかかりそうなので。」
「だとすれば、私たちが直接探したほうがいいかもしれませんね…。」
「…話なごーない？」
「イストワール様のありがたいお話です。長くても我慢ですよ。」
「ウチ我慢嫌いやないけど苦手なんや～……。」

「後ろ、少し黙ってなさい。では、行ってきます。」
「あら、まだ帰って来たばかりですよ？少し休んだらどうです？」
「そんなことしてる暇ありませんよ。こうしている間、ねぷ子もネプギアも苦しんでいるんですから。」
「…そうですね。いってらっしゃい。アイエフさん、コンパさん、５ｐｂ．さん。」

「「「いってきます！」」」

～視点【アイエフ】↓【ジャッジ・ザ・ハード】～
つまらねぇ、ああつまらねぇ、つまらねぇ。
……我ながらひでぇ一句だなぁオイ。

女神共が襲ってきて、マジックが返り討ちにして、縛って、洗脳して。
俺がやることはただの見張り。こんなの四天王のやることじゃねぇ

だろ、ったくよ…。
最初のころはまだ活気もあったってのに、トリックの奴態々洗脳しやがってこいつらウンともスンとも言いやしねぇ。
あーやだやだ。ブレイヴの身の上が羨ましいことこの上ねぇよ畜生。

暇だな……。
ああ暇だ、すごく暇だよ、コンチキショウ。
…字余り。

「ジャッジ。」
「あん?……んだよブレイヴ、俺に自由自慢か?」
「それもいいな。」「おい」
「冗談だ。それより一つ、気になることがある。」
「…あぁ?頭使うのはトリックの分野だろ?何だって俺に。」
「何、君の方が適任だと思ったからさ。それ以上でもそれ以下でもない。」
「へーへー…。で?んだよ」
「この四女神だが…妙なのだ。」
「どこがだよ?」
「……それを具体的に説明することはできない。しかし、何か違和感がある。そういったものを区別するのは君の分野だろうジャッジ?」
「……チッ、テメェの事に乗るのは気に食わねェが俺は暇だ。やってやるよ。」

俺の付属品の斧。
ザ・ハード1わかりにきぃ俺の能力、【二極化】。こいつの発動には俺の斧が必要だ。
曖昧な条件をどちらかに固定させる。
俺の斧は条件を指定し、こうならばこうする、こうでなければこう

ならない。これを指定して振るだけでいい。
ま、【嘘付きは死ぬ、嘘をついていないのならば死なない】とでもやれば、大抵の奴は死ぬんだろうがな。

「さて、じゃあどうやってやるかいブレイヴ。」
「そうだな。【マジェコンヌに屈服していなければ斧が当たる、していれば当たらない】でいいだろう。」
「おっし、やってやるか…！」

大きく斧を構え、横に振る。
嘘をついていなければ斧はすり抜ける。

勢いよく振ったため、当たれば縛っている管は千切れるだろう。
思いきり振り切る。
軽い手応えがあった。ということは……

「おいブレイヴ、【アタリ】だ。」
「ほう…。トリックの洗脳を免れていたとはな。一体誰かな？」

斧の柄を吹き飛ばした方向に向ける。
その方向には、確か……俺と同じような斧を持っていた白女神が壁にめり込んでいた。

「どうする、ブレイヴよ。」
「そうだな…少し、我等と一曲願うとしよう。」
「テメェの表現は一一遠回しでわかんねぇんだよ。俺はパスだ。」
「暇だったのではないのかな？」
「…チッ。テメェに付き合うならマジックか暇のがマシなんだよ。」
「そうか…。では、私は彼の女神を連れていこう。少し、良い作戦を思いついたのでな。」

「そうかい……。」

ブレイヴは気絶したらしい白女神を軽く持ち、奥に進んでいった。

……ああ、また暇になったな。ブレイヴに付き合ったほうがマシだったかもしれん。

ああ暇だ、とにかく暇だ、暇なんだ。

…我ながらくだらねぇ一句だ。

4－1（後書き）

～まじっくのおへや～

マジック「……。」【なんとこんかい、じゃっじじゃなくてとりっくがここにきたといういじょうじたいはっせい！】

トリック「吾輩がいるだけで異常事態とは失礼な話だなマジック。」

マジック「……。」【こまかいことはきにするな。ひょーひがはげてしろくなるぞ】

トリック「そんなことにならないよう、吾輩は常に体は清潔にしている。ぬいぐるみは綺麗さが命だからな。」

マジック「……。」【ぬいぐるみみとめるんだ・・・・・。】

トリック「さて、今回久々のジャッジ本編登場と同時に活躍だな。」

マジック「……。」【しろめがみがせんのーされてなかったりゆうは】

＞ブレイヴは気絶したらしい白女神を軽く持ち、奥に進んでいった。

マジック「……。」【このへんかいてるときにおもいついた。それまでなんとなーくだったんだけどね。】

トリック「今日始まったことではないが、些か適当過ぎはしないか？」

マジック「……。」【それでちょっといたいめみたよ。しょーさいはまえがきさんしょー。】

トリック「さて、今回はここまでにするか。」

マジック「……。」【しょうじきあいえふへんのながれとかそんなかんがえてなーいしねたもなーい！しまからぜんぜんでられなーい！どうしよー！】

トリック「懐かしいネタだな・・・作者の世代のゲームじゃないだろう…」

４－２（前書き）

Ｃｈａｐｔｅｒ４は短め。４－５まで行くかどうかのレベル。
そしてその分濃縮予定。
ん？元が薄味なのに濃縮して意味あるのか？

／気にするな！／

4－2

三度目のラステイションの町並み。
ゲイムギョウ界にはリーンボックスとラステイションしか多段階層都市は存在せず、あまり慣れはしない。
何が一番慣れないって階層同士のエレベーター。これ、何を考えてるのかわからないが金網なのだ。上下だけ。横周囲はガラス張りなのに。何の悪意よこれ。プラネタワーのエレベーターはまだ乗りやすかったわよ。

だが５ｐｂ．はどうやらリーンボックス出身だけあって結構慣れているようだ。
コンパは……何だかんだで適応力高いし。
結局私だけ酔ってるのか…うぷっ……。

や、やっと着いた……。
うぷ、気持ち悪い…

「あいちゃん……？大丈夫です…？」
「なんとか……。」
「アイちゃんってば軟弱やなぁ。」
「うっさい……」

コンパに背負われながら、私達は教会の中に入る。
そこには、妙に深刻そうな顔のケイがいた。
基本的にニヤケたようなムカツく顔のこいつにしては、珍しい。

「待っていたよ。アイエフ君、コンパ君、５ｐｂ．君。君たちの目

的はイストワール、そして箱崎チカから聞いている。ネプギアと、ユニだろう？」
「…そうだけど。」
「……ユニはわからないが、ネプギアなら心当たりがある。ついてきてくれ。」

そういうと、ケイは教会の奥へ進んでいき、私たちはケイについていくことに。私はコンパに背負われたままだけど。

ケイに連れられた教会の奥。エレベーターを降りた先。
恐らく地下だろう。薄暗く、長い通路に点々と置かれた明り。
不規則な模様の壁・・・岩盤。これじゃあまるで、前時代の牢獄じゃない…。

「うっわくらっ！こなとこいたらどうしても気落ちるでー？」
「５ｐｂ．ちゃん、静かにするです。アイちゃんたちが話してるです。」
「ねぇ、ケイ…？あんた、ネプギアの居場所を知っているんでしょ…？」
「この先だよ。この先に、彼女はある。」
『アアアア

「ぎあちゃん…です…！？」
「今の、人が出せる声やないで…！」
「…先に進むよ。そこで説明することが山ほどあるのだから。」

重い扉の先には、まさに牢獄のような光景が広がっていた。
周りには拷問器具。こんなもの、知っているのが嫌になるわ…。
その奥の壁に、両手両足を繋がれたネプギアがいた。
いつも来ていたセーラー服もボロボロ。出た肌も切り傷や焼跡だらけで、女の子のなる状態とは思えない状態だった。
さっきの叫び声を最後に気絶したのかしら…。

「ケイ…！何でこんなことを…！」
「こうでもしないと僕たちが殺されるんだよ。事実ここにいれるまで12人の兵が死亡したのだから。」
「…何があったのよ……。」
「……わかった、説明しよう。」

～視点【アイエフ】→【ケイ語り】～

ネプギアを発見したのは昨日の昼ごろだ。上空から女神が落ちてきたらしくてね。至急保護したんだ。
酷く傷ついていてね。上空、それも僕たちが探知できないほどの高度で戦っていたのだろう。

問題はここからだ。
目が覚めたと一報が入った直後、ネプギアは侍女や警備兵を皆殺しにしていたんだ。
その時は合わせて5人だったがね。
僕はネプギアが錯乱状態にあるのではないかと考え、落ち着かせよ

うと説得し始めた。だがちっとも効果が無くてね。最早モンスターだよ。彼女は。
何を言っているか全くわからなかった。先ほどの叫びのような声しか出さなくてね。
さらに5人の貴重な兵を失った。
犠牲の甲斐あってか、こうしてネプギアを捕らえることに成功し、今ここに幽閉してある。
ただ、その時に置いておいた兵二人は、いつの間にか殺されていたけどね。

…理解してくれたかい？
もう彼女を女神だと思わないほうがいい。コレは残骸だよ。女神候補生ネプギアのなれの果てだ。

～視点【ケイ語り】↓【アイエフ】～

「そんな……。」
「あいちゃん……！」

急に力が抜け、座り込んでしまう私。
なんとかコンパが押さえてくれたけど、自分で立てるような気がしない。
……こんな絶望を味わうのは二回目、ね…。
ねぷ子を助けられず、むざむざとやられ帰って…。
ねぷ子から託された最後の希望のネプギアが、今やこの姿……。

「……？ケイ言うたね？なんかオカシイで？」
「おかしい……？何がだい？」
「外の音が変や……。声に、爆発音……？…これ、悲鳴や！」
「悲鳴に爆発音…？テロかい！？」

「わからへん、さすがに音が小さすぎや！アイちゃん、コンちゃん！行くで！」
「…ごめん、５ｐｂ．、コンパ。先に行ってて……私、もう少しここにいるわ……。」
「あいちゃん！！」
「…僕は先に行っているよ！」
「ウチもや！はようきてなぁ～！」

５ｐｂ．とケイが走り去り、牢獄の中には、私と、私を心配そうに見つめるコンパ。そして、ネプギア。
…どうしてかな。動けないわけじゃないと思うんだけど…動きたくないのよね。
知らず知らずのうちにネプギアに頼り切りになって、私も弱くなったのかな。

「コンパ。コンパも先に行ってて。私は、ネプギアと話さないといけないから。」
「……だいじょうぶ、です？」
「当然よ。ネプギアが、私やあんたを傷つけるようには思えないもの。」
「…わかりましたです。絶対、来るですよ！」
「勿論よ。」

これで牢獄の中には私とネプギアだけ。

「ネプギア。もう聞こえないとしても、たとえ独り言でもね。私はあんたに謝らないといけないのよ。」

ネプギアは、返事を返さない。
あの元気そうな笑顔も、コンパと一緒になって私をからかおうとし

たときの顔も、あの、ねぷ子との仲好さそうな光景も。
もう、見れない……。
見れない…。

「…ッく、ぅ……！」

いつの間にか、私は声を殺して泣いていた。
駄目、気づかれたら、ネプギアはきっと心配する。ネプギアも、今はねぷ子みたいに苦しんでるのに、私のことを心配させたくなんてない……
なのに、もう、ネプギアが戻らないことがどうしても心に響いて、涙が、止まらなくて。

「ねぷこ…！ねぷぎぁぁ……！」

膝を抱えて、ネプギアの目の前で、私は情けなく、泣いていた。

～視点【アイエフ】→【ケイ】～
エレベーターを上り、扉が開く。
扉が開くと、途端に５ｐｂ．君が言っていた通り、悲鳴と爆発音が響いていた。
……何があったんだ？

「総員、状況報告！」
「突然、空が奇妙な色になり、マジェコンヌと思わしき兵器による砲撃がラステイションに！被害は不明！」
「ギルドのメンバーに迎撃要請を！砲撃はどこからだ！」
「北方、おそらくルウィーまでの街道、ラステイションから３ｋｍ地点！」

「リーンボックス、プラネテューヌに緊急連絡！ラステイション警備兵は住民の避難誘導を！船でできるだけ多く避難だ！人数漏れは起きそうか？！」
「……いえ！警備隊全員まで入れそうです！」
「そうか…。総員退避！警備兵の誘導に従ってラステイションを脱出してくれ！」
「「了解！」」

指示の元、教会からも多くの人々が避難を始める。
これで残るとすれば僕とギルドの人たち、そしてアイエフ君達か…。

「５ｐｂ．君、コンパ君。君たちも避難したほうがいいんじゃないかい？」
「…いいや。ウチは行くで。マジェコンヌ言うたら女神様たちの敵ちゅうことや。がすとちゃんとは、ちょうとした因縁あるしな。いるかもしれへん。」
「わ、わたしだって！あいちゃんとぎあちゃんを守りたいです！」
「……そうかい。だったら頼むことは一つだ。砲撃してきているマジェコンヌの兵器を破壊してほしい。アイエフ君には伝えておくよ。」
「了解やで！」「はいです！」

意気揚々と教会を出て行った二人。
……教会の地下エレベーターは頑丈だし、通気口もある。もし教会が崩れたとしても、脱出はできるだろう。

……。

三年前、ノワール達女神が行方不明になり、ゲイムギョウ界全体の

女神のシェアは急落した。
女神候補生達の尽力によりなんとか回復し始めているが、その女神候補生も全滅……。
これから、何が起こるのだろうか。

時代は移り変わるものだ。指導者も、時の流れに従って変わっていく。
古い書物によれば女神が存在せず、人間のみで生活していた、という記述が存在する。
今となっては女神の加護なければ人間は生き残ることはできないだろう。
それはつまり、人類の衰退を意味している。
……もし仮に、これから人間のみによる統治が始まるとするのなら。
僕たち教祖に存在は許されないだろう。
そうでなくとも、女神が存在していないのに教祖もなにもない。

……イストワール。西沢ミナ。箱崎チカ。
先に、あちらで待っているよ。

そう呟いた途端。天井で爆発が起き、瓦礫が僕に押し寄せた。

4－2（後書き）

～まじっくのおへや～

マジック「……。」【じゅあるせいじん、かくごしろ！】

トリック「小癪なマジックめ！」

マジック「……。」【べーたがん！】びー

トリック「グギャアアアアア！！！！」

ジャッジ「…何してんだお前ら、馬鹿だな、アホだな、死ねよ」

トリック「ふっ、ジャッジのような凡愚にはわからん遊びだ。」

ジャッジ「遊びの時点でわかりたくねぇよ」

マジック「……。」【ちゃーじまんえん！ごっこ。じゃっじもやる？】

ジャッジ「やるわけねぇだろうが」

マジック「……。」【おるかはかせ、おゆるしください！】ポイッ

トリック「ぬおぉぉぉぉぉぉぉぉ……」ドカーン

ジャッジ「付きあってらんねぇよ……。」

4－3（前書き）

シャフト、お許しください！

ほら、最近まど〇☆マギカゲーム化したじゃん？だからゲイムギョウ界だってそんなこと起きたっていいじゃない。いいじゃない。仕方ないじゃない。

4－3

「ネプギア……。」

いつの間にか涙も枯れ、悲しくてもなくこともできなくなっていた。
ネプギアの名前を呼んでも、一切反応はない。
…自分が、ネプギアだっていうことも忘れてしまったのかな…。
だとしたら、私はねぷ子になんていったら…。
いや、それ以前にねぷ子を助けることすらできない……。
どれだけ後悔しても足りない、どれだけ謝っても足りない。
……どうすれば贖罪できるかなんて、まったくわからない。

……私、一人じゃ何もできないのよね。
コンパみたいに治療したり、５ｐｂ．みたいに音を聞き分けたりなんてできない。
私って、今まで何かしたっけ…。

……
ふと、自分の両手が目に入った。
袖に隠してあるカタールを出すと、自然と刃が自分に向く。

…いや、ダメ。こんなの、ただの現実逃避。
こんなことするぐらいなら、もっと考えることがあるはずよ。
……

「そうだ……！」

何で、ずっと忘れていたのだろうか。
イストワール様の奇跡があったじゃない。二倍の代償と共に起きる奇跡が。
……以前、諜報部の一人がイストワール様に「彼氏が欲しい」と願った次の日、彼氏ができたと喜んでいたが、同日、転んだ時に通り縋った車に轢かれて、死亡した。
……私が、ネプギアを助けてほしいと願った場合、どのような代償になるかなんて想像もできない。
正直、死ぬのは間違いないと思う。
でも、私はそれでいいとは思っている。コンパには悪いけど、許してくれ…ないわよね。やっぱり。
だけど、これが私なりの贖罪。私なりの感謝の気持ち。
……絶対に助けるわ。命なんて安いものよ。特に私のなんてね。

立ち上がって、カタールでネプギアをつなげた鎖を切り裂く。
倒れたネプギアを受け止めると、信じられないほど熱く、軽かった。
……。
ネプギアを背負い、牢獄を出る。
長く、無機質な通路を、一歩一歩進んでいく。

「ネプギア…。大丈夫よ…。絶対、私達が助けるから……。」

私には、こんなことを言って、自分を保つことしかできなかった。

～視点【アイエフ】→【数十分前　ユニ】～

「う、ぅん……？」

目が覚めると、ここは…街道？
さっきまで私達が走っていた街道みたいだけど……。

…痛い。死んではいなかったみたいね…。運が良かったのかしら。

そうだ、フロムと、がすとは……！？

周りには、ＶＯＢだと思われる残骸に、爆発跡の火……。

少し離れた所に、倒れている人影……フロム！？

上手く動かない身体を必死に引きずり、倒れた人影の傍まで進む。

……やっぱり、フロムだ。

光粒子化してないってところを見ると、死んではいないと思うけど……。

でも…息もないし、顔も青ざめてる……。

あ、あと、がすと……！

「酷い目、に…あったです、の……」

「がすと！無事、だ……」

私は、目を疑った。

または、脳を疑った。

目の前のがすとは血だらけで、立っているのもやっと、というぐらいにふらふらだった。

「がすと……！だいじょうぶ…！？」

「あまり、そう、と、は…言いきれな、いですの……」

「そ、そうだ！あんた、エリキシル剤とか包帯とか…！」

「鞄も、どこかに吹き飛んだですの…。それ、に……」

突然、私に倒れ込むがすと。

えっと、治療、治療しないと……！

「ちょっと待ってなさい、がすと…！」

手元にあるのは、予備に持っていたヒールボトル。
……効いてよね、と願いつつ、がすとに振りかけると、みるみる回復していった。
…正直、私自身が使うことはなくなってたしね。

「ぅ……。たすかったですの…」
「無事でよかったわ。……あとは、フロム…。」
「デッド……！」

フロムの方向に向きなおすと、相変わらず、粒子化はしていないけど死んだように倒れている。
……。

「フロム……。」
「……おかしいですの。」
「おかしいって、何がよ…。」
「フロム、もう死んでいるですの。なのに粒子化していない……？」
「死んでる……？そんな、そんなわけないでしょ！？現にこうやってまだ形があるじゃない！」
「だからおかしいと言っているですの。……一体何が…？」
「そんなことわかれば、悩むことなんてないわよ…！さっきのヒールボトルしかアイテムはなかったし…ＶＯＢに積んであったのも多分全部燃えちゃった…。」
「……！フェイク！離れるですの！」

突然がすとに引き寄せられる。
「何すんの」と言いたかったけど、そんなことを言える状況じゃなかった。
目の前のフロムから、黒い煙のようなものが噴き出していたからだ。

「何よ…これ……！」
「そんなの、私が聞きたいですの……」
「だいじょうぶなの…？フロム……？！」

私達はただ、フロムから激しく立ち上る黒い煙を見つめることしかできなかった。
黒い煙は徐々に空を覆っていき、場景が歪んでいく。
まるで、戦争みたいな光景。
銃弾、砲弾や罵声が飛び交い、誰にでも訪れる【死】。それをよく体現しているような感じだった。
悲鳴、血飛沫。そう見えるけど触れない、まるでホログラムみたいな光景は、徐々に不安定になりそうで……。

「…フェイク！」
「あれ……モンスター、よね……？」
「そうでなければなんだと言うですの！デッドは恐らく死んだ！だとしたらここから逃げるのが一番ですの！」

私達の周囲を囲む、まるで兵隊のような人間の姿をした【血】。
私たちに銃を向け、見るからに敵意満々だった。

「私には釜もないし、多分戦闘の役には立たないですの。フェイクが頼りですの！」
「……了解！」

『その必要はねぇ！』

「「！？」」

突然、空が割れた。

赤い空が割れ、青い空が垣間見える割れ目から、黒い何かが落ちてきた。

…誰……？ブレイヴみたいな奴だけど……。

「やっと、やっとかよオイ……！ずっと暇してたんだぜ俺わよぉ……！やっとテメェと殺しあえるんだ！なぁデッドォ！今から会いに逝ってやるよ！殺し会いになぁ！」

大きな髑髏のついた斧を振りかざし、堕ちてきたロボットは、そう吼えた。

4－3（後書き）

～まじっくのおへや～

マジック「……。」【じゃっじが「でっどがやっとやるきになりやがった！はかもりなんてやってられねぇ！」とかいってどっかいってしまったため、わたしひとり。】

マジック「……。」【ひとりなのに、だれにひつだんしてるんだろうわたし。】

マジック「……。」【べつに、ひつだんするひつようなかったり？じゃあしなくていいか。つかれるし。】

マジック「……。」

マジック「……。」

マジック「……。」

マジック「……。」

マジック「……。」

～この放送は、犯罪組織マジェコンヌの制作でお送りしました（？）～

マジック「……。」

４－４（前書き）

えーっと、今回は……
特に謝ることないかな？

そういえば、毎日更新目指した結果他所に比べて短いと思うような思わないような感じだが、どうなんだろうね？

4－4

～視点【現在　５ｐｂ.】～

ラステイションの北口を出ると、えろうごっつう光景が広がっていた。
ウチは今まで見たことぉなかったが、戦争のような光景や。
大多数の【何か】と【何か】が、互いに銃撃ちあって殺し合っている。

…問題は、【何か】が何なのか一向にわからんいうことや。
人の姿を取ってはいるものの、全身血みたいな模様で、正直見ていてええ気分はせん。
……なんなんや、こいつら。

「……っ…。」
「コンちゃん？」

ウチの横では、コンちゃんが自らの身体を抱きしめ、顔を青ざめて震えていた。
…そういや新人ナース言うてたな。……衛生兵にでもなってたかもしれんのか。世知辛いわな。

「コンちゃん。つらかたら戻ってもええんよ？アイちゃんのところにサ。」
「だ、大丈夫です……。こ、これをなんとかしないと、あいちゃんとぎあちゃんが危ないんです…！」
そう言いながらデカい注射器を構えるコンちゃん。

見るからに虚勢やが…でおうてそう日もないウチが慰めても効果はないやろ。
……アイちゃん、何しとるんや…？
…考えても仕方ない。
愛用のギターを取り出し、軽く合わせておく。
……。いける。

「コンちゃん、この戦線一気につっきるで。精々おっかなびっくりついてきいや。」
「はい、です……！」

すー、はー。
…

「戦争なんかやめて、ウチの歌を聞けェェェェ！！！！」

特別性のギターから放たれる音波。
砂塵やらを巻き上げ、人型共を薙ぎ払う……と思っていた。

何も起こっていない。
さっきと変わらず、目の前では激しい銃撃が繰り広げられてた。
…どういうことや。これはホログラムみたいなもんってことか？
……だとしたら好都合や。

「コンちゃん、どうやらこれはホログラムか何かみたいなもんや。臆することないで？一気に走り抜けてよさそうや。」
「……」
「コンちゃん？」
「ふぇっ！？は、はいですっ！」

「…無理はせんほうがええで？辛いんなら休んできいや。」
「だい、じょうぶ…です！わたしだって、誰かの役に立ちたいんですから！」
「ええ気合や。そんじゃ、行くで！」
「はい、です！」

激しい銃撃戦の中心に走り出す。
予想通り、ウチ等には銃撃が当たらず、またウチらを気にする様子もない。
何や、ただの足止めちゅうことか…。効果甚大なのがムカツクで。
とにかく、音をばら撒きながら走り続ける。
歌いながら走るっちゅうのはえろうキツいんやが、まぁ、そんなこと気にする暇もない。

……この元凶、許せはせんで！

～視点【５ｐｂ．】↓【アイエフ】～

「何よ、これ……！」

エレベーターに苦しみつつも着いた先。
まさに廃墟と言うべき、瓦礫の山が広がっていた。
ここは、さっきまで教会だったはず……！
だとしたら、皆は……！？

「コンパー！５ｐｂ．！ケイー！……誰か、いないのー！？」

…返事はない。
……あまり、考えたくない最悪の事態ばかり頭の中に描かれていく。
そんなことあるわけない。

どっかに避難してたりする。そう、きっとそうよ……。

「……とにかく、ネプギアを安全なところに避難させないと…。」

そう思った矢先。
直ぐ近くで、光の粒子が、空に徐々に上りはじめていた。
……光粒子、化…！？
まさか、ね……。

とにかく、一度ネプギアを大きな瓦礫に寝かせ、粒子の出始めているところを掘り出す。
徐々に光が強くなって行く。近いのか、もう終わりかけているのか…。
少し大きな瓦礫を投げ捨てた途端。
……最悪の事態が起こっていたことを、痛感した。

「ケ、い……。」

そう、ケイだ。
ケイが、その身体から徐々に光の粒子を出していた。
……死んでいる。

光がひときわ強くなった途端、ケイの姿は跡形もなく消え去っていた。
……。

「う、あ、ぁぁぁあぁあ……！」

目の前で知り合いが死んでいること。
目の前で、光粒子化が終わったこと。

……それが、何より衝撃だった。

そして、私の思考がどんどん薄暗くなって行った。

【もしかしたら、コンパと５ｐｂ．もこの中にいるのかもしれない。】

【もしかしたら、既に光粒子化が終わっているのかもしれない。】

信じたくはない。けど、そうしか考えられなかった。

目の前で、こうしてケイが死んでいたんだから。

「…ッ、あああああああぁあ！！！」

咄嗟に瓦礫の平なところに思いきり頭をぶつける。

…痛い。すごく痛い。

現実なんだ。夢なんかじゃ、ない。

……考えるのをやめるんだ。

まず最初にやることだけを見ればいい。

……ネプギアを、助ける。

私の今の存在価値。……そう。今はそれだけを見ればいい。

少し離れたところに寝かせていたネプギアを背負い、とにかく歩く。

目標は、最下層の港……！

コンパ、５ｐｂ．……どこかで、生きていて…！

４－４（後書き）

～まじっくのおへや～
マジック「……。」
マジック「……。」
マジック「……。」
マジック「……。」
マジック「……。」
マジック「……。」

～この放送は、犯罪組織マジェコンヌの制作でお送りしました～

トリック「ネタがなくなったな作者！！」
えへ☆

4－5（前書き）

ラスティション、お許しください！

一体この小説はどこに向かっているのか。
そしてこの流れでハッピーエンドになるのか（なりません）。
……どうすればいいんだろう。

4―5

ラステイション最下層に向かい、ネプギアを背負いながら非常用の階段を下り続ける。
瓦礫がまだ降り注ぐ中、とにかく降りていく。
港、船があればいいのだけど……。

「……ぅ、ぁ…。」
「ネプギア……。ッ…。」

熱にうなされているのか、微かにうめき声を出すネプギア。
こういうとき、何も出来ない自分が恨めしい。
私にできることは、こうやって運ぶことだけ。
ネプギア、もうちょっとだけ我慢してね……。

延々と最上層から下り続け、港に到着した。
視界には、ただ黒と灰色の港。
広い広い海と空。

――そして、遠目に見える、船。

……おそ、かった…？
背後で、大きな音が聞こえた。瓦礫が崩れるような音だ。
振り向くと、壮観だった多段層のラステイションが、崩れ始めていた。
咄嗟にネプギアを前に起き抱きしめて庇う。

聞こえるのは、只管瓦礫が崩れる音。

見えるのは、後ろから吹き荒れる砂塵。

自分の無力さを嘆きながらも、今はネプギアを、ずっと抱きしめていた。

～視点【アイエフ】→【５ｐｂ．】～

街道を只管突き進むウチとコンちゃん。
相変わらず周りでは戦争のようなホログラムが繰り広げられ、その悲鳴が、徐々にウチらの精神を削り取る。
ほんと、こんなこと考えた奴は流石やで……。
延々と進んで行くと、血みたいな奴等の他に別の人影が聞こえた。
…ん、見たことある波長やな。

「あんたたち……！」
「面倒な時に面倒な奴らに会ってしまったですの。やれやれ、困ったものですの。」

リーンボックスであったようわからん子供、がすとちゃん。
そして、ラステイションの女神候補生ユニ。

……何の因果かしらへんが、奇遇やね。

「久しぶりやない、がすとちゃん？」
「ユニちゃん！どうしてぎあちゃんを裏切ったです！？」
「コンパ……。」
「確かに久しぶりですの。しかし今私達は貴女達に構っている暇はないんですの。」
「おっと！幻覚は通じへんで！ウチの音、なめたらあかんで？」
「舐めるなんて、私にそんな趣味はないですの。それに……。私は

軍師ですの。前とはちょーっと違うですのー？」
「戦いは避けられへんね……コンちゃん、行くで！」
「……はい、です…！」

「さぁ、余興を始めよう。ですの。」

がすとちゃんが指を鳴らすと同時に、二人の姿が忽然と消える。
どうせこの戦争の風景に溶け込むつもりなんやろが、ウチには効かんで…！

「ウチの音から逃げられる思わんことやな！」

大きくギターを鳴らし、反響でがすとちゃんとユニを探す。
がすとちゃんはともかく、ユニは何か困惑してた様子。そう障害にならんでほしいけど…。

「コンちゃん、右にがすとちゃん、左斜め後ろにユニや！」
「はい、です……！」
音で探り当てた場所を教えると、コンちゃんは真っ先にユニの方向を向いた。
がすとちゃんやなく、ユニを倒すつもりなんやろか……？

「ばら撒いて、痺れさせるです……！」

コンちゃんが注射器を押すと、黄色く光る液体がまき散らされた。
麻痺液か何かなんやろか。

それが何かにあたり、悲鳴と共に幻覚が解かれた。
直撃したのか身動き一つできんユニが、膝をついていた。

「あ、っくっ……！」
「許しません、です…！あいちゃんを傷つけて、ぎあちゃんも傷つけて、あんなことに、なって……！みんな、みんな！ユニちゃんの所為です！」
「…ッ！コンちゃん！あかん！」

とっさにコンちゃんのセーターを引き寄せる。
それと同時に【何か】がコンちゃんのいた場所を通り、ユニちゃんに刺さった。
これ、ダガー……！？

「おや、フェイクに当たったですの。まぁどちらでもよかったにはよかったけど少し勿体無いことをしたですの。」

ユニに刺さったダガー。がすとちゃんのものらしい。つまり、がすとちゃんがユニを殺したいうこと。
なのに、がすとちゃんは相変わらずの無表情で、淡々と話していた。

「がすとちゃん……！あんた、仲間殺して何も思わないんか！？」
「はて。５ｐｂ、あなたはマネキンを壊して哀しみに暮れるようなタイプですの？」
「マネキンやて…！？あんたにとってのユニはマネキンと同価値言うんか！？」
「そう言ったじゃないですの。意外に察しが悪いですの。」
「あんた……狂っとるよ…！」
「褒め言葉として受け取るですの。私の絶望はいまだ暗く深い。まだまだ足りないですの。でも今がすとには武器がない。ここは逃げることにするですの。」
「……逃がすう思ってるん？」

ギターを構え、がすとちゃんに向かう。
がすとちゃんは幻覚さえなければどうってことはない。経験上やが。
…さぁ、どう出るん、がすとちゃん。

「フェイク。頼んだですの。」
「フェイク……ユニ!?ユニは今がすとちゃんが…!」
「…了解。」
「ガっ……!?」

突然、脇腹に衝撃が走る。
その方向を見ると、ユニが、銃を構えていた。
ユニは、さっき、死んだはずやで……!?

「いつからフェイクが死んだと錯覚していたですの?がすとが殺したのはただのスライヌですの。」

がすとちゃんの、小馬鹿にするような声が聞こえる。
痛いけど、血が、出てない…?
ゴム弾……!?

「では、失礼するですの。」
「……ごめんね、コンパ。」

一言ずつ言い残し、ラスティションの方向に歩き去って行った二人。
コンちゃんがウチの治療を始めた時には、もう見える範囲からもいなくなっていた。

……チクショウ。完敗や。

4－5（後書き）

～まじっくのおへや～

～いまはだれもいません。～

４－６（前書き）

攻略……じゃなくて、画集買いました。
実はフェイクは原作ユニより身長が高く（成長）なっていたという事実。
（ユニ：１４９→フェイク：１５２）

適当にやっちゃいけないね。というかユニ女神化して色々劣化しすぎだって…。体が。

そしてフロムはネプギア以下だったことが判明（フロム：１５４ネプギア：１５４、女神化時１５５）。驚き驚き。

4－6

……。

あれ。治まった……？

顔を上げ、後ろを振り返る。

瓦礫の山。まさにその光景だった。

空高くまで伸びていた多階層都市は視るも無残な瓦礫の山に変貌を遂げた。

……その間、私は何もできなかった。

そらに、少しずつ上がる光が見える。逃げ遅れた子がいたのかな…。

助けられなくて、ごめんね……。

これから、どうしよう……。

ラステイションから徒歩でプラネテューヌに行くには一週間はかかる。

……そんな長い間、ネプギアをこのままにしておくわけにはいかない……。

どうすればいいの……。私は、何をすればいいの…。

問うても誰も答える相手はいない。今このラステイションにいるのは、私とネプギア。コンパと５ｐｂ．！……。

そうだ。コンパと５ｐｂ．！

あの二人、どこかで逃げていればいいけど……まさか…！

「そんなこと、ないわよね……？」

立ち上る光に向かって呟く。

まさか、そんなこと。言葉で否定してみてもそう思ってしまっては意味がない。

……。

コンパ、５ｐｂ．……！

「これが、ラステイション……！？」

「いやはや、酷いありさまですの。これで帰る所もなくなってしまったですの。かあいそかあいそですの。」

「その小馬鹿にしたトーンで慰めるのやめてくれる……？」

ふと、聞き覚えのある声がした。

それと同時に、危険だと、本能が叫んでいた。

咄嗟にその方向を向き、ネプギアを庇う。

正直、私はトラウマが出来ているのかもしれない。

……あいつに。

「おや。アイエフじゃないですの。そして女神候補生ネプギア…だったモノ。」

「…あ、アイエフ、ネプギア……。」

「がすと……ユニ……！」

「そんな睨まないでほしいですの。がすと達はただ逃げてきただけですの。避難民にすらこの仕打ち。泣けてきそうですの。」

「そういうことはお願いだから少しは表情か声色変えて言ってくれない？」

がすと。ユニ。

リーンボックスで私達を裏切り、マジェコンヌに下った。

その際、私を撃った……とコンパは言っていた。

正直、もう完治しているはずの場所がズキズキ痛む。トラウマ、か…。

マジェコンヌに下ったこいつらが、ネプギアに何をするかなんて知

れないし……！せめて、守らなきゃ
…！

「別にそのネプギアだったモノに興味はないですの。今がすと達が欲しいのは連絡手段ですの。そういえばアイエフ、携帯を持っていたはずですの。貸してほしいですの。」
「……何する気、マジェコンヌの仲間を呼んでネプギアを始末する気ね！」
「だからソレに興味はないと何度も言っているですの。いいから貸しやがれですの。」
「…連絡先、いいなさい」
「プラネテューヌ教会。」
「……！？」
「プラネテューヌの教会に私達の仲間がいるですの。そいつに私達を助けるようにお願いするですの。まぁ私はとっても慈悲深いですの。なんならアイエフ達も助けてあげるようにお願いしてあげてもいいですの。」
「……冗談！あんたらマジェコンヌの施しなんて受けるわけがないわ！」
「そうですの。それは残念ですの。フェイク。」
「待って……はい。デスペア。」

いつの間にか私から盗っていた携帯を持ち、通話を始めたがすと。
取り返したくても、ネプギアを守らなきゃいけない……くっ…！

「あー、もしもしですの。私、がすとと言うものですの。…おや、マーベルじゃないですの。いきなりでてくるとは驚いたですの。」

マーベル……それが敵の名前ね。

プラネテューヌ教会…諜報部かしら。誰がスパイなの……？

「ラステイションのことは連絡が入っているはずですの。…ですの。崩壊して瓦礫の山ですの。…ネプギアや愉快な仲間たちなら見事に生きているですの。心配性ですの、マーベル。」

私達のことを知っている……。うー、絞れない……

「デッドがいきなり大変なことになったりＶＯＢは壊れたりもう散々ですの。へるぷみーですの。ですの。お願いするですの。……イストワール。」

「なっ……！？」

「おや、どうしたですのアイエフ。スライヌが銃弾撃ち込まれたような顔で。美人が台無しですの。」

「あんた……今、なんていった……！？」

「何のことやらですの。私がプラネテューヌに潜むスパイ、【マーベル・ザ・ハード】に連絡したですの。」

「とぼけんじゃないわよ！あんた今、イス、イストワールって……！」

「だから何のことですの？私はマーベルにへるぷみーと連絡しただけですの。美少女が台無しなツラしてんじゃないですの。」

「この……！」

「私に構っている暇があるですの？ほら、後ろのネプギアが大変ですの。」

「ハァ…？ッ！？ネプギア！？」

がすとに促されるままネプギアを見る。

…ネプギアは、身体が徐々に光始め、少しずつ光の粒子が現れ始めていた。

まさか、嘘よ……！

「ネプギア……！待って、消えないで……！いなくならないで……！」

必死にネプギアを抱きしめ、呼びかける。

光粒子化が始まるのは、死んだ直後から。

始まっているのなら、もう死んでいる。そんなこと、認めたくない。

絶対にない。

なのに、少しずつ、少しずつ光出して――――

その姿が、完全に消えた。

「嫌ぁあぁあああああぁぁあああああああ！！！！！」

～視点【アイエフ】↓【ブラン】～

景色、相変わらず赤黒い場所。

身体、相変わらず動けねぇ。

……状態、連行中。

ノワールやベールの奴があっさり洗脳され。

オレもそうされるのかと思っていたのだが、なぜかオレは洗脳を免れていた。

…正直、何でオレが洗脳を免れたのかは一切わからねぇ。

だが、何かを犠牲にした、というのはわかった。事実ぽっかり穴が空いた気分だ。

そんなオレの状態もいざ知らず、オレを運ぶ……なんとか・ザ・ハード。

さっき、ロムを捕らえたっつってたな…何をするつもりなんだよ、こいつら……！

「ここだ。」

突然私の体が落下して地面に落ち、再度わけわかんねぇパイプに縛られる。

チクショー、結局こうなんのかよ……。

見渡すと、他の場所とはまた違った雰囲気だ。オレ達が戦ったマジックとかいう奴よりも、もっと嫌な感じがする。

そこには、オレ達を倒したちっちぇぇマジックとロムがいた。

ロムは、気絶しているのか地面に寝かされている。

そして、オレを運んだカラフルな奴と黄色いぬいぐるみみたいな奴。

マジック一人にもオレ達は勝てねぇのに、三人がかりでボコる気か……!?

「ようこそ、白き女神ホワイトハートよ。歓迎しよう。」

「歓迎すんならこれほどきやがれよこのクソボケヌイグルミ……!」

「口が悪いな。その口もふさごうかね?」

「……チッ」

「よろしい。何故君をここに招いたか、わかるかな?「……」わからないか。なら教えよう。前方を見てくれたまえ。」

前方。ロムが倒れ、そしてマジックがその横にたたずんでいる。

……嫌な予感しかしねぇ。

「これから、君の妹、ホワイトシスターロムを素体としマジェコンヌ様降臨の儀を行う。」

「……なっ!?ふざけんな!ロムをはなボガッ!?」

突然、パイプがオレの口に入り込む。

やたら太くてデカいパイプの所為で、一切声がでねぇ。若干息も苦

しい。

「少しうるさいぞ。マジックの集中が途切れてしまう。そうだな、何故彼女を選んだか教えてあげよう。彼女はもっとも才能にあふれている。ネプギアのように狂っても、ユニのように怯えても、ラムのように殺されてもいないからな。」

（な…てめぇ今なんて言いやがった！ラム、ラムをどうしやがった！）

心の中で叫んでも、口の中、喉に入りかけているパイプが邪魔で声が出ない。
微かなうめき声としか、あいつは受け取らねぇ。

「ラム。ラムか……。死んだよ。ロムが殺した。吾輩に無謀にも単騎でかかり返り討ちにあった。そこで傷の治癒をすればいいものの、何を考えたか吾輩に向かってラムを見殺しにしたのだ。全く、薄い姉妹愛だとは思わないのかね？」

（ふざけんな！ロムがラムを殺したなんて、そんなことあるわけがねぇだろ！）

「白き女神。君が言いたいことはよくわかる。しかし事実だ。吾輩はこの目でしっかりと見ているからな。」

（うそだろ…嘘だと言ってくれよ！なぁ！頼む！）

「君は幼女と呼ぶには少し大きいな……。だが、君の様な相手を屈服させられるというのは面白いな。好きに叫びたまえ。」

ズルッ、と口の中からパイプが抜かれ、激しい嘔吐感と共に呼吸が戻ってきた。
軽くせき込みながらも、オレは必死に、叫んだ。

「なぁ！何でロムなんだ！オレじゃダメだってのか！？ロムは助けてくれよ！オレはどうなったっていい！だから、ロムは……！」
「残念だが女神ではダメなのだ。いまだ熟していない女神候補生の方が、マジェコンヌ様は馴染まれやすい。ほうら、もうすぐ終わるぞ。」

目の前は激しくロムが光っている、ということしかわからなかったが、それの意味することはとてもよくわかっていた。
だから、無駄だとしても、必死に。

「やめてくれえええええぇぇぇぇぇぇぇぇ！！！！」

「……。」【おかえりなさいませまじぇこんぬさま。】
「御再誕おめでとう御座いますマジェコンヌ様。」
「我等、再び貴方様に従うことを誓います。」

怪しく佇むロム。
そのロムに対し、三人が膝を着く。
……そのロムが放つ感じみたいなものが、もはや全くの別物だと、感じ取ってしまった。

「…我、再びこの世に生を受け、この世の合切を破壊し尽すモノ也……魔の者、勇の者、罠の者……我に従いて、界を滅せよ…」

「「御意に」」

「……。」【ぎょいに】

ロムの声だ。でも、ロムの声を出している【それ】は、ロムじゃない。おぞましい、何かだ。

……オレは、ロムも、ラムも巻き込んで…

意識が、薄れていく…オレも、ベールや、ノワールみたいに……

畜生……ロム、ラム…。ごめんな……

Ｃｈａｐｔｅｒ　Ｅｎｄ

４－６（後書き）

～次回予告～
世界には、鎮魂歌（レクイエム）が響いた。
世界は暗き光にて照らされ、愚者を誘うだろう。
世界では愚者が恐れ、絶望の怨嗟を奏でる。
世界を救おうとしたものが遺した道標も、最早潰え。
世界には、もう風が吹くことがない。
世界にあるのはただ一つ、犯罪神マジェコンヌによる、絶対的な絶望だけだった。

次回、超次元ゲイムネプテューヌｍｋ２＋。ｃｈａｐｔｅｒ５.【世界が歩む断頭台】

明けぬ夜は、訪れる。

5－0（前書き）

ついに最終章（予定）。
予定だから違うかもしれない。というか多分違う。
でも一応予定として言っておく。
これが最終章（キリッ！

5－0

……おい。ここはどこだ。

目覚めての私の第一声がこれから。何ともまぁ、私も状況判断優先してる。

…見る限り、場所はそこまで変わっていないようだな。

ネプギアに撃たれてからどれだけ経っているのやら……。

…ん、硝煙のにおい……。

それに、この悲鳴じみた声…銃声……？何だ、どことどこが小競り合いしてんだ？

「知りたいか？」

……おい誰だ、私の思考に入り込んで……おお、私だ。

前略、憎きノワールに殺された母上及び父上。私が増えました。

…いやいや、何を言っているんだ私は。

しかし、私の目の前に私がいるのは事実。

「ひとの話は素直に聞くもんだぜ、デッドよぉ……。」

「そのうざったい口調、お前ジャッジか。随分かわいらしくなったな。」

「遠回しに自画自賛かぁデッド。俺はそんなことを聞くためにここに来たんじゃねぇよ…。」

「俺に会いに来いなんて言っておきながらそんな姿になってここに来たってことは、そういうことだろ？わーってるよド畜生。」

「ああ、そうだ…。俺たちザ・ハード、テメェらハンシン、殺し合いの幕開けだ……！」

「「ぶち殺す！！！」」

即行でグレネードを両手にだし、撃ち込む。
基本こうしてやるんだが、ジャッジには……不要だったかね。無傷かコンチキショウ。

「しかしまぁ、何だってそんな姿になったのかねぇジャッジ。」
「さてな。テメェの結界内に入った途端この有様だ。」

得物は変わらず、デカい戦斧か…。私の体には不似合いだよその斧。

「弾幕を突破できるってんなぁ、やってみろや偽私がァ！」

私の叫びと同時に、私の背後にデカいコンテナが出現。
コンテナが開くと、……これ、迫撃砲か…！？

…便利なもんだなザ・ハードってのは。
まぁいい、両手にはグレネードライフル、肩には大型グレネードキャノン【ＯＩＧＡＭＩ】。後ろには大量の迫撃砲。

「ぶっぱなせぇえええええ！！！」

叫ぶと同時に引き金を引く。左手のグレネードライフル、大きく変形したＯＩＧＡＭＩ、迫撃砲群が同時に発射される。

ジャッジも大きく斧を振って迎撃するが、爆破の衝撃には苦しんでいる様子。

……あれ、迫撃砲の弾どこ行った？まぁいいか。

気にせず、グレネードを撃ち続ける。弾切れになったら即パージし、両手に月光を展開。

……これも、なんか変わっていそうだな。

まぁいい、実践で試す！

「態々近づいてきてくれてどうもありがとう！ってな！」

「テメェに感謝されても一切嬉しくねぇ！」

「つれねぇなデッド！わざわざ会いにきてやったのによぉ！」

「そうかいありがとう死ね偽私！」

「ああどういたしまして死ねデッドォ！」

両手のレーザーブレードと、ジャッジの斧がぶつかり合い、激しく火花を散らす。

熱さもあまり感じない。……さっきの迫撃砲やＯＩＧＡＭＩといい、デッド・ザ・ハードになりきったってことなのか…？

「よそ見はいけねぇぜデッドォ！」

「誰がするかこんな美少女前にして！」

「テメェが言うか！」

ガキン、ザキン、ガキュン。

何度も何度も斬り合っても、収まることがない高揚感。

疲れもない。あるのはただ、相手への殺意のみ。

ザシン、ガキン、ガキッ。

幾程経ったかわからぬほど。

突然、レーザーブレードの刃が消えた。

エネルギー切れ…！？いつもと違って長いからって油断した…！？

「隙有りィ！！」

しま、反応が遅れッ……！

「俺の勝ちだデッドォォォォォォォオオオ！！！！」

「ッ……！」

目を閉じ、咄嗟に手をジャッジに向ける。

……あれ？

恐る恐る目を開けると――――

「……どういうことだおい。」

ジャッジが、倒れていた。

…光粒子化が始まった。死んでる……。

……ジャッジから溢れた光が、私に吸収されていった。

……。

何が起こるわけでもない、ってのか？

拍子抜けだな……。

景色が硝煙だらけから変わって行く。

赤黒い空が徐々に戻……

…おい、何だこれ。

空が、壊れている…！？

……ジャッジが死んだから、じゃないよな。まぁ。
とにかく、近いのはラスティションのはずだ。まずはラスティションに……。

「あ……！」
「…？」

～【フロム】↓【デスペア】～

……。ひでぇ有様ですの。
マーベルに連絡し、救助を要請して待つのみだった私達。
…その間、突然。空が割れたですの。
中心の山脈を起点に、徐々に割れていく空。
実に嫌な予感がするですの。

「空が……。割れた…！？」
「…何かが始まったと考えていいかもしれないですの。とにかくまずはラスティションを脱出して、アイエフとネプギアを運び出すですの。フロムの捜索は後回しですの。」

軽くネプギアとアイエフに目を落とす。
……苦しそうな寝顔しやがってですの。実に愛おしく感じるですの。
まさに狂人、ですの。
そんな軽く自嘲しながらも、適当な瓦礫に腰をかけ、紅茶を飲む。
……うん、いい味ですの。

「アイエフ…ネプギア……」

フェイクはいまだユニの情が残っているのか、アイエフとネプギアを看病している。
わざわざ瓦礫から発掘するなんて、フェイクも無駄に優しい。

「……フェイク。ソレにあまり情をかける必要はないですの。それはもはやただの人型ですの。」
「…そんなことないわよ。ネプギアはネプギア。アイエフはアイエフ。それは、絶対に変わらないもの。」
「…事実、ネプギアは狂って別物になったじゃないですの。」
「あれも、ネプギアなのよ。だとすれば、私は受け入れることだってできる。ネプギアは私のことは、受け入れてくれそうにはないけれど……。」
「……。そんな情、ザ・ハードには必要ないですの。」
「それでもよ。私は、私（フェイク）であると同時に私（ユニ）。私を捨てるって言っておきながら、こんな考えだけどね。」
「後悔すると、わかっていてもですの？」
「……ええ。」
「…なら私は何も言わないですの。今はマーベルを待つですの。」
「そう、ね……。」

その後、私たちは一切話さず、ただマーベルを待ち続けていた。

5－0（後書き）

～まじっくのおへや～

～まじぇこんぬさまございたんぱーてぃーちゅうなのでだれもいません～

5－1（前書き）

読者、お許し下さい！
前半ホラー後半ギャグ。何これ。何これ。

あ、ちなみにマジェコンヌ様は何か信〇っぽいですけど姿形ロムですのであしからず。

5―1

「あんたらは……ネプギアの連れの連中か……。」
「なんや、あんた……。悍ましい波長しかせいへん。」
「ジャッジ・ザ・ハード……じゃ、ないみたいですけど…。」

開口一番、悍ましいとか言われる私。何か泣ける。
しかしまぁ、いつも以上に自分が自分でない感覚というのは感じている。
……何だろうね。敵対される理由もあるっちゃあるけど…。

「んで、何？私に何か用？」
「あ、ええっと、私達、ラステイションを爆撃した兵器を止めに来たです。」
「兵器……？」

ふと、ここであることが頭をよぎった。
……私が大量に出し、弾薬費も考えずぶっ放した挙句どっかにいった迫撃砲だ。
確かあの時、迫撃砲は南を向いていたな……
まさかね。

「私は結構長い間いたが、んなもんはなかったぞ？それより……。あれはどういうことだ」

私が指差す方向を二人が見る。
ここからでもよく見えるラステイションの多階層都市が、きれいさっぱり崩れていたのだ。
なんもない。

その風景を見た二人は、それはもう見るからに驚いていた。身振り手振りが、もう。

「嘘……！」
「そんな…ラステイションが…！」
「……。ふむ、行ってみるか。」

ラステイション跡に到着。したのだが……
「ひでぇなこりゃ…。」
「跡形も無いで……。」
「あいちゃーん！ぎあちゃーん！！どこですかー！？」

完全に瓦礫だなこりゃ。フェイクとデスペアは何やってるのかね…。
「あいちゃーん！ぎあちゃーん！……ひっ！？」
「どうしたん……ッ！？」
「…わお。」

突然二人が悲鳴を上げる。
何かと思ってみてみると、思わず声が出てしまった。

周りの瓦礫だったものが、大量の人の顔になっている。
老若男女関係ないが、その全てが血だらけだ。
さっきまで瓦礫だったはずだ……。となると。

「デスペア。どっかにいるな？」

「「「「「おや、デッドじゃないですの。何かと思ったじゃないですの。」」」」」

「「ひいいいぃぃ！？」」

周りの人面共が一声に口を開く。キモい。

一瞬グレネードぶちかまそうかと思ったが、やめておこう。意味ないことだ。

「デスペア、キモいからさっさと出てきやがれ。」

「「「「「だったら探してみるですの。頼みの５ｐｂ．は怖がっているようですし、ですの」」」」」

「一斉に喋らせんなキモいから」

「「「「「冗談ですの。」」」」」

途端に周りの顔が消え、元の瓦礫に戻って行く。

悪趣味なことする…。

「数時間ぶりですの、デッド。生きていて喜ばしいですの。」

「そう思ってるんなら少しは表情変えろ。」

「あ、フロム……！」

すかした顔したがすとを退かし、ユニが飛び込んできた。勿論避ける。

結果、瓦礫に頭からダイヴしたユニ。何してんだこいつ。

「…ん、ネプギア……？」

「ああ、それはコンパや５ｐｂ．を交えて話すですの。」

デスペアの話によると、ネプギアはラステイションの地下に幽閉されていたネプギアをアイエフが連れ出し、ラステイションを脱出しようとしたらラステイションが崩落した、とのこと。
……原因、私なんだろうなぁ。

まぁいい。今プラネテューヌのスパイのマーベルとか言う奴に救助を頼み、船を待っているらしい。
…マーベルって誰だ？

～視点【フロム】→【トリック・ザ・ハード】～

「……。」【それでは、まじぇこんぬさまございたんきねんぱーてぃー、かんぱーい！】
「乾杯。」
「…乾杯。」
「……杯を給わん。」

……吾輩らは一体何をしているのだろうか。
何故吾輩らはちゃぶ台を囲んでシェア液（シェアをマジックが固めた後液状化したもの。ザ・ハードの主原動力）を飲んでいるのか。
まぁ、いつものマジックの遊び心なのだが。

数分前。突然マジックがこんなことを言いだした（言ってはいないのだが）。

「……。」【まじぇこんぬさまのかんげいぱーてぃーやるよ。】
「……は？」

「……。」【ぶれいう〝もよんだし。もんだいなっしんぐ。】
「いや、そういう問題ではなくな。何故パーティーなのだ。吾輩は今読書で忙しいのだ。」
「……。」【「きゅっとしてろりっ☆すーぱーようじょだいかんしゃさい」ってほんをよむのに？】
「吾輩の愛読書だ。毎月購入している。」

吾輩のオススメはこのロラちゃんだ。このルウィーの女神候補生によくにた子で、このギリギリのアングルと女神候補生に似た大人しめな顔が何とも言えぬ劣情を齎す。
全く、幼女は最高だな。

「……。」【まぁそれはあとにして。せっかくまじぇこんぬさまよみがえったのにやったことなんてただのけんせいでしょ？それじゃあまじぇこんぬさまもまんぞくなさらないとおもうのねこれが。】
「それで、マジェコンヌ様御再誕パーティーか？」
「……。」【そういうこと。】
「……まぁ、マジェコンヌ様が参加なされるのであれば吾輩も参加するが…マジェコンヌ様がそのような戯れをお気に召されるだろうか？」」
「……。」【もんだいない。さっききいたら「ぜひもなし、すきにせい」っていってた】
「マジェコンヌ様…」

相変わらず何を考えているかわからんな…。マジックもマジェコンヌ様も。

……そして、今に至る。

「……。」【おうさまだーれだ！】
「我ぞ……弐の者、壱の者をぶてい……」
「……。」【よっしゃわたしだ！かくごいちばん…とりっく！】
「何故吾輩がー！？」
「よもや、ここまで幸運が続こうとは。乙女座の私はセンチメンタリズムな運命を感じずにはいられない。」
「……。」【はいはいくじしまって。ひいて。おうさまだーれだ！】
「吾輩だな。１番、３番に思いっきり悪口を言え。」
「……。」【いちばんわたし…だれ、さんばん】
「我ぞ…」
「「……」」
「マジック、達者でな」
「君の墓標は、ジャッジの隣に創るとしよう。」
「……。」【みかぎりはやっ！？もうちょっとどうぞくいしきもとう！？ね！？】
「王の命令は絶対だぞマジック。」「ルールに背くかマジック。ならば裁かねばならんが。」

「……。」【ぬぐぐ…！ま、まじぇこんぬさま、おゆるしください！】
「…許す、言うが好…」
「……。」【ま、まじぇこんぬさまのようじょー！くちょうとこえどうかんがえてもあってねーよ！】
「……。」
「「……。」」」

「ふん、痒きも無…。」
「……。」【せー、っふ！】
「危なかったな……。」
「マジック、君でなければ恐らく八つ裂きだっただろう…。」

「……。」【まじやばいって、これしんろうとかまじやばいって。】
「うつけがぁ…。他言に耳貸せば死海が住人よ……。」
「マジック、翻訳を頼む。」
「……。」【そんなわるぐちきにしてたらはかいしんなんかやってらんねぇよ】
「正しいのかどうかわからないな…。」
「……。」【まぁまぁ、つづきつづき。おうさまだーれだ！】
「お、また吾輩だな。では――――――」
～強制終了～

5－1（後書き）

～まじっくのおへや～

～なかにだれもいませんよ？

5－2（前書き）

椿ちゃんの学園もの、トマト氏の運動会（今消えてるけど）……。
これは私も何かやらねばならんか…！？

え、ねぷ子奮闘記やれって？あ、すいません…。

5－2

現在地、フェリー。

数十分待った後、マーベルとやらが寄越したフェリーが到着。
何の冗談か、私らがハイジャックしたアレと同型だ。まぁ事実フェリーにいくつも型があるとは思えないんだけどね。

「デスペア、プラネテューヌまでどんぐらいだ？」
「1時間弱。着く頃には外は真っ暗ですの。」

…ああ、もう夕方か。今日は色々ごたごたありすぎて時間の感覚がおかしい。
いつから今日だっけか……。フェリーから脱出してからだっけか？
フェリーから脱出して、プラネテューヌに言って西湿地から抜けてルウィーに言って湿地行ってネプギアに襲われてラステイションでVOB……。
色々ありすぎだろ今日……。はぁ……

「フロム、大丈夫……？」
「問題はねェ。肉体疲労もそこまでじゃねぇが…精神疲労がヤバい」
「それはいけないですの。精神疲労に効くエリキシル「やめなさい。」……ですの」
「何しようとしたそこ…」

あー、突っ込む気力もねぇ。
バタッと倒れ、少し辺りを見渡す。

あっちではアイエフとネプギアを必死に看病するコンパ（だっけか）

。
そっちでは我此処にありと言いたげなほどハッスルしてギターを響かせている５ｐｂ．。
そしてそれを地味に恨めしそうに見ているデスペア。
んで、（多分傍から見れば）気だるそうに倒れる私と、付き添うユニ。
……

「お前はネプギアんとこ行かなくていいのか…？」
「私は…いいわ。今行ってもあまり喜ばれそうじゃないし。」
「無駄に常識的なのな…。」

ザ・ハードは基本的に常識を投げ捨てると思っていたがな。私しかりデスペアしかりジャッジしかり。
……まぁいいか。ダルい…
そう思いだらだらしていると、突然ユニが私の頭を引っ張り、膝に乗せた。
まぁ、やりたかっただけなんだろうけどな。これ、互いに辛いんだぞ。私もやったことあるからわかるが。

「……。」
「……。」

「ウチの声は天を貫く音波やぁ～！」
「そのまま喉潰れろですの」
「ウチの喉は底なしやで？一時間声出しっぱなし余裕やからな。」
「それはどちらかと言えば肺活量の問題ですの。」
「なんやなんや？ウチに幻覚きかへんから言葉で勝とうおもてるん？」

「さて。瓦礫を人面に変えたぐらいで怖がって声が出なくなる誰かがなんですの？」
「うぐっ……」

「ぎあちゃん……あいちゃん……。」

しかしまぁ、所々によってテンション違い過ぎだろうに。
あっちでは漫才、そっちでは通夜テンション。こっちは……なんだろうね。

「……ねぇフロム。」
「あ…？」
「私…これからどうすればいいんだろう……。お姉ちゃんを助けたとしても、もう帰る場所もないんだし……。」
「…それは私に対する嫌味と受け取っていいな？」
「あ……ごめんなさい…フロムも、帰る場所もうないのにね…。」
「それ以前に……ああ、そうだな…そういや私が女神嫌いな理由話してねぇな……。」
「ええ…。」
「そうだな……どこから話せばいいか……。」

～視点？【フロム】↓【語りはいりまーす】～

今から…そうだな、１０年ぐらい前だ。
当時まだ傍から見れば面倒臭いことこの上ない子供の私は、まぁ多少変わっているとは言われていたが、それなりに普通の子供だったよ。言わば重火器マニアってぐらいでな。

一発撃つだけで反動で死にかけたりした。
でもま、その時は女神って存在を敬っていたし畏れてもいた。

ある日。街に汚染種やら異常種やらのモンスターが大量に侵攻してきた。お前も知ってるだろ？
汚染種の小型２３体、異常種２体っつう大軍団でラステイションに侵攻してきた奴だ。
最初は街の警備隊や軍が迎撃していたんだがな。即行で全滅した、と言われていた。
私の両親はラステイション軍兵だ。母は衛生兵だったがな。

私は両親が心配で、こっそり様子を見に行っていたんだ。
前線より少し後ろの野営地に忍び込んで、母に会いに行った。
すぐに見つかって大目玉食らったけどな。
その後、大けがした父親がテントに運び込まれてな。
その時にも父親からは大目玉だ。そのときで私は流石にそれで懲りた。
それで行きと同じように帰ろうとしてテントを出、野営地からラステイションに帰ろうとしたんだ。
その時だ。突然後ろから叫び声が聞こえた。
今考えればあれは野営地まで前線が押し込まれていたんだろう。
そうと知らぬ私は急激に不安に襲われ、またテントに戻ろうとした瞬間のことだ。

突然、空から巨大な剣が降ってきたんだ。それは野営地ごと、モンスター共を潰したんだ。
何もかも押しつぶしたその剣が消えた後、血が飛び散りモンスターの姿も何もなき。テントやら資材が大量に散乱するだけの廃墟になった。
茫然とする私の前に、女神が降りてきたんだ。

「どうしてこんなところに子供が……ううん、無事でよかったわ。」

なんてほざいてな。私を心配そうに見つめていた。

その時の私は茫然として何も考えられなかったが、その後、私はしっかりと覚えていた。

ノワールが、私の両親を殺したわけだ。

その結論が、その憎悪が。私が傭兵になる切っ掛けで、女神を恨むきっかけだ。

女神は人間なんざ守ってやくれない。女神は何も救ってやくれない。

……そういうことさ。

～視点【語り】→【フロム】～

「１０年前のモンスターの大群……。確か、４０人の迎撃部隊が全滅、って書いてあったわ…。」

「全滅の原因はノワールだ！あいつが殺したんだからな……！」

「そんな……。お姉ちゃんが……。」

項垂れて黙るユニ。

敬愛する姉がそんな奴じゃあ落ち込みもするだろうか、な。

生憎私に兄弟姉妹に該当するのはいないが。

「その後、兵士の追悼にも奴はいたよ。ふざけた言葉並べてな。」

「……。」

「まぁ、私の身の上話なんてこれぐらいしかないし、な。さーって、テレビでなんかやってっかなー…。」

軽く起き上がり、大画面のモニターを付ける。
……プラネテューヌの電波かこれ。それっぽいニュースが流れていた。

……む？

『これより、ゲイムギョウ界の全ての人間・女神に対する声明を行う。』

突然画面が切り替わり、トリック、ブレイヴと…何か人形っぽいちびっ子の三人が映った。
…なんだ。今度は何を始めたんだあいつら。

今の声に反応し、ユニ、５ｐｂ．、デスペアの三人が画面近くに寄って来た。コンパも遠目に見ているようだ。

『我等は、犯罪組織マジェコンヌ。聞いたことない者はおそらくいないだろう。今までの我等マジェコンヌへの信仰（シェア）、実にありがたかった。それにより、ついに犯罪神マジェコンヌ様が復活なされた。見てほしい。』

画面が切り替わり、画質が荒いが……恐らく、ロムだろう。あいつらが攫って行ったしな。
そして怪しげなオーラっぽいのを纏ったロムが軽く腕を振った途端。
空が割れた。
……ああ、あいつらの仕業だったのか、これ…。
つかあいつらわざわざ撮影したんだな…。

『復活されたマジェコンヌ様の力の片鱗は今の映像で理解してもらえただろう。しかし、小賢しくも残された女神達は細やかな抵抗を続け、各都市のシェアを回復させていた。そのことに心を痛めたマジェコンヌ様はこれより、マジェコンヌに抵抗を続ける愚民の公開処刑を行うことをご決断された。マジェコンヌ様はとても慈悲深いお方だ。今からでも遅くはない。マジェコンヌを信仰するというのなら、ある女神を探し出して捕えてほしい。これだ。』

次の映像は……ネプギアだ。
ネプギアが狂ったように叫び、私達を必死に追っている。
……いつ撮りやがったあいつら

『これが女神の実態なのだ！表では守護女神だの言っている女神は、何の罪のない人間をこうして殺そうとするような奴等なのだ！』

罪ありまくりだし追われてるの人間かどうか怪しいんだけどな……。
迎撃して逃げようとしたバイクが、すぐに立ち上がったネプギアに撃ちぬかれ、爆発した。
そこで画面が切り替わり、再度三体が映る。

『このような女神の暴虐にマジェコンヌ様は本当に心を痛めている。しかし、諸君ら人間の手によって世界を、女神の暴虐から救うことができるのだ！女神の洗脳から目を覚ましてほしい！そして、女神候補生ネプギアを捕らえてほしい！既に他の女神や女神候補生は捕えてあるが、今まで不要な争いは避けたいというマジェコンヌ様の計らいの元、言えずにいたのだ。しかし、このような所業をした女神を最早許せはしない！人間の諸君、どうか、君たちの力で世界を救ってほしい。我等マジェコンヌ、世界を救う為に、誰よりも尽力することを誓う。』

一瞬のノイズの後、画面が元に戻る。
基本生放送のニュース中だったため一気に騒がしくなり始めたテレビ。

……あれは、言わばマジェコンヌの勝利宣言だ。
この先、女神に協力する筋合いはないのだがマジェコンヌの連中で好き勝手されるのも正直嫌だ。私は私だ。神なぞ信仰しない。私が信じるのは情報と私でいい。

恐らく全世界に放映されたであろう映像、これがどう転がるのか。
……思いつかないんだけどな。

5－2（後書き）

～退場者控室～
日本一「日本一とー！」
ラム「ラムとー！」
ケイ「ケイとー。」
ジャッジ「ジャッジの……」

日本一・ラム「「退場者コーナー！」」
ジャッジ「退場者コーナーじゃねぇだろオオオオオオオオオ！！！」

ジャッジ「いや、百歩譲って退場者コーナーなのはいい。事実ここのネタも尽きかけているしな。だが何で俺がいる！メンツバランスを考えろ！どう考えても俺だけ浮きまくってるだろうが！」
ケイ「君が退場したのは事実だろう。退場者なのだから退場者コーナーにいるのは当然だ。」
ジャッジ「だからってなんで俺なんだ！マジックの直轄のあいつ、リンダ！あいつはどうした！」
ケイ「帰ったよ。」
ジャッジ「チクショォォォォォォォォォオ！」

日本一「はいはい！ついに後書きコーナー三代目！メイン司会進行の日本一と！」
ラム「ラムちゃんでーっす！」
ケイ「解説、アシスタントのケイだ。よろしく頼むよ。」
ジャッジ「何で俺いるんだよ……」

日本一「でも、やっぱり初回なのでネタはありませーん！」
ラム「えぇーっ！」
日本一「でも次回には！きっと爆笑間違い無し！お楽しみに！」
ケイ「この作品の風潮を考えて爆笑間違い無しなのはどうかと思うけどね……。」
ジャッジ「何で俺（ｒｙ」

～この放送はゲイムギョウ界ギルド本部の制作で、お送りしました～

5－3（前書き）

本文と後書きのテンションの差に定評のあるリアねぷ…いや、なんでもない。

5－3

「……お久しぶりですね、みなさん。」

夜中のプラネテューヌ。
そういや２４時間営業なんだな…とか的外れなことを考えつつ教会に入ると、今度は物凄く暗い本…もとい教祖様が出迎えにいた。暇なんだな。

「イストワール様！あいちゃんが、ぎあちゃんが……！」
「…話は、がすとさんから聞いています。今は寝かせておいてください。」
「はい、です……。」

「さて…。話すことが多すぎて何から話そうか。」
「面倒臭いから三行で話すですの。
ラステイション崩壊したですの。教祖は知らないですの。
ネプギアとアイエフが精神崩壊したですの。
マジェコンヌの放送は視たですの？」
「一つ、ラステイション崩壊はケイさんから聞いています。二つ、ネプギアさんとアイエフさんは視ればわかります。三つ、勿論見ましたよ。ゲイムギョウ界のほぼすべてのテレビにあの放送が映ったそうですから。」

意外と真面目に受け答えすんのな……。
しかし、あのマジェコンヌの放送の影響は多大だろう。
何より、あのトチ狂ったネプギアが映されたわけだしな。ソースはあの映像で十分だろう。

女神打倒は別に協力してもいいんだがな……。どうにも気に食わん。

「それで、どうすんだ？女神候補生ももう一人しか残ってねぇのにその一人があの様だが。」

「そうですね……。プラネテューヌのシェアはかろうじて残っていますが、ルウィー及びリーンボックスはもはや無いとすら言ってもいいでしょう。」

「それは予想外ですの。ネプギアのあの映像があってまだ残ってるですの？」

「プラネテューヌには、ねぷ子様親衛隊というものがありまして……。」

「ああ、そういうこと……。」

三年経ってもシェア振りまけるほどって、どんなだよ親衛隊……。

まぁいいや。そこは。

「う、う……。」

「……！イストワール様！あいちゃんが目を覚ましたです～！」

あ、嫌な予感。

「あれ、コンパ……？」

「あ、あいちゃあああああああん！！！」

「ちょ、ま、コンパあああああああ！？」

「リア充爆発しろですの」

「はいはい黙って隠れような。」

「やっぱり私も隠れるのね……。」

「何で隠れるん……？」

「いいんだよ感動の再開シーンとかぶち壊すのが趣味の奴がいるけ

どいいのか？」
「……まぁ、仕方ないやね。」
「てへっ☆ですの」
「だからそういうこと言うぐらいなら表情を少しは変えろ」

恐らく、私達を傍から見れば果てしなくシュールだろう。
未だ倒れているネプギアを横に抱き合っているアイエフとコンパ。
そしてその光景を物陰に隠れてみている私、ユニ、がすと、５ｐｂ。
。教祖からはどう見えているやら。
頼むから私ら呼ぶなよ、修羅場になるからな、教会が（幻覚的な意味で）地獄になるからな……！

「……宜しいですか、アイエフさん、コンパさん？」
「あ、は、はい！？」
「だ、大丈夫ですよ！？」
「……では。アイエフさん。コンパさん。あなた達は、何を望みますか？」
「ぇ…ネプギアは……って、ネプギア……！」

感動の再開その２。
私ら（特にがすととユニ）見つかりませんよーに……。

「恐らくは、ネプギアさんの回復でしょうが……ネプギアさんは肉体、精神共に疲弊しきっています。いくら奇跡とはいえ、心まで癒せるとは限りません。そして、その心を癒せるであろう貴女達がどうなるか……。」
「……コンパ、知っていたの…？」
「……あいちゃんが無理をするなんて、そんなことしかないです。」
「コンパ…。ごめんなさい。こんな無茶、つき合わせて。」
「大丈夫です。あいちゃんと一緒にいれて、ぎあちゃんが助かるん

です。ねぷねぷもきっとぎあちゃんが助けてくれるです。…イストワール様。」
「わかりました。少なくとも、ネプギアさんの体の回復は保障します。行きますよ。」

感動の場面その3。何これ。何このクライマックス。

「うずうず、ですの。」
「やめなさい…。」
「これはぶち壊したらあかんで…。」
「何だかんだで我慢弱いのな、お前。」
「こんな感動の場面をぶち壊すなと言うほうが無茶ですの。」
「フロム。こいつは私が押さえつけてるわ。」
「よくやったユニ」
「はーなーせーでーすーのー」

あっちの感動の場面を余所にこっちは何ともかんとも酷い光景だ。
バレないでくれ、頼むから。
あっちでは教祖が…何かよくわかんない魔法陣（でいいんだっけか）を出し、まぁなんかやってる。

「第６６６拘束機関解放。次元干渉虚数方陣展開…！」

なにその詠唱。
教祖の乗る本が閉じた後、ぱらぱらと開かれる。どこに行ったんだ。
周りと同じ魔法陣が乗っている頁が開き、本と魔法陣が同時に激しく光り出した。

「うおっ……！」
「眩しっ…！」

「にゃあああ！！ユニ！離すですの！目を覆えないですのー！」
「大変やねー。目が見えなくても音を聞きゃどうとでもなるんやで。」
光が収まると、本からまた教祖が出てきた。どっちが本体なんだか。
まぁそれはともかく、アイエフとコンパにはここから見て対して変わっているようには見えないが…。
「……５ｐｂ．。私らはこれで失礼する。少し用事が出来た。」
「…ん、そうなん？……何するつもりや」
「ちょっとした野暮用さ。なんなら付き合うか？暫くはあいつらの会話に入れなさそうだが。」
「…ちいと監視させてもらうで。」
「ご自由に。行くぞがすと、ユニ。」
「合点承知ですの。」
「了解。」
プラネタワー上層部。
ルウィーの塔より特徴的なこの塔はやたら高く、プラネテューヌの大体が見渡せる。
夜の光が多少の視界を齎す。正直それで十分だ。
「ユニ、スナイパーライフル。」
「了解。」
「何をする気や…？」
「さて、何でしょうですの。」
そうだな…双眼鏡でもいいかな。

双眼鏡を一つ出し、ビル群をズームして見探す。
…いたいた。
「ユニ、赤い光を出しているビルの屋上。」
「……。」
私の声に受け答えするように、ユニがライフルを撃つ。
……うん、ナイスショット。
「な、何したん……！？」
「何、ちょっとした暗殺だよ。ユニ、そのビルの奥三つ目。」
「了解…。」
その後数回、ユニに指示してスナイパーライフルを撃たせる。
十数分後。
「…よし、もういいぞユニ。」
「ふぅ……。」
「お疲れ。」
ねぎらいついでに頭を撫でてみると、一気に顔が赤くなった。面白いなこれ。
「それで、がすと達はリア充振りを見せつけられただけですの？」
「んなわけねぇだろ。５ｐｂ．はともかくがすとには仕事があるんでね。」
「がすと使いは荒くしないでほしいですの。」
「だが断る。」
呆けているユニは放っておき、ぶーぶー言うがすとと５ｐｂ．を連

れて市街に出ることにする。
さーって。面白い土竜叩きが始まるぞー、ってな。

5－3（後書き）

～退場者控室～
日本一「に！」
ラム「ら！」
ケイ「け。」
下っ端（リンダ）「り…」

日本一「……にらけりってなーにー！」
ラム「わっかんなーい！」
ケイ「さて、地味に期待され出してしまった退場者控室。解説のケイだ。」
下っ端「ジャッジ様の代わりと言われちゃあ出なきゃいけねぇよな……。犯罪組織マジェコンヌのマジパネェ構成員、リン「あ、下っ端！」下っ端じゃねぇっつってんだろ！マジック様の直轄だ！寧ろ幹部だ！」
ケイ「なお、公式（ビジュアルコンプリートガイド）によれば本当に下っ端らしい。まぁ四天王に目を付けられるほど有能ではあるらしいがな。」
下っ端「畜生……出世したかった……」
日本一「まぁまぁ。」
ラム「まぁまぁ。」
下っ端「畜生…微妙に生暖かい視線がウゼェ……！」
ケイ「では、解説を始めよう。まず司会進行の二人、仕事をしてくれないかい？」
日本一「えー。」
ラム「だって遊びたいんだもーん。」
ケイ「ほう…。なら仕方ないね。今回の分のギャラを計算して、その分の菓子の料金と……ふむ、三日は菓子抜きになるが。」
日本一「さぁ始まりました退場者控室！メイン司会のゲイムギョウ

界の永遠のヒーロー日本一と！」
ラム「ラムでーっす！」
下っ端「単純なガキどもだなおい……。」

日本一「さて。読者の注目を浴びる話題は、前回のフロムの過去の話だね。」
ラム「ねーねーけいー。あんたってラスティションの教祖でしょ？何か知らないの？」
ケイ「十年前のモンスターの大群、か…。僕が教祖に就いたのは６年前だ。その前の教祖は確か、僕以上に非情と言われていて、病死した、ぐらいしか僕は知らないが……。」
下っ端「じゃあその前教祖が元凶じゃねぇの？」
ケイ「ふむ……。その可能性も高いだろう。僕も着任する前のノワールには詳しくないからね。」
日本一「フロムの親の仇は女神ノワールか！それとも前教祖なのか！？」
ラム「よくわからないけど次回に続く～！」

日本一・ラム「「まったね～！」」

下っ端「なんであいつらあんなテンション高いんだ」
ケイ「子供というだけさ。」

5－4（前書き）

最近みょーに進まない……。
ぐぬぬぬぬぬ……。

5－4

プラネタワー入口。
ラステイションとは違って一層都市なので結構ビルが高く、紫色が多く街灯も多く結構目に優しい。
……さーて、と。

「がすと。手筈通りに頼むぞ。」
「別に手筈も相談もされてないですの。」
「じゃあこのメモの通りに。」
「暗くて見えないですの。」
「そうかそうか。（ジャキッ」
「火炎放射機を向けるのはやめるですの」

まぁ軽いコントはここまでにして、がすとを派遣。
５ｐＢ．は私の監視……あれ？ユニどこいった？

「ユニならまだ展望台で呆けてるんちゃうん？」
「……何やってんだあのバカ」
「……まぁ、わからんでもないがな。んで、がすとちゃんに何させたん？」
「すぐにわかるさ。」

数分待つと、がすとが戻ってきた。（微）笑顔で。

「いやぁ、楽しかったですの。」
「一体何してきたん……？」
「がすとの得意なことだ。」
「……嫌な予感しかせん。」

「まぁ、あんたら女神と一時組んでやるよ。ザ・ハード共と戦わないといけないしな。その証拠を提供してやるよ。」
「……？」
「さーって。あいつら何してっかなー……。」
「ですのー。」
「……」

５ｐｂ．を置いていき、教会内部に入った。
……そういや、ユニはまだ展望台にいんのか？

「おや、フロムさん……。」
「よう、イストワール様。ネプギア達はどこいった？」
「彼女たちは、今部屋で休んでもらっています…。いつ、別れが来るかわかりませんから。」
「……そうかい。」

教祖様は妙に暗い顔をしている。教祖の責任感とかあるのかねぇ。

「それで。これからとーっても重要な話があるんだが……がすと。」
「はいはーい。ですの。」

がすとが肩に提げる鞄から、穴が空いた人間の生首と数個の銃。そしてマジェコンが出てきた。

「先ほど見つけたですの。クーデターでも企んでたんじゃないんですの？」
「……。何を、言いたいのですか？」
「私らを雇ってほしい。ネプギア一人じゃあ戦力不足だろうしな。」

「ウチいるんやけどなぁ……。」

やかましい青いの。

「……。ネプギアさんに、聞いてみないことにはわかりません。私の一存では…。」

「面倒臭いなおい……。」

「…ネプギアさん、大丈夫でしょうか……。」

「……少し、様子を見てくるですの。」

「おまえは行くな。状況が悪化する」

「酷いですの。」

「じゃあ、ウチが行ってくるで。」

５ｐｂ．が教会の奥に進んでいった。

…そして、謁見の間に残ったのは私とがすと、そしてイストワール。

この共通点は…言わなくてもわかるよな。

「さて、邪魔者もいなくなったですの。本題を始めるですの。」

「……」

「ハンシンの四人目。マーベル・ザ・ハード。その運命に殉じる気はあるですの？」

「……。私が、ザ・ハード、ですか…。」

「ですの。仮にイストワールを選んだとしても、奇跡（マーベル）の運命は常に付きまとってくるですの。それがマーベルへの代償ですの。」

「二つに一つ、ですか……。」

「……。」

「どうする、ですの？無茶振りはしないですの。代償か、プライドか。どちらを取るかというだけの話ですの。【創造主】を裏切るという、ね。」

「…貴女は、どこまで知っているというのですか……？」

「がすとは旅の錬金術師。風のうわさを聞いただけですの。」

恨めしそうにがすとを睨む（ようには見えないが）イストワール。
そして表情を一切変えないがすと。いつもの光景。

「……暫く、考えさせてもらいます。ギョウカイ墓場に向かうまでには、決めておきますので…。」
「オーライ。部屋適当に借りるぞー。」
「ですの。」

イストワールの横を通りすぎ、適当に部屋を探す。
さーって……あ。
ユニのこと忘れてた…。

5－4（後書き）

～その頃の展望台～

ユニ「フロム～……えへへ～……♪」

５ｐｂ．「……本当に呆けとった」

5－5（前書き）

今回やたら長々喋ってるのが約一名いますが別に全部読む必要もなかったりする。
単なるがすとの女神への愚痴だしこれ。

5－5

～翌日　視点【ネプギア】～

……目を開けると、とてもよく知っている天井が見えました。
起き上がると、暫く見ていなかった部屋でした。旅立った時から、何一つ変わっていない。

「……ッ！！！！！！」

頭に過る記憶。景色。感情。
悍ましいほどの憎悪が、私の頭を包んでいった。
必死に頭を振り、嫌な記憶を振り払おうとする。
それでも消えない。マジェコンヌへの憎悪。がすとちゃんへの憎悪。
目を閉じ、耳を塞ぎ。それでもなお聞こえる私とは思えない声。信じたくない景色。
助けを求めたくても、掠れた声しかでない。
どうしたって、この景色から逃げることはできず。ただ震えるだけで…。

「ちょっと、どうしたのよネプギア！」

突然、上から顔が出てきました。
その顔は、とても身近で、見たくはなかったけれど……

「アイエフ……さん……？」
「よ、っと。何か下の方でガタガタ音するからなんだと思えば……。もうちょっと寝かしてくれない……？」
「アイエフさん……アイエフ、さん……！」

「きゃっ、ネプギア……！？」

私は、咄嗟にアイエフさんに抱き着いていました。
ありがたさと、申し訳なさと……。さまざまな感情が渦巻く中、私はただ、アイエフさんに鳴きながら、しがみついていました。

～視点【ネプギア】→【がすと】～

「生首はーそとっ！」

昨夜、デッドに言われて採ってきたテロリスト（らしいですの）の頭を展望台からぽい。ですの。

「がすとはーうちっ！」

生首を投げ終え、いそいそと屋内に入るですの。
いやーこの季節は本当に寒いですの。こんな季節に侵略開始とかあいつらは何を考えているですの……？

廊下をさぶさぶと寒い思いをしながら教会の廊下を歩くですの。
全く、暖房とか無いんですのこの塔。不親切極まりないですの。
……ん？何か声がするですの。
…ねぷ子とネプギアの部屋。

「……へぇ。ですの。」

おっと、声が漏れていたですの。いけないいけないですの。
そーっと部屋の中を覗き込むと、何やらネプギアとアイエフが抱き合っているですの。おお、百合い百合いですの。
……流石に逢引を邪魔するほど無粋ではないですの。がすとは正直者で優しくて綺麗な淑女ですの。

お幸せにですのー。

謁見の間。マーベルしかいなかったですの。避難民とかで埋まってると思ってたですの。

「おはようですの、マーベル。」

「せめて、イストワールと呼んでください。がすとさん。」

「いいじゃないですの。密会なんだからですの。……それほど創造主を裏切るのがつらいことですの？」

「……ッ！？」

「図星、ですの。そうですの……。イストワールは世界の史書とまで言われる存在ですの。それはもう昔から……そう。たとえば最初の女神とか。」

「な、何故……！」

「ただの推測ですの。マーベルのようなのはほかに見たことがないですの。となれば創られた存在と仮定するのが速いですの。そして女神が存在するような世界で人間如きが世界を記録するなんて物が作れるわけないですの。ま、そういった考えから求められた答ですの。」

「……ええ。私はプラネテューヌの初代女神に創られました。プラネテューヌを守れ、という命令を今までずっと守ってきました。」

「しかし、その命令についには向かわねばいけなくなってしまった。」

「ッ……」

「いや……そもそも歯向かっているわけでもない。マジェコンヌによって世界が危機にさらされているというのは、単にマジェコンヌという存在の所為。つまりはただの女神の保身運動。女神は神とまで称された存在。信仰（シェア）がないのは困る。もし人間は独自に生きることになるとする。そうして生き残れば、それは人間の成長を意味す

る。人間がモンスターを畏れぬほどに成長したとすれば、最早女神への信仰（シェア）なんて無いも同然。」

「……。」

「女神も腐りきった政治家も本質は対して変わらないですの。ただ自分を信じるものが少なくなるのが怖いだけ。人間は女神を頼っているけど、それ以上に女神は人間を頼っている。さて、ここからが本題ですの。仮に女神からとはいえ、命令は【プラネテューヌを守れ】。『人は城、人は石垣、人は堀』という言葉を知っているですの？国を支えているのは王ではない、教祖でもない、女神でもない。市民。民そのもの。国を守るというのはそれそのまま民を守るということですの。まさか、女神のわがままに付きあってプラネテューヌの寿命を縮めるなんてのは、命令に反した行いじゃないですの？」

「なら、私はどうすればいいって、言うんですか……！」

「マジェコンヌを倒すのは、私達ザ・ハードのハンシンたち。ちょうどよく私達はザ・ハード四天王と殺し合うことを宿命付けられている。なら、女神に頼らずともマジェコンヌをなぎ倒すなんてわけないですの。事実今マジェコンヌ女神候補生ロムを触媒として存在しているですの。女神にはいい思いを抱いていないのが約二名存在しているですの……どうですの？」

「……」

マーベルは突然自らの乗る本の中に入り、本の中に閉じこもってしまったですの。

やれやれ。世話が焼けるですの。

「うぃーっす。フロム屋でーっす……ってがすとか…教祖様はどこ行った？」

デッド……。

……。いや、いいか。ですの。

「聞くですのデッド。いい知らせがあるですの……。」

これでマーベルも手中に……。楽しみですの。楽しみですの♪

5－5（後書き）

～退場者控室～

日本一「正義の槍、壱！」

ラム「希望の槍、弐！」

ケイ「策謀の槍、参。」

下っ端「未来の槍、四……」

ジャッジ「審判の槍、五」

日本一「五人そろって！」

日本一・ラム「「五本槍ィ！」」

ケイ「五本槍。」

下っ端・ジャッジ「「五本槍……」」

ジャッジ「じゃ、俺は帰る……何でこんなことの為だけに呼ばれなきゃなんねぇんだ……」

下っ端「お疲れ様です、ジャッジ様……。」

日本一「いやーかっこいいねぇ五本槍！まさに正義のヒーローだよ！無言☆即殺！悪と無駄口、削除なりぃ！」

ラム「わー！かっこいー！」

下っ端「おいどうすんだよ……あのガキ二人」

ケイ「ほっといてあげよう。子供には情操教育が必要不可欠だ。思慮深い大人になるにはさまざまなことを学ばなければね。」

ＴＶ『き、きさまー！俺が悪の組織の一員と知ってのことかー！

当たり前だ！貴様のような口うるさいものはまさしく悪！悪に違いない！無言☆即殺！悪は私達が削除する！』

下っ端「……情操教育？」
ケイ「……また次回。」

ＴＶ『我等五人、正義を貫き通すのだ！』
日本一「ヤッホー！五本槍ー！」
ラム「むごんそくさーつ！……むごんそくさつって何？」

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0773w/

超次元ゲイムネプテューヌｍｋ2+　LastGoddess

2011年11月29日01時02分発行